幻想小説ハートオブエタニティ第一部「永遠の心」

-The Heart of Eternity-

著作：焔火 紅

構想開始 1999/09/24
小説化開始 2003/07/01
本編完成 2004/03/14
ＨＰ公開 2004/03/26
番外編公開完了 2005/03/12
本書作成 2008/10/04

目次

目次……2
プロローグ……3
第一章 天界……5
第一節 天界の厳罰……5
第二節 天界の生活……6
第三節 深夜の事件……10
第四節 反抗の代償……16
第五節 堕天……21
第二章 人間界……31
第一節 運命の始まり……31
第二節 脆過ぎる存在……37
第三節 心を揺り動かす決意……41
第四節 優しき強さ……46
第五節 死毒……50
第六節 緩み始めた心の鍵……55
第七節 悲痛な思い……59
第八節 堕天使の弱点……67
第九節 安息の目覚めと戦慄……76
第十節 存在する意味……82
第十一節 二人の気持ち……92
第十二節 嵐の前兆……98
第十三節 永遠の約束……106
第十四節 無音の狂奏曲……117
第十五節 一筋の光……127
第三章 獄界……135
第一節 歩むべきは荊の道……135
第二節 真紅の歴史……141
第三節 闇の血筋……144
第四章 シェファ……156
第一節 変革は眠りの中……156
第二節 近くて遠い過去と現在……163
第三節 交錯する記憶と存在……172
第四節 約束の時……175
第五節 終末への秒読み……180
第六節 証……185
第七節 集いし心……192
第八節 未来の為に……197
第九節 この星に生まれて……213
エピローグ……227
番外編……229
リバレスとの出会い……229
フィーネの心……236
愛する者の為に……242

プロローグ

遥か……それは永劫の狂気。否……深淵なる久遠の闇。
光は色を持たず、物は形を持たず……ただ闇に浮かぶ一つの『存在』。内にあらゆるものを秘め、止まったままの『存在』……。その『存在』が動き出したのは僅か１００億年前の出来事だった。
１００億年以上前……否、それ以上昔に『時』という概念は通用しない。
何もかもが『無』でありその闇は永遠に変わる事は無く、その『存在』だけが静かに……生まれる前の赤子のように唯静かに、だが動き出す『時』を確実に待っていた。

そして『時』が始まった。

１００億年前……
『存在』に亀裂が入り、『光』と『物質』が止まっていた『時』を取り戻すかのような勢いで、また闇を拭い去る為に……何者も超越するスピードで無限に加速し『存在』から広がっていった。
その際限なく拡大する領域は留まる事を知らず、たった今でもそれは変わる事はない。
『時』の始まりは此処からで、全ての『モノ』の原点が生み出される事となった。

一つの悲劇も同じように……

１０億年後（９０億年前）……
『存在』から生まれた『モノ』は宇宙を形成し、その破片の物質は眩いばかりの星々になったが、まだ激しく熱を帯びており物質は常に超高温の炎に覆われていた。
その炎は収まる事を知らず燃え盛り、星を包む空間をも溶かし、暗黒だった宇宙を照らし続けている。まるで、暗闇を恐れるかのように唯、光と熱を放ち……悲しき『無』の世界を忘れる為に熱き炎をもって叫び続けているのだ。
そういう状況の中で後に『惑星シェファ』と呼ばれる星も誕生したのだった。
シェファは、原形を象るまでの２０億年……真紅の大気に取り囲まれ、無数の星屑の隕石を呼び込み巨大化していった。隕石は激しい悲鳴を上げてシェファに衝突し、シェファもそれに呼応するかのように灼熱の溶岩の涙を流してそれを受け止めた。
それは長い長い時間繰り返されていたが、徐々に収束の方向に向かっていった。

３０億年後（７０億年前）……
シェファは誕生して２０億年が経過し、厚い大気に覆われ表面温度を下げていった。
星には大地の原形が完成し、高温の液体……それでも海と呼ぶ事ができる広大な海原も完成した。
大地は岩で覆い尽くされ、数え切れない程の火山が噴煙と共に、憤怒に似た爆発を休む間もなく続けていた。血の涙ともいえる溶岩もまた、止め処無く流れていたのだ。
海は液体であったが、常に沸騰でボコボコと海面を揺らして蒸発し、それが雲となりまた雨が降る繰り返しだった。
そうして出来た空は、惑星シェファが属する銀河の中央に位置する高エネルギー体の星である『Ｓ．Ｕ．Ｎ』からのエネルギー放射を遮り、星の表面温度を下降させていく。
だが、この時点では無論生ける者が存在し得なかったのは言うまでも無い。しかし、この５億年後に奇跡は起こる。

３５億年後（６５億年前）……
時が満ち、今日まで続く世界の発端ともいえる『運命』が始まった。
惑星が出来てから２５億年が経過し、強大な二つの生命体が誕生したのだ。

不毛の大地からは後に『神』と呼ばれる者が、暗黒の海からは後に『獄王』と呼ばれる者が同時に生まれた。

それは、奇跡には違い無いが、この星が出来る前から定められていた事なのかもしれない。『神』は周りの物質を取り込みまた、『光』を放ちながら驚くべき速度で成長と突然変異を繰り返し、やがては独自の意志を持つようにさえなった。

『獄王』も同じように、暗黒の海の成分を吸収していったが、『神』とは違い、『闇』を増幅させながら『神』にも匹敵する速度で進化し、やはり独自の意志を持ったのだ。

それでも、この時点では両者はお互いに干渉される事もなく『支配』などという知能までを発達させるにはいたらなかった。だが過剰な進化は、敵対を招くようになる。

８０億年後（２０億年前）……

『神』と『獄王』は究極ともいえる進化を遂げ、互いに異なる意志を持つようになった。その意志は支配欲も生み出し、対立は此処から始まることとなる。

世界は、神の支配する大地と獄王の支配する海とに分かれた。

星は温度を更に下げ、神と獄王以外の生命体も次々と誕生していく。大地には植物が生い茂り、海には多種多様な生物が生まれた。空は青く澄み渡り、海は美しく透明で空と同化するかのようだった。

だが、知能を持っていたのは神と獄王だけだった。神も獄王も、単体で子を作ることが可能で、誕生してからの４５億年間、他の生物に全く干渉されず２００００回にも及ぶ世代交代と突然変異で、他の生物を遥かに凌ぐ知能と力を身につけていたのだった。

神と獄王は争った。

その波紋は大地を裂き、海を割り、犠牲となった生物が世界を血で染め上げた……

そして、数万年にも及ぶ戦いで神と獄王は力を削られ、その無意味さを知り争う事をやめた。

その後、神と獄王は力のほぼ全てを用いて、星を……惑星シェファを３つの小惑星へと分割する。

小惑星はそれぞれ『天界』、『中界』、『獄界』と区分され、『天界』は神が、『獄界』は獄王が統治する事となる。『中界』は『天界』と『獄界』の中間に位置し、緩衝帯としての役割を持つ不可侵領域とした。

こうする事によって、神と獄王は距離を置き平和に更なる進化を遂げられる筈だった。

しかし、現在から僅か数１００万年前……再び神と獄王が対立する事象が発生する。

それまでは互いに干渉される事無く、自分の持つ『界』を発展させ進化させ続けていた。『天界』には『天使』という生命が生まれ、時を同じくして『獄界』には『魔』が生まれた。

驚異的な速度で知能を有した生命が増殖し、幾度か『相対する界』へ侵攻しようと企てる者も居た。

だが間に在る『中界』のお陰で、界の対立迄には至らず平和な時が流れていたのだ。

それを終焉へと導いた事象とは、『神』が『獄界』に断り無く、緩衝帯である筈の『中界』に『人間』という生命体を多量に創った事である。

非支配である事で意味を為す『中界』が侵された事に獄王は激怒し、同様に『中界』へ魔を送った。

両者の間で修復不可能な深い溝が生まれ、現在もそれは続いている。『中界』は人間と魔が混在する世界となったのだ。

そして、大いなる悲劇は天界で生きる一人の天使から始まる。

第一章　天界

第一節　天界の厳罰

「判決を下す！」

そう、狂気染みた甲高い声で冷徹な言葉を叫んだのは神官ハーツだった。

此処は天界の中央、『大神殿』の屋上にある裁判所。この裁判所の特徴は、美しく磨かれた大理石の外壁と、微風に揺れる規則正しく灯された燭台だ。裁判の傍聴人である私達が座っている椅子は縦横整列されており、丁度１００席ある。

神官によって、頻繁に執り行われる無意味な裁判……。嫌気が差した私は、空を見上げた。其処には、数え切れない星屑が浮かび、今にも自分が吸い込まれそうな錯覚さえ覚える。

怒りが自分の中に渦巻くのを抑えていると、神官の次の言葉が耳に突き刺さる。

「被告クロムは神への忠誠を忘れ、そればかりか神を冒涜した罪により『魂砕断』に処す！」

彼は、先刻の声よりも更に大きく叫んだ。被告は、顔面を蒼白にして震える声で反論する。

「待って下さい！私は神への賛美歌の詩を一言間違えただけです！」

裁判所の奥にある神官用の台座に立つハーツは冷徹な表情を浮かべその言葉に返した。

「被告は聖歌隊の隊長でありながら、全ての天使の眼前で神を汚した事に変わりはない！よって、極刑を以ってしか神の怒りを静めることは出来ない！」

私は一連のやりとりを静観していたが、判決が重過ぎる事を許せなかった。昔からそうだが、神官は些細な事に対しても厳罰で臨み、殆ど罪もない天使を処刑してきた。もう黙って見過ごすのは限界だ……！

私は……自殺行為とは知りながら思っている事を口にする。

「神官ハーツ様、被告人は十分に反省しています！これからは、同じ過ちは繰り返さないでしょう。元々、悪意があったとは思えません！どうか、恩赦して頂けないでしょうか！？」

その言葉が終わるか終わらないかの間に、隣に座っていた天翼獣（様々なものに変化する能力を持った、小さな天使のような存在。蝶の様な羽を持ち、空想上の妖精に似ている。否、寧ろ妖精という存在が天翼獣から考え出されたという推測が妥当だろう。）のリバレスが私の口を塞ごうと手を伸ばし、小声で叫ぶ。

「ルナ！神官には逆らっちゃダメよー！」

私の身を案じての言葉だった。彼女は小さいながらも、私の世話を目一杯焼いてくれる優しい天翼獣だ。リバレスに意識を向けていたが、ハーツの鋭い視線が私を正面に振り向かせる。

「天使ルナリート君。君は、天使学校の中で最高の成績を修め、普段の行いも非常に優秀ですが、今此処で先程の言葉を訂正しておかなければ、君も重罪人になりますよ……！」

重罪人……そうなると、最低でも死は免れないだろう。

だが、こんな風に言いたいことも言えない束縛された世界なら、それもあながち悪くないとさえ思う。しかし、私が黙って神官を見据えていると、友人で女天使のジュディアが叫んだ。

「神官ハーツ様、お待ち下さい！ルナの優秀さはハーツ様が仰った通りです。当然、神に対する信仰の証である『神学』の成績に於いても、全天使の中で最高です。だから、さっきの発言は一瞬の気の迷いなのです！ね？ルナ！？」

其処まで私を庇おうとしているのだから、私はジュディアの言葉に従うしかないだろう。

「申し訳ありませんでした。先刻の言葉は訂正致します。私の発言は無かったものとして裁判を続行して下さい」

結局は自由を求めても変化は無く、私は悔しさを噛締めながら裁判を傍聴するしかなかった。

「善良なる天使の皆様、判決は即座に執行されます！」

そう叫ぶや否や、神官を取り巻いていた近衛兵４人が被告人を処刑台へと連れて行き、特殊な力によって台に拘束した。その特殊な力とは、個人差はあるが全ての天使が使える『神術』と呼ばれる力である。

神術によって拘束されたクロムは泣き叫びながら許しを求めていた。それも当然だろう。賛美

歌の詩を間違えたという些少の事で、今から死刑よりも重い刑に処せられるのだから……

「只今より、被告人クロムを『魂砕断』の刑に処す！」

『魂砕断』……この刑は、肉体は愚か魂までも粉々に砕かれる極刑だ。普通に生を全うした場合、私達天使は肉体に寿命が来ても魂は朽ちることなく新しき生命へと転生できる。転生の際には全ての記憶は失われることになるが、再び生まれ落ちることは幸福であると考えられている。だが、その刑はその機会を完全に奪い、受刑者の魂は永遠に存在することが出来なくなるのだ。

そして刹那の後、ハーツが声を張り上げた。

「神よ……今から、この不浄なる者の魂を永遠に滅します！怒りを鎮めたまえ！」

そう言って、ハーツは手に持つ純金と宝石が散りばめられた豪奢な杖を振り上げた。その瞬間、彼と掲げられた杖にとてつもない『力』が集中しているのを感じる。この裁判所にいる私達全てを焼き尽くせそうな程の眩い光と熱が一点に集中しているのだ！

そして、ハーツが冷笑と共に杖を振りかざした！

「いやだぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

痛烈な断末魔が辺り一面に谺する中、容赦の無い光熱の刃が被告人クロムを切り裂いた。肉体は切られる度に血を流すが、一瞬で蒸発し破片すら残らない。肉体が消滅し、激しい光と爆音の後に魂が砕かれたと私達は悟った。

「（何故此処までする必要があるんだ？見せしめの為だろうが、何故こんな惨い刑を平然と行えるのか……！？）」

私は行き場の無い激しい怒りを膨張させながらも、何も出来ない自分の無力さに苛まれていた。

一息おいてハーツが声高らかに叫んだ。

「善良なる天使の皆様！罪人は葬られ、私達には再び安息がやってきました！神への賛美の歌を歌いましょう！」

その掛け声と同時に、聖歌隊が歌い始めた。澄んだ声の裏側に、ハーツへの恐怖が私には感じられる。私も仕方無く歌う事にした。

「神を称えよ　神を崇めよ　我らが絶対なる神を
神は光　神は全てを創られた
我々には神を除いて何も必要ない
全てを捨てて神に従え」

誰か……誰か止めてくれ……
無駄な言葉だけの繰り返し……もう耐えられない。
だがこの世界にいる限り逃れられはしない。
永遠に……

第二節　天界の生活

先刻の裁判を終え、私とリバレスは部屋に戻った。

私の部屋は、神殿の３階にある特待生宿舎の一室だ。特待生宿舎は天使学校に於いて、非常に優秀な成績を修めている者にだけ貸し与えられる。女天使の友人のジュディアもこの宿舎で生活しており、部屋は隣である。

特待生でない一般天使は、２階の民間居住区に住む。特待生宿舎と民間居住区の天使の往来は禁止だ。恐らくは、民間天使が優秀な特待生に悪影響を及ぼすことを嫌っての事だろう。

時は既に、夜の１０時に差し掛かろうとしていた。窓から見える、燦然と輝く星々が美しい。

私が暫く空を眺めていると、リバレスが口を開いた。

「さっきの裁判で無茶な発言ばっかりしてー！ルナまで有罪になったらどうするつもりだったのよー！？」

彼女の口調から感じられるのは、非難とそれ以上の心配だ。

「……そうだな。心配かけて悪かった」
私は、苦笑を浮かべながら返事をした。
「ルナが死刑になったりしたら、わたしの居場所が無くなるでしょー！？しっかりしてよね！」
リバレスは小さい翼をはためかせ、小さい顔で泣きそうな顔をしていた。
「……大丈夫だって。もうあんな事はするつもりは無いから」
嘘だった。私は、この天界の掟と神官ハーツ……そして神への忠誠心を養うだけの天使学校と、其処で好成績を修めている自分自身にも嫌気が差している。次にまたあのような裁判が起これば、先刻よりも激しく抗議してしまうだろう。
だが私が死んで、身寄りのない天翼獣のリバレスを天涯孤独にするのは不憫でならない。
彼女に初めて出会ったのは、つい２２４年前の事……。私がまだ１６０２歳の時だ。それはリバレスが生まれた日に遡る。
彼女はこの世界に生を受けたと同時に、最愛の親を失った。私がその光景に気付いたのは、彼女が叢で大泣きしていたからだ。
その後、部屋に連れて帰り、今までずっと彼女と一緒に生きてきた。生まれた時から大泣きしていたが、今でも泣き虫なのは変わっていないな。
その考えを見透かしてか、リバレスは怪訝そうな表情を浮かべ私に言った。
「今日は疲れたしもう寝ましょーよ！」
「そうするか。その前にＥＳＧを飲まないとな」
ＥＳＧとは、私達が活動する上で必要なエネルギー源だ。天界で生きる者は、ＥＳＧと水しか摂取しない。これで十分過ぎる程のエネルギーが満ち溢れてくる。
私達は、ＥＳＧと水を一気に飲み干した。体内から溢れる光が全身を駆け巡り、養分の摂取が瞬時に完了する。それを確認して私達は柔らかいベッドで眠りに就いた。
だが私は、先程の裁判の光景と悔しさが再び込み上げて、なかなか寝付けなかった。

〜翌日〜
私はいつのまにか眠っていたようで、眩いばかりの朝陽に照らされて目が覚めた。
部屋の窓辺に置かれた白い花がＳ．Ｕ．Ｎ（惑星シェファを照らす太陽のような存在）の光を反射し輝いている。この花は月夜に咲くのでルナ草という名前だ。
私はベッドから抜け出し、花に水をやった。水を得た花は心なしかより美しく見える。
それを横目に、私は身支度を整える為に鏡の前に向かった。真紅の髪とコバルトブルーの瞳、背中には純白の翼が畳まれている。いつもと寸分違わない姿だが、他の天使達の髪は全て金色に輝いているのに対し、私だけが深い赤色である事に違和感を覚えない日は無かった。
だが、私はそれを恥じたことはない。私の命と引き換えに死を受け入れたという両親から受け継いだものなのだから……
天使服に着替え他の身支度を終える頃に、私の枕元で眠っていたリバレスがようやく目覚めた。
「ふわぁ……。ルナは相変わらず早いのねー……。わたしはもうちょっと寝てもいーい？」
時刻は既に午前８時に近付こうとしていた。
「駄目だ。そろそろ学校に行く時間だろ？もうすぐジュディアが迎えにくる」
そう言った直後、部屋の外からジュディアの呼ぶ声がする。
「ルナー！早くしないと遅刻するわよ！」
「解ってる！後一分待ってくれ！」
私はリバレスに目を遣った。
「一分で支度をしろと……ルナはわたしになかなか酷な要求をするわねー」
「あと５５秒」
リバレスは大急ぎで専用の直径３０ｃｍ程の丸鏡に全身を映し、着替え始める。
「ルナ！あっち向いてて！」
「はいはい」
天翼獣も『心』は天使と変わらないな、と思っている間にリバレスの支度は終わったようだ。
「はぁはぁ……どう間に合ったでしょー？」
「ああ、何とかな。行くぞ」
私達は部屋から廊下に出た。ジュディアは、さも「相変わらずね」とでも言いたそうな顔をし

ていた。
彼女とは１０００年以上前からの付き合いだ。その頃から、毎朝私を起こしにくるお節介な幼馴染になったのだった。
「早く行きましょ。今日はテストの結果発表よ」
「そうか。そう言えばそうだったな」
「ルナは当然１位でしょうねぇ。私も一度でいいから１位の座を奪ってみたいわ。でも、相手がルナじゃぁ仕方ないわね」
ジュディアには羨望の眼差しの裏に皮肉の色が隠れているように見えてならない。彼女は容姿にも学業においても絶対の自信を持っているから、負けるのが嫌いなのだ。唯、私に勉強で勝つことだけは半ば諦めているように見える。
いつも通り取り留めの無い話をしながら、学校に向かって３階から２階に下る階段を歩いていると、一人の天使の男が階下から走り寄って来た。
「あぁぁぁぁ！今日はテストの発表だぜ！俺の人生でこれ程不幸なことはねーよ！」
諦めに満ちた痛々しい声を張り上げている、少し大柄なこの男は友人のセルファスだ。
彼は、普段は非常に強気で賑やかな面白い奴だが、テストに関連する出来事がある日は一日中こんな感じに落ち込んでいる。
単刀直入にいうと、彼は勉強嫌いで成績が悪い。
「相変わらず大袈裟だな。本当にそう思うんなら不幸だと思う前に勉強しろよ」
私は慰める言葉も見つからなかったのでそう言った。
「ルナはちっともわかっちゃいねぇ！俺の心の痛みを！勉強の辛さを、テストの悲しみを！」
「もー……セルファスは勉強になるといつもそれなんだからー！」
とリバレスは苦笑しながら言った。それに続けて、
「あなたは、少しぐらい懲りて反省すべきね」
ジュディアは冷たく言い放った。彼女はセルファスに対して少々冷たい気がする。だが……
「おぉ！ジュディアがそう言うんなら反省するぜ！よーし、次のテストはルナに勝つ！」
呆れる程の気分の変わりようだ。その原因は、彼がジュディアに気があるからだというのは疑いようも無い。
「まぁ、私に勝つのもいいが今日のテスト発表を乗り越えてからだな」
私は、少し意地悪げに言った。
「オーマイガッッッッッッッッ！」
悲痛な叫びを上げながら、セルファスは私達に続いてトボトボと歩き始める。内心、少し悪いことをしたなと思った。それでもセルファスは立ち直りが早かった。
「ルナ！俺は過去なんて気にしねぇ！前進あるのみだ！次のテストを見てろよ！」
「解った。楽しみにしとくよ」
今度は意気揚々と私達の前を歩き始めた。
だが２階にある学校に入り、テストの結果発表が貼り出されている掲示板に近付くと、彼は後込みした。その様子に気付かず、リバレスは無邪気に宙を舞ってすぐに発表の確認をしに行った。
「みんなの名前見付けたわよー！」
彼女は小さな体で飛び回り、すぐに全員の名前を見つけた。
リバレスは天翼獣なので本来は天使学校に入れないのだが、私が願い出て付き添いという形で許可してもらっている。ちなみにリバレスは授業を受けているがテストは受けなくていい。
「ルナはー……やっぱり１位で１０００点満点中９９８点！ジュディアは３位で９５５点！セルファスは……っと」
リバレスは言葉に詰まっていた。恐らくかなり悪い点なのだろう。
「リバレス！俺に構わず言ってくれ！」
セルファスは階段での叫びに似た悲しげな声を上げた。
「セルファス、２００人中２００位！１０００点満点中１４３点よー！」
彼は無言ながらも大袈裟にその場に倒れこんだ。
そして、その暫しの沈黙を一人の秀才が破った。
「ははは、みなさんご機嫌よう。セルファス君は相変わらずですねぇ！」
満面の笑みを浮かべて嫌味を言う、細身で眼鏡をかけた如何にも勉強家な彼の名はノレッジ。

彼の成績は２位で９６８点だ。
「ノレッジ、てめぇ！普段は大人しいくせに、テスト発表の日だけ強気になりやがって！チキショー……！」
セルファスは逃げるように教室に向かって走り去った。そして、ノレッジは私達に視線を移す。
「普段僕は目立たないんだから、この場くらいはいいでしょう？ルナリート君にはまた完敗ですけど」
彼は指で眼鏡を押し上げて、わざとらしく秀才に見せようとしている。
その傍らでジュディアがショックを受けていた。
「私がこんな奴に負けるなんて……。ルナなら許せるけどノレッジは許せない！」
彼女はノレッジをキッと睨み付け、そう叫んだ。
「こんな奴とは失敬な。僕が君に勝ったのは実力ですよ！じ・つ・り・ょ・く！いずれはルナリート君にも勝ちますけどね」
ノレッジは睨み返しはせずに、眼鏡を押さえ下向き加減だが自身に満ちた顔で皮肉っぽく言った。
「くっ……！覚えてなさいよ！次は絶対に……絶対に負けないから！」
そう捨て台詞を吐いて、ジュディアも悔しそうに教室の中へと消えていった。
「ルナ、放っといていいのー？」
リバレスは不安げに言った。
「私が何を言ってもあまり説得力が無いだろ？それに火に油を注ぎかねないしな……。でも、ノレッジ！言い過ぎだ」
私はノレッジを見据えて言った。
「確かに今回は僕の言い過ぎかもしれませんが、たまにはいいじゃないですか？僕の取り柄はテストなんですから」
と悪びれた様子もなく反論してきたので、私は仕方なく言った。
「ノレッジ、他の天使を見下すような言い方は止せ。そんなに、自慢したいのなら私に勝ってからにしろ。約束できるか？」
「いいでしょう。但し、僕が君に勝った暁にはどうなるか知りませんよ！」
「あぁ、構わない。それと、友達なんだから後で二人にはちゃんと謝っておけよ」
「そうですね。ちょっとやり過ぎでしたか」
ノレッジは普段は大人しく理知的な天使だが、テスト発表の時だけは癖が悪い。そう遣り取りが続いていく間に、いつのまにか始業時間が近付いていたので、私達は慌しく教室に入り席についた。

～学校～
学校は午前９時から夜の８時までである。
１日の時間割の教科数は、途中昼休憩を挟んで１時間ずつで１０教科ある。毎日毎日それの繰り返しだ。
私が天使学校に入学してからの８００年以上、同じことが続いている。
教科はどれも共通して、『神』への忠誠心を養う為の教科だ。天界の歴史はもちろんの事で、生活の仕方それに考え方までが教えられ強制される。全ての天使に対して、生きる術や思想に至るまで画一さを求めているのだ。
私は……一人の天使として否、生まれ落ちた一つの生命としての自由を奪う学問が嫌で嫌でたまらなかった。
そんな私が優秀な成績を修めているのは、いずれ天界の指導者となり、この窮屈な教えを撤廃させたいからに他ならない。
私は、生まれつき全ての書物や見聞きした物を覚えようと意識すれば絶対に忘れない。１０００年前に一度読んだ本も一語一句覚えている。それは、他の天使から見れば異常らしいが私にとってはそれが普通なのだ。
本当は……学校に行きたくない。こんな意味の無い言葉の羅列を教えるだけの場所にいても苦しいだけだ！
それでも、学校に来ないとすぐさま神官ハーツがやってきて裁判にかけられ、断固拒否すると

死刑になる。今迄、私と同じような考えを持った生徒は皆処刑されたのだ！
自由を拒絶される世界。そして、教えに反することは何一つ許されない世界……それが私達の、総勢１５００の天使が住む天界だ。

『神学』、『歴史学』、『生活学』、『神術学』、『聖歌学』、『言語学』、『法学』、『統治学』、『兵法学』、『戦闘実技』の１０教科を終え、ようやく夜８時の授業の終わりと共に、今日も意味の無い一日だったと痛感していた。

第三節　深夜の事件

私達は授業を終えて、再び掲示板の前に集まった。メンバーはいつも通り、私とリバレスとジュディア、そしてセルファスとノレッジだ。
ノレッジは昼休みに、朝のテストの事をジュディアとセルファスに謝っていたようで、二人共既に怒りは冷めているようだった。
「それにしても、今日も一日長い授業だったなぁ……！」
セルファスは遣る瀬無い様子で溜息をついた。
「セルファス君、君は毎日同じ事を言って飽きません？」
ノレッジは、苦笑しながらもその言葉に返した。
「そんな事言ってもなぁ、毎日そう思うんだから仕方無いだろ！？俺には学校は向いてないと思うぜ」
「セルファス、あなた朝は頑張るって言ってたのにもう撤回するの？次のテストはルナに勝つんでしょ？」
諦め顔をしているセルファスに、ジュディアは微笑みつつも即座に喝を入れた。
「おう！次は頑張るぜ！俺がルナに勝ったら少しは見直してくれるよな！？」
「勝てたらね」
ジュディアはセルファスには勝つ見込みがないと思っているのか、少しからかうように言った。
「よし！次こそは俺の時代が来る！次のテストは満点だぜ！」
そのプラス思考と元気は何処から来るのだろうか？それについて私は正直羨ましいと思う。
セルファスは、余程ジュディアに気に入られたいらしい。今の所、報われていないが。
確かにジュディアは美しいし、私達には愛想も良い。だが、彼女は自分が見下している天使には冷たく、殆どの場合話そうともしない。彼女はプライドが高いので自分が認めた相手としか仲良くしようとはしないのだ。
私とノレッジは、成績の良さから彼女に認められているのだろう。しかし彼女は普段相手にしない、成績が自分より劣る天使の中でも唯一、セルファスとは冷たい素振りを見せながらも一応仲良くしている。
セルファスは、勉強は出来ないが持ち前のプラス思考で周りを元気付ける素質を持っているからなのだろう。
「おっと、そうだ！俺がルナに勝てそうな奴が一つだけあるぜ！」
セルファスは自身に満ちた顔で突然叫んだ。
「それってなーに？」
リバレスがすぐさま返事をする。
「『力』に決まってるじゃねーか！教科書通りの戦闘実技なんかじゃなくて、純粋に力だけで勝負すれば絶対勝つ！」
彼は再び声を張り上げた。
「そうね。それはテストに無いけど、あなたがルナに勝てる訳無いじゃない？ね！ルナ？」
ジュディアは、私に勝負しろと目で訴えていた。力で勝負した事など無いのだが……仕方無い。
「セルファス、私は勝負なら受けるが何で勝負するんだ？」
「『力を司る間』に行くに決まってるぜ！」
『力を司る間』とは天界にある４つの『間』の内の一つで、物理的な力を司っている『間』だ。此処は本来、新しく生まれてくる天使に力を与える所だが、『力』を数字で測定する装置が置いてあるので、よく男の天使が力を競うのに用いられている。

「解った。じゃあ皆で一度力の測定をやってみるか」

私達は５人、背中にある翼を広げ空へと舞い上がった。神殿や下を歩く天使がとても小さく見える。

空は、月が浮かび上がる寸前のぼんやりとした明かりと、数多の星々で埋め尽くされ、私達を優しく照らしている。

空を飛ぶ……。私はこの時が一番好きだ。何故か、空は『心』を穏やかに……そして、自由に解き放ってくれる。窮屈な世界の中で、私が生きている喜びを一番享受出来るのはこの瞬間なのだ。

しかし、飛行が許されるのは学校終了から、午後１０時までと限定されている。理由は解らないが、法として厳しく定められているので普段は自由に空を飛ぶことはできない。

私は短時間ながらも幸せを感じながら、目的地に着いた。時刻は午後８時４５分。１０時までには部屋に帰らねばならない決まりだ。

「さぁ、着いたぜ！」

『力を司る間』は、神殿と同じく大理石で造られ見事な彫刻が施されている。この彫刻は何らかの動物を象っており『力』の象徴だ。

セルファスは測定装置の方へ一人で走っていった。

「やれやれですね、セルファス君は」

ふぅ……とノレッジは溜息をつきながら、私達の方を振返りそう言った。私達はセルファスに続いて測定装置に近付いた。

「よーし！みんな、俺の全力を見せてやるぜ！」

そう叫びながら、セルファスは装置のクッションのような測定部位を全力で殴った。

とてつもない力だった。装置は揺れて轟音が『間』に響く！そして、すぐに数値は出た。

「１２６４０ポイント！？」

ジュディアは思わずそう叫んでいた。私達も驚きを隠せない。何故なら、普通の力の強い大人の天使が本気で殴っても、せいぜい５０００ポイントが関の山だからだ。セルファスは一体何者なんだ？

「見たか、ジュディア！そしてルナ！力は俺がトップだろ！？」

そう高笑いするのも無理は無かった。全てにおいてエリートのジュディアでも８８９０ポイント、秀才のノレッジは４２００、リバレスは２８００とセルファスには遠く及ばなかったからだ。

そして、私の番が来た。

「ルナ、怖気付いたんなら止めてもいいんだぜ！」

セルファスは、勝ちを確信したかのように私に降伏を煽っている。勝てないかもしれない。だが、私は勝負すると言った以上止める訳にはいかないのだ。

私は、装置の前に立ち拳に力を集中した。力を一点に集中するのは初めてだが、恐ろしい程の力が拳に流れ込む。

次第に拳は強力な光と熱に包まれた。私は恐ろしくなってそのまま拳を前に突き出す……！

「ドゴーン！」

という耳を塞ぎたくなる程の轟音と、立っていられない程の振動で『力の間』は揺れていた。

結果は……

「４６８００ポイントー！？」

セルファスは驚愕の余り、叫んだ直後にその場に崩れた。他の皆からは声も出ない。

私は一体何者なんだ！？拳に力を込めただけなのに……。例のテストだってそうだ。私が９９８点だったのは、一問だけ私が問題を解かなかっただけに過ぎない。

私は他の天使とは違う……。何もかもが！まるで……姿形だけ似ている別の生物のようだ。

束の間の沈黙の後、ジュディアは急に歓喜の声を上げた。

「流石ルナ！私が見込んだだけはあるわ！」

それから一呼吸おいて、セルファスが再び口を開いた。

「……力でも無理かよ……やっぱ、ルナは特別過ぎるぜ！」

彼は諦めの表情とは別に、非常に悔しそうにしゃがみこんだままで地面を叩いていた。それを見兼ねた秀才ノレッジが言葉を発する。
「セルファス君、仕方ないですよ。ルナリート君は、天界始まって以来のエリートって言われてるんですから」
ノレッジは内心、セルファスが私に勝つことを期待していたのだろう。

私は今までこういう勝負の度に『ルナは特別だから』と言われ続けてきた。私には正直、この言葉は悲しい。何故なら、『私は普通じゃない』という現実と孤独感に苛まれるからだ。
私の心中を悟ったのか、リバレスが笑顔で話し始める。
「もうー！みんなしてそんなにびっくりした顔してー！ルナが凄いのはみんな知ってるでしょー！」
「（おいおい、気持ちは嬉しいけどフォローになってないぞ。）」
そして、その言葉のお陰かどうかは解らないが、セルファスが再び元のプラス思考の明るい奴に戻った。
「チッキショー！またも、ルナにしてやられたぜ！こうなったら意地でもルナに一つでも勝たねぇと気が済まねー！ルナ！？無論受けて立つよな！？」
私は、セルファスのいつも通りの態度が嬉しかった。
「ああ。何でも来い。どんな勝負内容でも受けるぞ」
セルファスは、私の言葉を聞いて口元に不気味な笑みを浮かべた。

「勝負は今晩、１１時に『封印の間』までの道程を競う！」
「『封印の間』だってー！？」
全員が声を揃えて、その言葉に驚きを示した。それもその筈だ。
『封印の間』とは天界において最も神聖な場所で、『神』が存在しているといわれている場所だ。無論一般の天使は其処に近付くことは出来ない。其処に行けるのは『神官クラスの天使』だけだ。
具体的には、今いる『力を司る間』の司官。その他、『命を司る間』、『死を司る間』、『神術を司る間』のそれぞれの司官。そして、その司官達の上に立つ神官ハーツの計五人である。
だから、一般の天使が其処へ行くのは、最悪の場合極刑を意味する。
「止めときましょう！ね！？ルナ！」
「そうですよ！セルファス君、それはあまりに無茶ですよ！」
ジュディアとノレッジの二人は怒涛の如くセルファスの言葉に反論した。
「俺はルナに聞いてるんだ」
彼は私の目をじっと見据えて反応を待っている。此処で断れば、先程の『どんな勝負内容でも受ける』という約束が覆ることになる。
「解った。受けて立とう」
私の答えと同時にリバレスが口を挟む。
「ちょっとー！ルナー……！」
だが私は、物言いたげなリバレスを静止して、セルファスの目をじっと見据えた。
「よーし！それでこそルナだ。勝負内容は、夜１１時っていう外出厳禁の時間帯で、更に立ち入り禁止の『封印の間』へ近付くっていう危険な勝負だぜ。誰にも見付からずに、『封印の間』の門前にある噴水からより早く水を汲んできた方が勝ちだ。普段なら衛兵に見つかって即捕まるけど、今日は１００年に一度の不吉なレッドムーン（赤い月）の日。今日は絶対誰も外出しねー筈だ」
セルファスはいつもとは違う真剣な顔で語った。恐らくはこの命懸けの勝負に対する覚悟の重さの現れだろう。
「……いいだろう。今夜１１時に勝負だ。リバレス、ジュディア、ノレッジは危険だから部屋に戻ってるんだぞ」
その言葉に真っ先に反応したのはノレッジだった。
「あ、あ、あ、当たり前じゃないですか！誰がそんな危ない賭けを見届けるものですか！僕はもう帰りますよ！」
ノレッジは大慌てで此処から飛び去り、自分の優等生宿舎へと帰って行った。彼は見付かった

場合の厳罰を恐れているのだろう。保身に走る。それは当然の反応だ。
そして、ジュディアが不安に曇った声を発した。
「私は、見守るわ。ルナが心配だから……。あと一応セルファスもね」
その言葉が終わる前にリバレスも続けた。
「わたしもー！保護者のルナがいないとわたしは生きていけないわよー！」
そういった流れで、私達４人は危険な夜中の冒険をする事となる。
だが、これが私の……否、私達の運命を変える事になるとは、この時は全く予想出来無かった。

〜深夜１１時〜
私達４人は、定刻通り神殿前の噴水前に集まった。
空には真紅の月が出ている。私の髪と同じ色だ……。辺りは不気味な赤色に染まり、他の天使は一人もいない。
この日は古来より、外に出れば災いが降りかかると言われている。しかし、私達は子供の時に一度レッドムーンの日に遊んだことがあるが、災いなど何も起こらなかった。寧ろ、うるさく注意する神官や大人の天使がいないので楽しく遊べたものだった。
だが、今回は訳が違う。今は天界の法律に従わなければならない年齢だ。捕まれば大変なことになる。それを皆が悟ってか、私達は無言で『封印の間』への道に就いた。
噴水前から石畳を歩き、レッドムーンの光をも閉ざす森を抜け……そして、衛兵がいる筈の監視台の下まで来た。いつもなら最低二人は衛兵が目を光らせている筈なのだが。
「よし。やっぱり今日は誰もいないな」
ヒソヒソ声で周りを警戒しながらそう言ったのはセルファスだ。
「ああ。勝負は此処から始めることにしよう」
私もその言葉に慎重に返した。
「私とリバレスは、此処で時間をカウントしてるから気をつけて行ってきてね。特にルナ……、お願いよ」
ジュディアは美しく長い金髪を風になびかせ、大きな瞳を心配に染めながら言った。
「解ってる。私は勝つつもりだ」
それに過敏に反応したセルファスは小声だが興奮しながらこう言った。
「ジュディア！俺はこの勝負でルナに絶対に勝つ！そしたら俺の事を認めてくれ！」
覚悟した男の真剣な眼差しだ。だがジュディアの反応はいつも通り冷淡なものだった。
「はいはい。もしあなたが勝てたらね」
ジュディアを見ていると、表裏があって怖く思える。彼女が私に好意を持っているのは解るが、他の天使に対しては冷た過ぎる。
きっと、私がジュディアに認められなくなったら、途端に私から去っていく。そう思えるから、今まで彼女の思いを受け止めたことはない。
外見の美しさには非の打ち所が無いのだが……
そんな冷淡なジュディアの返事に対しても、セルファスは嬉しそうに言った。
「よし、これでルナを負かせてジュディアに認めて貰うんだ！」
彼からやる気が漲っているのが感じ取れる。そしてもう一人私を心配するリバレスが言った。
「負けてもいいから、無事に帰ってきてねー！」
私にとって子供のようなリバレスの励ましが、一番頼りになる。この勝負はこれから先の事を考えて、負けてもいいから無事に帰って来ようと決意した。それでも、勝てるに越した事は無い。
「ルナ、スタートだ！」
セルファスが叫んだ。と同時に私達は駆け出した！
この監視台の下から『封印の間』の門前の噴水迄は、大体５００ｍ程度あると言われている。走り始めて気付いたのだが、監視台からのこの道は強固な高い塀と木々に囲まれ、まるで牢獄のような閉塞感を受ける。また、殆ど光も入ってこない。
しかし、セルファスは辺りを気にせず全速力で駆け抜けていく。その並の天使を超越したスピードでは、恐らく１分もしない内に着くだろう。
「（このペースじゃ負けてしまう……）」
私は、全身に力を込め全力で地面を蹴っていった。足元は変わらず石畳なのだが、時折それが

ひび割れる程の力を込めて走っているのだ！そして、本気を出した私はすぐにセルファスを間近に捕えた。
「くっ！やっぱりルナは早いぜ」
もうセルファスの声が聞こえるぐらいの距離だ。すると、セルファスは更に加速した！
「うぉぉぉぉぉ！」
彼は顔を真っ赤に染め、全力を出しているのが明瞭だ。その熱気は私にまで伝わってくる。
「セルファス……いつからそんなに速くなったんだ！？」
私は少し息を切らせながら尋ねた。
「……負けられねーんだ！俺はジュディアに認めて貰うんだ！」
彼は問いには答えず呪文のように叫んだ。恐らく、走り始めてまだ３０秒程だろう。しかし、もう目前に『封印の間』の門前の噴水があった。私とセルファスはほぼ同時に自ら持参したコップに噴水の水を汲もうとする。……すると、とてつもなく眩い光が少し離れた水底から放たれた！
その光は私達に向かって来たが、間一髪で避け、私のコップだけが砕け散った！
「まずい、ルナ！あれは、神官ハーツお得意の『拘束』の神術だ！」
それは、昨日の裁判で被告を押さえつけた強力な神術である。恐らくはハーツが侵入者用に設けた罠だろう！
「解ってる、どんどん放たれてくる！？セルファス、勝負はお預けだ！逃げるぞ！」
私は緊急の事態にそう叫ぶしか無かった。青褪めたセルファスは即座に答える！
「おう！捕まったら終わりだ！全力で行くぞ！」
私達は顔を見合わせ、行きの時よりも更に速く、息も絶え絶えに元の監視台に戻っていった。

時間としては、ほんの二分程度の出来事だっただろう。しかし、私達二人には永遠に等しく感じていたのは確かだ。
そんな私達を迎えたジュディアとリバレスの表情は不安に曇っていた。勝負どころじゃないという程、疲労と恐怖に引きつった私達の表情を見て、ジュディアは心配そうに話しかけた。
「どうしたの！？二人とも！？」
その質問には私が答えた。
「今はそれよりも逃げるんだ！事情は後で話す！」
私が余りにも大きな声で叫んだので二人は驚いていたが、事の重大さに気付き私達に続いて走り出した！
しかし、突如見慣れぬ影が私達の前に立ちはだかった！

「こんな所で何をしているのです！？」

私達を絶望の淵に追い遣る、その冷徹な声の主は紛れもなく『神官ハーツ』のものだった。
全てが終わった。そう観念して、何も答えない私達を見て更にハーツは続けた。
「この凶日に出かけるばかりでは飽き足らず、まさか『封印の間』に近付くとは……！」
其処で、少しでも弁解する為にリバレスが打って出た。
「わたし達が此処にいる罪は認めます。でも、『封印の間』に行ったとは断言出来ないんじゃないでしょーか？」
しかし、ハーツは不敵な笑いを浮かべそれに返答した。
「君は確かセルファス君でしたねぇ。君の持つコップに入っている水には私の術が施されているんですよ！」
そう突き詰められたセルファスは持ったコップを、呆然と力を失い地面に落とした。

……どれだけ良いように考えても死刑は免れないな。

私達の誰もがそう思っていた筈だが、聡明なジュディアだけはその場に跪き反論した。
「神官ハーツ様！どうかお許し下さい！私達は唯、神に祈りを捧げたかっただけです！『封印の間』に近付いたのも、神のお近くに寄りたいが為です！全ての行動は私達の信仰心の顕れなので

す！」
彼女は必死に説得しようとした。しかし、ハーツの表情は変わらない。そして私は決断した。
「神官ハーツ様！全てはこの天使ルナリートの責任です。皆を誘ったのは私です。どうか、私を処罰して下さい！」
その言葉が終わる刹那に他の３人が同時に叫んだ。
「ルナ！？」

そして無限にも等しく思える沈黙の後、ようやくハーツが口を開いた。
「成る程、事情は解りました。全ての天使の中で最高に優秀なルナリート君が言うのだから間違いはないでしょう。だから……今回は特別に見逃してあげましょう。しかし、次は無いと思いなさい！」
私達は意外な結果に顔を見合わせたがすぐに返事をした。
「はい！ありがとうございます！」

ハーツは呆気ない程早々に立ち去ったが、死ぬ思いをした私達は無言で帰路に就いた。まだ皆が恐怖に震えているのが解る。
だが、私だけは至極冷静でいたのはおかしな事だろうか？
そんな疑問を自分に投げかけていると、私達の生活の主軸である神殿前の噴水広場まで戻って来た。其処でようやく皆の心がほぐれたようだ。
「ルナ！あんな事を言ってどうするつもりだった（んだ！）（のよ！）（のよー！？）」
三人は同時に叫んだ。皆が親身になって心配してくれている。

其処で、私は先刻の言葉に隠された、１０００年以上も誰にも語らなかった真意と決意を全て話すことにした。

「私が……普通じゃないのはみんなが知っている通りだ。でも、私は自分の考え方については正しいと確信している。今から話すことは皆だから話すんだ」
皆、瞬きすら躊躇うかのように真剣に私を見つめる。
「私はこの世界そのもの、いや天界に疑問を持っている。『神』という見えない観念に縛られ、全ての天使が自由を奪われている。神官や学校の教師達は私達に決め付けられた思想を植え込み、其処からはみ出す者は容赦なく処刑される。それが果たして幸せだろうか？否、私は決してそうは思わない。全ては神の教え、全ては私達の幸せの為……そう思い込まされているに過ぎないんだ！何故そう思うのかは、神官ハーツを見れば解るだろう？奴によって、私と同じように疑問を持った天使は殺された」
今まで押し殺してきた感情が激化する。私は握った拳が怒りに震えた。
「私は、自由な一生が欲しい……！自由に考え発言し、何者にも脅えることなく生活できる世界が！その世界が永遠に実現しないのならば、私にとっては生きながら死んでいるようなものなんだ！」
私を見つめる瞳が、驚きに染まって行く。
「さっき私が皆の為に犠牲になるような発言をしたのは、裁判の場で全ての天使に『自由の幸せ』を理解させたかったからだ。それでもし私が殺されても、必ず私の考えを継ぐ者が現れる。そして、いずれは天界に生きる者全てが、真の幸せを享受出来る時代が来る！それが叶うならば、私一人の犠牲など軽いものだ。そもそも、私は『神』の存在を認めていない。本当に存在するならば、こんな世界にはしない筈だ！」

私は、興奮を抑える為に深呼吸をした。皆はどんな反応を示すだろうか？絶縁で済むだろうか……
「ルナ！目を覚ましなさいよ！あなたはどんな天使よりも優秀で、容姿も頭脳も最高な天使ルナリートでしょう！？唯一、私が一人だけ認めた存在の筈……。それをあなたは裏切るの！？」
私の考えの一片も理解出来ず、そう答えたのはジュディアだった。

「私はジュディアが思っている程、素晴らしい天使じゃないさ。偶然、能力が良く生まれて来ただけだし、そんな自分に孤独さえも感じてる。ジュディアには解って貰えないようならそれでいい」

私は冷静にジュディアの目を直視して、多少冷たくそう言い聞かせた。

「俺もそう思うぜ……。お前程優秀な奴が、そんな馬鹿な事を言って一生を無駄に散らせるなんて許せねぇよ！友人として絶対そうさせる訳にはいかない！お前は俺の目標だし皆にも必要なんだ！俺はそんなことになる前に力ずくで止めるからな！」

彼は激しく私を叱責した。私を思い遣っての事だろうが、私の考えは変わらない。

「セルファス……気持ちは嬉しいんだが、友人なら解ってくれると思ってた分……残念だよ」

悲しい事に、親友だと思える彼にも理解して貰えない。私に共鳴してくれる友人はいないのだ。

「リバレス！お前も何とか言ってやれよ！」

話を振られたリバレスは戸惑いながら……それでもしっかりと答えた。

「わたしは、ルナが大事な親みたいなものだからルナの考えは尊重する。でも、絶対死なせたくない！今日はもう遅いし、わたしが部屋で説得してみるから、みんなはもう帰って」

「でも！」

二人は同時に答えた。しかし、リバレスは態度を変えなかった。

「お願い……！わたしは、生まれた時からルナに育てられてきたから、何となく考えは解るのー！絶対みんなの思うような悪い方向にはしないからー！今日は……ね？」

そう言って二人は渋々と部屋に帰って行った。

「……絶対に！私の信じるルナに馬鹿なことはさせないから！」

ジュディアが帰り際に放ったその言葉が、何故かいつまでも耳に残った。

そして私達も部屋に戻り、リバレスと二人になった。

「リバレスありがとう。お前だけだ、私を解ってくれるのは」

彼女は少し困惑しながら答える。

「もうー！普段はわたしのことなんか、滅多に褒めないくせにー！ルナがそんな考えを持ってるのは解ったけど、それが神官に知れたら死刑じゃ済まされないのよー！だから、ルナが将来神官になって、現状を改革する日が来るまでは他言しないって約束できる！？」

こうなると、まるでリバレスが私の親みたいだな。

「それが一番堅実だろうな。解ったよ、もう無茶はしない。ゆっくりと天界を変えていくさ」

私は、一朝一夕で変えられない現実を直視し、これから先生涯をかけての責務を胸に誓ったのだった。

そう、この時は本気でそう思っていた。

第四節　反抗の代償

「ドンドンドン……！」

無機質に……荒々しくドアを叩く音で私達は目を覚ました。時刻はまだ午前６時だ。一体何事だろうか？

「んーなぁにー？」

しかし、リバレスの呑気な声は相変わらずだ。

「此処を開けろ！」

聞きなれない凄みのある声がドアの向こうから聞こえた。私は急いで着替え、ドアを開けた。

「天使、ルナリートだな！？」

この天使達には見覚えがある。神官ハーツの親衛隊だ！

「はい、私はルナリートです。私に何か用でしょうか？」

私は事情が解らなかったので、普段と変わらぬ態度で対処した。神官に昨日見つかった件は見逃された筈だが……

「神官ハーツ様の勅命により、お前を連行する。いいな！？」

親衛隊は専用の白い甲冑で身を固め、鋭い槍で私を包囲している。此処は大人しくしているのが賢明だろう。
「ちょっと待ってよー！？ルナが何をしたっていうのー！」
リバレスは、この異常な状況を打破する術を持たなかったが、それでも私を弁護する為に叫んだ。
「黙れ！天翼獣の分際で！神官ハーツ様直属の親衛隊である我々に意見するな！」
親衛隊は声を荒げてリバレスの言葉を掻き消した。
「さぁ、来てもらおうか？」
彼等は更に接近し、私の喉元近くに槍を突き付けた。
「はい」
私はこうして理由も解らぬまま、神官の元へ連行されていった。それには私の身を案じるリバレスも一緒に付いて来た。

〜神官室〜
私は親衛隊に無理矢理歩かされ、昨日通った封印の間への道を抜け、監視台を通り『封印の間』の入り口の手前にある神官室へと連れて来られた。
此処に来るのは生まれて初めてだ……。途中、神官の神術が施された噴水の傍らに、私のコップの破片が落ちていたのを横目に見て、昨日の出来事が脳裏に蘇る。
やはり、昨日の免罪は虚言だったのだろうか？
そんな事を深刻に考えている間に神官が私達の眼前に現れた。相変わらずの冷徹な目付き、狂気染みた口元……。それを強調するかの如く、この神官室は薄暗く冷たい空気が流れている。
壁には、神官の杖や剣などの武器、更には拷問器具までもがある。私は血液の付着したそれらを見て背筋が凍りついた。リバレスも小刻みに震えているのが解る。そして、狂気の神官ハーツは口を開いた。
「さて、此処に君を呼んだのは他でもありません。尋問の為です。今から、私が君に幾つか質問します。君程優秀な天使なら、即答できる質問の筈。正直に答えなさい」
神官は私を椅子に腰掛けさせ、彼も机を挟んで私の正面に座った。周囲は当然の如く親衛隊に取り囲まれている。
何故、私が尋問されるのだろうか？恐らくは昨日の件だろうが、あれは許された筈なのに……
だが私は、釈然としない気持ちを抑えたまま、大人しく尋問を受けることにした。まずは相手の真意を掴む必要がある。
「尋問をどうぞ」
私は短くそう返事した。
「いいでしょう。今から質問する内容は衛兵によって記録され、公な証拠となります。くれぐれも虚偽の返答をしないように」
その言葉と同時に親衛隊の一人がハーツの横に座った。手には万年筆を持ち、書類に記録をしている。
「まず、あなたは万能なる唯一絶対なる神の存在を信じますか？」
ハーツは強い口調で私に問い掛けた。この言葉に対する答えは、勿論本心ではノーだが……
「はい……、信じます」
そう言った瞬間だった、ハーツは顔を怒りに紅潮させ、机を激しく叩いた！
「嘘をつくのではない！昨晩、君が神に疑問を持っていると言ったのを、はっきりと聞いた者がいるのですよ！」
私はその反応に驚いた。昨晩、その話をリバレス、ジュディア、セルファスにしたのは事実……。
しかし、誰がそんな事を密告するんだ？誰か知らない天使が盗み聞きしたのだろうか？情報が少ない今は、下手に答えるべきでは無いだろう。私は暫く黙る事にした。
神官は束の間の沈黙の中で思索を巡らせて、こう言った。
「ルナリート君！君は最高に優秀でありながら、本当にそんな事を言ったのですか！？違うでしょう！？きっと、密告者が君を陥れようとしているのです！」
ハーツは更に興奮し、荒々しく声を上げた。

その様子から、私への期待と信頼の高さが伺える。私は唯テストで優秀なだけだと言うのに……。彼は天使を勉強の出来不出来でしか判断出来ないのだ。

それはさて置き、いつまでも黙っている訳にはいかない。私は怒れる神官に無難な質問をすることにした。

「私がその質問に答える前に、一つお伺いします。密告者とは誰なのでしょうか？私の見解と、密告者の報告が食い違う場合、正しい裁きが為されないのは言うまでもありません。出来れば、お呼び頂きたいのですが」

私はあくまで冷静に対処した。相手の感情に合わせて、自分を激化させれば悪循環だからだ。

「良いでしょう！来なさい！」

その言葉に反応し、部屋の奥の扉から出てきた天使はよく知る天使だった！

非の打ち所の無い美しい容姿を持ち、完全主義者の女天使……！

「ジュディア！」

私が反応する前にリバレスが驚愕の叫びを上げた。

「ジュディア、何故だ！？」

私はジュディアの目を直視する。

「あなたに……あなたに余りに危険過ぎる考えを止めて貰いたいからよ！」

彼女は、半分涙目になりながら悲痛な叫びをあげた。ハーツに密告したのは私に考えを改めさせる為だったのだ。

「天使ルナリート君！もう一度聞きます！この天使ジュディア君が、昨日私に言ったことはあなたの本心なのですか！？否、単なる気の迷いでしょう！？」

神官は更に興奮し、私に質問を浴びせる。

私は、神官ハーツが次にとる行動を考えた。私が此処で本心を否定すれば、無罪放免されるだろう。しかし、虚偽の密告をしたとされるジュディアはどうなるだろうか？間違い無く厳罰に処せられる。

神官は、私を信じている。成績の良さ故に。そこを上手く利用すれば、私もジュディアも無罪に出来る筈だが……

「神官ハーツ様！私が神官様に報告したのは、天使ルナリートに考えの更正を施して欲しいからなのです！」

ジュディアは神官に叫んだが、彼はその言葉には耳も貸そうとしない。

「天使ルナリート君、正直に答えなさい！ジュディア君の密告は真実なのかどうか！？真実で無いのであれば、ジュディア君を処罰して君は解放しましょう！君程優秀な者が、そんな愚かな過ちを犯す筈はありませんからね！？」

やはり神官は私を盲目な迄に信じている。

私が此処で真実を否定するのは容易い。上手い嘘で、私とジュディアの両方を無罪にする事も容易い。

だが私は、今後天界で胸を張って生きていけるのか！？

自由を言葉に出来ず、真実は闇に葬られる。それで、満足出来る筈が無い！

もう、心を否定され続けて生きるのは嫌なんだ！

「神官ハーツ様！私天使ルナリートが昨晩、天使ジュディアに話したことは全て真実です！私の本心です！」

「ルナ！」

リバレスとジュディア、二人の叫びは殆ど私の耳に入らなかった。私の心は真実で満たされている！

私にもう迷いは無い。こんなに窮屈な世界で、我慢して苦しみながら生きていくのは耐えられないのだ！

私の言葉に、紅潮していたハーツの顔は蒼白になり、今まで見た事が無い程に、冷徹な顔つきになった。

「……失望しましたよ……。天使ルナリート君、否、ルナリート……。あれ程優秀で、私を期待させておきながらこの仕打ち……。君には今晩、公開裁判を行います！その時に謝罪しても、もう有罪は免れません！そして今の君の発言が、どれ程愚かで悔やむべきものだったか理解するでしょう！」

私は信念を貫く。その為に裁かれるのであれば本望だ。私の考えを全ての天使に聞かせるんだ。

『自由』を手に入れる為に！

私の覚悟を神官が知る由もなく、神官は身も心も凍てつくような叫びを発した。

「牢に連れて行きなさい！」

その突き刺さるような叫びと共に、私とリバレスは地下の牢獄へと連れて行かれた。

～牢獄～

冷たく閉ざされた牢獄……。眼前には強固な鉄格子。それには神術によって結界が張られており、どんな物理的な力を持ってしても破る事は出来ない。

薄汚れた灰色の壁には、黒く固まった血の爪跡が残っている。罪人が投獄されて、苦しみ抜いて付けた跡だろう。

罪の無い被告達は、処刑される直前迄、悔しさに涙しながらこの傷を付けたに違いない。

私も……今晩大衆の前で裁かれる。それまでの時間を此処で過ごす訳だ。

「ルナー！どうして、神官の前で弁解しなかったのよー！？ルナが真剣に考えれば、ルナもジュディアも無罪にできた筈よー！」

リバレスは、悲しみと悔しさに満ちた顔を私に向けた。

「良いんだ。私が信念を貫く限り、いつかはこういう事態になると思っていた。昨日は私が神官になる。その日まで辛抱するつもりだったが、やはりあの神官には失望と怒りしか沸いてこないよ。そんな奴に敬意を払い、自由の奪われる世界で数千年我慢するなんて、私には無理だったんだ。でも……お前には悪い事をしたと思ってる」

私は自分の信念を貫いたことに悔いは無いが、唯一つリバレスの今後の事を考えると、申し訳無い気持ちで一杯になった。

彼女には私が必要だ。私を失った彼女はどうなる？親も兄弟もいない彼女が！親を持たない天翼獣は生きていけない。

生きていくには天使の助けが必須なのだ。

「ルナのバカー！バカバカバカ！」

リバレスは、小さい体で泣きながら私の胸を叩いた。私にはその気持ちが痛い程良く解る。

だが、私には彼女に伝えなければならない言葉がある。

「リバレス、よく聞くんだ。私は今迄、お前の親代わりになって生きてきたつもりだ。だが、今日私は狂気の神官によって裁かれる。恐らくは死刑は免れないだろう。そして今のまま、私がお前の親権者だと罪はお前にも及ぶんだ。だから、私とは縁を切れ！そして別の天使に親権者になって貰うんだ！そうすれば、リバレスはリバレスのまま生きていける。解ったな？」

彼女はこの言葉を聞いて更に泣き出した。もう喋ることも出来ない。

「ごめんな」

私はリバレスの頭を優しく撫でた。こうするのも、これが最後かもしれない。

私達は無言のまま、寄り添っていた。徒に時が過ぎていく……

そして、数時間程経っただろうか？友人達が尋ねてきた。結果的に私を陥れる形になったジュディア、そしてセルファスとノレッジだ。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……！」

ジュディアは号泣しながら私の元へとやって来た……。その涙で滲んだ美しい顔は、後悔の痛みに彩られている。

「馬鹿野郎！何で反論しねぇんだ！？お前なら、何とか出来ただろ！？」

セルファスは本気で怒っている。その怒りの強さから、私のことを本気で心配してくれているのが良く解る。

「ルナリート君……僕は失望しましたよ。君は僕の目標だったのに、まさかこんな事になるなんてね」

しかし、ノレッジは微笑さえ見せた。彼だけは、私の事を考えていない。
彼は、建前として私の事を心配する振りをしているだけなのだ。寧ろ彼は、私が消えることに喜びすら抱いている。醜い優越感を得ているのだろう。
心の闇を垣間見たが、わざわざ私に会いに来てくれた友人達に言葉をかけない訳にはいかない
「こうなってしまったものは仕方ない。誰も悪くはないんだ。ジュディアもな。強いて言うならば、自由な考えを持つだけで罪人となるこの世界が悪い……。私は昨日言った通り、自分の意思を貫き通した末に、全ての天使に自由を与える礎となるなら悔いは無い。そうする為の発言を、法廷の場で胸を張ってやるさ」
私は淡々とだが、強い意思を持って語った。
「ルナ……！あなたが居ない世界なら私は要らない！私は裁判で、何とかあなたを守って見せるから！それが私のせめてもの罪滅ぼしだから！」
ジュディアは涙声でそう叫んだ。しかし、
「やめるんだ！」
私は自分でも驚く程の大声で彼女を一喝した。
「それで、罪がジュディアにまで及んだらどうする？これは私の戦いだ、自由な世界を勝ち取る為の！」
「でも、でも！こうなったのは私の所為なのよ！」
彼女は一歩も退こうとしない。
「ありがとう、気持ちだけ受け取っておくから。絶対に馬鹿な真似は止めるんだ。それが私への償いだと思ってくれ」
その言葉の後、ジュディアは啜り泣きが止まらず、口を開くことはなかった。

その後に、皆とどんな話をしたかは記憶していない。
私の頭の中は、信念と決意のみに支配されていたからだ。

永遠とも思える沈黙の中……また数時間が経過した。

死……否、それ以上の苦しみを考えると、私はどうしようもなく不安になって来た……
自分の意思を曲げる気は毛頭無いが、いざ自分の生涯の終わりを目前にすると心は恐怖で満たされる。
死ぬのは怖い、生命としての基本的な感情が今ごろになって私を満たしだしたのだ。
私は愚かだったのだろうか？普通に生涯を全うする方が幸せだったのではないか？
本当に私の裁判での発言如きで世界を変えられるのか？無駄な死になるのでは無いだろうか？
しかし、苦悩の果てに私はいつのまにか今までの生きてきた道を記憶の中で辿っていた。
記憶にはリバレス……、そして友人達と過ごした１０００年余りしか浮かんで来ない。記憶を辿るにも私には謎が多過ぎるのだ。
私は両親の顔を知らない。私を産んですぐに死んだという事を聞いただけだ。
また、自分の本当の名前も知らない。ただ解っていたのは『ルナリート』という名前の一部のみ。本当の名前は誰も知らないのだ。
そして、私は様々な点に於いて他の天使とは違う。外見も、能力も、考え方まで……
それでも、私は自分に胸を張って生きて来た。自分自身に後悔はない。
私は最後まで信念を貫く。何者にも脅える事無く、自由に暮らせる世界にする為に！

私が生きてきた理由は此処にあるのだ。

そう決意を固めた頃、ずっと黙っていたリバレスが真っ赤に腫れた目を擦りながら私に話しかけてきた。

「わたしの親はルナ一人だからー……！」
その言葉には重い意味があった。それは、私と共に生き共に死ぬ覚悟があるという事……。彼女は其処まで私を慕っている。
「解った」
私はその意思を確かに受け止め、短いが優しくそう答えた。
「……でもな、私は裁判でどんな判決が出ようとも、意思を曲げるつもりは無い。それぐらい強い意思を見せなければ、この世界に変化は起きないからだ。今迄僅か１８２６年しか生きていないが、何も変わらなかった。だから私はどんな手を使ってでも、法廷の場で意見を全ての天使に明白にするんだ。自由の尊さを！刑を受けるのはそれからだ」
リバレスはしっかりと私の考えを受け止め、強く頷いた。私達の間にもう言葉は要らない。

そして今夜、全てを揺るがす事件が起こる事になる。

第五節　堕天

時刻は午後８時半になった。「ツカツカ」と牢獄へ通じる暗い廊下を歩く硬質な音が聞こえる。ついに来たのだ。衛兵が私を裁判所……否、処刑場へと連れて行く時が。
無情な足音が私の独房の前で止まる。
「出ろ！」
その声と同時に鉄格子が開くと、白い甲冑を纏ったハーツ直属の近衛兵が、私の部屋を訪れた時と同じく鋭い槍を突き出し、私達を完全に包囲した。
「私は逃げも隠れもしませんよ」
私は法廷で信念を見せるんだ。逃げる理由など無い。
「黙れ！さっさと歩け！」
私の気持ちを狂える神官の手下が知る由も無く、私達は槍で後ろから追い立てられた。
来た道を戻り神殿の前に着く迄に、多くの天使が私をジロジロと見ていた。彼等の殆どは私を蔑み……一部の者は、『可哀相に』と小声で囁いている。他人事であるのを良い事にその態度は冷たく恐ろしかった。

天使達がこうなるのは、自由を奪う神官と厳罰に他ならない。

厳罰に処せられる天使は、冷静に考えれば大した罪は犯していない。しかし、神官がそれを重罪に扱えば天使達もそう思うしか無い。言論は愚か、思想、生活まで規制し画一的な社会を作り出し、はみ出す者は即処刑……。それが実情だからだ。
私は意志を更に強く持ち集中する。次に気が付いた頃には神殿の屋上の裁判所に到着していた。
私とリバレスは被告人の席に座らされた。時刻は午後９時。それを掛け時計が知らせると神官ハーツが現れた。

「只今より、被告人ルナリートの裁判を開廷します！善良なる天使の皆様、神に敬礼を！」
私とリバレスも含め起立し、裁判所奥にある神官用台座の背後にそびえたつ神を象った彫像に敬礼した。
「皆様、着席して下さい」
神官は淡々と、裁判の前に行う用意を済ませていった。
「今回、被告ルナリートには３人の弁護人がついています。学友のセルファス君、ジュディア君、ノレッジ君です」
あれ程、馬鹿な真似は止めろと言ったのに……。被告である私に厳罰が下れば、友人である彼等にも悪影響を及ぼすのだ。
しかし、裁かれようとしている今となると、私は正直嬉しかった。
「それでは、被告ルナリートに対する罪状を読み上げます！」
そんな気持ちとは裏腹に冷酷な神官による裁判は容赦無く進む。

「被告ルナリートは、昨晩レッドムーンの日にも関わらず外出をしました！これは、重大な法律違反です！しかし本人は天界一優秀な上、重々反省しています！これが今回の罪状です！」
おかしい！何故だ！？私の罪はそれでは無い、私は神の存在を否定したんだ！
今回の裁判の焦点はそれについてだろう！どうなっているんだ！？
「私は……！」
其処まで言った瞬間だった！神官は指先から、強力な『拘束』の神術を聴衆には見えない様に放ち、私の口一点に集約させた！
口を封じられ何も話せない！
「神官……！」
そう叫んだリバレスは体全体を全て拘束された！
「皆様、この通り被告は重々反省しております。そうですね、ルナリート君？沈黙はイエスと取りますよ」
そう言って、神官は勝ち誇ったように微笑んだ！私は必死に口を開こうとしたが、天界一の神官の術は外せない！
「この通りです。皆様！弁護人の３人、異議はありますか？」
「いいえ」
３人は声を揃えて答えた。私は絶望した！
理由は解らないが、私は陥れられたんだ！恐らくジュディア、セルファスが神官に抗議したのだろう。私を生かしたいが為に！
そうでなければ、神官が私を助けた恩でこの先死ぬまで私を利用する為に！
それじゃ、意味がないんだ！この世界を何も変えられないじゃないか！

「判決を下す！」

神官はいつもと同じように高らかに叫びあげた。
「被告ルナリートは、今後５０００年間私の勉強部屋に禁固の刑に処す！但し、学校の授業のみには参加できるものとする。だが、友人との会話等は一切認めない！」

私は深い絶望と怒りで身が震えた！涙まで止め処なく流れる！リバレスも横でもがき苦しんでいる！
私……否、俺は全ての天使に自由を与える為に此処に来たんだ！それなのに……それなのに……！
私の意見を伝えるのは愚か、口封じまでされて何も話せない！そして、判決が今後５０００年間も神官の元に禁固だと！？
ふざけるな！私をこうやって助けた振りをするのは、じっくりと時間をかけて精神操作を施して、利用する気なのだろう！？
この裁判は謀略だ！私の口を封じて、自分の思い通りに世界を動かす為の！
許さない！絶対に許さない！
そして、感情が限界を超えた時、俺の体に変化が顕れた！
体がとてつもなく熱い……！焼けそうだ！そう感じた時には体中が強力な『力』に包まれていた！
頭髪は銀色に変色し、瞳は真紅に染まっている！
先刻、神官にかけられた『拘束』の神術も紙切れのように弾け飛び、次の瞬間には、苦しむリバレスに手をかざし、術から解放していた！
「な、な、な……何ですかそれは！？」

長い沈黙の後、其処で神官がようやく口を開いた。そう感じたのは、今の俺には全ての動きが止まっているかの如く見えるからだ。
「……何ですかだと！？ふざけるな！貴様がかけた術で、俺達の口を封じたのだろう！？それを破っただけだ！……何が神官だ、何が神だ……！保身と欲の為に生きる偽善者が！」
俺は怒りの余り、普段決して使わない暴言まで吐いた。
「天使ルナリート！せっかく助けてやったのに何だ、その態度は！？近衛兵、取り押さえなさい！」
近衛兵は全員槍を持ち俺の元へ走り寄る。
「邪魔するな！」
俺は、右の掌から『焦熱』の神術を放った！
それは近衛兵の白い甲冑を真っ赤に加熱させ、全員裁判所の壁に叩き付けた！叩き付けられた壁は崩壊し、崩壊した壁から兵が外へ飛び出す！
本来、この術は学校で教わる最も初歩の術で、マッチ一本程度の火力しかない。今、俺の体は通常の数百倍以上の力が漲っているようだ。
「俺達は……貴様みたいな神官が造った、偽物の『神』の教えに操られる、生きる意志を持たない人形なんかじゃないんだ！生きる者はな、自由に考え自由に発言し、自由に生きる権利があるんだ！」
俺は神官を激しい憎悪と共に睨み、言葉を続ける！
「……それを貴様は踏み躙る！気に入らない奴は、すぐに惨たらしく処刑する！そして俺のように、成績が優秀な者は助けて利用する！貴様が本当の罪人だ！」

俺は今まで言えなかった本心を神官にぶつけた。聴衆の天使は皆、俺の意見に聞き入っている！皆が少なからず同じ疑問を抱いていたのだろう。この後はどうなろうと、俺は満足だ……
「天使ルナリート！救いようのない男だ……これでも食らいなさい！」
ハーツは高等神術である『滅炎』を俺に向けて放った！それは半径５ｍ程の炎の渦で、とてつもない熱量だ！しかし、俺はそれを片手で完全に掻き消した！
その熱は辺りの物を溶かし、普通の天使ならば側に寄れない程の熱空間を生じた。
尋常ならざる光景を見て、聴衆の天使達は急いで逃げ出す！

そして……この場には俺とリバレス、セルファス、ジュディア……そして神官だけが残された。臆病な保身主義者のノレッジは真っ先に逃げ出していた。

「貴様の所為で、何人の天使が犠牲になったと思ってる！？この１０００年間、俺と同じような考えを持った天使が！？皆、この世界を変えたかったんだ！自由に……何者にも脅える事無く、幸せに生きる術を模索したんだよ！」
俺は自由を求めて処刑された、今は亡き天使達の意見を代弁した！
「黙れ、黙れ、黙れ！この神官ハーツ様に逆らうな！逆らう奴は死ぬがいい！」
そう叫び、ハーツは杖を振り上げた！『魂砕断』だ！
光の刃が俺を襲う！その術を眼前にして感じたが、確かにこれだけの力なら魂が砕けてもおかしくはない！
しかし、その瞬間俺は全身の力を最大限まで増幅させた！
「パリーン！」
究極処刑神術の『魂砕断』は、激しい音を立て俺の体に触れる前に粉々に砕け散った！
「そんな馬鹿な」
ハーツは杖を落とし、ガックリと膝をついた。
「神官ハーツ！今までの無念の天使達の怨みを思い知るがいい！」
俺はハーツとの距離を一瞬で詰め、拳に怒りを込めて狂気の神官を殴り飛ばした！
「うがぁぁぁぁぁ……！」
神官の叫びと共に、ミシミシと骨が砕ける音がした！そのまま奴は『神を象る彫像』に激突し床に落ちる。

俺はゆっくりと奴に近付いた。
「来るなぁぁぁぁ！許してくれぇぇぇぇ！」
奴は懸命に命乞いをしている。
「貴様は……今まで命乞いをした天使をどうしてきた！？」
俺は未だ収まらぬ激しい怒りを神官に向けた。
「……許して下さい！どうか、どうか命だけは！」
惨めな姿だ。あれ程厳格に……否、傲慢に天使に情けをかけなかった神官が、こうして跪き許しを請うている。
しかし、俺は冷徹に言い放った。
「二度と転生出来ぬよう、肉体もろとも魂を消し去ってやる！貴様にはその刑がよく似合う……！」
「ルナ！」
その時初めて、リバレスとジュディア、セルファスが叫んでいるのに気付いた。
「止めるな！この男がいなければ天界は救われる！」
しかし、3人は俺の元に駆け寄り必死で止めようとする！
「ルナ！それで神官を殺しても、神官とやっている事は変わらないわよー……！」
俺が奴と変わらないだと……！？そんな筈はない！
3人は必死で俺に食い付いてきたが、今の俺を止める術は無かった。
「神官ハーツ……！覚悟するがいい！」
神官は放心状態に陥っていたが、そんな事は関係無い。俺は、許されざる者を消滅させる為に、空中に強力な『滅び』の力を集めた！
何故か、今の俺には全ての神術の術式が頭に浮かぶ。究極神術を超えた禁断の神術さえも！
『滅び』の力はやがて空間さえも飲み込み始めた。これを放てば神官は愚か、この神殿そのものが消滅するだろう！
構わない、消えてしまえばいい！
「禁断神術……！」
其処まで叫んだ時だった！
「待つのだ！天使ルナリートよ！」
威厳に満ちた声が脳まで響く程に谺した。その瞬間、俺がたった今作っていた『滅び』の力は掻き消される！
更に、この神殿に渦巻く全てのエネルギーまでもが無に帰し静寂に飲み込まれた。
「誰だ！？」
俺は、その力を無に還元した声の主に尋ねた。
「我は、お前が存在を信じることが出来なかった『神』だ」
声の主は『神』！？そんな馬鹿なことがある筈がない！
「……虚言を吐くな！『神』が、『神』が存在するのならば、何故こんな愚者に全権を委ね、こんな束縛された世界を許す！？姿を現せ！」
俺は『神』を語る声の主に、深い憤りを感じずにはいられなかった！
「天使ルナリートよ……怒りを鎮めるのだ」
その言葉の直後、俺はとても穏やかな風に包まれた。全ての怒りを包み込む優しい力だった。
全身を包んでいた『力』は消え去り、髪は普段の真紅に戻り、瞳も青色に戻った。しかし、強大な力を静めるには、それよりも遥かに強い力を必要とする。

俺……否、私はその存在が天使では無い事を確信した。
「貴方は本当に『神』なのですか……？」
私は、自分でも驚く程穏やかになった心で問いかけた。
「そうだ。我は第２３２６４代目の『神』……。この天界を支える者だ」
『神』は心に響く声でそう語った。その存在は……もはや疑いようが無かった。
「しかし！何故、『神』がいながらこの世界で私達は安息の日々を送れないのですか？」
私は、『神』が実在しながらこんな世界になった現状に歯痒さを覚え……そう問いかけた。
「我は……この天界を維持する為に、『封印の間』から離れる事が出来ないのだ。肉体は常に封印されており、意思を皆に送るのでさえも困難だ。だから、こうして声を聞かせるのも実に５００年振りの事となる」
『神』は穏やかなのに力強く……偽り無い言葉を発した。私は、その重い言葉に返答する事も出来なかった。

「我の役目は、この天界の維持エネルギーの生産、そして天使達へのＥＳＧ供給……。更に、天界の下に位置する『人間界』への関与だ。『人間界』はかつて『中界』と呼ばれ、この『天界』と……『獄王』の支配する『獄界』との間の緩衝帯であった『界』だ。天使であればかつての、神と獄王との戦いの歴史の後に創られたものだと知っているだろう。しかし、３代前の神からは『中界』から『人間界』への変遷と、それに応じる責務を負わねばならなくなった」

いつの間にか、神殿は神の声を聞く天使で溢れていた。そして、皆一様に、言葉に耳を傾けているのだ。
「我は、５０００年に一度しか天使に声を聞かせる事は出来ないが、この世界に生きる天使の幸福の為に全力を尽くしてきたつもりだ。だが神官ハーツによって、誤った方向に天界が進もうとしていたのは詫びよう……。５０００年前に彼を神官に任命した我の責だ。すまなかった。本日より、彼を罷免し余生を『封印の間』で過ごさせる。天界の統治権は分散させよう」
私は嬉しかった！この『天界』がついに良き方向に変化する！
「だが、天使ルナリートよ……。我は公正に、罪深き神官とはいえ圧倒的な力で傷付けたお前も裁かねばならない」
「私はどのような罰でも喜んでこの身に受けましょう」
私に後悔は一片もない。私の望みは成就したのだ。

「天使ルナリートには、『２００年間の堕天』を課す」

『堕天』とは、天使としての力を一定期間失い、天界から人間界に堕ちることを意味する。
「承知致しました。その罰、今すぐにでもお受けします」
軽い罰だ。２００年後には天使として戻ってくることが出来るのだから。
「いい心構えだ。『堕天』の際にはお前の力の９０％を封じる。だが、天翼獣リバレスの同行も許可する。異議は無いのか？」
「ありません」
私は神の慈悲と深淵な心を感じ身震いした。
神は全てを見ていたのだろう。唯、どうしても自分の責務の為に私達の元に現れることが出来無かったに過ぎない。
私は自分の存在の小ささに恥さえも覚えた。
「『堕天』は明朝９時より実行する。それまでに荷物を纏めておくのだ」
その後、神の声はハーツの姿の消失と共に聞こえなくなった。『神の声と力』は、一時『封印の間』に戻ったのだろう。

放心状態が暫く続いたが、私は歓喜の表情を湛えた天使達に囲まれていた！
「俺達は今日から自由に生きることが出来るぞ！」
そんな歓声と共に私は賞賛されたが、私は明日には『人間界』に堕ちる。喜びを分かち合っている場合では無い。

「リバレス！帰るぞ！」
私は胴上げされているリバレスに叫んだ。
「解ったー！」
私とリバレスは天使達の波を縫って、部屋へと急ぐ。
セルファス、ジュディアをその場に置いていったのは、私が疲れている所為と言うよりも、裁判の場で私の考えを真には理解してくれていなかった悲しみが、深く心に根差していたからだった。

〜堕天までの時間〜
私達は先刻の疲れで、「ドサッ」とベッドに倒れ込んだ。時刻は午後１０時、私達に堕天の刑が下される迄、後１１時間だ。
「リバレス……、色々済まなかったな」
私は長かった今日一日を振り返り、リバレスを労った。
「別にいいわよー！さっきは術から助けてもらったしー！それより」
彼女が私に訊こうとしている事は、表情から瞬時に読み取れた。長年の付き合いの賜物だ。
「さっきの事だろ？」
彼女は小さい首を「コクリ」と縦に振った。
「……今日は長かったな。でも、私の願いは聞き入れられたし、天界もこれからは……自由を侵されること無く平和に過ごせるようになるだろう。私は満足してるよ。でも、一緒に堕天する事になってごめんな」
リバレスは、少し困り顔になって言った。
「堕天の事はいいのー！ルナが無事だったんだからー！それよりも、さっきのルナの『力』が心配なのよー！」
解っていた。彼女がその事を訊きたいだろうという事は。しかし、わざと話題を逸らしたのだが通用しなかったようだ。
「……さっきの『力』か、あれは私にもよく解らない。裁判で私が陥れられて、リバレスが苦しめられているのを目の当たりにしたあの時……私の感情が、限界を超えたと感じた瞬間にああなったんだ。あの状態になると、力も感情も歯止めが効かない程膨れ上がってどうしようも無かった。神に止められなかったら、どうなっていたか解らないよ」
リバレスは心配そうに私の顔をじっと見つめ、ゆっくりと言葉を返した。

「ありがとー、ルナ。あの時のルナは怖かったけど、今は元に戻って良かったー！ルナの願う『自由な天界』も実現しそうだしねー！でも……明日から『人間界』かー！」

彼女は強張った表情から、いつもの呑気な顔に戻り大きく溜息をついた。どうやら、私の今の落ち着いた表情を見て安心したらしい。
「『堕天』は、私の行いに対しては遥かに軽い刑だが、明日から『下等な人間』と２００年も過ごすのは苦痛だな」
私は正直な気持ちでそう言った。
学校で『人間』とは、神が戯れで創った玩具のようなものと教えられている。その玩具の暮らす世界で私達は２００年生活しなければならないのだ。きっと話し相手になれるのはリバレスだけだろう。
そもそも……神は何故『人間』などを創ったのだろうか？3代前とは言え、聡明な神が獄王と敵対関係になる事を理解しながら……戯れなどで、『中界』を『人間界』に変えたりするだろうか？
勿論、その考えは私の知る所ではないのだが……
「……はぁぁー『人間界』ねー、２００年ぐらい大した事は無いんだけど、良く考えればわたしってまだ２２４歳なのよねー……って事は、今まで生きてきた分と同じくらい『人間界』で過ごす事になるのー！？……ガーン！」
リバレスは、大袈裟に全身を使ってショックの大きさを表した。その様子が滑稽で、私は思わず笑いを零した。

「あー！ルナが笑ったー！久しぶりじゃない？あははは－！」
彼女は嬉しそうに笑いながら、私の顔を覗き込んだ。確かに最近あまり笑って無かったな。
「お前まで笑うなよ！……それにしても、今日は私にとって一番充実した日だったよ。明日からは、ちょっと辛い『人間界』暮らしだが宜しく頼むぞ。リバレス」
尚も笑い続ける彼女は、楽しそうに返事をした。
「オッケーでーす！」
陽気なリバレスのお陰で、私は明日からの『堕天』が全く厳しいものでは無いような気がしていた。
そして、私達は来るべき明日に備えて準備をして、就寝する事にした。

～深夜２時～
私達が眠りに就いてから数時間は経過しただろうか？ドアを「コンコン」と叩く音に私は目を覚ました。
私は今朝の悪夢の訪問客を回想してしまったが、奴らならこんなにも優しくノックしたりはしないだろう。私はベッドから抜け出し、ドアを開けた。
「今晩は」
廊下に佇むその声の主はジュディアだった。今回の騒動の原因を作り出した天使。全ては私を想ってやった事は明白だが、私の考えを理解してくれていなかった事が私の心を締め付ける。
「どうしたんだ、こんな夜遅くに？」
私は熟睡しているリバレスを起こさぬよう、小声で話しかけた。
「本当にごめんなさい！今回の事は全部私の所為なの！私が神官に告げ口さえしなければ！」
涙で目を腫らしたジュディアは、驚く程大きな声で叫んだ。しかし、リバレスは起きなかったようだ。
「もう少し小さな声で話せよ。みんな寝てるんだ！」
彼女はしまった！という表情で口を手で塞いだ。そんな事をしても手遅れだと言うのに。
「……それより、ジュディアは何も気にする必要は無い。今回の件の原因は私の意思に因るものだからだ。あんな形で、意志が表明される事になるとは思っていなかったが、私の『夢』である『自由』は『堕天』という小さな代償で実現する事になった。だから、寧ろ今回の事には感謝してるよ」
私は今の気持ちを率直に述べた。
「そう言ってくれると助かるわ。ありがとう、ううん……ごめんなさいルナ！流石は、私が認めた。いえ、『愛する天使』」
ジュディアは泣き顔で大胆にも、告白宣言をしてきた！前々から何となくそんな気はしていたが、私は動転してしまい声が出なかった。
彼女は、涙で朱に染まった顔を更に赤らめながら、尚も言葉を続ける。
「ルナ……、私は２００年、誰にも恋をすることなく待つから！今の美しいままの私でいるから！」
彼女の想いの強さが伝わってくる。しかし、彼女の性格や行動を考えると、安易に快い返事は出来ない。
「返事は２００年後に」
そう告げると、ジュディアは見たことも無い程悲しい顔をして、無言で部屋に帰っていった。
「相変わらず、ジュディアは積極的ねー！いい加減折れたら？ルナ！」
私がベッドに戻ると、さっきの一部始終を見ていたらしいリバレスが私をからかった。
「ジュディアは……性格や行動に恐さを秘めているからな」
そう言うと、リバレスは「ウンウン」と頷いてすぐに眠ってしまった。私も眠ろう。天界での夜は２００年後まで訪れない。

窓からは、月と眩い星々が見える。
それよりも気掛かりだったのは、窓辺にある私が育てているルナ草だった。
私は、その白い花を咲かせているルナ草を『保護』の神術で包み込み、窓から外に向けて放った。花はゆっくりと夜空に吸い込まれていく。
この術が解けるころには、花は大地へと再び降り立ち咲き誇ることだろう。

少し寂しい気持ちになったが、これで２００年間天界に思い残す事は無い。
私は、吸い込まれるようにベッドで眠り就いたのだった。

～堕天の時～
時刻は午前８時。私達に堕天の刑が執行されるまであと１時間。私達はそれより１時間以上前に起きて身支度を整えていた。
身支度と言っても大したものでは無いが、２００年間人間界で暮らす為に最低限の物は用意した。衣服や小道具、そしてリバレス用のＥＳＧ、更に本の類。
此処で、何故私の為のＥＳＧが無いかというと、『堕天の刑』は受刑者がＥＳＧを摂取することを禁じているからだ。私が人間界で生きる為には、人間が食べる粗末な物を摂取しなければならない。それについては、不安だが仕方が無いだろう。
もう一つ禁じられている物がある。それは武器だ。天界の武器を人間界で使用すると、余りの破壊力で人間達を滅ぼしてしまう恐れがあるからだ。
人間の生死など、私達『天使』には知った事ではないが、それでも人間は神が創ったものであることには変わり無い。少しは尊重しておこう。
それに、武器があろうが無かろうが大した問題では無い。私の力の９０％が封じられても人間の数百倍はある。たかだか２００年生活する上では心配無いだろう。
それより、忘れてはならない何より大切な物は『天使の指輪』だ。これは、全ての天使がその存在の証として生まれた時から持っている物で、失えば天使として認められなくなる。だから、例外無く私の右手中指には指輪が光っている。
これで、用意は済んだ。
「はぁぁぁぁぁ、やっぱり堕天直前ともなると憂鬱ねー……！」
リバレスは昨日に続き、深い溜息を漏らした。
「そうだな、でも今更幾ら嘆いても仕方無いさ。今まで通り頼りにしてるからな」
私は彼女の頭をポンポンと優しく叩きながらそう言った。すると、彼女の顔はすぐに綻んだ。
「はーい、頼りにされます！」
本当に素直ないい奴だ。私達は灯りを消して、長い時間慣れ親しんだ部屋を後にした。

再びこの部屋のドアを開けるのは２００年後だ。

そう思うと少し胸が締め付けられたが、私達は前に進むしか無い。
「行くぞ、リバレス！」
私の横で宙を舞っているリバレスに声をかけた。
「ルナ、解ったー！」

こうして、私達は刑を受ける為に裁判所へと向かった。
途中、道行く天使には声をかけられ励まされ、賞賛の嵐を浴びた。皆の表情は活気に満ち溢れていた。
ようやく束縛された世界から解放されて、自由に生を謳歌できるのだ。これ程嬉しい事は無いだろう。そして、そのきっかけを作れた私も喜びで一杯だった。
歓喜が渦巻く中、私達は堂々と裁判所へと歩いていった。これ程喜ばれた罪人は、今までいなかったに違いない。

８時４５分。昨日の戦いの傷跡が酷く残る裁判所へと到着した。
「ルナ！昨日は本当に悪かった！お前を助けたい一心だったんだ！」

裁判所で真っ先に話しかけてきたのはセルファスだった。その必死の表情から、彼の深い反省が伺えた。
「セルファス、気にするな。昨日の偽の弁護には驚いたが、恨んではいない。私の身を案じてやった事ぐらい解ってる」
私は出来るだけ優しくそう言い聞かせた。彼はその言葉を聞くや否や泣き出した。
「うおぉぉぉ……！すまねぇ、ルナ！２００年後に元気で帰ってくるのを心待ちにしてるからな！」
「ああ。必ず元気に戻ってくるさ」
私は力強く返事をし、セルファスの肩を叩き横を通り過ぎた。彼にはこれ以上の言葉は必要ない。私を理解している友だからだ。
その後にはノレッジを見つけた。こいつの心の醜さ、いや弱さを私は知っている。彼は私に見付からないようにしているのか、壁を向いて私に背を向けていた。彼は心の弱い天使だから、罪悪感を持っているのだろうか？
しかし、今は別にノレッジを憎んではいない。私は、心の弱さを罪に問える程立派な天使では無いからだ。私だって心の弱さを持っている。
「ノレッジ！私がいない２００年間、成績トップで頑張れよ！」
その言葉に、ノレッジは一瞬私の顔を悲しそうに見て去っていった。やはり友としての心を忘れてはいなかったのだろう。
そして、私は裁判所中央の処刑台の下まできた。すると、深い悲しみを湛えた女天使が走り寄ってきた。
「ルナ！２００年後のあなたの返事待ってるから！きっといい返事を……！」
ジュディアの顔にはまだ涙の跡が残っていた。その表情と言葉には、私への悲壮なまでの想いが感じられる。
「……２００年間ゆっくり考えとくよ」
それでも、私は無難な言葉を選んだ。優しい言葉をかけるのは簡単だ。しかし、完全に想いを受け入れるのは容易ではない。
「私は……２００年間あなたを待つけど、その間に人間の女なんかに毒されたら駄目よ！それだけは絶対許さないから！」
彼女は声を荒げた。私の心が、人間如きに奪われるのを危惧しているのか？馬鹿馬鹿しい……
「ジュディア、心配しなくてもそれだけはない。人間に毒される程堕ちてはいないさ」
私は正直な気持ちを言った。その言葉に彼女は少し安心したようだ。
「……解った。あなたを想ってずっと待ってる！気をつけてね！」
彼女は私に笑顔を見せたが、その光景を悲しそうに見つめるセルファスの方が印象的だった。

そして、私達は処刑台に立った。

時刻は午前９時。それを知らせる掛け時計の音と共に、再び『神』の声が響き渡った。その場にいた全ての天使は沈黙する。
「天使ルナリート、及び天翼獣リバレスを只今を持って２００年間の堕天の刑に処す！」
「謹んでお受けします」
その声と同時に私の全身の力が消えていくのを感じた！体が酷く重い……！これが力の封印か！
「天使ルナリートよ、自らを犠牲にし……刑に服するその態度、誠に見事だ。これを持つ事を許可しよう」
そう言って目の前に突如現れたのは『オリハルコンの剣』だった。
見事な装飾がされた天界の強力な武器。この剣は、持つ者の精神力の一部を破壊力に変換する能力を持つ剣だ。精神力は神術を使う時のエネルギー源でもあり、この力の強い者程強力な神術を使いこなす事ができる。
私が戦闘実技でこの剣を振った時には、厚さ２ｍ程の大理石の壁が粉々になったこともある。全ての力の殆どが封じられてはいるが、きっとこの剣は役に立つだろう。私は剣を受け取った。
しかし、以前は軽く感じた剣が今はとても重かった。

「ありがとうございます！」
私は重い唇を懸命に動かした。
「それでは２００年間、人間界へと堕ちるのだ！」
私達の体が強力なオーラに包まれる。人間界へと転送されるのだ！
「みんなー！元気でねー！」
リバレスは皆に向けて手を振りながら叫んだ。だが、オーラは全てを遮断し声は届かない。
刹那の後、目の前が漆黒の闇に包まれた！体中が闇に蝕まれる！
「ルナリートよ……２００年後に天界に帰って来た時には、人間界へのある重要な『計画』の指揮を担って貰う事になる。何故ならお前は……『エファロード』の力を持つ者なのだから」
そう、神が私に言った気がした。『計画』、『エファロード』……？何の事だ、解らない。
答えを見出せぬまま……私の意識は其処で途切れた。

そう……想えば、私の人生は此処から始まったんだ。
覚えてるかい、私と君が出会った日の事を？私は決して忘れないよ……。君が私を変えたんだ。
短い月日だったけど、私には今まで生きて来たどんな時間よりも大切で……心の中では永遠とも思える時間だった。
君は私に、生きていく本当の意味を与えてくれたね……。私に暖かい心をくれたのも君なんだ。
出会ってから……共に過ごす時間の中で、君の優しさと強さに触れて私は少しずつ変わっていったんだよ。
私は生まれて初めて恋をした。私に『心』を与えてくれた君に。
君と生きた日々はいつでも脳裏に蘇る。君の声を聞くだけで私は幸せだった。

でも……でも……その声はもう届かない。呼びかけても！
だから私は戦うんだ！私の生きる意味を取り戻す為に！
悲劇を二度と繰り返させない為に……！

そう……未来の為に！

§ The Heart of Eternity §

『I remember the incident changed me……
and gave me the unescapable destiny.
My heart is crying myself silently……
Even if a fearful destiny struck us,
I will love you until the end of the time.

I want nothing…… but I need only one that existence of you.
You gave me the heart of eternity……
I never forget it to wipe out the tragedy's repeat.
So……that was beginning the significance of my life 』

第一章　天界

―　完　―

第二章　人間界

第一節　運命の始まり

私が、天界からの転送で意識を失ってから何時間経っただろうか……？私はうっすらと目を開けてみた。すると……

「おい！リバレス！起きろ！」

私は半狂乱になりながらリバレスに叫んだ！

「んー？なぁーにー？……キャァァァァァァァァーー！」

リバレスも驚いたようだ！それも無理はない。私達は本当に空の上から、まだ遠く見えない地面めがけて猛スピードで落ちている！

まるで私達は流星の如く夜空を垂直に切っているのだ！

「……大丈夫だ！翼を開けば……！」

私は翼を広げようと力を込めた。しかし……！

「ルナー！翼が無くなってるわよー！」

私は落ちていく体で必死に腕を背中に伸ばしてみた！だが、本当に翼は無くなっていた！堕天は翼も失うのか……！？

「……まずいな」

私は血の気が引いていくのを確かに感じた！

「ルナー！わたしが全力で支えてみるから！」

リバレスは小さい体で翼を懸命に広げ、私を下から支え落下を食い止めようとした！

「リバレス！止めろ！無茶だ！」

無謀な行動だった。天翼獣といえども、身長が３０ｃｍ程しかない彼女に私の落下を食い止める程の力は無い！

「ルナ！神術は使えないのー！？」

私のあらゆる力は９０％封じられている！しかし、今はそんなことも言っていられない！何もしなければ確実に死ぬ！

「リバレス！お前も力を貸してくれ！」

「解ったー！」

私は頭の中で『保護』の術式を描いた！其処に今ある精神力を全て注ぎ込んだ！

「行くぞ！」

私達の周りを『保護』のオーラが包む！しかし、そのオーラは力を封じられる前に比べると遥かに弱々しい……！

「地面が見えてきたわよー……！」

大地が見えた！夜の暗い大地が……！私達はその瞬間激しい嵐に揺さぶられた！激しい雨と風に加えて、落下するエネルギーで『保護』のオーラ膜にダメージを与える！……地面が近い！

「……ぶつかる！」

そう思った瞬間だった！

「ピカッッッッッッッッ……！」

雷光がはっきりと見えた！次の瞬間……

「ドォォォォォォーン……！」

激し過ぎる衝撃が私達の体を襲う！その衝撃は私を粉々に砕く程に強く、その衝撃で私は体の感覚が消えた！

私は恐ろしさの余り、目を閉じるしか無かった。

「（死んだかもな……）」

目を閉じてどれぐらい時が経ったかも解らない。ただ……辺りが急に静かになった気がした。

「……ナ……ルナ……！」

聞き覚えのある声が私の耳に届いた。私は恐る恐る目を開けた……

「ルナ！」
目に涙を溜めたリバレスが私の胸に飛び込んできた。
「……ッッッ！」
その瞬間耐え難い痛みが全身に宿った！先程の落下で体は重症だ……
「ルナ！大丈夫なのー！？」
なおも、彼女は私に叫びつづけた。私に比べ彼女は見たところ無傷のようだ……
「……クッッッ……体中が……ひどく痛む……力が封じられて……体まで脆くなっているみたいだな。堕天を甘く見過ぎていたようだ」
私は心配かけさせまいと作り笑いをしたが、体は暫く動かせそうにも無い。
「……そりゃー天使の時のままじゃあ、刑罰にならないもんね」
その言葉の直後再び激痛が私を襲った！
「……ウッ……！……冗談を言ってる場合じゃ……なさそうだ……何処か……休める場所を」
私は無理矢理にでも動こうとした。
「ルナ！無理しちゃだめよー！わたしがルナに『治癒』の神術をかけてあげたいけど、今はそれ程の力は残ってないのー……
だから……お願い、ルナ！しっかりしてー！」
彼女は私の体を激しく揺さぶる。
「リバレス……、痛いから……！……でもな……体に全く力が……入らないんだ」
私はその言葉を発した直後目の前が真っ暗になった。
「……ちょっとー！ルナ！どうしたのよー！」
リバレスの声が遠ざかっていく……
「……仕方がないわー。絶対にイヤだったけど『人間』に助けを求めるしか……！」
彼女のその言葉と、彼女が発した人間に合図する為に送った光の柱……それが、その時の記憶の最後だった。

～一人の少女～
私が堕ちた先、それは言うまでも無く……此処人間界だ。ほんの数１００万年前までは中界と呼ばれ、天界と獄界との間の障壁として存在していた界だ。今は、数万人の人間達が獄界からの『魔』に脅かされながら生活している。それも当然だろう。獄界に断り無く、中界を人間界に勝手に作り変えたのは天界の神なのだから……人間界は、人間と魔が互いに憎悪をぶつけ合う混沌とした世界なのだ。

そして、逃れることの出来ない運命が始まった場所……生涯名を忘れることは無い、『ミルド村』。

その村には『一人の少女』が暮らしていた。

話を少し其処に移すことにしよう。

此処は『ミルド村』。この村は人間界の北西部に位置し、鉱山のお陰で出来た村で、其処では『鉄や銀、銅』などが採れる。普段は緑豊かでのどかな田舎村なのだが、今日は朝から嵐が吹き荒れ、夜の８時になっても未だおさまる気配はない。一度嵐が吹くと、海岸沿いという事もあって荒れ狂う自然の脅威にさらされる。此処に暮らす男達は皆が揃って鉱山で鉱石を掘り出す日々を送っている。鉱石を他の地域へ輸出する為、人の出入りには寛容で、おだやかながらも活気のある村だ。今日は激しい嵐だったが、男達は鉱山に潜り作業をすることを躊躇いはしなかった。
『一人の少女』も、そんな鉱夫の娘として生まれ生活していた。
「お父さん……、本当に帰りが遅いなぁ」
時刻は午後８時。少女はレンガ造りの家で、帰りの遅い父を待っていた。いつもなら６時には帰ってくる筈なのだが……
「今日はちゃんと帰ってくるって言ったから、ご飯の用意して待ってるのに……この嵐の所為で帰れないのかな……？」

少女の名は『フィーネ』。まだ１８歳にも満たない幼い彼女は、窓際の椅子に腰掛け……外を心配そうに眺め続けていた。
窓に映る彼女は、長く美しい栗色の髪をたなびかせ、この世の闇を知らぬような優しく純粋な瞳は不安に染まっている。
その心境を現すかのように暖炉の火はユラユラと動き、それによって作られる影もまた頼りなく見えた。
窓の外は激しい嵐。雨と風が荒れ狂い、時折雷が轟く。彼女の住む家はそれによってガタガタと揺れていた。
「……心配だなぁ、お父さん大丈夫かな……！？」
「……ドーン！」
落雷だ！フィーネは、窓から微かに見える『丘』に雷が落ちると同時に、眩しさと轟音に包まれ思わず目を閉じた。
落雷を受けた丘……それは、ミルド村から少し離れた所にある『ミルドの丘』である。普段は美しい緑に包まれた、心安らぐ丘なのだが
強い嵐の吹く今日は、闇夜に浮かび上がる魔物のように禍々しくさえ見える。少しの時間が過ぎた後、フィーネは瞳を開いた。
「……ミルドの丘に落ちたみたい……でもびっくりしたぁ……！」
彼女は雷の眩さと音に心底驚いた。しかし、それも束の間……彼女の胸には再び父への不安が訪れた。
「……もう、お父さんのバカ！せっかく頑張って料理を作ったのに冷めちゃったじゃない」
フィーネは父へ怒りを抱いてみたが、それもまたすぐに心配で掻き消された。その時だった！
「あれ！？丘の上がおかしい……！光ってる！」
彼女は『ミルドの丘』の上に光り輝くものを見た。村人が持つ松明などの光とは全く異なった光……今まで見たことの無い光景だった。
「……もしかして……『魔物』……！？」
彼女は初めて見たものを魔物と認識してしまった。無理もない。その光は人間界には存在しないものなのだから。
「……どうしよう……もしかしたら、人が襲われてるのかもしれない！？……でもこんな時にお父さんはいないし」
フィーネは考えた。しかし、心優しい彼女には決断の時間はそう必要では無かった。
「……私に力はないけど、もしかしたら助けを求めてる人がいるかもしれない。行こう！」
彼女はすぐに、身支度を整え始めた。今着ている服は紺色のワンピースで生地は厚手の綿だ。
それを、腰の上でベルトを通している。その上に彼女は皮のコートを羽織った。外は強い雨と風。今の季節では暖炉の火がないと生きられない程に寒い。だから厚着をしないと、すぐに体熱を奪われてしまう。更に、彼女は壁にかけてあった剣を手に取った。重い……その剣は細腕の彼女には辛い重さだったが、魔物に遭遇するかもしれない以上、武器は必要だ。そして、雨避けを付けた金属製の松明を持って家の外へと踏み出したのだった。

～ミルドの丘～
話は戻るが、私はまだ先刻の衝撃で意識を失ったままでいた。此処から先、私が目覚めるまでの話はリバレスに聞いたものだ。
天候は、空から落ちてきた時と同じ……ひどい嵐だった。視界は遮られ、風の所為で音も聞こえない。
あれから暫くの時間が経過して、私は気を失っているだけだと気付いたリバレスはある程度落ち着いていた。
「……うーん……やっぱり、ルナを助ける為とはいえ、光で信号を出すのはまずかったかしらねー？ルナは気を失ってるだけだし、わたしが一人でなんとかした方が良かったかもー」
リバレスは、さっきの光の柱を出した事に少しばかり後悔していた。もし、悪意を持った人間や『魔』が現れたら困りものだからだ。
「……まーいっか。わたしの力でも、人間ぐらいなら何とかできるしー……あっ！誰か来た！」
一人……人間の少女の姿が遠目に確認できた。距離にして５００ｍぐらい向こうだろうか？少

女はまだこちらに気付いていない。
それもその筈だ。リバレスは天使よりも若干能力は劣るが、それでも天翼獣。人間の数百倍の能力を持っている。
この視界の悪さでは、向こうがこちらに気付くのにはまだ暫くの時間が必要だろう。
「……人間の女みたいねー……助けてくれるかしらー……？」
更に少女は近付いてきた。そろそろ、こちらが見えてくる頃だ。
「うーん、ルナは天使とはいっても、堕天の所為で見た目は人間の姿と変わらないからいいけどー……わたしの姿を見られるのはちょっとまずいわねー……！」
そう一人で呟くと、彼女は一つの決断をした。
「そうだ、『変化』の神術を使えばいいんだわー！わたしって頭いいー！」
その言葉と共に、リバレスは私の指輪へと変化した。そして、彼女は私の右手薬指へとおさまった。
『変化』の神術。それは天翼獣のみが使う、様々なものに姿を変えられる神術だ。
「（これで、人間が来ても怪しまれないわー）」
こうして、私は行き倒れの姿で少女に発見されることとなる。そして、その時は訪れた。

「……あっ！大丈夫ですか……！？」

右手には剣を、左手には松明を持ち、長い髪を雨風に乱れさせながら、コートを纏ったその少女は私の元へと近付いた。
「（この人間……剣を持ってるじゃないのー！？もし、ルナに危害を加えようとしたら許さないからねー！）」
そのリバレスの不安とは裏腹に、少女は剣を投げ捨てて私の体を抱き起こした。
「大丈夫ですか！？しっかりして下さい！」
少女は、私に向かって大声で叫んだ。しかし、意識の無い私が答える筈もない。
「……大変！この人、意識がないし……それより、ひどい怪我！家に連れて帰って手当てしなきゃ！」
少女は私を気遣い、私の腕を肩に担ぎ懸命に家まで運ぼうとした。しかし、人間の女が男の私を運ぶのは容易な事ではない。
不幸中の幸いなのが、天使といえども体重や姿は人間とさほど変わらないことだった。少女は重い足取りだが、渾身の力を込めて
嵐の中をゆっくり……だが着実に進んでいく……
「（……うまくいったわー。何とか助けてくれるかもしれないわねー……それに、この女が何か企んで、ルナに万一の事がありそうだったらわたしがこの人間を殺せば済むことだしねー……）」
リバレスの『人間』への冷徹な感情を少女は知る由もなく……こうして私は、まだ名も知れぬ少女に担がれ、ゆっくりと彼女の家へと
導かれていったのだった。

そう……これが、私達の始まりだったんだ。

～安息の微笑～
頭が痛い……体中も痛い……しかし、私は暖かい空気に包まれ薄れていた意識が次第にはっきりしてきた。
「……う……うぅん……？」
私は満身創痍ながらも、意を決して目を開けてみた。
「良かった！気付かれましたか……！」
一人の人間の少女が私を見ている。驚いた！人間の女性の外観は天使とたいして変わらないじゃないか……！

ただ、髪が栗色な所と翼が無いぐらいの差だ。それでも、衣服は比べ物にならないが……
「怪我は大丈夫ですか！？あんな所に一人で倒れていて、本当にびっくりして心配しましたよ……！」
その少女はなおも私を心配そうに見つめている。私は状況を把握する為に周りに目を遣ってみた。此処は、レンガ作りの簡素な家……天界の図鑑で見た通りの、人間の住む家屋だ。恐らくはこの少女の住む家……どうやら、私は倒れてから此処に運ばれたようだな。
今私は、固いベッドの上に寝かされている。シーツの目も粗く、天界のそれよりも遥かに肌触りが悪い。
それはそうと……リバレスは何処だ！？
「（わたしは此処よー！）」
その言葉が脳に直接響くと同時に私の右手の薬指が微かに動いた。リバレスは『変化』の神術を使い、私の意識に話しかけているのだ。
「（何故、こんなことになってる！？）」
私は少女に悟られぬよう、リバレスに意識を送った。これは、『転送』の神術の初歩の使い道で、意識を相手に送ることが出来る。
『転送』の力を極限まで高めると、私達が人間界に転送されたように、あらゆる物を転送することができる。
「（ルナが倒れたから、合図の光を送ったらこの女が助けにきたのよー！）」
私がなおも、少女に対して黙っているので彼女は泣きそうになって話しかけてきた。
「……ほんとに大丈夫なんですか……！？……しっかりして下さい！」
少女は私を直視し、私の体を揺さぶろうとしたので私は諦めて口を開いた。あまり、人間と言葉を交わしたくはないのだが……
「……あぁ、大丈夫だが……全身に力が入らない。特に……腹部あたりがおかしいな……痛むのではないんだが」
私は体の状況を正直に話した。何故、こんなに全身に力が入らないんだろうか……？傷は大して深くない筈だが……
「あ！きっとお腹が空いてるんですよ！今日の夕食は作り過ぎましたから食べてください！」
少女は私の体調を見透かしたかのように、笑顔でそう言った。一体私の何が解るというのだ？
「今、料理を温めてきますから少し待ってて下さいね！」
彼女は楽しそうに、家の奥の恐らく……炊事場へと消えていった。図鑑で見ただけだから、解らないが……人間が料理するのは炊事場と書いてあったからだ。それよりも……
「（おい……リバレス！私はどうすればいいんだ！？）」
私は困惑の表情を浮かべ、リバレスに意見を促した。
「（お好きなようにー。でも、これから人間界で暮らすんだから、利用しやすい人間を作るのはいい事じゃないのー？）」
リバレスはこの状況を楽しんでいるかのような口調だった。自分は変化しているから、他人事だと思って……
「（まぁ、確かにお前の言う事にも一理ある。だが、下等な人間と馴れ合うのは苦痛だ……しかし、それにしても何故人間の言語パターンが私達の言語と一致してるんだろうか？）」
私はさっきから思っていた疑問を投げかけた。
「（そりゃー、人間も神から創られたからじゃないのー？でも、同じ言葉の方が過ごしやすいじゃない。）」
つくづく呑気な奴だ。リバレスに難しい質問をした私が間違いだったな。

「出来ましたよ！料理には余り自信がないんですけど食べて下さい！」
少女が帰ってきた。手に料理とやらを持って……これを私に食べろと……今までＥＳＧしか摂ったことの無い私に……
「……あ……あぁ」
私は恐る恐る料理の乗った盆を受け取った。黄色をしたスープと呼ばれているらしい物。図鑑のパンとよく似た物体。更に、植物や肉らしき物がソテーされている料理……図鑑で、恐ろしいと思った物達が今私の目の前にある。

「さぁ、遠慮せずにどうぞ！」
少女は満面の笑みで私を見ている。心なしかリバレスも笑っているような気がする。
「（人間はこんな物でエネルギーの補給をするんだな。ＥＳＧが恋しい……しかし、私はＥＳＧを摂ってはならない。仕方ない！）」
私は意を決してスプーンらしき物を手に取った。スープを一口、流し込む……すると！
「何だこれは！？」
私はとても驚いた！こんな感覚初めてだ……！口の中が幸福に染まる！この感覚は辞典で確か……『美味い』だったな！
「おいしくないですか！？」
少女は悲しそうに俯いた。
「いや、その逆だ。私はこんなに『美味い』物を食べたことはない！」
正直な感想だった。ＥＳＧのような瞬時の充足感は無いが、ＥＳＧには味はない。私はこの『美味い』感覚に酔いしれた。
「ほんとですか！？それは良かったです！でもちょっと塩を入れすぎたんですけどね」
少女は再び笑顔を取り戻して、私が食べる様子を嬉しそうに眺めている。
「（いいなールナ。わたしも食べてみたいなー……！）」
リバレスは羨ましそうに私の意識に話しかけた。
「（お前はＥＳＧを摂れるからいいだろ？）」
そんなやりとりが続く中で私はあっという間に食べ終えた。食べるという行為がこんなに幸せだったのは生まれて初めての事だった。

「よっぽど、お腹空いてたんですね！お役に立てて良かったです！」
私が食べた食器を下げた少女は、再び私に話しかけた。さっきまでの私なら人間の女性を冷たくあしらうだろうが、今の私は美味い料理のお陰で若干ではあるが、この少女に感謝の気持ちが生まれていた。
「ああ、お陰様で力が戻ってきた気がするよ。ありがとう。ところで君の名は……？」
私は感謝の辞を述べ、少女の名を聞いてみることにした。
「私はフィーネです。あなたは？」
少女の名はフィーネ。私はさっきまでよく見ていなかったが、彼女はとても優しい目をしていた。また、幼さ故か純粋さも顕れている。
髪は栗色で背中まで真っ直ぐ伸びており、背は私よりも２０ｃｍばかり低いだろうか？この少女が私を此処まで運ぶとは……人間も意外と力強いのかもしれないな。それはさておき、彼女は私の名も聞いている。果たして、本名を名乗っていいものだろうか……？
「私は、ルナだ。ある辺境の地から世界を旅している。……でも私は倒れていて解らないんだが、此処は何処なんだ？」
私はルナリートの名は伏せておく事にした。無論、天使であることも。更に倒れていたのを理由に、この地の説明を聞いてみた。
「ルナさんですかぁ。変わってるけどいい名前ですね。それにしても、あんな嵐の中で倒れるって……旅人って大変なんでしょうね。
此処は、世界の北西にある鉱山の村。『ミルド村』の私の家ですよ。……あっ！」
フィーネは急に思い出したかのように叫んだ。
「どうしたんだ？」
私は冷静に聞いてみた。
「お父さんが帰ってこないんです！鉱山から！……遅過ぎるから私、様子を見に行かないと！最近魔物が多いから心配で心配で！」
彼女はさっきまでの穏やかな表情とは急変して、とても不安な顔になった。
「（獄界の低級魔だろうな……獄界の『魔』はこの『界』を占有する為に、獄界から派遣されてくると学校で習った覚えがある。無駄だと思っていた天界での勉強も、満更捨てたものではないようだ。リバレス、私は人間に手を貸す気は無いが、この少女には恩を受けた。せめてもの代償に父親を無事に此処まで送り届けてやろうと思うんだがどうだ？）」

私はリバレスに意識で聞いてみた。
「（ルナがそうしたいんなら止めないわよーでも相変わらず甘いわねールナは！）」
リバレスは皮肉めいてそう答えた。しかし、其処は長年の付き合い。リバレスは私の考えを解っている。
「フィーネ、私が代わりに鉱山に行ってやろう。君の父親を連れて戻ってくる」
そう言って私はベッドから起きあがった。体はほぼ完治している。堕天はしたが、私は天使だ。並の傷はすぐに治る。
「え！？悪いですよ！それに病み上がりのあなたじゃ危険です！」
フィーネは驚いて私の前に立ちふさがった。その表情は真剣だ。
「心配するな。私は、『低級魔』如きにやられたりはしない。鉱山は何処なんだ？」
私は、ベッドの横に置いてあった荷物から『オリハルコンの剣』を取り出して、実際には重いが軽く振っているように見せた。
「私の家から……南です。本当に大丈夫なんですか！？怪我もしてるのに！」
彼女はなおも心配している。私の力を知らないのだから無理もないが。
「怪我はもう完治した。君のお父さんはすぐに見つけて戻ってくるから、此処で待ってるんだ」
そう言って私は玄関のドアを開けた。寒い雨風がすぐに私を襲う。だが、この程度の冷気では私を冷やす事などできない。
「……わかりました。ルナさん！気をつけて……！お願いします！」
フィーネが不安気に私を見送るのを確認して、私は鉱山へと道を急いだのだった。

第二節　脆過ぎる存在

私と指輪に変化したリバレスは、強い雨風の中を南へと歩いていった。住宅街を抜け、山道を登り２ｋｍぐらいは歩いただろうか？ようやく『ミルド鉱山』と書かれた看板を入り口に掲げた場所に辿りついた。幸いな事に、この嵐の為人は外出しようとしないのか、誰とも会う事は無かった。私の衣服は人間のそれとは異なる。物珍しさで人間達に囲まれて厄介事になるのはごめんだ。この村を歩いていると、
天界との文明の差が歴然だ。天界では道や建造物は幾何学的に、完璧に作られている。また、建材も大理石や水晶やその他金属等が
ふんだんに使われているのだ。それに対し、この村の作りは雑で、整備されていない。道が舗装されていないのには特に驚いた。だが、天界の画一的な構造とは全く異なり、生活感だけは溢れていた。家々のひび割れや修繕した跡、子供の落書きや家にしまい忘れたであろう洗濯物など……見慣れぬ景色は私の瞳には新鮮に映ったと同時に、この世界で生きていけるだろうかという不安も生じたのだった。
「（はぁぁぁー全く……低レベルな村ねー……！）」
リバレスの声が頭に響いた。
「（そうだな。こんな世界で２００年生きるのはやはり気が滅入るな。）」
私もその意見に同調した。
「（さっさと、あの娘の父親を連れて帰ってこんな村とはおさらばしましょー！）」
彼女は、余程この村が気に入らないらしい。その気持ちはよく解るが。
「（そうだな、手早く済ませよう。『魔』と戦う事はあまり気が進まないが……）」
私はあの少女……フィーネには約束したが、此処に来て少し躊躇の念が生まれた。
「（イヤになったんなら、人間との約束なんて破っちゃえばー！）」
リバレスは、少し嬉しそうに私に約束破棄を勧めている。やはり、私が人間と交わした約束など価値のないものだと思っているのだろう。
「……いや、約束は守る」
天使である私が、獄界の魔と戦う。それは、獄界が天界を憎む心を増長しかねない。しかし、私達天使が『戦闘実技』を始め、その他の戦術を学校で施されていたのは、全ては獄界との全面戦争になる場合を予期しての事だ。獄界の者は、天界の全てを激しく憎んでいる。
そして、低い知能だが強大な力も持っているとも教えられた。それでも、天使には遠く及ばないらしいが。天界では、もし『魔』と遭遇する事になれば、躊躇わずに戦えと教えられてきた。し

かし、私は争い事を好まない。何故其処までのリスクを負って、人間如きに礼をするのかというと、受けた恩は必ず返すのが私の主義だからだ。相手が人間とはいえ約束した以上はやり遂げなければ。

「（ルナらしいわー。）」

私の言葉を聞いたリバレスの声は少し消沈気味だった。私は最悪の場合、戦いも辞さないという覚悟を決め、剣を構えて薄暗い鉱山の入り口へと歩いていった。人間などの為に動くのはこれが最初で最後だと誓いながら……

～血塗られた鉱山～

私と指輪のままのリバレスは薄暗い鉱山の中に足を踏み入れた。入り口から内部の奥深くまで、壁には松明の灯とロープが続いている。このロープは足場の悪い所を通る時や、非常時の脱出などに使われるものだろうか？その真意は解らないが、最深部まで続いているのは確かだろう。しかし、それよりも私は異様な雰囲気を直感で感じていた。普段なら、作業員達の声でこの鉱山内部は賑わっているのだろうが、何の音も聞こえない。常人ならば、気の狂いそうな程の静寂……その原因は、奥へと歩を進めて５分ぐらいで理解した。

「……やはりか」

私は、足元に惨殺された人間の男の死体を見つけた。全身に深い切り傷があり、特に胸部が深く抉られている。其処から流れ出た血液が大きな水溜りのようになっていた。その水溜りはまだ凝固しておらず、死後時間の経過が少ないのを物語っている。死体は中年ではあるが、鉱山で働く屈強な男が此処まで傷めつけられるのだ。人間如きにつけられる傷ではない。間違い無く『魔』にやられたものだ。

「（ひどいわねー……やっぱりルナ、あの女の為に『魔』と戦うなんて馬鹿げた事は止めて帰りましょーよ！）」

リバレスは、死体を見て私の気が変わるだろうという期待を抱いて叫んだ。

「（約束は約束だ……人間との約束はこれで最初で最後にするから。行くぞ……）」

私は、リバレスに答えると同時に自分にもそう言い聞かせ、真新しい死体を背に更に奥へと歩んでいった。すると、今度は広い空間に着いた。其処は血の匂いがたちこめる死の空間だった。

「……何てことを……！」

私は、思わずその光景に怒りさえ覚えた。幾ら、殺されているのが人間であるとは言ってもこれは余りに酷過ぎる！ある者は切り裂かれ……またある者は引き裂かれ……生きながらに燃やされ……その無念と絶望と苦しみの表情は筆舌に尽くし難いものがある！

殺された者達は、恐らく十数名……死体は原形を留めていないので解らない！

「酷過ぎるわー！」

リバレスは耐えきれず、元の姿に戻り叫んだ。その顔は恐怖と悲しみに満ちている。心を持つ者であれば、この状況で何も感じない者はいないだろう。私の心の中には少なからず、死人への同情と魔への憎しみが沸いてくるのを感じた。

「急ごう、フィーネの父親だけは助けると約束したからな！まだ生きているかもしれない！」

私は、人間を救う気など毛頭無いがこの状況だけは許せなかった。せめて、私を助けたフィーネの父親は連れて帰らなければ！

今まで、フィーネに似た男は一人もいなかったので生きている望みを持って足早に奥へと進んだ。そして、最深部……鉱石を採掘する現場に到着したのだった。いや、それが遠目に見えただけだ。距離にして残り１００ｍ程はあった。

しかし、其処には目を覆いたくなるような凄惨な場面が繰り広げられていた。

「ヒャハハハハハ！死ね！ゴミ人間どもが！貴様らの存在は邪魔なんだよ！」

獄界から現れし『魔』……その姿は異様で、黒褐色の皮膚……天使とも人間とも違う、不気味な姿だった。背丈は２ｍを超え、五肢には分かれているが、全て厚い筋肉に覆われている。また、長い尾がありそれも強力にしなっている。何より特筆すべきは、頭部……白濁の瞳、鋭く長い牙、窪んだ鼻と似つかわしきもの、尖った耳……その『魔』が、人間を紙屑のように切り裂き……噛み砕き……何らかの術で、

激しい炎を発生させている。そして、続けて瞬く間に一人の男に飛び掛った！

「フィーネーー……！」
それが、その男の断末魔だった。男は魔の腕から伸びる長い爪に胸部を貫かれたのだ。そう……手遅れだった！
「……すまない、フィーネ……、君の父親は救えなかった」
私とリバレスは、その地獄へと駆け寄っていたが間に合わず……無残にも、この鉱山にいた人間は全滅したのだ。
「お！また人間か！殺してやるぜ！楽しくてたまらねーよ！」
魔は、私達を発見した。しかし、私の心は憎しみに満たされ戦う事に躊躇いは無かった。
「獄界の住人は、こんな愚物ばかりか……！？リバレス、少し離れてろ！」
私は、リバレスに叫んだ。魔はこちらに猛スピードで向かってくる！
「解ったー！」
その言葉と同時にリバレスは、私の側から瞬時に飛び去った。その直後、魔の牙が私へと襲いかかる！
「キンッ……！」
私はその瞬間にオリハルコンの剣で牙を打ち砕いた！魔は、不意を突かれ驚愕の表情で私から飛び退く！
「グッ……！貴様……人間じゃないな……！……まさか天使か！？」
魔は醜い口から緑色の血を流し、私に罵声を浴びせた。
「……生憎……堕天はしているが、平然と生命を奪う……お前のような下等な者と話す口は持ち合わせていないんだ。早々に獄界へ帰れ！」
私は、柄にも無く感情的になって叫んだ！人間の為などではない。生命の自由を奪う事を許せない私自身の怒りがそう叫ばせたのだ！
「……堕天使の分際で……死ね！」
その咆哮と共に、奴の口から炎が吹き出た！真っ直ぐに私に向かってくる！しかし私は、剣を持たない左手を前に突き出し中級神術である『天導炎』を放った！炎と炎がぶつかる！
「ゴォォォォォォォ……！」
激しい熱が発生したが、私の炎が圧倒的だった！この炎の威力から、奴の力が低級である事は明快だ。堕天はしていても、天使である私は低級魔如きには負けない！私の炎が魔を包んだ！
「ギャアアアアアアア……！」
もがき苦しむ魔の絶叫が谺する！

……その絶叫が終わった時、私は我に返った。
「……私は、魔を殺してしまったか」
私が呆然としていると、リバレスがすぐに飛んできて話しかけた。
「ルナー！大丈夫ー！？」
「ああ……大丈夫だ。それより、私は魔を殺した上に約束も守れなかった」
私は、生まれて初めて魔とはいえ生命を奪った事……そして、人間とはいえ約束を守れなかったことに多少の自責の念を感じていた。
「仕方ないわよー！ルナが戦わなきゃ、ルナが殺されてたかもしれないしー！それに、約束もどうしようもなかったわよー！」
彼女は、私を心配そうに慰めた。だがその時！私は背後……此処にやって来た道の方に気配を感じた！
「……化け物……ルナさん……、あなたも魔物なんですか！？魔法を使うなんて！それに……妖精……？」
聞き覚えのある声がした。其処には、血の気が引いて恐怖に凝り固まった表情のフィーネが呆然と立っていたのだった！人間に私達の事を知られるのはまずい……だが、見られた以上は説明して口止めしなければ……！
「……見てしまったんだな！……だが、私は化け物でも『魔』でもない。と同時に人間でもない」
「わたしも、妖精なんかじゃないわよーだ！」

魔や妖精扱いされるのは嫌だ。しかし、天使である事を明かす訳にもいかない。しかし、フィーネは私達の言葉など上の空だった。
「……それより……お父さん！お父さん！」
私は、フィーネが突然現れたので頭が困惑していた。そうだ……彼女にとっては私達の正体よりも、親の安否が大切に決まってる。
私は約束を守れなかったのだ！彼女は、父の亡骸へと駆け寄っていった。

「お父さん……、？お父さぁぁぁぁぁん……！」
彼女は声の限りに泣き叫んだ。生きている筈も無い父の骸に抱きつき、顔をうずめながら泣いている。私は心が痛んだ。
「……すまない。手遅れだったんだ」
私とリバレスはかける言葉も見つからないのでその場から少し離れた。
「どうするのー？ルナ」
なお、フィーネの泣き声が聞こえる中、リバレスは私に首をかしげて困惑した表情で問いかけた。
「……せめて私達に出来ることは、この危険な鉱山から出るまで見届けることぐらいだな」
私は、その他にフィーネの為に出来ることは無いと思った。
「そうねー……あんまり深入りするのも良くないし、どっかに隠れて様子を見守りましょー。それで、あの子がこの鉱山から出たら私達はもう人間とは無関係ねー」
「そうだな。天使の私が、人間の為に動くのはこれで最後だ。行こう」
私は、まだ心が痛んではいたが、私は『天使』。人間とは関係ない。この鉱山に現れた魔は倒したんだ。これ以上助ける義理はない。
そして、私達はフィーネに背を向けて歩き出した。

「……待ってください……！何処へ行くつもりなんですか……！」
すると、突然涙声のフィーネが私達を呼び止め、私達は振り返った。
「……私達は私達で安住できそうな場所を探しに行く。君には感謝してるよ……だが、さっきの出来事は忘れてもう私達に関わるな。そうしなければ、私は君を……殺さなければならない」
事実だった。私達の存在を公にされれば、天界や獄界の存在すら知らない人間に、私達天界の住人を知られる事となる。もっとも、それは天界の法でも厳しく制限されているし、何より魔にも恰好の標的にされてしまう。
「……いいえ……私……だけでなく、全ての人達にとってあなた達の力は必要なんです！魔物と戦えるのはあなた達しか……！」
彼女は、殺されるという一言に全く動じず……寧ろ、涙を手で拭い強い意志を込めた目で私達に叫んだ。さっき、家で私に料理を出してくれた時の目とはまるで別人だ……
「人間は脆く作られてるからしょうがないのよー！」
其処で、リバレスが割って入った。少し、怒った口調になっている。それもそうだろう。私達が、人間の為に動く理由などないのだから。
「私達の村は……原因不明の悪病に見舞われ……度々魔物に襲われます。それでも、みんな頑張ってこの鉱山で働いていたのに……それが……またこんな事になって……！」
フィーネは再び泣き出した。しかし、すぐに堪えて話を続けた。
「……ウゥ……いいえ……私の村だけではありません。世界中の村や街が同じように……！……だから……だから……どうか……力を貸してください！」
そう言って彼女は私の右手を両手で掴み、哀願した。
「……私達に其処までする義理はない。料理の礼なら十分に返した筈だ」
私は、冷たく言い放つしか無かった。そうでもしなければ、この娘は諦めないだろう。
「……そんな……其処を何とか……私なら何でもしますから！……どうか！」
悲しみ……苦悩……私達への希望……そんな感情が、必死な言葉を通じて伝わってきた。
「無駄よーね、ルナ？」
しかし、それでも人間が私達の心を揺り動かせはしなかった。

「せめて、この鉱山の入り口までの安全は確保しておくから……村へ帰るんだ」
私は、掴んでいた手を振り解いた。理由の無い事の為に動く程……私は善人じゃないんだ。そう、自分に言い聞かせ、私はフィーネに背を向けた。リバレスも私に続く。

「……私……明日の夕方６時に……あなたが倒れていた丘……ミルドの丘であなたを待っていますから……！あなたを信じて待っていますから……！」

フィーネは最後にそう言った。私はこの言葉には答えられなかった。人間は天界で教えられている程、下等な生物なんだろうか……？どうしてこんなにも……たった一人の人間の娘が強い心を持てるのか……他人を信じる事が出来るのか……？

しかし……『私達は人間に協力する義理も理由もない』……それが、その時の私の考えだった。

そして、私とリバレスは鉱山を出た。途中危険は無かったので、フィーネも無事に帰れるだろう。嵐はいつのまにか止んでいた。

まさか、人間界に来てたった一日でこれだけ多くの事があるとは思ってもみなかった。私とリバレスは疲れ果てて、山の中の森で野宿をすることにした。私が『保護』の神術で私達を包み、それでテント代わりにした。フィーネは最後に「明日、丘で待つ」と言った。だが、私達が行くことはないだろう。

私は天使、フィーネは人間なのだから……

さっきまでの嵐とは打って変わり、今は空に一面の星が出ている。今日はもう眠ろう。明日は何が起こるか解らない。

私とリバレスは長い長い一日のお陰で疲労し、余り言葉を交わす事無く眠りについた。

人間界で過ごす２００年の重さを噛締めながら……

第三節　心を揺り動かす決意

朝が訪れた。時刻は午前９時。人間界で迎える初めての朝だ。しかし私は、目覚めた瞬間目に映った景色に驚いてしまった！今までの朝は、柔らかいベッドの上で見慣れた部屋が寝起きと共に目に入っていたのだが、今は森の木々と朝露とＳ．Ｕ．Ｎの眩い光が最初に目に映ったからだ。こんな風に外で朝を迎えたのは生まれて初めての体験だった。

「ふわぁぁー……あれっ！？」

リバレスも目覚めと共に混乱したようだ。その戸惑いの表情が、私の驚きと一致していたのでおかしかった。

「リバレスも驚いたか。私もだ。今まで、ずっと天界でしか朝を迎えたことは無かったからな」

私は、微笑みながらも少し溜息をついた。

「ルナもなのー！あははーまだ人間界二日目で慣れてないもんねー」

彼女は、朝から楽しそうに笑っていた。本当に気楽な奴だ。時々、その性格が羨ましい。こうして、私達は談笑しながらも、身支度を整えていった。だが、一つどうしてもやらねばならないことがあった。リバレスはＥＳＧを摂取したが、私には食物がない。昨日はフィーネの家で食べさせてもらったのだが、私は、今日の食物でさえ事欠く立場に陥っている。食物を調達しなければならない。ＥＳＧを摂取できないとは何と不便なのだろうと、私は『堕天の刑』の辛さをまたも思い知った。

「すまない、リバレス。私は空腹だから、人間の村で食物を手に入れなければ」

私は苦笑しながら、リバレスにそう言った。

「仕方ないわねーあんまり人間とこれ以上関わりたくなかったけど、ルナの命には代えられないわー！」

そう言って、彼女は再び私の指輪へと変化した。そして、私は純白の天使服から、持参していた黒色の丈夫な戦闘用の服に着替えた。

天使服は人間界では目立ち過ぎるからだ。それに戦闘服は防護効果が高く、弱体化した私の体を保護する為でもある。準備は整った。こうして、私は重い荷物を背負い仕方なくミルドの村へと戻っていったのだった。

〜葬列〜

私は村へと戻る途中何人かの人間と擦れ違ったのだが、その全てが私に奇妙な物を見るような視線を投げかけていた。ある程度は予想していたが、何がそんなに人間と違うのだろうか？この時点では私には全くわからなかった。その後、村に入り大通りの食料店へ向かう途中、私はある集団がこちらに向かって歩いてくるのを見つけた。

「（何かしらねー？）」

指輪に変化したリバレスにも、その光景は見えているようだ。

「（さあな。私に人間の行動が解る筈がないだろう。……！）」

私はその意志をリバレスに転送した直後、あるものを見つけたので立ち並ぶ建物の間に隠れた！

「パパ……パパーー！行かないでよー！今度遊んでくれるって言ったじゃないかー！」

「あぁ……あなた！私と子供を置いていかないで……！」

「うぅ……お父さん……、お父さぁぁん……！」

葬列だった。喪服らしきものを身に着けた人間達が１００人ばかり……しかも、女、子供ばかりが棺に納められた無残な亡骸を運んでいるのだ。間違いなく、昨日鉱山で皆殺し……惨殺された人間の親族だ……その遺族達のある者は大声で泣き叫び……またある者は糸の切れた操り人形のような放心状態に……またある者は錯乱状態に陥っている。私が隠れたのは、その中にフィーネの姿があったからだ。彼女とは会いたくなかったから隠れたのだが、彼女もまた深い悲しみに包まれ周りが何も見えていない様子だった。

遺族達に、フィーネのような女子供達しかいないのは、恐らく今までにも同じように『男』が『魔』に殺され続けてきた所為だろう。

昨日鉱山で見たように、人間は『魔』によって耐え難い苦しみを与えられている。

そして……その悲しみの行進は、ゆっくり……ゆっくりと私の前を通りすぎていったのだった。

「（人間にも同じように……悲しみの心があるようだな。）」

私は人間に多少の哀れみを感じたと同時に、天使と同じ……いや、他人を想う心はそれ以上であるかもしれないということに驚いた。

「（所詮、紛い物でしょー？）」

リバレスは、相変わらず全く人間を認めていない。怪訝そうな顔が私の脳裏に浮かんだ。

「（本当に、あれが紛い物なのだろうか……？フィーネ達人間のあの悲痛な顔が……？）」

「（もー！しっかりしてよー！ルナ！こんな場所は早く離れましょーよ！）」

怒るリバレスに促され、私は食料店へと向かっていった。だが、私にはどうしてもあの悲しみは偽りに思えなかった。

〜人間への疑問〜

私達は、葬列からだいぶ離れた所にある食品店に着いた。店は、立ち並ぶ民家と同じようなレンガ造りだが入り口の上に大きく『ミルド食品店』と書かれてある。私は、小奇麗にされた店の階段を上り扉を開けた。途端にカランカランと音がする。

「いらっしゃい！何が入り用だい！？」

中年で小太りの男店主が私に愛想良く声をかけた。

「食料と水が欲しいんだが、どうすればいい？」

私は店に入ったものの、食料を貰う方法がわからなかった！

「異国の人かい？こんな銀貨で商売してるんだがね」

そう言って、店主は私に銀の貨幣を見せた。そういえば、人間界では物を得るのに対価を支払

わねばならないと本で読んだ事がある。
「これじゃあ駄目か？」
私は、荷物の中から水を飲む為に持ってきた純金の杯の一つを取り出した。この杯は天界では大した価値はない。
「こりゃ驚いた！純金じゃないか！これを、銀貨に交換するけどいいかい？」
「ああ。頼む」
すると、店主は袋一杯の銀貨と交換した。
「それで、この銀貨で何と交換できるんだ？」
私は、これで今日一日くらいの食料になればいいと思っていた。しかし……
「その銀貨を全部食料と交換したら、この店が潰れてしまうよ！まぁ、仮に交換したとしたら1年以上は食べていけるね。でも、それは勘弁してくれよ！」
「……そんな事はしないから、今日一日空腹にならない分ぐらいの食料と交換してくれ」
私は、この威勢のいい店主とやりとりするのに少し疲れてきた。
「はいよ！いやぁ、あんた金持ちだねぇ！見慣れない服だし、何よりそんな真っ赤な髪の人は初めてだよ！」
「……解ったから、早く食料を渡してくれ！」
私は一刻も早く此処から逃げ出したかった。
「こりゃすまないねー！あんたが今までには無いお客さんだったからつい！それにしても、昨日の鉱山での惨事は知ってるかい……？特にフィーネちゃんって子が可哀相なんだよ！フィーネちゃんの父親は唯一の家族だったのに……数年前も」
「もういい！」
私は、店主が置いた食料を取って急いで店を出た。
「（何であの男は聞きもしないことまで喋るんだ！？）」
私は少し腹がたっていた。天界には少なくともあんな奴はいない。私はますます人間がわからなくなった。
「さーねー人間って訳わかんないわねー」
リバレスも、少し困惑気味だ。
「私達は、そんな人間と２００年も過ごさなければならないんだな」
「……あー……！お先真っ暗！って感じよねー」
私達は、店主の図々しい態度や強引さに呆れて、これが人間かと思うとこれから先に不安を覚えた。

しかし店主の言葉にフィーネが出てきた事で、昨日今日の出来事が鮮明に蘇ってきた。
天界から堕ちて怪我をした私を、何の見返りも求めずに助けた少女……
昨日、唯一の肉親を失ったばかりの少女が私達に投げかけた言葉……
今日も、悲しみに暮れている少女が私を信じると言った言葉……

「あなた達の力が必要なんです！
あなたを信じて待ってますから……！」

人間が……人間如きが……どうして、こんなにも『魔』に脅かされ続ける苦しい世界で強く生きられる。
「フィーネは……本気で私を信じているんだろうか……？」
私は思わず、思った事を口に出してしまった。しかし、その言葉に、リバレスは過敏に反応した。
「（人間なんて、自分の身すら守れない！言い換えれば自分自身を信じることも出来ないのに、他人を信じることなんて出来はしないわよー！）」
リバレスは、さっきから私が思いも寄らない事ばかり言うのでまた怒り出した。
「（……私もそう思うが……）」
時刻は正午を回っていた。私は妙に釈然としない気持ちを抱えながら、村の外れの大木の下で食事を取った。

～約束の時まで～

日が傾いてきた。私とリバレスは食事を取り、今も大木の下にいた。そして、やはり私はフィーネの事を考えていた。そして、結論が出た。

「リバレス、丘へ向かうぞ」

私はそう、リバレスに語りかけた。

「（へ！？ルナ、本気で言ってるのー！冗談がうまくなったわねー！）」

彼女の驚きの声が頭に谺すると同時に、その表情が脳裏に浮かんだ。

「私は本気だ」

私は、それを強い口調で返した。

「（何で！？どうしてよー！？相手は所詮人間よー！）」

リバレスの言いたい事はよく解る。私達には、人間如きと馴れ合う義理はないのだから。

「確かにそうだ。相手は人間だ。でも、親を殺されてなお私を信じると言った強さに興味が沸いたんだ」

天使でさえ、其処まで強い心を持った者はいないだろう。私は、天界で強い意志を持ち続けた所為で神官と対立し堕天した。結果として、私の行為は天界を変える事に繋がったのだから何の悔いもないが。私はその、意思の強さという点においてフィーネという女性に何らかの共感を覚えたのだ。

「（やめときなさいよー！余計な事に巻き込まれるに決まってるわよー……！）」

確かに、そんな気がしない訳ではない。だから、私は人間を救う気など全く無いのに変わりはない。しかし、フィーネに興味を持ったのも事実。だから、話だけは聞こうと思っている。

「リバレス、心配するな。私は話を聞くだけだ。それに、あの娘は人間界でうまく生きていく為に利用できるかもしれないだろ？」

私は、そう彼女に言い聞かせた。渋々顔が目に浮かぶ。

「（解ったわよー……！ルナは頑固なんだからー！どうなっても知らないからねー……）」

こうして、私達は約束の丘に向かう事に決めた。しかしこの時は、其処で待ち受ける運命を知る筈もなかった。

～丘からの始まり～

昨日の天気とは打って変わり、今日の天気は快晴だった。時刻は午後５時３０分。美しい夕陽が丘を照らしている。昨日の大雨に濡れた緑が夕陽に照らされ、鮮やかな光を発している。その光景は、昨日起きた出来事の恐ろしさを全て拭い去るかのように悠然としていた。遠くにはフィーネの家や、ミルドの村。そして鉱山が見える。その景色の全てが朱に染まり、一種の統一感を奏でていた。そして、それとは裏腹に昨日、私達が天界から堕ちてきた跡は地面が深く抉れており生々しくその衝撃を語っているのだった。

「此処から見える景色も美しいな」

私は思わず、言葉を発した。

「（そうねー……この夕陽の景色は天界と変わらないかもねー……でも、天界の整然とした風景とは全然違うから、ずっとずっと遠い場所に来たって感じがしてちょっと寂しいわー。）」

確かに私もそう思った。天界で見る黄昏は、神殿や建造物、そして画一的にされた森林の姿だったからだ。

しかし、感傷に浸っていると暫くして、フィーネが近付いて来るのが見えた。

「あ、来てくれたんですね！良かった。あなたが此処にいるという事は」

私は、彼女にかけられた言葉よりも、彼女の外見の変化に驚いた。昨日までの、優しく純粋でこの世の闇を見たことの無いような目は、涙で少し腫れている。更に、子供の様な純粋さは消えて、ある強い決意を持った目に変わっていたのだ。そして、背中まで真っ直ぐに伸びていた栗色の長い髪は、昨日の整った感じは見受けられず、所々で乱れていた。

しかし、昨日は感じなかったのだが『美しい』と感じた。強い志の裏に悲しさを秘めている、その少女の健気さに惹かれたのだろうか？

「初めに言っておくが、私は君の話を聞くだけだ。それ以上は期待しないでくれ」

私はフィーネの姿に驚きながらも、最初にかけた言葉は冷たいものだった。私は、出来もしない優しい言葉などかける気はない。
「……そう……ですか……わかりました」
「（あれっ、物分りがいいわねー？）」
その瞬間に、彼女の表情は曇り涙を流しそうにさえなった。しかし……！
フィーネの顔は強い覚悟の表情に変わり、ベルトに通した大型のナイフを取り出した！
「……無駄だ。そんな物で私を脅そうとしてもな。君の力では私を傷つけることすら出来はしない」
其処で、リバレスも多少の危険を感じたのか元の天翼獣の姿に戻った。
「自殺しようとしてもムダよー！あなた一人の命でルナの考えなんて変わらないんだからー！」
私達の説得を聞いているのか聞いていないのか、フィーネの表情は変わらなかった。その顔で私達をじっと見据えている。
「……違います」
ようやく、口を開いた。口調が重々しい……
「……私が、魔物を全て倒しに行くんです！私から全てを奪った魔物を！」
驚いた。こんな脆弱な人間が『魔』を倒すだと！？冗談も甚だしい……
しかし、彼女は本気の様でナイフを強く握り締め強い怒りの表情を湛えていた。
「やめるんだ！無意味に命を捨てようとするな！」
私は、この少女に助けられた。幾ら人間といえども、魔の手にかかり無残に殺される姿を想像すれば、そう言葉を発せずにはいられなかったのだ。恩人がわざわざ、残虐に殺されるのを見過ごすことなど出来ない！
「いいえ！止めないで下さい！あなたの言う通りに、他人には頼らないんです！……私が動かないと何も変わらないし、何も変えられはしません！……止めるんなら、今此処で私を殺してください！」
その言葉は……
「何処かで聞いたセリフねー」
私が思うよりも前にリバレスが口を開いた。呆れ顔の彼女はきっとこう思っている。「ルナとそっくりな考えだわー」と……
私も、そう思った。この少女は、優しく、意思の強い人間だとは思っていたが、まさかこれ程とは……
人間も、私の様に自らの命をかけてまで自分の意思を貫く事が出来るのだ。私は正直驚いた。そして、私が天界で命を懸けたように、今此処で魔を倒す為に命を懸けている少女がいる。私は、この時初めて人間、少なくともフィーネを見下していた自分を少し恥ずかしいと思った。
「仕方ない」
私は、初級神術である『衝撃』を威力をセーブして放った。
「……カキンッ！」
それは、フィーネのナイフに直撃し遠くへと弾き飛ばした。
その瞬間、強い心で自分を支えていたフィーネは支えを失ったのか、その場に泣き崩れた。
「うぅ……あなたは、私から武器さえも奪うんですか……！？……ぐすっ……それじゃあ、私は一体どうすればいいんですか……！」
幾ら強い意志を持っているとはいえ、まだ年端もいかない少女。限界を超えたんだろう。私は、フィーネに対して優しさが心に溢れてくるのを感じた。
「フィーネ……、君は何でもすると言ったな」
フィーネは泣き続けていたが、私の突然の優しい口調に驚いた様子だった。
「……私とリバレスが、この世界で何不自由なく暮らせるように、食料や情報、宿などを提供するんだ」
私は、私と似た考えを持つこの少女を助けてやろうという気持ちになった。通常の私なら決して考えられない事なのに……
魔と戦う……それはリスクが高い。しかし、天界で魔と戦う事は禁じられてはいない。そんな前提や、保身の考えよりも何よりフィーネという人間の心が気に入ったのだ。
「……そ……それじゃあ」

フィーネは涙を拭いて、私に目を向けた。昨日と変わらぬ優しい目……
「……手伝ってやるから、もう馬鹿な真似はよすんだ」
「は……はいっ！」
フィーネはとても嬉しそうに、私の手を握り満面の笑みを湛えていた。
「ルナー！だから行くなって言ったのよー！」
リバレスは困り顔で私の肩に停まった。
「……こうなった以上仕方ないだろ？」
「もー……！相変わらず甘いんだからー！（でも、それがルナのいい所なのよねー相手が人間なのが困り者だけど……）」
「ん？リバレス、何か言ったか？」
私は、今リバレスが言った最後の方の言葉を聞き取れなかった。
「何でもないわよー！」
リバレスは私の子供のようでいて、時に母のように振舞う。世話焼きの彼女がいれば、この先も安心だ。
「私は、人間に甚大な被害を与える魔物だけを排除する。その代わりにさっき言った条件と、私とリバレスの事を決して他人に口外せず、また、正体を聞いてはいけないこととする。いいな？」
リバレスは困り顔だったが、もう呆れ顔で私の考えを認めてくれているようだった。そして、
「はいっ！張り切って、ルナさんとリバレスさんのお世話をさせて貰います！手始めに、今晩はおいしい物を作りますよ！」
と、フィーネは元気一杯で答えたのだった。
この日の彼女の家で食べた料理はとてもおいしく、量も半端では無かったが私は空腹だった為、全て食べ尽くした。
それを羨ましそうに見守るリバレスの姿も、何処か楽しげに見えた。

これから待ち受ける過酷な試練と、今までとは全く異なった日常には不安もあったが、正直期待も大きかった。
まるで、囚人のように勉強と試験を繰り返し、自由にも生きられなかった天界の時とは全く違う。
今日の事も明日の事も全く予想ができない。そして、何より全てが自由に出来る事が嬉しかった。
また、この一晩でフィーネの話を聞いて、人間界の事がリアルに伝わってきた。人間が、どれだけ『魔』を恐れて生きてきたか。
そして、どんな生活をしてきたか……

今日は少し空を見て眠ろう。明日の事は解らない。そして、自由な一日一日を大切にしよう。
２００年は長いけど、何とかやっていけるような気がした。
私は、眠っているリバレスとフィーネから離れて、一人で夜空に浮かぶ月を眺めていた。

そして、これから先の私達の人生の幸福を願って眠りに就いたのだった。

第四節　優しき強さ

眩しい……私は、フィーネの家の寝室にあるガラス窓から差し込む光で目を覚ました。
「うーん」
暫くして、リバレスもうっすら目を開いた。その様子から、彼女はやはり朝に弱い事が解る。
「もう目を覚ませよ、リバレス」
私は、笑顔で彼女の頭をポンポンと撫でて起床を促した。
「はいはーい……起きますよー」
ようやく、リバレスは伸びをして完全に目を覚ましたのだった。
しかし、フィーネの姿が見当たらない。昨晩は三人とも同じ部屋で寝た筈なのに……私は、天界

から持ってきた純銀で装飾されている懐中時計を開いた。時刻は午前６時１０分。もう、こんな時間に彼女は起きているというのか？私が寝ている隙に魔が現れたという心配が私の心をよぎったので私はフィーネを探しに行こうと思った時だった。

「おはようございます！ルナさん、リバレスさん早起きですね！」

私達が寝ている部屋のドアが不意に開いた。其処に、清々しい笑顔でフィーネは現れたのだった。

「おはよう」

「おはよー」

私達はほぼ同時に返事をしたが、リバレスは少し元気が無かった。まだ、人間の手助けをする事を心から認めてはいないからだろう。

「ルナさんの朝食の準備が出来ましたよ！どうぞ、食べて下さい！」

私達は、フィーネに連れられて食卓を囲んだ。今日の朝食は、スクランブルエッグとベーコンとパンという物だった。これも、なかなか美味で人間界ではよく食べられているらしい。食後に、コーヒーという物を飲んでみたが苦くて飲めなかった。

リバレスは相変わらずＥＳＧと水だけを摂取し、始終私の肩の上に座っていた。その表情からフィーネには、やはり心を許していないようだった。その後食事を済ませた私達は、各々に分かれて出発の準備をすることになった。無論、昨日フィーネと約束した『非情な魔のみを排除する』旅の為だ。これは、私にとってリスクの高いものだが、私自身が決めた道だ。後悔はしない。その決意を胸に私は準備を進めていった。戦いに向けての準備は、オリハルコンの剣、黒の戦闘用の防護服、フィーネの家にあった爆薬などだ。その他には、天界から持ってきた衣服や食器などに加えて、この人間界の世界地図やコンパス、数日分の食糧、そして銀貨などの必須アイテムを用意した。

私が用意を終えて、二人は未だ用意に追われていたので私は天界から持参した本を開いた。本のタイトルは『自由と存在』だ。この本は、私にとって思い入れが深い……何故なら、今から１００年前に天界で私のような考えを持ち厳罰を受けた天使が書き残した本だからだ。その天使と私は仲が良く、兄のように慕っていた。しかし、神官によって力のほぼ全てを封じられて存在を消されたのだ。

その天使が消えても、思想は私に根付いた。この本は、言わば私にとっての生きる指針と言っても過言ではない。無論、本の内容は一言一句記憶しているのだが、大切な物なので持ってきたのだ。

暫く、本を熟読していると二人の用意が終わったようだった。

「用意は済んだか？」

と、私は二人に訊いた。

「オッケーでーす！」

とリバレスは元気に答えた。その表情は相変わらず元気そうだ。それにしても、リバレスの見た目は何も変わっていないのに、何故私よりも用意に時間がかかる？

「はい！私も大丈夫です！」

と答えたフィーネを見た私は驚いた。何故なら、姿に似合わぬ重そうな鎧を着た上に剣を三本も携えている。

「フィーネ、動けるのか？」

と私は呆れながら訊いてみた。

「……もちろんですよ！」

と声を張り上げて一歩歩こうとした瞬間、ガシャン！という大きな音を立ててその場に崩れ落ちた……

「フィーネ……、意気込みは解ったから、鎧と剣は置いてくるんだ。動けなければ意味がないだろう」

「……はーい……そうします」

私が言い聞かせると、彼女は顔を赤らめて恥ずかしそうに部屋の奥へと戻っていった。

数分後……

「お待たせしました！」

今度はフィーネは、丈夫そうな衣服を着て、剣とナイフを一本ずつ装備して現れた。そして、

調理器具やテントなども持っている。これなら大丈夫だろう。
「……よし、出発するぞ。人間を助けたいんだろ？」
と、私は声をかけると同時にテントを担いだ。人間の女性が持って旅するのには少し重いだろう。
「はい！ありがとうございます！……でも、その前にどうしても立ち寄りたい所があるんです」
と、一瞬彼女は悲しそうに目を伏せたのでその場所に立ち寄ることにした。

～ミルド共同墓地～
フィーネに連れてこられた場所は、墓地だった。村を見下ろすように丘の中腹に設けられている。その墓碑の多くには花束や、花飾り、食物などが供えられている。その色合いや鮮度から殆どが最近葬られた人間の為であることが容易に想像できた。
墓碑自体は質素なものばかりだったが、深い悲しみの空気が此処には満ち溢れている。
「いっぱい死んだのねー」
とリバレスは声を漏らした。周りに誰も人がいない為、今は指輪の形には変化していない。
「はい……、この数ヶ月で１００人以上の人が殺されました」
と、俯きながら重い口調でフィーネは答えた。
「……父親の墓か」
と私は、出来るだけ悲しませないように優しい口調で訊いた。
「……いいえ、お父さんとお母さんのお墓ですよ」
「すまない」
私は、聞いてはいけない事を聞いた気がして即座に謝った。
「……いいんです。少し話を聞いて貰えますか？」
その表情から悲しさと優しさの両方が感じ取れた。
「ああ」
と私は短く返答した。
「手短にねー」
と、リバレスが余計な一言を加えたので、私はリバレスの頭を軽く小突いた。彼女はムッとした表情で私を見たが、それを無視して
「フィーネ、話を続けてくれ」
と私はフィーネに呼びかけた。
「……お母さん……、いえ、母は数年前に流行の病で死にました。……とても優しい人で、他人の事を常に思いやり自らを犠牲にしてでも、自分の愛するものは守る人でした。でも……突然、原因不明の病に冒され……序々に痩せ細り……苦しみ抜いて最期を迎えたんです。あの病気は見ているこちらも、悲しみや無力さに胸が抉られる思いでした。そんな、新種の病気は魔物が作り出しているという噂もあります。だとしたら、私は絶対に母を殺した魔物を許さない！……すみません、話を戻します。……父は……偉大な人でした。病気の母を常に励まし……最後の最後まで傍にいてくれて、危険な鉱山で私を養う為に働き……私の前では決して涙を見せない強い人だったんです！……でも、今はお父さんもお母さんも……声を聞く事も出来ない！」
と、フィーネは一筋の涙を流した。
「……人間は脆いな……何故、自分の無力さに涙してまで生きようとする？それ程の悲しみがあるなら、死を受け入れる方が容易だろう？」
それが、今の私の正直な気持ちだった。そんなに、苦しい思いに耐えるぐらいならば死ぬ方が簡単なのに……死んで生まれ変われればいいだろう。いや、天使と違って人間は生まれ変わる事は出来ないのか？天使ならば、そんな苦しみには耐えられずに生まれ変わる道を選ぶだろうに。私は、人間の考えがわからずにそう訊いたのだった。

「……例え脆くても……この素晴らしい世界に生を受けて、たくさんの人に恵まれて一生懸命生きることはきっと幸せなんです。だから……父も母も幸せだったと思います。二人は、私を育ててくれたし、家族には愛があって幸せだったから……でも、この世界にはそんな幸せを享受できない人々もいます。魔物によって……一片の幸せさえも奪いつくされる。私は魔物が絶対悪だとは言いません。だけど……人間の私から見るとやっぱり許せないんです！……出来るならば、

全ての種族の共存を願います。けれど……最近の魔物は明らかに私達を皆殺しにしようと襲ってきます。年月を経る毎に魔物の勢いは増しています。でも……私は、大好きな父と母から生まれたから！……素晴らしい世界に生まれたから……！そして……幸せでありたいから……！私は生きるんです！」

そう、フィーネは涙を拭いて力強く言った。この少女はすごい……。私は本気でそう思った。いつ死ぬかも解らない、この世界をどうして素晴らしいと思える？何故たった一人の人間がこんな考えを持つことが出来る？どうして、こんなにも前向きに生きる事が出来る？そして、何故そんなにも自分や人を愛せるんだ！？私達天使はただ、言われるがままに生きてきただけなのに……！

リバレスも黙っていた。流石に、フィーネの考えに少しぐらいは驚いたんだろう。

「……お待たせしました。さぁ、行きましょう！」

私達が驚いていたのも束の間、墓碑に花束を捧げたフィーネが私達に出発を促した。その顔はいつもの優しい顔だった。だが、私にはその顔が力強くも見えるようになった。

「あ……あぁ」

私はフィーネの元気に気圧されて、間抜けな言葉を発してしまった。

その後、リバレスが私の指輪に変化し、私達は船着場へと向かって行った。それは、次の目的地である『レニーの街』へと向かう為だ。

途中、ミルドの村人達にフィーネは何度も捕まっていたが、いつもの笑顔で村人を安心させて私と共に船着場へと道を急いだ。私はというと、流石に黒の戦闘服を着て、大きな荷物を担いでいる上に、赤髪なので一際注目を集めていたが村人はそれどころではないのか、声をかけられる事は少なかった。そして、私達は船に乗ったのだった。丁度、暫くして正午が近くなったので食事を摂る事にした。

「此処から、どれぐらいなんだ？」

私は、パンを片手にフィーネに訊いた。

「大体東に３００ｋｍぐらいなので、明日の朝には着きますよ」

と、フィーネは事も無げに紅茶を片手に答えた。

「（長いわねー！）」

と、リバレスは私の言葉を代弁した。

「この世界の交通は不便だな。それはそうと、その街には何があるんだ？」

と私も紅茶をすすりながら訊いた。コーヒーは飲めないが紅茶は飲める。

「通称、雨の街レニー。作物を多く作り、貿易をしている街です。ミルドから、一番近いっていうのもありますが、何より最近悪い噂を聞いたんです。それは、悪い疫病が流行っているという噂……その背後には魔物が関わっているという噂も……だから、その原因が魔物ならルナさんに何とかして貰いたいと思ったんです。私も頑張りますから！」

と、フィーネは頭を下げて私の手を握った。これが、彼女のお願いの仕方なんだろう。

「私は、それが魔……いや魔物の仕業なら何とか出来るかもしれないが、純粋な疫病ならば何も出来ないぞ」

と私は、余り大きな期待を持たせないように言葉を返した。

「はいっ！お願いします！」

それでも、フィーネは嬉しそうだった。

その後もフィーネは私達の事をもっと知りたそうだったが、約束をしていたので何も訊いてはこなかった。

船での時間はこうしてゆっくりと流れていくのだった。

第五節　死毒

翌朝、船は『レニーの街』の船着場に到着した。パラパラと雨が降り、霧に包まれて２０ｍ先も見えない。時刻は午前７時３０分。
乗務員が荷下ろしを行っていて、私達が下りられるのは８時頃になるらしい。まだ、リバレスは指輪に変化したまま眠っていた。
「少し時間がありますし、朝食を取りましょうか？」
と、フィーネは海を眺めていた私に笑顔で話しかけた。
「ああ、ちょうど空腹だったんだ。頼むよ」
と、私は正直に答えた。つい最近までなら、人間の施しなど受ける気がしなかったのに。
「じゃあ、今日は缶詰と干し肉とパンにしますね」
と言って、次々と簡単な料理が出てきた。船の甲板の無機質なテーブルが華やかになっていく。
「フィーネは料理がうまいな」
と、私は思わず感心して声をかけた。
「え！そんな事ないですよぉ。ルナさんにはいっぱいお世話になってるから、私も頑張ってるんです！」
と、フィーネは素直に照れながら返事した。
「いや、色彩のセンスもいいと思う」
と私が褒めると、フィーネは尚も嬉しそうに食卓を彩っていった。
雨が降っていたが、食卓はパラソルの下にあるので私達は濡れる事もなく楽しく朝食を摂る事が出来た。
「昨日の晩は三人とも疲れて泥のように眠っていたからな」
と私が思い出して話すと、
「昨日はもっとお話したかったんですけどね」
と、彼女は寂しそうに漏らした。私が天界から堕ちて以来、ゆっくり休めたのは昨日が初めてなので仕方ないのだが。
「フィーネは、あれだけの事があったんだから疲れて当然なんだ。今日から、また頑張ればいいさ」
と私は、彼女を元気付けた。
「はい！頑張りましょう！」
と、フィーネは満面の笑みを見せた。
「（ふわー、もう出発……？）」
と、此処でリバレスが目を覚ました。その後、リバレスはＥＳＧと水を摂り出発の準備は整った。

〜レニーの街〜
私達が街の入り口に入ろうとすると、其処に中年の男が酒を飲みながら樽の上に座っているのを見かけた。年は５０前後だろうか？
「……若いの……言っておくが、この街には入ってはいかん。すぐに立ち去るんだ」
男は、酔いで顔が赤くなりながらも私達に声をかけた。呂律が回っていない。
「何故だ？魔物が襲ってくるとでも言うのか？」
と、私は訝しげに問いかけた。
「……いいや……もっと恐ろしい事だ……病……死の病が……！」
「病気……！？お母さんが死んだあの病気かも……！？……原因を突き止めないと大変なことに……！」
フィーネの顔が不安に染まった。確かに、街には活気が無い。入り口から覗く街は死んでいるようにひっそりしている。
「……病にかかり死ぬのはお前達の勝手だが……わしは止めたからな」
と男は不吉な言葉を投げかけて、黙り込んでしまった。
「どうするんだ？」

と私は、思い詰めた様子のフィーネに問いかけた。
「もちろん病気の原因を探すんです！私……ちょっと街の様子を見てきます！」
と言うや否や、彼女は霧と毒気に覆われた街の中へと走っていった。
「な……おい！待てよ！フィーネ！」
その言葉が届く前に、フィーネの姿は見えなくなっていた。
「……（全く……これだから人間は……！）」
とリバレスの声と呆れ顔が脳裏に浮かんだ。
私とリバレスも仕方なく、街の様子を調べてみる事にした。街に入ると、まず人の気配が殆ど無い事に気付いた。更に、霧と雨に包まれているこの街は重々しい空気を作り出している。手始めに酒場へと向かった。全て、木で作られた酒場はいい具合に色褪せて、その歴史の長さを物語っていた。看板には、『ようこそ、豊作の街レニーへ』と書いてある。
「カランカラン」
入り口の扉を開けると、乾いた音が鳴り響いた。
「いらっしゃい」
奥で、マスターの気弱な声が響いた。
「この店に客はいないのか？」
と、私はマスター以外に人が見当たらないので訊いてみた。
「そうだよ、今みたいに街が毒で呪われている時にはみんな酒場になんて来ようとしないんだ」
と、マスターは溜息を漏らした。
「それを詳しく教えてくれないか？」
と、私はマスターに銀貨を渡した。この一連のやり取りはフィーネに教わったもので、酒場で銀貨を渡すと情報を仕入れられると聞いていた。
「毎度、何にする？」
と、マスターは酒の種類を訊いているようだった。人間界の酒など、飲んだことがない。どうするか……？
「（一番高そうなやつにしといたらー？安物は、ルナの口には合わないわよー）」
と、さり気なくリバレスが私に助言した。
「じゃあ、此処で一番美味い酒を頼むよ」
と、マスターに言うとすぐにその酒は出てきた。
「『恵みの雨』っていうこの土地原産の白ワインだよ！最高の味さ」
私は、それを恐る恐る啜ってみた。思ったよりも、美味だったので驚いた。
「確かに美味だがアルコールが弱いな」
と私は正直な感想を述べた。天界でたまに振舞われる酒は、とても美味でアルコールも遥かにきついからだ。
「兄さん、酒に強いみたいだねぇ……このワインは度数が２０だよ」
と、マスターは久々の客に少し嬉しそうだったが、此処で時間を費やす訳にもいかない。
「それはそうと、この街の状況について教えてくれ」
と、私は本題を催促した。
「そうだね……この街は、数ヶ月前から急に病気が流行り始めたんだ。原因は不明なんだが、森で作業する人間から病気に感染し始めた。森には畑や果樹園があって、この街の主要産物が其処で生産されているんだ。不思議な事に、森に行かない者は感染しないんだが、何せこの街から森を無くすとみんな飢え死にしてしまう……だから、森に入らない訳にはいかない。みんな、原因は森の中の何かだって事は知ってるんだけど、はっきりとは解らない。病気にかかると、段々体が弱り……痩せていって、体の中からボロボロになって苦しみ抜いて死んでしまう……俺も、そろそろ商売を止めて別の街に行こうかと思ってるんだ」
と、諦観の境地にいる人間の顔だった。だが、私には何となく答えが見えてきた。
「森は何処にある？」
私は単刀直入に訊いた。
「街のすぐ南だよ。まさか行く気じゃないだろうね！？死ぬぞ！」
マスターは叫んだ。その様子から、病の恐ろしさが感じ取れた。
「いや、訊いてみただけだ。ありがとう」

そう言い残して私は店を後にした。
「（解ったのー？ルナー。）」
と、リバレスの声が頭に響く。
「（ああ。恐らく、森で魔が毒を撒いているんだろう。上手く人間に見つからないようにな……その賢さから推察して、残酷で手強いぞ……）」
と、私の推理を打ち明けた。
「（じゃあ、わたしも戦った方がいいかもねー……）」
「（最悪の場合は頼む。）」
と会話した後で、遠くの方で声がするのに気付いた！

「う……うわぁぁぁぁぁぁ……！」

その絶叫のする元へ私は駆け寄った。場所は、街と森を繋ぐ道の入り口だった。其処にはフィーネも居た。
倒れている男は、年にして２０代半ばだろう。しかし顔は青褪めて、背中に傷を負い大量の血を流していた。
「どうしたんだ？」
と、私は冷静に訊いてみた。
「う……うぅ……俺は、俺は見たんだ！……森の畑の作物や果樹に魔物が毒をばら撒くのを……毒を……！」
必死に逃げて来たんだろう。そして、この男も病に侵されているんだろう。ガリガリに痩せ細っている。
「もう、大丈夫だ」
其処に、その男の身内らしき者がかけよってきて、大急ぎで男を家へと運んでいった。
そして、さっきまで近くの家々の窓からこっちを見ていた者がいたが、全て窓を固く閉ざして人の気配が無くなるのを感じた……

「……この街の様子は……数年前に母が亡くなった時と全く同じです」
と、フィーネは深刻な顔をして辺りを見回した。その表情は悲しみと怒りで凍りついている。
「……ひどい事をするな……これは、君の言った通り、魔物の毒がもたらした病だと思う。元凶はどうやら森にいるようだから、私が始末してくる。恐らくはそいつを倒せば毒は消えるだろう。相手は手強い。君は宿で待っていろ！」
と、私は事の重大さを把握して、フィーネを危険に晒さないように言い聞かせた。
「そんな……イヤです！決して迷惑はかけません！私も連れて行って下さい！私もそいつを許せないんです！」
と、フィーネは必死で反論して懇願した。この状態の彼女を大人しくさせるのは難しいな……
「（何言っても、多分……ううん、絶対ついてくるわよー。やれやれねー……）」
と、リバレスはまたも私の胸中を言い当てた。流石は付き合いが長いだけはある。
「仕方ないな……足手纏いになるなよ。それと、絶対に私から離れるな。約束できるな？」
と、私は仕方なくフィーネを連れて行く事にした。
「はい！絶対に約束は守ります！」
そう、いつも通り元気に振舞っていたが、私は彼女が剣の柄を強く握り締めているのを見逃さなかった。余程強い怒りなんだろう。

〜レニーの森〜
私達は森へと踏み入れた。左右には、果樹園や畑が広がり、森という感じがしない。しかし、歩を進めるに従って森の木々の密度が濃くなり陰鬱とした雰囲気に包まれてきた。街に近い部分は開拓されて、遠い部分はまだ未開拓なのだろう。現在時刻は昼ぐらいだというのに、この場所は夜のように暗い……と同時に、私は異様な空気を察知し始めていた。人間では感じる事の出来ない異臭や毒気を感じたからだ。
「此処から先には、きっと魔物がいる」

私はそうフィーネに告げた。
「わかりました。気をつけます」
そう、警戒してどんどんと奥へと進んでいった。小川が流れている。道も細くなってきた。此処らが、この森の水源なのだろう。
しかし……！
「フィーネ！？」
振り返るとフィーネの姿は無かった！ほんの数分前までは後ろにいたのに……
「（魔が現れたのかもねー！？探さないとー！）」
其処で、リバレスは元の姿に戻り私達は全力で捜査を開始した！

数分前……
「……綺麗な花」
フィーネは、道の脇に現れた美しい赤い花に目を奪われていた。
「……あれ、ルナさん！？リバレスさん！？」
その時には、ルナ達の姿は無かった。……と同時に視界が霞むのを感じた……
「……私はどうなるんだろう」
彼女の意識は其処で途切れた。

～レニーの森の水源～
此処は、レニーの森の最も奥に位置する水源だ。光は殆ど差し込まない。水は本来の清らかさを失い毒々しい紫色を呈していた。
「……ようこそ……お嬢さん」
その不気味な声にフィーネは目を覚ました。フィーネの両手両足は草木を束ねた物で縛られている！
「……だ……誰！？」
彼女は声の主を睨み付けた。その姿は異形の姿……一見巨大な植物にも見えるが、体中がボコボコと膨らみ、赤い血管のようなものが張り巡らされている。頭は毒々しい赤色の花のようで、其処に飛び出た目玉と裂けた口が見える。恐ろしい……彼女は直感した。
「人間によく効く毒を作っている『魔』だよ。ケケケ」
裂けた口は、憎い言葉を吐いた。その一言でフィーネは、恐怖よりも憎しみに満たされた。
「あなたが……！私の村も襲ったのね！？」
彼女は、動けない体を揺らし怒りの言葉をぶつけた。
「そうさ。苦しむ人間を見るのは楽しくてたまらないんでねぇ……クククッ……！」
「私はお前を許さない！」
フィーネは、歯を食い縛り口から血を流しながら叫んだ！
「まぁ、そう言うなよ……一つ取引をしようじゃないか？オレは……この世界を全て毒で染め上げるつもりだが……お嬢さん……、あんたが、この果実を一つ食べきれたら、オレはこの世界から撤退しよう……どうだ？」
という言葉の後で、この魔物は体の一部から薄気味悪い緑色の果実を取り出した。
「……本当なの……？」
フィーネは自分が無力なのを知っている。戦って勝つ事など出来はしない。『でも、此処で私がその猛毒であろう果実を食べる事で多くの人が救われるなら……この魔物は私を騙しているかもしれないけど、私が人を救えるなら』……という気持ちになっていた。
「魔は、一度言った事は絶対に取り消さないのさ……約束を破るくらいなら死んだ方がマシだからねぇ」
と、魔物はフィーネを説得した。フィーネは、相手が魔物であっても人間を救いたいという気持ちでいっぱいだった。
「……わかりました。食べます」
という一言を発した瞬間、フィーネの両手両足の枷は外れた。そして、醜い魔物から果実を受け取った。
「さぁ、食べるんだ！」

フィーネは、思い切ってその果実をかじった。すると……
「う……！」
彼女は全身に毒が回るのを感じた。恐らく数分もしない内に死ぬだろう！
「バカめ！魔を信じる人間が何処にいる！？ヒャハハハハ……！愉快でたまらないねぇ……！」
その時、フィーネは自分の愚かさを感じ激しい憤りの中で意識を失っていった。

「そうか……愉快か。それなら、笑いながら死ぬがいい！」
私が到着したのはその時だった。既にフィーネは毒を食べてしまっている！遠くから声は聞こえていたのだが……！
「誰だ！？」
魔は私を驚きながら見た。
「貴様に名乗る名などない。生憎、時間もない。フィーネが毒で死ぬ前に消えて貰う」
私は剣を抜いた。リバレスも臨戦態勢に入る。
「お前が例の堕天使か……許してくれ！」
と、魔は急に大人しくなり跪いた。私は話し合いで解決するなら、と剣を下ろした。
「なんだ？許して欲しいなら、フィーネと人間にかけた毒を解除しろ」
と、言った瞬間だった！
「馬鹿が！」
と魔は叫ぶと同時に、頭にある花のようなものから大量の毒霧を放出した！
「くっ！」
私は突然の出来事で目が眩んだ！
「死ね！」
魔から伸びる触手が私の脇腹に直撃する！
「保護！」
リバレスがそう叫び、私をフォローした。私を保護の神術が包み、ダメージはさほどのものではなかった。しかし、脇腹はズキズキ痛む。
「貴様に情けをかけた、私が馬鹿だったよ」
そう、言いながら私は全力疾走し剣を振り抜いた。
「グアッ……！」
敵の四本ある触手の二本を切り落とした。油断せずに戦えば、倒せる！
「堕天使の分際で……これでもくらえ！」
その叫びと同時に辺りにある全ての植物が毒化した。そして、植物が私達を襲う！
「キャー！」
リバレスが、植物の蔦に絡め取られていた！
「何処までも卑怯な……私を怒らせたな……！」
私は、精神力を集中した。それは、ある神術を使う為だ。
「高等神術……『滅炎雨獄』！」
この神術は、天界で神官ハーツが使った『滅炎』の効果を広範囲に広げたものだ。
私の叫びと共に、フィーネとリバレス以外の全ての植物が灼熱の空間に包まれた！半径１０ｍ以内にあった植物は消失した。
同時に、魔も致命傷を負っている！この術は、九割の力が封じられて尚もこの威力……滅多に使うものじゃないな……
「……や……止めてくれ……許してください……！」
しかし……この魔はこの術で死なないのか……ミルドの魔とは桁違いの強さだ……これ以上の敵が現れたら私に倒せるかどうか……？
「貴様は言ってたな。約束を破るくらいなら死んだ方がマシなんだろう？本望じゃないか」
「ま……待って……！」
私は、魔の首を切り飛ばした。恐らくこの魔の命乞いを聞いていたら、私達の命が危ない。
「転生したら、他人を騙さずに生きるんだな」
毒霧を吸って、体がクラクラしていたが、魔を倒した瞬間に全ての毒気が晴れていった。
森を覆っていた陰湿な空気も晴れていき、明るさを取り戻していくのが目に見えて解った。

「これで、フィーネの毒も街の毒も消えるわねー！」
さっきまで、植物に捕まっていたリバレスも元気そうで何よりだ。
「う……うぅん」
其処で、魔に騙されて瀕死に陥ったフィーネも目を覚ました。しかし、心配の言葉よりも先に言いたい事があった。
「馬鹿が！お前が一番憎んでいる相手をどうして信じる！？私が来るのがもう少し遅かったら死んでいたんだぞ！」
私は、彼女への心配が怒りになって現れたのだった。
「ごめんなさい……でも……私一人の命でたくさんの人が幸せになるんだって思うと」
フィーネは申し訳なさそうに、俯きながら涙を溜めて返答した。
「考えが浅過ぎるんだ！あの魔物もせいぜい中級程度の者だろう。恐らく、この世界には他にもっと強力な魔物がいる。そして、 魔物は人間そのものを滅ぼそうとしているんだ。（それは、神が何らかの理由で中界を人間界に変えた所為なのだが……）そんな奴等がたった一人の人間の娘の言葉に耳を貸す筈がないだろう？解ったら、これからは軽率な行動を控えるんだ！」
私は感情に任せて、人間が知らない事まで言ってしまいそうになった。
「……わかりました。でも、どうしてそんな事を知っているんですか？」
と、フィーネは私が隠している事や知っている事を知りたそうだ。
「訊かない約束でしょー？」
と、リバレスはいいタイミングで横槍を入れた。
「……はい……、でも、もし教えてくれる気になったらお願いします！私は何でもしますんで！」
と、またフィーネは私の手を握りお願いしてきた。
「それと……助けてくれてありがとうございます！」
感謝の言葉と笑顔も忘れていなかった。
「あぁ……気が向いたら少しぐらいは話してもいいかもな」
フィーネという人間に、少しずつ心を許していく心を私は感じていた。
何故、この娘は自分よりも人の幸せの事を考えられるんだ？人間も、私達と同じように考えを持ち幸せを追求する生物だという事が最近解ってきた。いや、フィーネに限っては私の想像を超えるかもしれないな……
そんな事を考えながら、私達はレニーの街への帰路についた。途中の道の霧は全て晴れて、眩いばかりの光が森を照らしていた。
森の出口が見えた時、既に日は傾いていた。人間界の一日は過ぎるのが何と早い事か……
私は、過ごす一日一日が新鮮で、新しい発見に満ち溢れている事が楽しかった。
そして、これが本当の意味での自由なんだと実感していた。

第六節　緩み始めた心の鍵

私達が街の入り口へと近付くと、多くの人間がこちらに向かって手を振っているのを見つけた。
「何だ？」
私は、怪訝な顔をしてフィーネに尋ねた。
「さぁ、私にもわかりませんよ」
状況がうまく掴めないまま、歩を進めていくと一人の若者が走り寄ってきた。
「ありがとうございます、ありがとうございます！あなた達が魔物を倒してくれたんでしょう！？」
見ると、森に向かう前に倒れていた若い男だった。どうやら、毒気が抜けて元気になったらしい。
「ああ、怪我は大丈夫か？」
私は、さっきまで瀕死だったであろう男に訊いてみた。
「はいっ！背中の傷は少し痛みますが、街の病がすっかり消えたのでみんな大喜びですよ！」
喜びに満ち溢れた顔で深くお辞儀をすると、男は街の人間達の所に帰っていった。

「英雄の凱旋だーー！」
私達を褒め称える叫びと共に、私とフィーネは興奮する街の人間達に囲まれた。物凄い歓迎だ……
「きっと、私達が森に入っていくのをみんな知ってたんですね」
と、フィーネは私に耳打ちした。
「（全くこれだから人間は……馬鹿騒ぎしちゃってー……）」
リバレスの困り顔が目に浮かぶ。
「今日は、二人の英雄の為に祝宴を開きましょう！いやぁ、めでたい！」
どうやら、街長らしき風格のある初老の男が嬉しそうに私に言った。
「いいって、私は魔物を倒しただけなんだ！他に何もしてないよ！」
私は、焦ってそう叫んだ。これ以上多くの人間と関わりあうのはごめんだ！
「ルナさん、これを断るのは無理ですよ。ほら、街の人がどんどん集まってきます」
見ると、街の至る所からこちらに走り寄ってくるのが確認できた。
「英雄のお二人のお名前をお聞かせ願えないでしょうか？」
街長が、私に全ての街の人間を代表して訊いてきた。
「（仕方ない。）私は、ルナ。もう一人はフィーネだ」
私がそう言った瞬間。
「皆の者、英雄のルナ氏とフィーネ嬢の為に盛大な祝宴を開くんだ！」
長の叫びと共に、街の人間達は各々街に戻って準備を始めた。
「今晩、あなた達の為に街が一丸となって祝宴を開きます。どうぞ、お楽しみになられるよう」
そうして、私の意向に関係なく狂喜に乱舞する街は、まるで祭のように浮かれていた。
「（困ったもんねー……ルナ、逃げないでいいの？）」
と、リバレスは私を心配して逃げるよう勧めてきた。
「（まぁ、なるようになるさ。それに、街の全員に知られているのに逃げられないだろう。）」
私は、フィーネと接するようになってから人間に対する偏見が少し和らいでいたので、祝宴には別に参加しても構わないと思っていた。
「ルナさん、今日は楽しみましょう！？参加しますよね？」
自分達の為に祝宴が開かれることに、フィーネは驚きながらも嬉しそうだった。こんなに嬉しそうなのに、参加しない訳にはいかないだろう。
「そうだな、せっかくだし旅の疲れもあるから、今日はゆっくりと祝ってもらおう」
私が、「仕方ないな」という表情と共にそう言うと、
「本当ですか！もしかしたらルナさんはこういうのは嫌いかと思ってました。ありがとうございます！」
フィーネは、自分の母と同じ苦しみからこの街が救われたことが嬉しいのか、私も祝宴に参加することが嬉しいのか、何にせよこんなに嬉しそうなフィーネは初めて見たかもしれない。
こうして私達は、即席の祝宴会場の中心へと案内されていった。会場は街の中心にある噴水前。雨は止み、空には月が出てきた。
どんどんと、テーブルと椅子が運び込まれる。その上にはテーブルクロス、そしてありとあらゆる酒や豪勢な料理が運びこまれてきた。
街の人間の殆どが参加するのだろうか？この中心地だけでも数百席以上はある。更に、街の道にも家から出したテーブルが並べられて各家庭でも宴会の準備をしているようだった。正に、この街全体が祝いのムードに包まれていくのだった。

〜喜びの祝宴〜
街は見渡す限り、狂喜に満ちた人々で溢れていた。どうやら、宴会の準備が出来たようだ。私と、フィーネにこの街最高の酒である『恵みの雨』が純銀の杯になみなみと注がれた。街の人々もまた、その手には酒を入れた杯を持っていた。一瞬静寂が訪れた。
一体何をする気だ？
「さぁ、大英雄のルナ氏とフィーネ嬢に感謝の意を表し……乾杯！」
街長の叫びと共に人々が杯を『キンッ』という音と共にぶつけあって、酒を飲み始めた。恐らくこれは何らかの儀式かしきたりなんだろう。

「かんぱーい！」
フィーネが私と杯をぶつけあった。その後、街長やその他数え切れない人間が私達と杯をぶつけあった。
人間はおかしな儀式をするものだ。そのまま、各々が飲めばいいものを……
「さぁ、皆の者！この偉大なる勇者の話を酒の肴にしよう！」
またも街長が勝手に叫び、多くの人間が集まってきた。でも私は、人間達にうまく嘘をついて話が出来る程器用じゃない。
「フィーネ……、此処は任せた。私のサポートをするのが役目だろ……？」
私は、フィーネにだけ聞こえるように囁いた。
「えぇー……！そんなぁ、待ってくださいよぉ！」
フィーネは、物凄く困った顔をしたが、『それは私の役目』と納得したのか、街の人々に話をすることにしたようだ。
「（頑張ってねー！）」
指輪に変化したリバレスが、面白がってフィーネに意識転送（テレパシー）を行った。
「あれ！？リバレスさん！？」
フィーネは驚いてキョキョロ辺りを見回したが、姿が見える筈もない。
「それでは、フィーネさんお話を！」
街の男の一人が黙っている私を見て、フィーネにそう叫んだ。
「はいっ！それでは」

フィーネは、私の人間離れした部分は一切話さずにうまく人間達に話をしていった。リバレスの存在も隠していた。私は少し記憶を失った旅人とされた。よくも、そんなにうまく嘘をつけるものだ。しかし、フィーネはどうやら必死に嘘をついているようで、少し冷や汗をかいているのを私は見逃さなかった。私は、酒を水のように飲み料理もたくさん食べた。酒は、天界のものより味もアルコールも劣るが料理は格段に美味い。
色んな人が私達を訪れて感謝された。
始終、祝賀ムードの中で二時間ぐらいがあっという間に過ぎていった。

「（人間は、本当に楽しそうに笑いよく喋るな……私は疲れたぞ。）」
私は、つぶやくようにリバレスに言った。
「（じゃー、みんな酔い潰れてるし静かな場所にでも行きましょーか？）」
私は、それに無言で頷きフィーネの元に近付いた。彼女は……例外なく顔を真っ赤にして酔い潰れている。
「フィーネ、私達は先に宿に行く。後は頼んだぞ」
私は、はっきりとそう言ったが……
「ふぁい？」
そんな、間の抜けた返事しか返ってこなかった。
「……（泥酔か……）まぁ、あれだけ皆に飲まされれば当然か」
私には、街人達が酔っているのが滑稽だった。私には、人間界の酒は水と大差ないと思えるからだ。
「（天界では、ＥＳＧの他にたまに美味しいお酒が振舞われるもんねー）」
「（そうだな。あの酒は美味いけど、一杯飲んだだけで天使も酔う程の強さだったな。）」
私とリバレスは少し思い出話をした。今では、天界の存在がとても遠くに感じる。
「フィーネ、酔いが醒めたら来るんだぞ」
私は、彼女に理解できているのかどうかも解らないまま宿へと向かっていった。

〜レニーの宿のバルコニーにて〜
私達は、宿で一時間程待っていた。すると、街人にフィーネは運ばれてきた。
「わざわざありがとう。フィーネは、酒に弱いみたいだ」
私は、宿まで運んでくれた街人に感謝の言葉を述べた。
「いいえ！英雄の為ですから！僕達は、生涯あなた達の事を忘れません！」

街人達は、私にこれ以上無い程の感謝の言葉を述べてから帰っていった。
私は、眠っているフィーネを抱えてベッドに寝かせてから、宿にあるバルコニーに出た。
「フィーネも、普通の人間なんだな」
私は、強い心を持つ彼女の人間らしさに少し驚いていた。
「ホント、人間って色んな面で弱いわねー」
リバレスは、バルコニーに誰も人がいないのを確認してから元の姿に戻っていた。
彼女は、ＥＳＧと共に酒を飲んでいた。やはり、彼女にも人間界の酒は効かないようだ。
私は、暫く考えていた。

「２００年間か……もしかすると、短く感じるかもな」
私は、段々と人間に対する誤解が無くなっているのを感じていた。そして、今の日々に楽しさ
さえ覚えていたからだ。
「へ？いやー、長いでしょーやっぱり」
リバレスはまだ、私の心境の変化を知らない。いや、認めたくないだけかもしれない。
「ルナさーん……！」
少し遠くでフィーネの声がして、暫くしてから足取りの覚束ない彼女が現れた。
「どうした、眠れないのか？」
私は、まだ酒の抜けない彼女に訊いた。
「……あなたは、人じゃないかもしれないけど……いい人ですね」
彼女は少し俯き加減でそう言った。照れているのか？
「一体、急に何を言い出すんだ？」
しかし、フィーネは尚も言葉を続けた。
「……私のわがままを聞いてくれて……そして助けてくれて……初めは無口で冷たい人だと思っ
ていたのに……とても感謝してます」
「フィーネ……、酔っているのに、無理するな。ゆっくり寝るんだ」
私は、その言葉は少し嬉しかったが、酔いで少し真実味がない分彼女の体の方が心配だった。
「私は酔ってません！今言った事は全部本当です！」
彼女は驚く程大きな声を出した。どうやら、本当なんだろう。
「でもねー、顔を赤く染めて千鳥足のあなたの言葉は説得力ナシよー」
珍しく、リバレスが笑ってそう言った。彼女も少しは人間を認めたのだろうか？
「私は……酔っても……嘘はつかないんです！……あれ目の前が」
その言葉の直後、彼女は前のめりに倒れかけたが私が受け止めた。
「はー……ヤレヤレねー。これだから人間は」
リバレスが溜息を漏らした。その気持ちはよく解る。
「まぁ、仕方ないだろう。それでも、私が思っていた人間像よりは遥かに上出来だ」
私は、今の率直な意見を話した。
「ルナはなんでも、公平に見ようとするもんねー。でも、あんまり人間びいきになるとジュディ
アに怒られるわよー！」
ジュディア……そういえば、私が堕天する前に「人間に毒されるな」と言っていたな。
「私は、人間に毒されてなどいないさ。ただ、思っていたよりも愚かではないと理解しただけ
だ」
私は、そう弁明した。
「はいはーい。確かに、人間も一部しか見てないけど天界で言われてた程馬鹿じゃないもんね
ー」
天界で教えられていた人間……それは、知能が低く感情のみで動く動物。言葉を一応話すこと
が出来る。程度のものだった。
「天界の教えの中には矛盾したものが多かったからな」
私は、天界での勉強を思い出した。思想を統一して、感情を束縛する教え……
「ルナが反発したから、わたし達は此処にいるもんねー。ルナと一緒なら何処でも楽しいけど
ー」

そう言ってリバレスは私を嬉しそうに見た。何が嬉しいのか？
「お前がいてくれて感謝してるよ。私の第一の理解者だからな」
私が素直にそう言うと、
「照れるわよー！」
と、小さな手で私の頭を軽く叩いた。
「天界に帰ったら、人間の誤解も解くか。ジュディアはちょっと怖いけどな」
と、私は少し大げさに肩を震わせた。
「ほんっと、ジュディアが思い詰めたらルナは何されるか解らないもんねー」
私の為を思ってだが、考えを改めさせる為に神官に密告する程の天使だ。私が人間に毒されていると勘違いされたら怖いな。
「あいつも、一度人間界で生活したら考えも変わるだろうけどな」
私達は笑っていた。思い出話が弾む。
「セルファスやノレッジはどうしてるかしらねー」
「セルファスは、ジュディアに言い寄ってるだろう。ノレッジはきっと次の試験で一位を取る為に勉強に必死だろうな」
私はみんなの行動が予測出来るのがおもしろかった。
「そういえば……そういえば」
次から次へと思い出話が出てきた。
今思い返すと、友人と過ごした天界での生活も楽しく思えた。あんなにも、自由の無い世界が嫌いだったのに不思議なものだ。
「人間界での話も一杯持ち帰りましょーねー」
リバレスが翼をはためかせて、私の周りを飛び回りながらそう言った。
「そうだな。この世界でも色んな思い出が出来そうだ。また、明日からも頑張るか！」
「はーい！」
私達はまた明日からの旅に備えて眠りについた。
しかし……フィーネが目覚めるのはいつになるやら……

第七節　悲痛な思い

朝が訪れた。人間界で迎える4回目の朝だ。堕天してから、今日で5日目になる。思い返してみると、人間界で過ぎる時間はとても変化に満ちていて、たった5日の間に起きた出来事とは思えない。でも、こんな生活にも段々慣れてくるのを私は感じていた。
それにしても……何故、フィーネもリバレスも目覚めない？窓から射す朝の光に目を覚ましたのは私一人だけだった。
「仕方ない。二人が目覚めるまで本でも読むか」
私はそう呟いて、旅の荷物から本を取り出した。前回に読みかけた、「自由と存在」という本だ。この本を読むとやはり思い出す。兄のように慕っていた。あの人の事を……今はどうしているんだろうか？生きているのか、死んでしまったのか……何処にいるのかさえ解らない。
その天使の名は『ハルメス』。私が最も尊敬する天使だ。出来る事ならばもう一度会いたかった。
そんな事を考えて、本を読み終わる頃には既に日が昇りつめていた。
「おはようございます」
「おはよう。随分長い間眠ってたんだな」
意外にも私の次に目覚めたのはフィーネだった。眠そうに目をこすり、髪は乱れている。
「あっ！見ないで下さいよ！顔を洗ってきます！」
私の視線に気がついたのか、彼女は慌てて部屋を出て行った。
「ところで……お前は何故まだ寝てるんだ？」
私は、昼を過ぎても眠り続けるリバレスの頭を指で小突いた。
「う……うーん？もう朝なのー？」
起きたと同時に、眠そうにリバレスは伸びをした。
「もう昼だ。たまには、私より早起きしてみたらどうだ？」
私は、呆れて首を傾げながらそう言った。

「わたしが、この２２４年間でルナより早く起きた事が何回あるのよー？」
リバレスが、膨れっ面をしながら私に訴えた。
「そうだな。まだ９回しかない。確率にして、大体２５年に一回の奇跡だよ」
私は、リバレスの早起きは全て記憶している。
「其処まで詳細に言わなくても……でも、わたしが遅く起きるのは仕方ないのよー！」
「確かに……今まで色んな事を試したけど無理だったからな」
そんな会話をしていると、顔を洗って髪を整えたフィーネが帰ってきた。
「ごめんなさい。この街は水が豊富なんで、水浴びもしてたんですよ」
そう言った彼女は少し身震いをしていた。人間には、この気温は寒いのだろう。
「寒いんだろ？暖炉の近くで暖まった方がいいぞ」
私はそう言って暖炉に薪をくべた。火が勢いよく燃える。
「ありがとうございます！ルナさんや、リバレスさんも水浴びどうですか？」
水浴びか……基本的に私やリバレスみたいな天界の住人は、普段から薄い『保護』のエネルギーで体が覆われているので水浴びなどで体の汚れを落とす必要はないんだが。何事も経験か。
「解った。行くよ」
「わたしもー！」
こうして、私とリバレスは浴室へと向かっていった。しかし、着いて見ると男性用と女性用で別れていた。
「どうやら、人間界での水浴びというのは男女別のようだな」
天界で水浴びをする時は、服を着たまま水浴びする。その後、体の周りを熱空間で包み込み一気に乾かすのだ。水浴びは、天界で一年に一回行われる行事だ。私はあまり好きではないが、リバレスは大好きなようだ。
「じゃー、わたしは女用に行くわねー！」
そう言った瞬間、リバレスは人間の女性ぐらいの大きさに変化した。姿は普通の女天使と同じで、髪は金色だった。
「リバレス！其処までしなくても！」
私は、他の人間にバレたら、という心配があったので静止しようとしたが無理だった。リバレスの姿はもう見えない。
「仕方ない。私も水浴びするか」
私は服を着たまま浴室に入り、シャワーという物から出てくる水を浴びてすぐに戻った。体全体を『焦熱』の神術で包み込み瞬時に乾燥させた。その後、１０分程待ったがリバレスは戻らないので私はフィーネの待つ部屋へと戻ることにした。
「お帰りなさい！サッパリしましたか？」
とフィーネは笑顔で私に問いかけた。
「あ、ああ」
私は、少し引きつった笑顔でそれに答えた。
「朝食の準備、出来てますよ！」
見ると、色とりどりの食卓が出来上がっていた。やはり、料理がうまい。
「ところで、フィーネ。昨日の事は覚えてるか？」
私は、昨日の宴会とその後の事を訊いてみた。
「昨日……？いえ、宴会の後の事は全く覚えてないです。ごめんなさい」
フィーネは申し訳無さそうに謝った。別に悪い事はしていないのに。
「謝らなくてもいいよ。ただ、君が私の事を初めは冷たくて無口だと思っていた事が解っただけだから」
私は少し、素直なフィーネをからかってみたくなった。
「え？え！？私、そんな事言ったんですか！？ごめんなさい！でも、今はそんな風に思ってないですよ！今は、優しくて頼り甲斐がある人だと……って、ごめんなさい！今のも無しでお願いします！」
「ははははっ……！」
私は、余りにも素直で嘘がつけないフィーネの慌てる様子を見て思わず笑ってしまった。
「ルナさん……、笑ってる所を初めて見ましたよ！」

私が笑うのはそんなに珍しいのか？そういえば、リバレスにも笑うのは珍しいって言われた事があるな……

「私だって、笑う時ぐらいあるんだ！……ところで、次は何処に向かうつもりなんだ？」

私は少し焦って、話題を無理やり変えた。

「は、はい。次は南にある『ルトネックの村』に行こうかと思っています。あの村も最近悪い噂が多いですから」

そう言うと、フィーネのさっきまでの笑顔は消えて急に悲しそうな顔に戻った。

「フィーネ、やっぱりその話は後にして朝食にしよう！」

私は場の空気が凍てつくのを感じたので、この話題はやめにして空気を明るくしようとした。

「たっだいまー！」

其処に、さっきから天使の姿に変化したままのリバレスが戻ってきた！

「あの馬鹿！」

私が、飛び出そうとした瞬間……

「あ！ごめんなさいー！」

リバレスは自分の失敗に気付いて、指輪に変化した。

「今のは……？リバレスさんでしょう？リバレスさんが、変身したんじゃないんですか？」

時既に遅しで、流石にフィーネも気付いたようだった。

「そうだ。リバレスは、色んなものに変化できるんだ。でも、その理由は教えられない」

私は訊かれる前に説明した。しかし、フィーネの表情は笑顔のままだった。

「うらやましいな……私も変身出来たらいいのに」

とフィーネは、呟いた。全く驚かないのには私が驚いた。寧ろ、私が笑う事に驚かれる方がショックだったのだが……

そんな風に、今日の朝食？いや昼食も楽しい時間が過ぎていった。

～感謝の街～

私と、フィーネが宿から出ると擦れ違う人々全てに感謝の言葉とお辞儀をされた。この街で私達はやはり英雄扱いだった。

しかし、私達は次の目的地へと向かうべく、食糧の買出しをする為に食料品店へと向かった。

「お代は要らないから、何でも好きな物を持っていってくれ！」

店に入った瞬間店の主人にそう言われた。３０半ばであろう主人はとても嬉しそうだった。

「いいよ。昨日の祝宴で十分私達は歓迎されたんだから」

私は、流石に無料で食糧を貰うのには気が引けた。しかし……

「英雄から金を貰っちゃあ、家の店が街の人間に文句を言われるって！さぁ、持って行ってくれよ！」

と、主人は袋に入るありったけの食糧を私達に渡した。

「あ、ありがとうございます！」

と、フィーネは申し訳無さそうにその袋を受け取った。

「また、この街に寄ったら俺の店に来てくれよ！歓迎するぜ！」

と、主人は威勢良く言った。

「あぁ、また寄らせて貰うよ」

と、名残惜しそうな主人を背に私達は店を出た。そして、ルトネックの村へ向かうべく船着場へと向かっていった。

その途中で、昨日の若者に再び出会った。

「昨日は本当にお世話になりました！」

毒に侵され、大怪我をして、私達を歓迎した青年だ。

「もういいよ。昨日で、十分感謝は受け取ったから」

私は、尚も礼を尽くすこの青年に少し申し訳ない気持ちを持った。

「いいえ！幾らお礼をしても足りません！これを持って行って下さい！」

と、その言葉と共に光る物を差し出された。

「これは？」

「この街の宝です。街の人を代表して、俺が持ってきました！」

見ると、プラチナだろうか。プラチナにダイヤモンドが散りばめられたネックレスだった。天界でも、このクラスの品はなかなか手に入らない。
「いいですよ！こんな高価な品物は受け取れません！」
と、フィーネは青褪めた顔で首を横に振った。その様子から、このネックレスの希少価値の高さが解る。
「いいんです。あなた達がいなければ、この街は死んでいました。そのせめてものお礼なんです！」
と、若者は必死に渡そうとする。恐らく、街人みんなの願いなのだろう。
「解った。受け取らせて貰うよ。ありがとうと、みんなに伝えておいてくれ」
と、私はそう言ってネックレスを受け取った。
「はい！本当にありがとうございました！」
と、若者は何度も振り返って頭を下げながら去っていった。
「フィーネ、せっかくだからこれは君が付けておけよ」
と私はそれをフィーネの首に優しく着けた。
「そ……そんな素晴らしいものは私には似合いませんよ！」
フィーネは、それをすぐに外そうとしたが……
「よく似合ってると思うぞ」
と、私が言うと顔を朱に染めて黙って頷いた。
そして、私達はルトネック行きの船に乗った。無論、代金は取られなかった。

〜滅びの村〜
私達が、レニーを離れて二時間ばかりが過ぎていた。日は傾き始めている。
「あと、一時間ぐらいでルトネックに着くけどあそこは魔物が多いんでな」
と、小型船の船長は深刻そうに呟いた。船長と言っても、船員は船長しかいない。
「そんなに多いのか？」
私は、その顔色から推察してかなりのものだと思った。
「おう、二週間程前からルトネックとは音信不通なんだ。あそこは漁業が盛んで、レニーとは交易が盛んだったんだが」
と、男は更に不安そうに俯いた。
「大丈夫ですよ！私達が何とかしますから！」
と、フィーネは男を慰めるように強気にそう言った。
「（気安くそんな事言わないでくれるー！？）」
と、リバレスは私とフィーネにテレパシー（意識の転送）を送った。
「ごめんなさい！」
と、フィーネは私達に頭を下げた。船長は不思議そうな顔をして、
「俺達の街を救った君達には期待してるぞ！」
と、船長は私の背中を叩いた。
空が夕焼けに染まり始めた頃ルトネックの船着場が見えた。
「様子がおかしいな」
船長が、無人の船着場を見て呟いた。
「村から火が上がってます！」
と、フィーネが叫んだ。確かに、村の中心から煙が立ち昇っている！
「さぁ、着いたぜ！お……俺は帰るからな！」
と、私達を港に下ろした瞬間船長は大急ぎで出航した。
「待てよ！」
私がそう叫んだ時には船は陸から大分遠ざかっていた。
「ピカッ！」
一瞬閃光が私の目の前をよぎった！
「ドーン！」
村の中から放たれた閃光は、船長の船に直撃して炎に包まれた！
「魔物だ！」

私は、沈み行く船を見てそう叫んだ。
「おじさーん！……村は！？」
と叫び、またもフィーネが村の中心へと駆け出して行った！
「馬鹿！待つんだ！」
私は、フィーネを見失わないように全力で追いかけていった。そして、私達は村の中心へと辿り着いた。

「隠れろ！」
私の声で、フィーネと私は物陰に潜んだ。何故なら、村の中心に強大な魔の存在を感じたからだ。リバレスもこの瞬間元の姿に戻る！
「クックックッ……後はお前達二人だけだなぁ！どうやって殺すか……？皮剥ぎ、串刺し、八つ裂き……！」
村は既に破壊の限りを尽くされていた。その村の中心の瓦礫の上に、魔は立っていた。全身が暗黒に染まっているが、私達天使のような姿だ。漆黒の体に漆黒の翼……今まで見た魔とは違い、天使や人の姿に近かった。
「どうか……どうか……！私はどうなっても構いませんから、この子だけは！」
見ると、大人の女が大事そうに子供を守るように抱えている。そして、魔に向かってひれ伏していた。
「さて……どうしようかなぁ……？」
魔が腕組みをして、人間を見下していた。その時！
「待ちなさい！」
と、横にいた筈のフィーネが魔に向かって疾走していた！
「あの……馬鹿！どうして、先を考えずに行動するんだ！？」
私が、そう叫んだ時にはフィーネは魔に接近していた！
「邪魔するな、娘！お前も後で殺してやるからよぉ！」
と、魔は掌をフィーネにかざした！その瞬間、フィーネは遠くに弾け飛んだ！
「フィーネ！……ルナ！？行かないの！？」
リバレスは飛んで行こうとする！
「待て、リバレス！さっきのは『衝撃』の魔術……あの魔は強大だ。私には解る。もう少し待つんだ！」
私は理解していた。あの魔の力は私よりも強大だという事を……堕天する前の私の力を以ってしても勝てるか解らない！
私は正直動けなかった。死ぬのが怖い……そう思っていたのかもしれない。
私は今、リバレスに待つように言ったが待ってどうなる！？
「邪魔が入ったが……お前の言う通りにしてやろう」
と、魔は人間の女に向かってニヤリと不気味な笑みを浮かべた。
「それでは……子供は助けてくれるんですね！」
「ああ……子供から殺してやるよ！」
その瞬間、魔の掌から発せられた『冷凍』の魔術によって子供が凍りつき……そして砕け散った。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！貴様よくも！殺してやる！」
女は剣を取り、魔に突進していった！
「いいねぇ！その怒りに狂った顔が！そんな奴を殺すのがオレの楽しみなんだよ！」
魔は再び掌を女に向けた
「ギャァァァァァァ……！」
女は燃え尽きた。灰すら残っていない。とてつもない『魔力』だ……
「殺すっていうのは、強い者だけが行える愉しみなんだぜ！」
と、惨殺現場に魔は唾を吐いた。

「うぅ……何て事を……どうして魔物はそんなにも残酷に人を殺せるの！？私達が何をしたのよ！」

その時、弾き飛ばされたフィーネが泣きながらそう叫んだ。
「さて……待たせたなぁ……！次はお前の番だ、娘！」
魔の掌に力が集約される！
「中級神術『天導雷』！」
その瞬間、私は咄嗟に魔に神術の雷を放っていた。
「バリバリバリッ！」
天を裂く雷撃が魔に直撃する！
「グッ！誰だ！」
その言葉の終わるや否や、私とリバレスは魔の眼前に踊り出ていた！しかし、足が竦む……！
「クズが……！それ以上の愚行は私が見過ごす訳にはいかない！」
フィーネに危機が迫っている以上、私一人逃げる訳にはいかない！私は懸命に声を張り上げた。
「フッ……やはり来たか。待っていたぞ、堕天使ルナリートよ！」
魔は私の登場を予め予見していたかのように、不気味な笑みを浮かべた。
「何故、私を知っている！？」
私は、得体の知れない相手に叫んだ。
「貴様の存在は、獄界では有名なんだ。それより……何故、天使のお前が人間の味方をする！？元々、この愚鈍な人間共が暮らすこの世界は、貴様ら天界の神が我々に断り無く中界に作ったものだろうが！？」
魔は歴史の事実を私に叫んだ。
「……確かにそうだ……しかし、人間達は……天界に誕生する価値の無い魂から生まれるという点以外では、殆ど我々の干渉を受けずに単独で暮らしている！人間は天使とも魔とも違う、意思を持った生命だ！」
私は、魔を睨み付けその言葉に反発した。
「ククククッ……本当にそう思っているのか……！？どうやら、一般の天使には本当の『人間界』の存在意義を教えられていないらしい。歪んだ歴史のみが貴様らには伝えられているらしいな！この世界は決して『神の戯れ』などで創られたのではない！完全な計算の元で創り出された、天界の副産物ということだ！」
魔は理解出来ない内容を語った。
「……どういう事だ？」
私は、事実を知りたかった。人間界は、数百万年前に『神の戯れ』で創りだされたのではないのか……？
「貴様が知る必要の無いことだ。オレが此処にいるのは、堕天使ルナリートを消す為……オレは獄界で指揮官クラスの力を持つ。オレは獄界から派遣されたのさ……！そしてこの村で虐殺を繰り返せば、必ず貴様が現れると思って待っていた！死ぬがいい！」
その言葉の直後、魔に先程よりも遥かに強大なエネルギーが満ち溢れてきた！
「（まずい……！リバレス！この力では私に勝ち目はない！）」
「（逃げましょー！フィーネも、逃げるわよー！）」
私達は、奴の隙をついて逃げることにした。足が震える！恐ろしい……！
「冥土の土産にいい事を教えてやろう。魔は、生命全ての生命力を数値化して見ることが出来る。例えば、其処の人間の娘……お前は僅か『１０』だ。そして、天翼獣……貴様は『３０００』。ルナリート、貴様でさえ『５０００』しか無い。ところが、獄界指揮官クラスの生命力は『３０００』以上。オレに至っては、『６５０００』だぁぁぁ！」
生命力の数値化！？魔はそんな事が出来るのか？その数字が事実かどうかに関係なく今は逃げなければ！力の差は感覚で解る！
そう思った矢先、魔の指から三本の漆黒の矢が放たれた！矢は私達全員を狙っている！
「クッ……！」
リバレスは上手く避けたが……私にはフィーネをかばって二本の矢が突き刺さった！
魔術で作り出されたその矢の威力は絶大で、私の肩と太腿を貫通していた！痛みに意識が朦朧とする。
「ルナ！」
「ルナさん！」

私を心配する二人の叫びが谺した！
「大丈夫だ……それより！（私が隙を作るから逃げるんだ！）」
私は、二人に逃げるようにテレパシーを送る！
「高等神術『滅炎』！」
痛みを堪え精神力を振り絞って、魔に向けて私が使える最大の神術を放った！半径５ｍが超熱空間に包まれる！
「（今だ！逃げるぞ！）」
私はリバレスとフィーネに強いテレパシーを送った！
私達は同時に、村の外れの方に逃げていった！酷く足が重いのにも関わらず、全力で走った！しかし……！

「恐れをなして戦闘回避かぁ！ハハハッ！天使のくせに無様だな！このオレから逃げられる訳がないだろう！？」
逃げた先に、すでに魔が立っていた！私の『滅炎』が直撃したにも関わらず、魔には火傷一つついていない。
「ま……待って下さい！どうか、この方は助けて下さい！悪いのは私なんです！人間を助けて欲しいって頼んだから！
殺すんなら私だけにして下さい！……お願いします！」
フィーネは、その場に跪き魔に懇願した。屈辱だろう。私が不甲斐ないばかりに！
……私……いや、『俺』にもっと力があれば！
「却下だ。だが、そんなに死にたいならお前から燃やし尽くしてやろう！これが本物の炎だ！」
魔にかつてない程の力が集まる。これを受ければフィーネは即……死……！
フィーネは……俺を助けて……人間を愛して……世界を愛して……喜んで……悲しんで……幸せを求めて……
それが、焼き尽くされる。嫌だ！俺はフィーネを失いたくない！
「死ね！」
魔から炎が放たれた。が、その動きはとても緩慢だった。この感覚は……神官と戦った時と同じ……
俺は、炎の前に立ちふさがり、俺達３人全てを『保護』の神術で守った。この力は……さっきまでの数十倍……！
炎が炸裂する。しかし、俺の保護の膜には傷一つつかなかった！それに、傷の痛みも消えていた！完治している！
「待てよ、貴様の相手は俺だろう？」
俺は、その瞬間オリハルコンの剣を抜き魔を弾き飛ばしていた！
「グアッ！速い……！それに、さっきの神術の強度は何だ……！……貴様は……！」
さっきの『滅炎』では傷一つ無かった魔に剣が致命傷を与えていた。
「解らないのか……！？貴様のような愚者は俺に触れる事すら出来ないんだよ」
俺は自分の変化に気付いていた。天界で神官と戦った時程ではないが、力が満ち溢れていることに！
「まさか……まさか……貴様がエファロード！？」
俺の様子を見た魔が急に焦り始めた。
「エファロード？何の事だ！？」
エファロード……？堕天の直前に『神』が俺に言った言葉……
「第一段階……『銀の髪』……！まさか……そんな筈は無い！これでも食らえぇぇぇ！地獄の業火だぁぁぁ！」
魔は我に返り、恐らく最高の魔術であろう『地獄の業火』を放った。
「無駄だ」
俺は高等神術である『絶対零度』を使った。その瞬間……！
魔もろとも、見渡す限り一面が凍りついた！魔のいる方向の海まで凍りついている！
俺は、氷の彫像と化した魔にゆっくりと近付いた。
「殺せ」

魔は先程の様子とは異なり、観念した様子だった。
「貴様に一つ質問する。エファロードとは何だ？」
俺は、剣を彫像に構えて質問した。
「今の貴様の生命力は『２００００００』……その力が、第一段階である証拠だ……今の貴様の目が真紅に染まれば、貴様の力は更に十倍になる。貴様の情報は今、獄王様に意識として転送した。さぁ、殺すがいい！」
真紅の目？神官と対峙した時には確かにそうだったが……段階とは何だ！？
「貴様の知る事を全て教えるんだ！」
俺は理解出来ない言葉に戸惑った。
「クククッ……貴様がエファロードなら、この世界は獄王様の物だ！クハハハハハッ！」
その瞬間……！
「ドォォォーーン！」
という閃光と爆音と共に、魔は砕け散った！自爆したのだろう。

そして……無限とも思える静寂の後で私は我に返った。
「ルナ……、大丈夫なのー？」
リバレスが、不安で曇った顔色で私の表情を伺う。
「あ……あぁ。今の私の力は一体……？天界での……あの時とよく似ていたが」
私は、前髪に手を伸ばし確認してみた。いつもの赤い髪に戻っている。
「ルナの髪が銀色に光ってたのよー！前みたいに目は赤くなかったけどー」
エファロード……第一段階……あの魔が言った言葉……理解が出来ない。
「それより……フィーネ！大丈夫か！？」
私は呆然と立ち竦むフィーネに問いかけた。
返事は無かった。私達の事を知って驚いているのか？
「……もう知られてしまったからには仕方ないな。……私は」
と言いかけた時だった。
「……あなたが……あなたが誰かなんてどうでもいいんです！……どうして……どうして争いは無くならないの……！？
何故殺しあわなくちゃいけないの！？……解らない！私はどうすればいいんですか……！？……どうすれば、みんな幸せになれるんですか……！？教えて下さいよぉ……！」
そう泣き叫びながら、フィーネは私の胸にすがりついた。彼女は争いを無くして皆を幸せにしたい。その一心なのだ。
「……君はよくやってるよ。今は……争いが無くならないのは仕方ないんだ。でも、それを少しでも無くす為に私達は此処にいるんだろ？」
フィーネは頑張ってる。心からそう思う。たった一人の人間が……私は、優しく彼女の頭を撫でた。
「……うぅぅぅ……はい」
フィーネは暫く泣き続けた……今まで辛かった事が我慢出来ずに……堰を切ったように出てきたんだろう。

冷たい風が吹いている。日は暮れて、月と星が瞬き始めた。その光が、無人の廃墟と化したこの村を照らす……
「落ち着いたか？」
私は、月明かりに立つフィーネに穏やかな口調で問いかけた。
「ご迷惑をおかけしました」
フィーネは、さっき取り乱した事と勝手な行動をしたことを反省して謝った。
「全く……世話が焼けるわねー……もうちょっと考えて行動してほしーわ！」
子供のようなリバレスにフィーネが世話を焼かれるのか……？と思うと、少しおかしかった。
「わかりました。反省しています。本当にごめんなさい！」
と、再びフィーネは深く頭を下げた。
「もういいよ。ところでだ……君は私達の正体を知ってしまっただろう？」

私は、怒らずに優しく訊いてみた。フィーネに正体を知られても支障はないだろう。私は彼女を信用している。

「あのぉ……話が難しくて何の事かサッパリわかりませんでした。ただ、ルナさんがルナリートさんで『ダテンシ』だって事しか……

『ダテンシ』という所から旅をして来たんですか？」

と、フィーネは逆に拍子抜けな質問を浴びせてきた。

「ははっ……そうか、難しすぎたか！」

確かにあの会話のやりとりで何も知らない人間が理解出来る筈も無い。しかし、フィーネの勘違いもおもしろかった。

「ルナがまた笑ったー！」

と、リバレスまで笑い出した。

「フィーネ、今から説明するよ」

と、私が説明している間、三人には笑いが絶えなかった。さっきまでの重々しい空気は何処に行ったのだろう？

私が天界から堕ちた天使だという事。天界、獄界、人間界の三界があるという事。リバレスと私の関係など……そして何故堕天したのか……

余り自分の事を語りたくない私だが、不思議とフィーネには話してしまう。しかし、人間界が、魔の脅威に晒される理由や、三界の因縁などは話せなかった。話せば、フィーネは天界……私達を憎むかもしれないと思ったからだ。

一通り話を終えると……

「驚きました！あなたが天使様だなんて！」

とフィーネは私を、恍惚とした様子で見た。

「止めろよ。私はそんなに尊敬される存在じゃない。天使達だってそうだ」

と、羨望の眼差しを向けるフィーネを一喝した。

「でも、天使様って本当にいたんですね！神様も……！それなら、この争いの世界もすぐに平和になりますよね！」

と嬉しそうなフィーネの様子が心痛かった。神が人間を中界に創り……魔の脅威という苦しみの中で生きさせているのだから……

「そうだな。平和な世界はきっと訪れる」

と、私は柄にもなく気休めの言葉を投げかけてしまった。罪の意識と、彼女への思いやりの所為だろうか？

「頑張りましょうね！ルナさん！」

と、フィーネは私の手を取った。彼女は純粋に私を信じ、平和な世界を望んでいる。

私は今まで以上に彼女の力になろうと決心した。

この日は、廃墟に残る建物の中で暖を取り眠る事にした。

フィーネの料理を食べ、三人で会話を楽しんだ。リバレスも今はフィーネと打ち解けるようになっていた。

美味しい料理を食べ、思い出話やこれからの話……他愛のない事で盛り上がる。争いの無いこんな日々が続く事を私は切に願う……

リバレスとフィーネが先に眠り、今日も私は空を見ていた。

エファロード……

その言葉が頭から離れなかったが、いつの間にか眠りに落ちていた。

第八節　堕天使の弱点

「チュンチュン」

壊れた窓からの光と、小鳥の囀りで今日は目を覚ました。二人はまだ眠っている。私は、天界

から持参した懐中時計を取り出した。
本体は純銀で、文字盤にはダイヤモンドがあしらわれている。しかし、この時計は私が生まれる前からある物で、細かい傷や年月を経た変色が見られる。何より、この時計には強い思い入れがあるのだ。
「ハルメスさん」
　私は、その時計を見て再び私に生きる道を教えてくれた天使の事を思い出した。この時計は、１０００年前に彼から貰った宝物なのだ。
少し、感慨に耽っていると時刻は、午前７時になっていた。天界で、毎日そんな時間に起きていたので不思議と目が覚めてしまう。
「リバレス、フィーネ起きろよ」
　私は二人を毛布の上から優しく揺さぶった。
「……はーい」
　眠そうな声で、二人がほぼ同時に返事をしたのには少し驚いた。
私は、二人が朝の支度をする間一人でこの廃墟の村を散歩する事にした。
「惨いな」
　私は、破壊された家屋の中や、草むらに横たわる死体を何体か見つけた……
私は、その口を閉ざした村人達がフィーネの目に触れる事を恐れて、一人で埋葬する事にした。
それからほんの十分位で、神術を使い地面に大穴を開けて村人を弔ったのだ。
「魔は……人間を殺し尽くすつもりだろうな」
　私は、今まで出会った魔を思い出してそう呟いた。しかし、私はフィーネの力になると決めたのだ。私は思わず剣の柄を握り締めた。
この先、どんな事が待ち受けているか解らないが、絶対にフィーネとリバレスは守り抜こう。私は宝である懐中時計に誓った。
「そろそろ戻ろう」
　私は、散歩を終えてリバレス達の待つ瓦礫の家屋に帰っていった。

「お帰りなさい！」
　パッと花が咲いたような笑顔のフィーネに私は迎えられた。
「ただいま」
　私も、軽く微笑んだ。
「（ルナ、最近表情が柔らかくなったわねー？どーしたのー？）」
　とリバレスのからかう声が頭に響いた。
「（うるさいな！私が笑うのがそんなに気に入らないのか！？）」
　と、私もテレパシーで返してテーブルの上に座っていたリバレスの頭を指で小突いた。
「痛いー！フィーネー、ルナがいじめるのー！」
　と、リバレスは大袈裟に叫んだ！
「あらあら、ルナさん。リバレスさんをいじめたらダメですよ」
　と、フィーネが困った顔をしたので……
「リバレス！そろそろ冗談はやめよう」
　と、私はリバレスの目を凝視した。
「はーい！もうちょっと遊びたかったけどねー」
　と、残念そうに私の肩の上に飛んできた。
「冗談だったんですか！？てっきり喧嘩をしたのかと！」
　と、フィーネは本当に驚いた顔をした。
「見れば解るだろ……？フィーネ、君は騙されやすいから気をつけるんだぞ」
　人を疑う事を知らないフィーネは、純粋だが少し危うい所もあるので私は注意した。
「よく言われます。でも、私は人を騙したりするのが大嫌いです。だから、私は人に嘘をついたり出来ないんですよ。だから、誰かの嘘も見抜けないんですよね」
　と、ガックリと肩を落とした。
「いや、それがフィーネのいい所なんだ。それで、私達も救われてる」
　もし、フィーネがフィーネじゃなければ恐らく私は人間に力を貸そうとは思わなかったに違い

ない。
何より私は、フィーネとリバレスと過ごす今の日常が天界の頃より好きだ……
「そんな事ないですよ！助けられてばっかりなのは私の方です！」
と、顔を真っ赤にして首を振った。
「もー……早くご飯にして、出発しましょー！」
リバレスが、私達の様子を見て『キリが無いわねー』と思ったのか、横槍を入れた。
「は、はい！そうですね！」

そうして、暫くするとフィーネが作った料理が出てきた。バターシュガートーストとスープだった。
「このトーストは……辛いものなのか？」
私は、バターシュガートーストとやらを口にして思わずそう言ってしまった。名前のイメージとはかけ離れて辛い。
「え！？普通は甘いですよ！」
と、フィーネはびっくりして私のトーストの一つを取って食べた。
「あ！ごめんなさい！砂糖と塩を間違えました。やっちゃいましたね！」
と、フィーネは恥ずかしそうな顔をした。
「フィーネは見た目と違ってドジねー」
其処に、リバレスの一言が入った。人の事を言えるのか？そして、フィーネは朝食を慌てて作り直そうとする。
「フィーネ、このままでいいよ。十分に美味しいから」
と言って、私は辛いパンと甘いスープを一気に食べたのだった。
「ルナさん……、優しいんですね」
と、何故か目に涙を溜めたフィーネがそう言った。
「どうしたんだ！？悲しいのか？」
私は驚いて思わず訊いてしまった。
「……いいえ、嬉しいんです。私……ルナさんだけは、信じていけそうです」
頬を朱に染めて、本当に嬉しそうにフィーネは食器を片付け始めた。
「（私が何かしたのか？）」
私は思わずリバレスに訊いてしまう。
「（ルナも、相変わらず鈍いわねー女心が解らないんだからー）」
と、リバレスはフィーネの方に飛んで行ってしまった。
「人の心はどれだけ勉強しても、解らない事が多いな」
と、私は一人で呟いていた。

～出航～
朝食も終わり、私達は村を出発する事にした。
「次は何処へ向かうんだ？」
私はいつも通り、地図を広げるフィーネに問い掛けた。
「それが」
何故か、フィーネの表情は曇っている。
「どーしたのー？」
その様子を察してか、リバレスが気遣うように訊いた。
「はい……、この村の人達はみんないなくなってしまったので、他の土地へ行く手段が無いんですよ」
なる程、地図を見れば解る。このルトネックの村は孤島で、交通手段が船しか無いのだ。となると……
「それなら、レニーの街からの使者を待つか『リウォルの街』へ進むしか無いんだろ？」
私は地図を見てそう訊いた。此処から一番近いのは、東の海に浮かぶ不気味な火山跡で『死者の口』と呼ばれている島らしいが……
「そうですね。でも……きっと、レニーからは誰も来ないですよ。私達を送ってくれたおじさん

は……魔物にやられましたから」
となると、私達の道は南西およそ５００ｋｍにある『リウォルの街』しかないな。
「それなら、リウォルの街へ行こう。船着場には船が数隻あったしな。一隻ぐらい拝借しても構わないだろう」
私がそう言うと、フィーネは微笑んだ。私が率先して先へ進もうとするのが嬉しいのか、進む道が決まった事が嬉しいのかは解らないが。
「行き先は『リウォルの街』で決定だけどー、『死者の口』ってなーにー？」
と、リバレスは唐突にフィーネに尋ねた。
「其処は……その場所から、魔物が現れてくるって噂なんです。だから、誰も近付けないんですよ」
フィーネは身震いしながら言った。その場所は余程恐ろしい噂でもあったんだろう。
「いずれは魔物を倒しに、其処へ行かなければならないかもしれないな」
私は剣を握り締めて、フィーネに微笑んだ。
「はい！私はルナさんとリバレスさんが行くなら何処へでもお供しますよ！」
身の危険も恐れない。相変わらず、強い女性だと私は感心していた。そして、私達は瓦礫の中を船着場へと歩いていった。

船着場には船が三隻見えた。どれも似たような作りで、全て木造の帆船だ。全長は１０ｍ位の小型船だった。
「さぁ、行きましょう！」
フィーネは真っ先に船に乗り込む。天気は快晴、出航日和だ。吹き寄せる風と潮騒が心地良い。
「待てよ、あんまり急ぐと危ないぞ！」
と、走るフィーネを私は心配して注意した。
「大丈夫ですよー！」
彼女は振り向きながら笑顔で駆けていった。
「まだまだ、子供ねー」
と、横でリバレスが腕組をしながらウンウンと頷いている。
「お前も子供だろ？一緒に飛び回ってこいよ」
私はリバレスの頭をポンポンと叩く。
「ムカッ！でも、たまには飛び回るのもいいかもねー！」
子供扱いに腹を立てながらも、リバレスはフィーネと共に遊んでいた。平和な光景だ。私はその間に、錨を引き上げて帆を張った。この二つは人間界の船を扱う人々を見て覚えた事だ。陸からどんどん離れていく。
「さて、フィーネ。操縦は頼んだぞ」
私は走り疲れているフィーネの肩を叩いた。
「えっ！？ルナさんが操縦してくれるんじゃないんですか！？」
フィーネは呆気に取られた表情を見せる。
「天使だった私が、船を運転出来る筈がないだろ？」
「えーっ！？それじゃあ、リバレスさんは！」
フィーネがリバレスの方を向いて叫ぶ。
「こんなに小っちゃいわたしに船の操縦なんて出来る訳無いでしょー！」
「でも……変化したら……？」
フィーネが尚も食い下がる。
「変化は疲れるのよー！それに変化した所で、操縦技術は無いから無駄なのよー！フィーネ、冗談は止めて早く運転してよねー」
リバレス、珍しく真顔でフィーネにそう言った。
「えぇーっ……！そんなぁ！単なる村娘が船の操縦なんか出来る訳ないじゃないですかぁ！」
と、フィーネは必死の形相で叫んだ。
「どーするのよー！？陸はもうあんなに遠いわよー！」
あっという間に陸は小さくなっていた。
「漂流決定だな」

私は、甲板の手すりにもたれながらそう言った。
「何でそんなに冷静なのよー！？」
リバレスが、私の頭の周りを飛び回る。
「一応南西には向かっているようだし、食糧も一週間分くらいはある。まぁ、何とかなるだろ」
私はそう答えた。羅針盤で確認すると船は南西に向かっている。このまま行くと二日もあれば着く筈だ。
「そうですね。ルナさんがいれば大丈夫な気がします」
と、フィーネはさっきまでの慌てぶりを失い微笑んだ。
「二人とも呑気過ぎー！わたしはＥＳＧのお陰で大丈夫だけど、ルナは弱体化してるのよー！フィーネは普通の人間だしー……知らないわよー！どうなっても」
リバレスのその声も風の音でゆっくりと消えていった。船は静かに進んでいくのだった。

～漂流一日目～
早くも、漂流初日の夕方が訪れた。周りは全て海……だが、その海が全て夕焼けを呈している。その美しさは圧巻だった。
「それじゃあ、そろそろ夕食を作りますよ！」
フィーネは、相も変わらず笑顔で私に話しかけた。
「いや、今日はいいよ。私は、君やリバレスが眠ってから一人でゆっくり食べるよ。食糧は自分用に持ってるしな」
と、私はフィーネにそう言った。勿論、この言葉には意味がある。
「え！？でも、お腹が空いたでしょう？遠慮しないで下さいよ！」
フィーネは不思議そうに私に問い掛ける。今まで、私はそんな事を言った事が無いので当然だが……
「この船に乗ってる間はいいよ。私は、天使だから元々余り空腹になったりしないしな。君が持ってる食糧は君が一人で食べるんだ」
嘘だった。人間界に堕ちてからは、人間と同じように空腹になる。
「でも！」
尚も、フィーネは私を心配して食い下がる。
「いいから。細かい事は詮索しない約束だろ。私は夜に一人で食べるから何も心配するな」
そう言って私は、海の方に視線を移した。我ながら冷たい態度だったと思う。
「……せっかくルナさんと仲良くなれたと思ってたのに……わかりました。それじゃあ、私一人で食事を取らせて貰いますね」
フィーネは悲しそうに俯きながら、船室へと帰っていった。
「すまない」
私は彼女に聞こえないように呟いた。其処に、その様子を見ていたリバレスが現れた。
「どーして、あんな嘘をついたのよー！？ルナが持ってる食糧なんて一日分ぐらいしかないのにー！」
リバレスは怒って、私に体当たりしてきた。
「痛い痛い……！私とフィーネでは頑丈さが違うだろ！？この船には、二人で食べたら一週間と持たない食糧しかないんだ。漂流は正直何日になるか解らないし！それに、ああでも言わないとフィーネは気にして食事を取らないだろ！？」
私は怒るリバレスに正直に訳を話した。
「もー！相変わらず甘いんだから！それとも、相手がフィーネだからー？」
と、リバレスは半分怒りながらもからかってきた。
「違うって！私は堕天使、フィーネは人間なんだから、優しくして当然だろ？」
私は少し焦ってそんな返事をしてしまう。
「へーえ……ちょっと前までは、『下等な人間と暮らすのは苦痛だ』って言ってたくせにー！」
更にリバレスは面白そうに私をからかう。
「こら！『蝶々』、いい加減にしろよ！」
其処で、私までムキになってリバレスが怒る呼び方をした。
「ムカムカッ！わたしは『蝶』じゃなーい！」

リバレスの姿は妖精や蝶そっくりだ。だから、蝶と呼ぶと怒る。
この夜、フィーネは寂しそうだったが無事に過ぎていった。そして、皆が寝静まった頃に私はベッドを抜け出した。
空には星が出ているが、月は雲に隠れていた。段々、雲が増えてきているのが解る。明日は天気が悪いかもしれない。
そして、私は甲板の椅子に座り世界地図を開いた。其処には、フィーネがミルドからルトネックまでの旅路を赤い線でマークしてあった。
「明日で一週間か」
私はミルドの丘から始まった旅を思い返していた。とても、充実した日々だった。そして、フィーネの存在が私にとって大きくなってきたのも自覚している。今までの、天界の生活と違った日々……そして、フィーネがいる事。今の生活は天界の１０００年を上回る意味があると断言できる。
まだまだ、私の２００年は長い。もし、フィーネがこのまま傍にいてくれたとしても５０年位だろう。そう思うと、人間界の生活がとても長い……
悠久の時にも思える。この２００年は、『刑罰』というよりも掛け替えの無い『思い出と経験』だと思う。そして……２００年後には、きっと私は『贖罪の塔』を登って天界に戻るだろう。この地図にも不思議な事に『贖罪の塔』と記してある。人間達がその名を知っているのは意外だが、堕天の期間が終われば数千階の高さにもなるその塔を登らねばならない。
私は、そんな事を考えながら乾パンを少しかじった。やはり、少し空腹になってきたが我慢して眠る事にした。

〜漂流二日目〜
「ルナさん！大変です！」
その叫びと共に、私とリバレスは叩き起こされた！
「どうしたんだ！？」
私はフィーネと共に甲板に出た。すると、もの凄い雨と風に襲われた！
「嵐か！」
暴風雨で目も開けられない！
「どーしたのー？」
其処に寝ぼけ眼のリバレスが現れた。
「リバレスさん！嵐です！来ちゃダメですよ！」
と、体重の軽いリバレスをフィーネは心配した。
「帆を畳まなければ！」
私は、強風でしなっているマストを確認した。今にも折れそうだ！それに、帆で風を受け続けているとこの船が転覆しかねない！
「私も行きます！」
余りにも強い口調でフィーネがそう言ったので、私は思わず頷いた。
暴風雨の中、私達二人は三本あるマストへと姿勢を低くして近付く……姿勢を高くすれば飛ばされそうになるからだ！
私はメインのマストに近付き、手早く帆を畳んだ。その作業にはもの凄い力がいる事が解った。人間一人の力では無理だ！
「フィーネ！大丈夫か！」
私は叫んだが、声は嵐に掻き消される！目を凝らしてみた。すると……
「フィーネ！」
彼女は、何と今にも折れそうなマストの帆に繋がる綱を剣で切っていた。正しい判断だ。そのマストは早く帆を畳むか切り離すかしないと、一分も持たない状態に見える。そして、暴風の中一人で帆を畳む力は無い。その様子を見て感心した私は、もう一本のマストの帆も手早く畳んだ。そしてもう一度振り返る！
「フィーネ、何処だ！？」
振り返った先にフィーネの姿は無かった！開かない目を見開き四方を見渡す！
「ルナさーん！」

風の唸りの中から、微かにフィーネの声が聞こえた！見ると……マストの綱に絡み取られて宙を舞っている彼女を見つけた！
「今行くからな！」
私は、マストの根元まで行ったがフィーネは上空１０ｍくらいで飛ばされそうになっている！早く助けなければ！
「翼があれば……！」
私は、そんな空しい希望の言葉を叫びながら必死の思いでマストによじ登っていく！そして、フィーネに繋がる綱を捕らえた！
「フィーネ！絶対に離すなよ！」
全力で綱を引っ張る！腕の筋肉が軋むがそんな事は関係ない！あと３ｍ位だ！
「ルナさん！」
その叫びを聞いた瞬間、私達を繋ぐ綱は無情にも切れてしまった！
「フィーネー！」
彼女の姿が荒れ狂う海へと投げ出される！そう思った瞬間だった。
「ヒュンッ……！」
私の目の前を光り輝く物体が通り過ぎて、フィーネを拾い上げた！
「リバレスか！？」
私は炎のように燃える鳥に問い掛けた。
「ふぅー、やっぱりわたしがいないとダメねー『不死鳥』変化よー」
元の姿に戻ったリバレスが私に笑いかけた。不死鳥は、天界に住み炎を纏う鳥でとても寿命が長い。
「リバレス……、ありがとう！フィーネ、大丈夫か！？」
私はリバレスに心から礼を言った後、フィーネを抱き起こした。
「ルナさん……、帆は畳めましたか？」
自分の体よりも、船の事を心配するフィーネ……、私は思わず彼女を抱きしめた。
「バカ！無茶をするなって言ってるだろ！？私にはフィーネが大事なんだよ！」
私の目から一滴の涙が落ちた……
「ごめんなさい……私も……ルナさんが大切ですよ」
さっき死ぬ思いをしたのに、フィーネは優しく微笑んだ。何故、こんなにも健気なんだろう。私は、またもフィーネに惹かれていくのを感じた。
「（全く……妬けるわねー）さー、帆も畳んだし嵐が止むまで船室で大人しくしていましょー！」
リバレスの掛け声の後、私達は三人船室で大人しくしていた。この日は嵐が収まる気配が無かった。

フィーネは大事な人なんだ。さっき思わず叫んだ言葉に私は少し照れていた。
そして、フィーネも私を大切だと言ってくれた。今日は、お互いが少し気まずくて余り話をしないまま眠りについた。

～漂流三日目～
今日は船窓から差し込む、Ｓ．Ｕ．Ｎの眩しい光で目を覚ました。この世界では、Ｓ．Ｕ．Ｎを『太陽』と呼ぶらしいが。
「いい天気だな。昨日の嵐が嘘みたいだ」
珍しく、フィーネよりも早起きしたリバレスに話しかけた。
「そーねー！でも、昨日の嵐で船が何処にいるのか解らないけどー」
明るい表情から、ガクッと一気に肩を落とした。相変わらずのオーバーリアクションだ。
「ははっ、でも今は南西に向かってるから大丈夫だろ」
私は笑いながらそう答えた。私も、随分と楽観的になったものだ。
「ルナがまた笑ったー！最近笑う事が多いわよー！昔は一年に一回も笑わなかったのにー！」
と、リバレスまで笑い出した。今日は快晴で、雲一つない。風も穏やかだ。これなら、もうすぐリウォルに着きそうな気がしていた。

そして、そんな気がしたので、私は残りの食糧を全て食べた。全てといっても、乾パン２枚だが……

リバレスはＥＳＧを摂る。私は、ＥＳＧを摂りたくなったがその衝動を抑えた。私がＥＳＧを摂取する事は堕天の意味が無くなるからだ。

最悪の場合、天使である資格を剥脱されかねない。

昼前になってようやく、フィーネも目覚めた。昨日の事で余程疲れていたんだろう。

「おはよう、フィーネ」

私達は、眠そうに甲板に出てきたフィーネに同時に声をかけた。

「昨日はよっぽど疲れてたんだな」

私は、まだ眠り足りないといった様子の彼女に問い掛けた。

「いいえ……昨日は眠れなかったんです」

と、フィーネは予想外の返事をした。

「へーえ……身近にいる堕天使の事でも考えてたんじゃないのー？」

リバレスは、即座にフィーネに余計な質問をする。そんな筈が無いだろう？

「……ち……違いますよっ……！」

フィーネの顔が真っ赤になった。本当に嘘をつけないんだな、と思うと同時に私まで恥ずかしくなった。

「そ、その話題はやめにして……フィーネ、朝の支度でもしてきたらどうだ？」

少し焦り気味の口調で、フィーネにそう言った。

「は、はい！そうしますね！」

その瞬間、フィーネは背をむけて走っていく……途中でつまずいていた。

「二人とも照れ屋ねー」

と、リバレスが笑いながらメインマストの上まで飛んでいった。本当にお節介な天翼獣だ……

今日は平和に過ぎていく……そう思っていた。しかし……！

「（魔物よー！）」

リバレスが、私とフィーネに強いテレパシーを送った！

その直後、３体の魔が現れた！その姿は巨大なカラスに手足が生えたような姿だった！

「大した強さじゃないな」

私は、瞬時に魔の強さを読み取った。この魔は言葉も話せず、知能も低い……

そう思った瞬間、三匹の魔が急降下してきた！何とかオリハルコンの剣を抜く！

「くっ！」

私は、怪我は防げたが、不意をつかれて少しよろめいた！油断してはいけない！

「グァァァァッ！」

奇妙な叫びを上げながら、魔が三匹ともよろめいた私に猛攻撃をかける！

「初級神術『落雷』！」

リバレスが、魔の一匹に雷を落とした。電撃を受けた魔は消滅した。

「ルナさん！」

タイミングの悪い時にフィーネが現れた！

咄嗟に二匹の魔が標的をフィーネに変える！

「中級神術『天導氷』！」

私は、フィーネを避けて魔に氷の渦を放った！

「ギィィィィヤァァァァァァ……！」

一匹が凍りつき、マストに激突して粉々に砕けた！しかし！

「フィーネ！」

尚も生き残った一匹が、フィーネに向かって疾走する！

「ガキンッ！」

鈍い音が響いた！すると、緑の血を流しながら魔は天空へと逃げていった。

「どうなってるんだ？」

私は、フィーネを見ると折れた剣を構えているのが解った。近くに剣の破片がある。

「手がジンジンしますね……！」

フィーネは、勢いよく疾走する魔に剣を全力で振ったのだろう。流石の魔もあれだけ勢いがあ

れば、人間の攻撃が効くようだ。
「やるじゃないか！」
私は、魔に臆せず剣を振ったフィーネを褒めた。
「ありがとうございます！ルナさんが戦ってるのに、私だけ何も出来ないのは悔しいですから……！でも……魔物って、固いんですね。びっくりしました。あんな魔物を倒せるルナさんはやっぱり凄いですよ！」
フィーネは嬉しそうに微笑んだ。
「買いかぶり過ぎだよ。私だって、強い魔物には勝てないんだ。寧ろ、君の勇気の方がすごいよ」
それは私の本心だった。フィーネは照れながら否定していたが、彼女には私に無い強さや良さがいっぱいあると確信している。
その後は、平和に夜まで時間が流れていった。

夜……漂流三日目の夜が訪れた。
「まだ陸に着きませんね」
フィーネは甲板の椅子に座りながらポツリとそう言った。
「そうだな。（それより……）」
私は、自分がかなりの空腹に襲われているのを感じていた。あと数日は我慢出来ると思うが……そんな事を考えて、私が黙っていた所為だろう。フィーネは唐突な質問を浴びせてきた。
「ところで、天使様ってどんな事をして暮らしているんですか？」
そういえば、以前には天界での暮らしぶりなどは話してなかったな。
「君が思ってる程、いい生活はしてないよ。短い生命を懸命に生きてるフィーネみたいな人間の方が、ずっと生きてる実感を持って幸せでいられると思うな。私達は、毎日同じ事……勉強や儀式の繰り返しで生ける屍のようだったともいえる」
私は、天界での日々を思い出してそう答えた。自然と、表情が硬くなる。
「そうですか……？私にはルナさんがそんな世界で生きていたとは思えませんよ。ルナさんは、私に元気をくれるし……そう、ルナさんが傍にいると、私は何でも出来そうな気がするんです！だから、私はいつもあんなに無茶な行動をしてしまうのかもしれませんね……！そんなに、素晴らしい人……いえ天使様が生ける屍だなんて……！」
そう言って、フィーネはまたも顔を赤くしてしまった。言い過ぎたと思ったんだろう。
「はははっ……！フィーネは変わってるよ。少なくとも、天界に君のような……前向きで懸命な考えや行動力を持つ者はいなかった。凄く良い意味で、フィーネの存在は私の心の在り方を変えてくれたんだ。それはとても感謝してる。ありがとう！」
その言葉でフィーネは更に照れていた。更に、
「おっと、わたしを忘れないでねー！わたしも、人間は嫌いだったけど、フィーネは例外よー！だって、いい子だもんねー！」
と、リバレスが私を見た。何だ、その物言いたげな目は？
「あぁ、そうだな。フィーネはいい子だ」
私はそう同調したが、自分で目が泳いでいるのを感じた。リバレスは余計な事を言い過ぎだ！
「そんな……私の方が感謝しても全然足りないのに……ありがとうございます！ルナさん！リバレスさん！」
目に涙を溜めながらフィーネは懸命に私達に礼を尽くした。
「それにしても、フィーネ。そんな他人行儀にならずに、私達は呼び捨てで構わないんだぞ。それに敬語も要らない」
私は、正直フィーネの一歩引いた喋り方を普通にして欲しいと願っていた。
「い……いや、それは無理ですよ！恐れ多いです！でも、もしも……この戦いが終わったら……そうしてもいいですか？」
と、逆に申し訳無さそうにフィーネはそっと私の目を見つめながら答えた。
「それじゃー、ルナとフィーネの為にも早く戦いを終わらせないとねー！」
その時リバレスがまた、鋭い横槍を入れた。余計な事を！
「ああ。その為にも、もっと頑張らないとな！」

と、私も頬を朱に染めて微笑んだ。戦いの道は険しいが、フィーネの為なら頑張れると思った。

～漂流六日目～

漂流してから、今日で六日目だ……昨日と一昨日はただ海を彷徨っているだけで何事もなかった。

それより……眩暈がする。朝も昼も解らない。限界だ……空腹の果てがこれか……

「フィーネ……、リバレス……、私は限界のようだ」

私は船室のベッドで眠っていた。今朝から、体の調子が一気に崩れた。

「どうしたんですか！？ルナさん！」

その声も遠くに聞こえる。

「……実はルナ、殆ど何も食べてないのよねー」

言わなくていい事を……

「ルナさん！あなたは食糧を持っていると！」

私の手を握り締めてフィーネが私の体を揺さぶる。

「心配いらない。今から一時的に身体の機能を停止させる」

と、私が言った瞬間だった。

「ダメよー！『停止』の神術は、今の体でやると仮死状態みたいになるのよー！」

『停止』は、対象の『時』を止める神術……自分にかけると精神力が無くなるまで『停止』できる。無くなれば死の危険があるが……

「街についたら、リバレス……、停止を解除してくれ……堕天して人間と同じような生活をすると……不便だな」

堕天の辛さを噛み締めて……私が発した言葉は其処までだった。

「ルナさーん！ルナさーん！」

フィーネが私に泣きながらすがりつくのを感じたのが最後の感覚だった。

私は、薄れ行く意識の中で『停止』の神術を発動した。

第九節　安息の目覚めと戦慄

「……ナ……ルナ」

遠くの方で声が聞こえる。意識が混濁している。

誰だ……？

「ルナ……、さん」

停止していた時に光がうっすらと差し込む……

……眩しい……

「ルナさん！」

私は恐る恐る目を開いた。

「フィーネか」

私の目の前にフィーネの姿が見えた。随分やつれてるな……心配そうに……せっかくの可愛い顔が台無しだぞ……

「ルナさん！」

その瞬間、フィーネが私に抱き付いて来た。

「……痛いって……私は大丈夫だから」

私は、涙を浮かべるフィーネの頭を優しく撫でた。

「ルナさぁぁぁん……！」

フィーネは私の胸で泣き続けていた。私はそんなに心配をかけたのか……？

「ルナ！」

リバレスまで、心配そうに私の頭をポカポカと叩く。

「一体、今はいつで此処は何処なんだ？」

私は周りを見渡した。何処かの部屋のベッドで私は横たわっていた。

「ルナ！ルナは、あれから三日間死んだように眠ってたのよー！」
三日……か。それじゃあ、今日は漂流してから八日以上経っているんだな。
「……此処は、リウォルの街か？」
涙で目を真っ赤にしたフィーネに訊いてみる。
「……はい！ルナさんのお陰で、無事に着いたんですよぉ……！どうして、私なんかの為に無理をしたんですか！？幾ら、人間より丈夫だと言っても、今は弱ってるんじゃないんですかぁ……！」
尚も、私を強く抱きしめる。その光景を見て、私は悪い事をしたなと少し反省をした。
「ごめんごめん、フィーネもリバレスも心配かけて悪かったよ。私も正直、自分の体が此処まで弱いとは思ってなかったんだ」
私は、フィーネの背中を優しく擦り、リバレスの頭も撫でた。
「ところで、私が倒れてからこの街にはいつ到着したんだ？」
私は、リバレスに尋ねる。
「ルナが倒れてから次の日には街に着いたのー！殆ど眠らずに三日間フィーネは付きっきりで看病してたのよー！」
そうか。それなら皆無事で良かったと、私は胸を撫で下ろした。それにしても……
「フィーネ、ありがとう。お陰で助かったよ」
私は、穏やかな口調でそう言った。
「そんな！感謝してるのは、私の方ですよ！ルナさんのお陰で、私は元気に此処にいるんですから！」
フィーネは怒ったようにそう言った。まるで、自分は感謝されるような事はしていないと言うように。
「まぁ、お互い感謝してるって事でいいじゃないか。……それより、私は空腹なんだよな」
私は目で訴えかけた。この八日間、ろくに何も食べていない。
「は、はい！今すぐおいしい物を作ります！」
と、フィーネは慌てた様子で、私の体を離れた。その顔は林檎のように真っ赤だ。抱き付いていた事が急に恥ずかしくなったのか……？
「ルナも照れちゃってー！顔が赤いわよー！」
其処に、リバレスが厳しい言葉を挟んだ。フィーネの温もりが残っているのを感じると余計に恥ずかしかった。

３０分ぐらいが過ぎた。其処に、フィーネが食べきれないぐらいの料理を持ってきた。その料理は、ベッドの前のテーブルに次々と並べられる。窓のカーテンから差し込む光で、料理がより色鮮やかに映える。また、部屋には沢山の花が飾られてあった。私を心配して、フィーネが持ってきてくれた物だろうか？
「はい、どうぞ食べて下さい！」
フィーネは、にこやかにそう言った。その表情はいつになく嬉しそうだ。栗色の長く美しい髪と、純粋で優しい瞳がこちらを見ている。
「頂きます」
私は、フィーネ手作りのおいしい料理を食べ始めた。限界を超えて空腹だった為、言葉を発する暇も無く食べ続けた。パンもスープも、卵料理も肉料理も瞬く間に、私の胃の中に吸い込まれていった。そして、いつもの三倍ぐらいの料理を１５分もしない内に食べつくしてしまった。
「ごちそう様！美味しかったよ、生き返った気分だ」
私は満足の笑みを浮かべて、フィーネに礼を言った。本当に、体の底から力が溢れてくるようだ。
「そうですか！それは良かったです。作った甲斐がありますよ！」
彼女も微笑む。作った料理を美味しく食べて貰うのは幸せなんだろう。
「でも一つだけ……トーストが辛かったよ。私は、フィーネが作った辛いトーストも好きだけどな」
と、私は笑いながらそう言った。
「ふふっ……またやっちゃいましたね！でも、ルナさん優しいから」

と、全く気にしていない私の様子を見てフィーネも笑っていた。
「（あーあー妙な雰囲気ねー……ルナリート君。）」
其処に、わざわざテレパシーでリバレスが余計な一言を挟む。
「（……うるさいぞ、蝶々！）」
私は応戦した。
「（うっ！ムカッ！わたしは蝶じゃなーい！）」
リバレスは怒った。怒って、私の髪を引っ張る。
「どうしたんですか？」
その無言のやり取りを見て、フィーネは怪訝な表情を浮かべた。会話が聞こえなければ、この光景は不思議な事だろう。
「いや、何でもないよ。それより、今フィーネがこの街でやりたい事はあるか？魔物退治以外で」
と、私は唐突に訊いた。これには勿論意味がある。
「どうしたんですか？急に？」
フィーネは不思議そうに首を傾げた。それはそうだろう。今まで私はそんな事を言った事がない。
「うーん……私が倒れてからずっと看病してくれたお礼に、何かやりたい事や欲しい物があるなら、叶えてあげようと思ってな」
そう言って私は頭を掻いた。これは、今までの魔物と戦う旅とは関係なく、フィーネと息抜きでもしたいと思ったからだ。
「え！そんな、悪いですよぉ！」
と、フィーネは一瞬嬉しそうな顔をしたが、思い直して首を振った。
「ルナが、こんな事を言うのは１０００年に一度あるか無いかよー？いいのー？」
私の髪を引っ張っていたリバレスがこんな時にだけ言葉を挟む。お節介な天翼獣だ。
「１０００年！それじゃあ、是非お言葉に甘えます！私は……買い物とか、美味しい料理店で食事とかしたいです。それと、この街の名物の音楽隊の演奏も聴きたいです。もちろん、ルナさんの付き添いで……！」
と、フィーネは俯き加減で頬を朱に染めながら、恥ずかしそうに言った。あどけない仕草が可愛らしいと思う。
ただ、買い物は少し人間染みていて気が引けるが……でも、フィーネと行けばきっと楽しいだろう。
「よし、解った！行こうか」
私は笑顔でそう言った。体はほぼ完治している。一応、何があってもいいようにオリハルコンの剣は持っていこう。
「はいっ！お願いします！」
満面の笑みを見せた。まだ幼さを残しているが、整った顔に輝く無垢な目に秘められた強さ。その笑顔が私に力と心をくれる。今はそう思う。
「わたしは、蝶じゃないからねー！」
其処で、リバレスがまたも私の髪を引っ張った。私はこんな二人に囲まれて幸せだ。

〜幸せの時〜

此処は、リウォルの街。金属加工業が盛んな街だ。街は、石造りで強固な外壁を持っている。今まで見て来た街や村の何処よりも近代的で、民家や店などが数多く整然と並んでいる。それらの建造物も石造りで、ドアや窓枠は鍛えられて加工された鉄が使われている。また、道の大半も舗装されており、その上を歩く人々も色とりどりの服を着て楽しそうだ。この街からは『魔』の気配がせず、平和そのものだった。
「この街は平和なんだな」
私は、独り言のようにフィーネに言った。
「そうですね。この街は、魔物の侵入を防ぐ外壁と、鉄を鍛え上げた強い武器がありますから」
フィーネは、この街の様子が羨ましそうだ。道行く人々の笑顔や、女性の華やかな衣装……物珍しい世界の品々。フィーネの視線が様々な所に向いているのを私は見逃さなかった。更に、彼

女は自分の服を見て溜息をついている。
「買い物をするんだろ？まず、服屋に行こう」
と、何故か落ち込み気味のフィーネの肩を叩いた。
「えっ！？服屋に行ってどうするんですか！？」
心の内を読まれたと驚いているのかもしれない。
「勿論、フィーネの服を買うんだよ。フィーネがいい服を着れば、其処ら辺にいる女性は誰も勝てはしないさ」
私は本心を言ったが、少し照れていた。
「そんな事ないですよぉ……！でもその気持ちだけでも嬉しいです！」
フィーネは恥ずかしそうに笑った。やっぱり、フィーネは普通の女の子なんだと思った。
そして、石畳を歩き服屋に着いた。看板には、『リウォル最高の衣服店』と書いてあった。
「多分、この店は高いですよ！別の店でいいですから！」
フィーネは焦って私の腕を引っ張る。高いと言っても、私の持ち物を売れば大丈夫な筈だ。
「心配しなくていいよ。私のせめてものお礼だから」
私はフィーネを連れて店に入った。
「いらっしゃいませー！」
入った瞬間、綺麗に着飾った女性３人が近寄ってきた。
「本日は、ご来店ありがとうございます！どのような服をお探しですか？」
一人の女性が訊いてくる。しかし、フィーネは、焦って何も答えられない。
「この子に合う最高の服を持ってきてくれ」
私は、止め処なく喋り続ける店員にそう言った。
「それで……お客様ご予算は……？」
店員の一人が訝しげに私の顔を覗き込んだ。失礼な人間だ。きっと、私達の服がみすぼらしく見えたのだろう。
「これで」
私は、荷物の中から再び『純金の杯』を出した。ミルドの村で、一つを換金した分の銀貨はまだ沢山残っていたのだが、私達を貧しいと思ったような態度が気に入らなかったからだ。
「はい！大変失礼いたしました！ただいま、最高の服をお持ちいたします！」
店員達３人は深く頭を下げて大慌てで服を探しに行った。店の中には無数の服が飾られているが、最高の服とやらは別の所にあるのだろう。
「ルナさん！私は普通の服でいいですよぉ！それに、何でそんな高価な品を持ってるんですか！？」
フィーネは慌てながら私の手を握ってブンブン振り回した。余程の慌てようだ。
「あの杯は、天界では大した価値はないよ。それに、どうせ買うならいい物を買わないとな」
と、私はフィーネに微笑んだ。物で喜んでくれるなら、人間界で最高と呼ばれている物をあげたい。
「（そうそう、フィーネは遠慮し過ぎよー！せっかくの機会なんだから、もっとルナに甘えないとー！）」
リバレスが、私に気付かれないようにテレパシーを送っていた。
「はい」
またも顔を赤く染めて、俯いてしまった。この時のフィーネはいつもより小さく見える。普段でも、私より２０ｃｍ程小さいのだが。
暫くして、大慌ての店員３人が帰ってきた。その手には持ち切れないぐらいの服を持っている。
「はぁ……はぁ……これでどうですか？」
３０着ぐらいの服があった。シルクのワンピースや白い毛皮のコート、それに鮮やかなドレスなど……人間界にしては豪華な品揃えだ。
「フィーネ、気に入ったら全部買っていいぞ」
私はフィーネの背中を軽く叩いた。遠慮気味に俯きながらも、見た事もない綺麗な服を見るフィーネの目は輝いていた。
「えーっと……どうしよう……私、こんな服見るのも触るのも初めてなんですよぉ」
彼女は、恐る恐るシルクのドレスに触れた。この様子じゃ、埒があかないな。

「フィーネ、試着すればいいよ。いいだろ？」
私は、店員の目を見た。
「はい！どうぞ、好きな物を着てください！」
３人は、背筋をピンッと伸ばしそう答えた。初めの様子と全く違うな。
そして、服を持った店員とフィーネは奥の試着室へと消えていった。
「（ルナも人が悪いわねー……わざわざ、杯を出さなくても銀貨はいっぱいあったのにー）」
リバレスは呆れたように言った。私も普段ならこんな事はしないのだが。
「（私は、フィーネの服を見て『田舎者』と侮辱するような目をされたのが許せなかったんだ。）」
私は正直な理由を話した。フィーネが、他の虚勢を張るだけの者に見下されていい筈がない。
「（なーるほどねーそんなにフィーネの事が……ねー）」
きっと、リバレスが指輪に変化していなかったら、からかう様な顔で笑われている事だろう。
その後、綺麗な服を着た可愛いフィーネが現れた。
「驚いた！フィーネは、そんなに美人だったのか！」
私は思わず思った事を口にしてしまった！白のシルクのドレスを着たフィーネだった。私が、今まで見たフィーネは色褪せたようなワンピースや、皮のコートだった。しかし、今真っ白なドレスを着たフィーネはとても輝いて見える！
「ルナさん……、恥ずかしいですよぉ……！これじゃあ、まるで花嫁さんみたいです」
花嫁……？流石にそれはまずいな……いや、買っておいて損はないな。きっとフィーネも喜ぶだろう。
「よし！その服をまず貰うことにするよ」
私は、店員にそう言った。店員も笑顔で頭を下げる。
「ありがとうございます！銀貨１５０枚になります！」
１５０枚か、杯一つで確か２０００枚ぐらいの価値はあるからまだまだ大丈夫だな。
「ルナさぁぁーん！」
フィーネが恥ずかしくも嬉しそうに慌てる様子を余所に、私は次々と服を買った。
そして、店員達に見送られながら私達は店を出た。今のフィーネは、薄いピンク色のシルクのワンピースの上に、柔らかい白の毛皮のコートを着ている。そのあまりの綺麗さに、道行く人が振り返る程だ。
「よく似合ってるよ。いい買い物をしたな」
私は恥ずかしそうに横を歩くフィーネに声をかけた。こんなに人から注目されるのは初めてだったのだろう。
「すごく恥ずかしいけど……すごく嬉しいです！ありがとうございます！」
彼女は頬を赤くして満面の笑みを見せた。この笑顔が見れるなら安い買い物だ。
その後、私達は世界中の雑貨が売っている巨大な市場を訪れた。多くの人と物で此処は溢れている。
「すごい人ですねぇ！あっ、あれ見に行きましょうよ！」
フィーネは珍しい物を見ては楽しそうに駆け出していく。このままじゃあ、はぐれてしまうぞ。
「フィーネ、そんなに慌てなくても大丈夫だから！」
私は右手でフィーネの左手を取った。思えば、これが初めてフィーネと手をつないだ瞬間だった。
「ルナさん……！」
フィーネの顔は炎のように紅潮した。思わず私も恥ずかしくなって、手を離そうとする。
「あっ……ダメですよ！せっかくつないでくれたんだから……！」
彼女は私の手を逆に強く掴んだ。それを見て、私はフィーネに頷いた。
「（二人とも妬けるわねー……！わたしは、暫くお休みするわー。）」
と、リバレスは私達を冷やかした後に、指輪に変化したまま眠ってしまった。器用な奴だ。其処まで気を遣わなくてもいいのに。
私とフィーネは手をつなぎ、雑貨店を見て回り、昼食代わりに軽食の露店で買ったクレープなどを食べた。そしてこの街の、名物の劇場で音楽隊の演奏を聴いたりしていると、すっかり日は落ちて夕闇が近付いていた。今日は、一生の内で一番楽しい日だと私は実感していた。

そして、私達の心が通じ合っていくのを感じた。

争いも無く、天使も人間も関係無ければ……私は本気でフィーネを好きになっていたよ。そんな一日だったんだ。

～混沌の訪れ～

私達は、楽しい時の余韻に浸るべく『海辺の料理店』を訪れていた。此処は、リウォルで一番美味しい料理店らしい。

「わぁ……！美味しそうですねぇ！」

私達は、食卓に並ぶ豪華な海の幸や肉料理を中心に向かい合わせで座っている。

「本当だな。……それより、今日は、楽しかったよ。ありがとう、フィーネ！」

私は少し照れながらそう言った。こんな楽しい一日を貰えた事に私は心から感謝している。

「感謝するのは私の方ですよぉ！私……今日の事は絶対忘れません！大切な大切な思い出です！」

フィーネは、レニーで貰ったネックレスを握り締め今日買った服を俯きながら見た。相変わらず顔は赤い。

「私もだ。今日は１８２６年間で一番楽しい日だったよ！さぁ、冷えない内に食べよう！」

私達は、幸せな空気に包まれていた。しかし、今日一日の中で一つだけ気になる話があった。それは、ある街人の一人が『リウォルタワー』は魔物の本拠地である可能性が高いという話だ。『リウォルタワー』とは、リウォルの街の北東３０ｋｍぐらいの場所に位置する古代の塔らしい。その塔に最近魔物が多く出入りしているらしく、近付いた人間は殺されるらしいのだ。……だがもしも、その塔は人間が生まれるよりも前の古代の塔ならば、恐ろしい事が起きるかもしれない。いや、大丈夫だろう。私は一人で考えていた。

「おいしいですねぇ……！」

私の考えを余所にフィーネは一口食べただけで、とろけそうな幸せ顔になった。

「あぁ、この料理は最高に美味いな！私はフィーネの料理の方が好きだけど」

正直な感想だった。此処の料理は濃厚な味わいだが、私はフィーネが心を込めて作ってくれた料理の方が好きなんだ。

「えぇ……！私の料理の腕前じゃあ此処の料理には勝てないですよぉ！」

彼女は笑顔で首を横に振った。お世辞だと思ったのだろう。しかし……

「……まずいな」

私は、ナイフとフォークを置き思わず呟いた。

「えっ！？そんな事ないですよ！美味しいですよぉ！」

フィーネは私の真剣な顔と行動に驚いていた。

「冗談を言ってるんじゃない！早くこの店を出るんだ！」

「えっ？えっ！？」

私は椅子から立ち上がり、フィーネの体を抱えた！説明している暇はない！

「（何！？この物凄いエネルギーの波は！？）」

リバレスも目覚める！強力なエネルギーが遠くで集約されているのを、私は感じたのだ！

私はフィーネを抱えて全速力で走る！そして、そのまま海に飛び込んだ！

その瞬間……！

「ピカッ……！」

強烈な閃光と波動がリウォルの街を貫いた！

「ドゴォォォォォー……ン！」

凄まじい轟音と衝撃が襲う！私達はその時には海に潜っていた！

そして……静寂が訪れた。

「キャァーー！」

街の光景を見たフィーネが思わず叫んだ！それも、その筈だ。街が……街が幅５０ｍに渡って直線状に消滅していたのだから……！

「何て事だ」
海から上がった私達は愕然とした。幅５０ｍ、長さにして１ｋｍぐらいが跡形も無く消えている。建物も人も森も大地も……何もかも！
「どうして……！どうしてこんな事になるの！？」
フィーネは泣き崩れた。さっきの料理店も消滅している。
「ルナ……、この跡は」
思わず元の姿に戻ったリバレスが囁く。
「あぁ……これは……『Ｓ．Ｕ．Ｎブラスター』の攻撃に間違いない。超エネルギーの星であるＳ．Ｕ．Ｎ（この世界では太陽と呼んでいるが）から降り注ぐエネルギーを変換して、光線を照射する禁断の兵器だ！」
私は、この圧倒的な破壊力を見てそう確信したのだ。さっき食事中に心配していた事が現実になった。古代の塔には天界に由来する物があるかもしれないと危惧していた事が！『Ｓ．Ｕ．Ｎブラスター』は天界の兵器！誰かが持ち出したのか！？
「幸い……殆ど使いこなせてないみたいだけどねー……１００％の出力を出せば、この街の全てを消すぐらい訳ないから……！」
リバレスは身震いしながらそう言った。一体誰が……何の為に！？いや、待てよ……光線が照射された方角を辿ると……
「使用された方角には、リウォルタワーがある！現在其処は魔物の本拠地らしい。兵器を使ったのは、恐らく高度な知能を持つ魔物だ！さっきの一瞬で数百……数千の命が奪われた。許す事は出来ない！」
私は声を荒げて叫んだ！
「どうするのー！？ルナ！」
リバレスも怒りを露にして私の顔を覗き込んだ。
「叩き潰す……！こんな残虐な真似を許せる程、私は穏健ではないからな！」
その時、フィーネが立ち上がった！
「……私も行きます！許せないから！」
と、フィーネも今まで見た事もない程の形相に変わった。
「ダメだ！今回は危険この上ない戦いになる。相手は禁断の兵器を使う者。私は君を守りきれる自信がない！」
私は真剣な表情でフィーネをなだめた。大切なフィーネを危険に晒したくはない！
「でも！」
フィーネは涙を拭いて、この街で買った新しい剣を抜く。
「頼む……！此処にいてくれ……此処にいて、傷ついた街の人々を助けてやってくれ！」
私は、怒れるフィーネを抱きしめて街を指差した。街からは火の手が上がり、傷つき逃げ惑う人々の群れが夜闇に映っていた。
「……わかりました。決して無理はしないで下さいね……私は……ルナさんが」
剣を落とし、涙声で私を心配するフィーネは途切れ途切れに言葉を発した。
「解ってる。私は必ずフィーネの元に戻る！だから、その言葉の続きは……今は無しだよ」
私は、フィーネを強く抱きしめて優しく髪を撫でた。そして、必ず戻ってこれる事を信じてリウォルタワーへと全速力で駆け出した。
この時、私は行く先に待ち受ける運命を知る由も無かった。

第十節　存在する意味

私とリバレスは、リウォルの街を出て破壊された跡を辿って月明かりの中をリウォルタワーへと向かっていた。
「凄い破壊力ねー……！」
Ｓ．Ｕ．Ｎブラスターの照射を受けた跡は、元は森だったのだろうが……何も存在しなかったかのように消え去っている。
「あぁ、急ぐぞ！」
距離にして３０ｋｍ。全力で走れば一時間もかからない筈だ！私はリバレスを肩に乗せて更に

スピードを上げた。
「もう一度禁断兵器が使われたら……わたし達もあの街も滅びるもんねー……！」
リバレスが声を震わせた。そう考えると恐ろしい！しかし、あれだけのエネルギーを放射するのだから充填には時間がかかる筈だ。
そんな会話をしていると、リウォルタワーが目前に迫った。遠くに見えるその姿は正しく……
「あれは……神、いや天界が創った物に間違いないな……！」
人間界には不釣合いな程完璧に創られた超高層の塔……材質は大理石。恐らく金属はオリハルコンが使われているのだろう。
「あっ！」
尚も走っていたその時、リバレスが叫んだ！それもその筈だ……数え切れない程の魔！
「塔の周囲を囲む者達……あの全てが魔だ！」
私は咄嗟にリバレスに叫ぶ！
「どうするのよー！」
リバレスが不安げに私の肩を叩く。
「強行突破だ！あれは恐らく、低級魔の集団……数は多いが心配ない！」
残りの距離は２００ｍ……！私は、神術を使う為に精神力を集中した！
「行くぞ！高等神術『雷光召喚』！」
私の神術の発動よりも早く魔が私の存在に気付いたようだ。全員が恐ろしい形相でこっちへ向かってくる！
「ルナ！危ない！」
「グォォォォォォォ！死ネェェェェ！」
魔が目前に迫る！牙や爪が私達を引き裂こうとした瞬間！神術が発動した！
「ピカッッッ……！」
まるで、雷の神が舞い降りたかのような雷が魔に降り注ぐ！
「ドゴォォォォーーン！」
凄まじい轟音が辺りの空気を激しく揺さぶり、閃光と電撃が絶え間なく続いた！
「今だ！リバレス！入り口へ急ぐぞ！」
今ので魔の大半は倒した筈だ！そして、私は入り口までに立ち塞がった敵は剣で薙ぎ倒した！入り口が近い！しかし、入り口の扉は最強の金属オリハルコンで作られていたのにも関わらず破壊されていた！
「一体どれ程の魔が中にいるんだ！？」
私は、そんな疑問を叫びながらリバレスと共に塔のなかに飛び込んだ！
「コロスコロス殺スウウウウウ……！」
しかし、後続の魔達も私達を殺そうと塔の入り口に向かってくる！
「リバレス！結界だ！」
私はリバレスに叫んだ！その意味を理解したリバレスと私は、入り口に向かって精神力を集中した！
「中級神術『結界』！」
私達は同時に神術を発動させた！結界とは、保護の神術を強力にしたもので、私達とは反する属性である魔を消滅させるシールドになる。
これで、魔は塔に入ってこれない！しかし、知能の低い魔の一部はその結界に衝突し砕け散った！
「これで暫くは大丈夫だな」
私は胸を撫で下ろした。そして、改めて塔の内装を見てみた。天界の古代建築様式と同じだ……この塔は数百万年の月日が流れている。私はそう確信した。荘厳な柱、壁に整然と並ぶ神術で灯された燭台。更に、上層へ続く階段は螺旋階段で、階段の中央には赤い絨毯が敷かれてある。一階層の高さは１０ｍ以上、直径は５０ｍといった巨大な塔だ。扉や燭台、階段の手すりなどは全てオリハルコンだった。
「それにしても……豪華な塔ねー」
古代建造物の中でも最高級の造りだ。余程この塔は重要だった事が伺える。
「この塔は……禁断兵器だけじゃないかもしれないな」

私は、この塔には他に何か重要な役割があるような気がしてきた。禁断兵器を封印するだけなら、此処まで労力をかけないだろう。
「なかなかやるじゃないか、堕天使ルナリート……！」
突如、不気味な声が響いた！私は声の元を辿った。
「貴様が街を破壊したのか！？」
一見、女に見える魔……ルトネックの村で出会った指揮官クラスの魔に似て、漆黒の体に漆黒の翼……そして漆黒の長い髪。強い……！
「私が破壊……？お前はもっと賢い奴だと思っていたけどねぇ……私の力程度でこの塔の封印を破れたと思うのかい？」
この女の力は……ルトネックの時の奴より若干劣るように感じる。確かにその力では神がつくった封印は破れないかもしれない。
「それでは、貴様では無くもっと強力な魔が塔の上層にいるということか！？そいつが兵器を使ったんだな！」
私は剣を抜いた。指揮官クラスで無くても、強力な力を持つ魔の女を睨みつける！
「ご名答！でも、お前はこの塔の秘密も知らないまま、私に此処で殺されるから関係ないけどね！」
魔が力を解放した！一見普通の女に見えていた魔は体中が筋肉で膨らみ、牙と爪が伸び剥き出しになった！
「ルナ！相手は強いけど大丈夫なの！？」
敵の様子を見たリバレスが私の背中にしがみつく。今の魔は間違いなくルトネックの魔よりも強く知能も高い！
「あぁ、でも負ける訳にはいかないだろ！」
不思議と恐怖は無かった。私はフィーネに戻ると約束したんだ！負けられないんだ！……しかし、その時！
「お前がエファロードの力を使う前に殺してヤルゥゥゥゥゥゥ……！」
恐ろしく低い声に変わった魔は猛スピードで突進してきた！エファロードが何かは解らないが油断すれば殺される！
「喰らえ！」
精神力を破壊力に変換する剣、オリハルコンの剣を全力で振り抜く！
「ガキンッ……！」
剣を握る手が痺れる程の衝撃が走った！手応えが無い！
「効かぬワァァァァ……！」
その瞬間！強靭な腕の一撃が私の腹部を捉える！
「ウァッ……！」
腹から押し出される空気で出た音と共に、私は壁まで弾き飛ばされた！
「ボキッッ……！」
壁が背中に激突すると同時に、体内から嫌な音がした！骨の一、二本は折れただろう。
「死ネェェェ……！」
私が飛ばされた所まで魔は一瞬で間を詰めて、私を蹴り上げた！
「ガハッ……！」
声にもならない音と共に１０ｍも上にある天井に飛ばされる！
「ドォォォォォーン……！」
轟音と共に天井に激突し、私は床に落ちた……骨折と激痛で体中が痺れる！
「うぅ」
私の体は動きそうに無い。苦痛の息が漏れた！
「ルナー！」
すぐさま、リバレスが近寄り、私に『治癒』の神術をかける！しかし、それを魔が黙って見ている筈も無い！
「天翼獣如きが邪魔をするなァァァァァ！」
刹那で間を詰められて、リバレスに魔の裏拳が炸裂した！
「キャー……！」

この塔に響き渡る程の叫び声で、リバレスが遠くの床に叩き飛ばされた！
圧倒的な力だ……！絶望的な程……力の差を感じる。
「リ……リバレス……！」
私は、少し回復した体で剣を杖代わりに立ち上がって叫んだ！僅かに……生命力を感じた。リバレスは瀕死ながらも生きている！
リバレス……！こいつを倒したら必ず助けるからな！……お前を死なせはしない！
「貴様の相手は……俺だろう！」
リバレスが瀕死になって、自分自身が死の淵まで追い込まれて……俺の力の一部が解放された！髪が銀色に染まる！
「エファロード……！」
魔に動揺が見られた！しかし……！
「アハハハハハハ……！それが第一段階か！笑わせるねぇ……！」
低い声で嘲笑が響く……だが、今の俺の力ではこいつを倒すのは容易い筈だ。
「何が可笑しい！？」
俺は怪我が治っていくのを感じながら、剣先を魔に向けた！
「その力で、今の私を殺せても……上で待つ主の足元にも及ばないということさ！愚かな堕天使よ！」
今の俺の力でさえ、魔に勝てない？空言を！いや……もしかすると……俺の頭は少し混乱した。
「油断したね……！私は主の一部に過ぎない！偵察に来ただけなんだよ！上で会おうじゃないの……！」
俺の一瞬の隙をついて、狡猾な魔は消えた。ただ、俺の偵察に来ただけだと……？それより！
「リバレス！」
崩れた大理石の転がる横にリバレスは倒れていた！
「治癒！」
普段の数十倍の力で、俺はリバレスに治癒の神術を使った！瞬時にリバレスの傷が治る！
「うーん……ルナ！？」
俺はリバレスの頭を優しく撫でた。お前がいなかったら、二人とも殺されてたよ……
「大丈夫か？」
俺はリバレスに微笑んだ。
「わたしは……大丈夫だけどールナ、髪が銀色になってるわよー！」
元気になったリバレスが俺の髪を指差した。
「あぁ……これで三度目だな。一体私は何者なんだろう？」
刹那の静寂の後に、私の髪は元の赤色に戻った。一気に体の力が抜ける！
「大丈夫ー！？」
力が抜けてよろけた私を、リバレスは心配そうに見つめた。
「大丈夫だ。強力過ぎる力の反動だよ」
止むを得ず私とリバレスは、大理石の柱にもたれて数分の休憩を取った。しかし、先を急がねば！
「行こう！上で巨大な魔が動き出す前に……！」
私は、リバレスを肩に乗せて螺旋階段を上がっていった。

～真実の記念碑～
私達は階段を足早に登り、塔の二階に到着した。気配を探り、警戒していたがこの階には魔はいないようだ。それを確認した後に、剣を収めて階の様子を見てみる。豪壮な祭壇が部屋の中央にあり、その周囲は浅い堀に囲まれていた。何処からか水が流れ込み、穏やかに流れる音が部屋に響いている。
「なんで、塔にこんな部屋を作るのかしらねー？」
私と同じ疑問をリバレスは呟く。しかし、一つ解るのは祭壇の上に何かが安置されているという事だ。
「見てみよう」
私はリバレスと共に、祭壇の階段を登った。無論、罠を警戒しながら……

「オリハルコンで出来た記念碑みたいねー？でも、わたしには読めないわー」
祭壇の上には、文字が刻まれた記念碑があった。
「古代の文字だな」
私は、古代語の辞書を読んだ記憶を掘り起こす。私は、一度記憶した事は忘れない。
「……『この塔の完成は……この人間界の創世とともにある』」
一つを解読した。そして、もう一つを翻訳する。
「……『塔には……いつ如何なる時であろうと人間を滅ぼすことが出来るように……禁じられし兵器を置く』……！？」
この塔は人間がこの世界に創られたと同時に存在し……その人間をいつでも殺せるように兵器を置くだと……！？
「どういう事だ！？神が人間を創り……神がその人間を滅ぼす兵器を作ったのか！？」
理解できなかった。戯れであれ何であれ人間を創った神が……何故わざわざ、それを滅ぼす兵器を作る！？
「もしかしたらー……昔の神様は……人間の存在が魔に憎まれる事を、初めから解ってたんじゃないのー？」
リバレスは、珍しく冴えた答えを出した。彼女はたまに鋭い考え方を持つ。
「なる程。そう考えれば辻褄が合うが、それならば初めから人間など創らなければいい事じゃないか？」
私は、その一つの矛盾が整理出来なかった。神が獄界と対立を避けるなら、人間を創ってそれを破壊する兵器を置く手間をかけるよりも、最初から人間を創らなければいいだけの事なのだ。恐らく……何か考えがあっての事だろう。
「うーん……考えてても始まらないわよー先に進めば答が見えてくるかもしれないしねー」
首を傾げていたリバレスは、そう言って上の階に続く階段へと飛んでいった。
「待てよ！」
確かに考えていても始まらない。先に進もう！いつ再発されるかも解らない危険な兵器が安置されている！私達は、更に上の階へと急いだ。長い螺旋階段が続く……　しかし、階段を登り詰めて現れた光景に私はまたも驚いた！今度の部屋は、部屋一面が緑の木々や花に覆われているのだ！……そして、やはりその中央に祭壇があった。
「また記念碑か」
私は、少し緊張して記念碑を解読する。重大な事が書かれている。私は確信してきた。
『人間という生命そのものには……天界を維持する為の鍵がある』
『神は……神合成という力により……Ｓ．Ｕ．Ｎ（Super ultimate nuclear star）から無限に近い膨大なエネルギーを生み出す』
ますます混乱してくる！人間が天界の維持の鍵？天界を維持しているのは神の力だろう？しかし……神がＳ．Ｕ．Ｎから無限に近いエネルギーを創り出すという事は初めて知った！ＥＳＧや天界の維持エネルギーを創り出す事は知っていたのだが、そのエネルギー源がＳ．Ｕ．Ｎだとは誰も知らない事だったのだ。私は、先に進み記念碑を読む事に恐怖すら感じてきた。この先の真実を知ってもいいのかと……！？
「ルナー……、上にはもっと……知ってはいけない事が書いてるかもしれないわよー」
リバレスも怯えていた。しかし……私は恐怖よりも真実を知りたいという気持ちが勝った。
そして、塔の４階に到着した。今度の部屋は……周りの全てが砂漠だった。砂漠に祭壇がある。
『神は……神合成で持て余したエネルギーから……自分自身に似せた天使を創った』
『神は……更に……ＥＳＧ（Energy sphere of God）というエネルギー球体を天使に与える事にした』
此処まで知ってしまったのだ。先にある真実を知る義務がある。記念碑を全て見てから結論を出そう……
私は砂漠の砂に足を取られながらも階段へと急いだ。この塔は……禁断の兵器と、真実を与える為のものなのだ。
次に現れた光景は……夜の海……偽物の月と星が部屋を照らしている。海の中に祭壇はあった。
私は、月明かりを頼りに恐る恐る記念碑を解読する。
『限りなく続く神合成の果てに……神は天界だけでその膨大なエネルギーを処理することが出来

なくなった。』
『神は苦心の果てに……天界の維持の代償として……中界に人間を創り……余剰エネルギーを消費することにした』
私は、其処まで読んで思わず叫んだ！
「人間を創ったのが……神の戯れだと……！？何故……何故天界では嘘ばかり教えるんだ！？」
歯痒かった。人間は……天界の為に生まれたのだ！それを……私達は見下して……蔑んで……！
「ドンッ！」
思わず記念碑を叩く……！自分の考え……いや真実を知らなかった自分に怒りの気持ちすら沸いてきたからだ。
「人間って……天界の為に利用されてたのねー」
リバレスまで、俯き暗い表情をした。人間に申し訳ない。そう考えているんだろう。この上にも階は続いていそうだった。
「行こう……私達は全てを知らなければならない」
私は、『ある決意』を胸に更に上の階への階段を踏みしめて行った。
塔の６階。此処は、ただ真っ白な空間だった。まるで、全ての精神を止まらせるような無の空間だ。其処に、透明の水晶で出来た祭壇がある。
『人間は天使と同じように魂を与えられる。魂というレベルにおいて両者に優劣はない』
『ＥＳＧが……天使に強大な力を与えているに過ぎない。もし人間にＥＳＧを与えれば、拒絶反応と長い年月を経て天使となる』
新しい真実を知る度に心が揺り動かされる！私が人間と接して感じた事……天使と人間の心に大差は無いと感じ始めていた事……
当然じゃないか！？魂……心は同じだったのだから！
私達は走った！更に上で待つ真実を知る為に！『決意』を強固にする為に！
塔の７階……此処はまるで宇宙を模したかのような空間だった。近くに大きな惑星の模型……暗闇に浮かび上がる無数の煌き……そして、Ｓ．Ｕ．Ｎ。床も暗黒に染まり、まるで本当に宇宙を歩いているかのようだ……その中心に、私達の生きる星……『シェファ』を模した祭壇があった。
此処には、重要な真実が隠されている。そう確信して、記念碑に目を遣った。
『人間は……唯、天界の維持の為に……エネルギー塊として排泄される存在に過ぎない』
『人間界の存在意義……それは天界にとって無くてはならない。言わば《塵処理場》である』
私は頭を抱えてその場に座り込んだ！
「何て事だ……！人間が魔に脅かされているのは私達の所為じゃないか！？辛い世界に生まれて……苦しみながら生きて……悲しみの中で死んでいく……！なのに……私達は平和な天界で、被害者である人間を蔑み……感謝することも無く生きてるじゃないか！？」
私は自分の存在が、人間達の犠牲の上にあると知り、情けない心で満たされた。
「人間って……可哀想な存在だったのねー」
リバレスが一筋の涙を流す……その表情から、深い悲しみが見える。
「……私達は……私達の為だけに生まれて来る人間を顧みる事は無かった。愚かなのは私達天使の方じゃないか！？」
私は立ち上がった。そして、剣を抜いた。『決意』を『覚悟』にする為に！
しかし、その言葉を口にする前に上へ続く螺旋階段への扉にオリハルコンのプレートがあるのが見えた。私は無言で走り寄る。
『この扉の先には禁じられし兵器がある。それは神の意思により……人間界の全てを焼き尽くす事が出来る』
『この兵器で人間を全滅させて……新しく創ることによって……エネルギーの消費効率は上がる』
私はもう許せなかった！同じ金属であるオリハルコンの剣に力を込めた！
「パキンッ……！」
プレートと扉……その両方を剣で両断した！
「ふざけるな……！余りに身勝手過ぎる！一体私達に何の権利があるんだ！……俺達の為に人間は魔に虐殺されるんだぞ！何故だ……もっと他に手段があっただろう！？かつての神よ！」

俺は言葉の途中で、感情が震えて限界を超えた！髪が……銀色に染まっていく。
フィーネ……！君が悲しい目に遭ってきたのは……俺達の所為なんだ！
すまない。本当にすまない！
俺の目から涙が流れる。そして……『決意』を口にした！
「リバレス……、俺は決めたんだ。俺は人間界にいる２００年間……ずっと人間達を守る！せめてもの……償いの為に！」
俺は剣を前に突き出した。この時……俺の２００年の指針は決まったのだ！
「……もうわたしは止めないわー。ルナの頭が銀色になる時って、何か強い思いがある時だけだもんねー……でも、わたしはずっとルナについて行くから宜しくねー！」
リバレスは物思いな表情から、笑顔に切り替えて俺の肩に乗ってきた。
「お前は頼りにしてるよ！行こう……！兵器も魔も止めなければ！」
リバレスはいつも俺の事を解ってくれる。こいつとは、ずっと一緒だ！
俺は塔の屋上に続く最後の螺旋階段を全速力で上がっていった。無論、銀の髪のまま……

～真紅の瞳と光の翼～

屋上への扉……その最後の扉を俺は蹴破った！
「遅かったではないか……？」
塔の屋上が震える程の低い声が響いた。声の主を辿る。すると、月明かりの下に巨大な影が見えた。
「すぐに、その兵器から退け！そうでなければ、俺がお前を倒す！」
俺は精神力を集中した。瞬時に強力な神術を発動させる為だ！
「……グハハハ……エファロードがその程度の力か……！お前の言う通りだな！」
影がもう一つの影に可笑しそうに話しかける。
「そうでしょうぅぅ！あれは、エファロードというよりも……愚かな堕天使なんですよぉぉぉぉ！」
「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ……！」
さっき逃がした女と、二人で嘲笑う……！何が可笑しい！？
「高等神術『光刃』……！」
俺は先手を打つ為、強力な術を使った！無数の光の剣が空間に現れる！
「パキパキパキーン……！」
光が魔を切り裂く……！手応えがあった！しかし……！
「何だ……この玩具のような剣は……？この程度では、我が僕は倒せても……このシェイド様には傷一つ付けられんぞ！」
シェイドと名乗る魔……光に照らされて姿が見えた。身長は３ｍばかり……横幅も２ｍくらいはある。体は漆黒で、暗闇の中なら影すらも見えない程だ……また、鱗のような固い皮膚で覆われており、至る所から剣のような突起物が出ている。背中には体よりも更に巨大な羽があるようだ。……それでも、天使や人のような形はしている。だが、それよりも……シェイドには、『光刃』でさえダメージを与えられないのか……！俺の今の力は普段の１０倍以上はある筈なのに！
「もう終わりかい？今から、私はシェイド様の中に戻り……お前を惨たらしく殺してやるからねぇ……！」
俺の光刃を逃れた魔の女は、一瞬の内にシェイドの中に溶けていった。その瞬間……！
「さぁ……始めようか……！エファロードよ！」
シェイドの力が膨れ上がった！塔の全体が振動する！
「ルナ……！何なの……！？このエネルギーは！？」
俺が生きてきた中で……これ程までに凄まじい力を感じたことはない！殺される。俺は息もまともに出来なくなった。
「エファロードよ……我は獄王様直属部隊の司令官である！生命力にして、２６０００００！お前を殺す為に、獄王様直々の命を受け此処に現れたのだ！お前がまだ第一段階までしか発現させられない事は解っている！生命力２０００００００如きで足掻くがいい！」
シェイドが話した直後……！塔の屋上に結界が張られた！これで、逃げる事も隠れることも出来ない！

「俺が……エファロードなのかなんてどうでもいい！俺は……俺は人間の為に戦う事を決めたんだ！邪魔するな！」
俺は、震える体に鞭を打って剣にありったけの精神力を込めてシェイドに切りかかった！
「ズシャッ！」
軽い音と共に、シェイドの突起物が一つ弾け飛んだ。俺は心臓を狙ったのだが見当違いの所にしか当たらない！
「その程度の速さで、我を捉えられると思うのが間違いだ……！」
シェイドの姿が消えた！いや……目で追えない！
「（リバレス……、階段を伝って逃げろ！）」
この場にいたら確実にリバレスは死ぬ……！俺は必死でリバレスにテレパシーを送った！
「まずは……天翼獣から死ぬがいい！」
案の定……リバレスが狙われた！俺は全力で地を蹴り、シェイドの前に立ち塞がる！
「他人を気遣うその甘さが命取りだ……！」
奴は俺がリバレスを庇う事を予測して……そうか……あの女が言ったんだな。
「ブシュッッッッ……！」
うっ……やられた。腹の辺りで鈍い痛みの感覚が広がった。
「これで天界も攻撃しやすい訳だ！グハハハハハハハハハ！」
天界……？攻撃……？そんな事はどうでもいい……腹部がシェイドの鋭い腕で抉られた。俺は……死ぬ……腹部から大量の血が流れ……口からも大量に血を吐いた。
「ルナをよくもー！」
リバレスが炎を放つ……氷を放つ……雷を落とす……光で切り裂く……
彼女は知っている神術の全てをシェイドに放った。しかし……効果がある筈もない。
「小賢しい奴だ……！」
シェイドが指先で軽くリバレスを弾いた。
「キャァァァァァァーー！」
彼女は結界にぶつかるまで弾き飛ばされて地面に落ちた……
大怪我したに違いない。でも……俺は動けないんだ。
俺は今まで誰にも負けた事が無かったけど……上には上がいる。
さっき……２００年間戦う事を決意したばかりなのに……
ようやく真実を知って……戦う覚悟が出来たのに……
ごめんな……フィーネ……、俺はもう……
……意識が……薄れていく……

「ルナさんっ！」
生きる事を諦めかけた時……幻聴が聞こえた。
「まさか……人間が来ようとは！？お前は何者だ！？」
シェイドが誰かと言いあっている。俺は入らない力を振り絞り……目を開けた……視界がぼやける。
「……ィネ……フィ……ね……？」
血が喉に詰まり声が出ない。しかし……俺の目の前にいるのは……フィーネ……！
「そうか……お前がエファロードの女か……！エファロードも生きているようだから……目の前で切り刻み殺してやろう！」
何故……何故こんな所に来た……！？いつも後先を考えずに行動する癖……治せよ！
危機にも関わらず、自分から危険に飛び込むフィーネの癖が何故か愛しく思えてきた。
フィーネのお陰だろうか……？何故か……体の底から力が沸いて来た……！
「待てよ……！シェイド。まだ俺達の勝負は終わっていない」
体は急速に回復しているが、まだ完全ではない。俺は剣を杖にして立ち上がった！
「エファロード……！第二段階か……！？」
だろうな。今の俺は天界で神官と戦った時と同じような力を感じる！恐らく目は真紅に染まっている事だろう。
「フィーネ……、リバレスを連れて安全な場所へ！」

俺は溢れるような力を感じていた。今なら、シェイドがフィーネとリバレスへ攻撃しようとしても確実に防げる！
「ルナさんっ！約束を破ってごめんなさい！私はどうしても心配で！」
と、涙目で走って行きリバレスを抱えた！
「フィーネ！ありがとう……！」
塔の中へと逃げていくフィーネに俺は叫んだ。
「逃がす訳にはいかん！」
しかし、シェイドはフィーネを追おうとする！シェイドがフィーネへと動く！
「余所見してると命取りだぞ」
俺は、俺から注意を逸らしたシェイドの右腕を切り飛ばした！今の俺はさっきまでの俺よりも遥かに強い力を使える！
「小癪な……第二段階でも貴様の生命力は２０００００００！我の方が上だ……！」
その言葉の直後、激しい攻防戦が始まった！シェイドも魔術で漆黒の剣を出す！
「俺にはフィーネがいる！だから戦えるんだ！」
俺はシェイドの首を狙う！しかし、キーン！という音と共に防がれた！剣での戦いが数分続いた！
お互いにスピード、力とも譲らず……紙一重で避けながら相手にかすり傷を追わせた……！そして……
「愚かな……これでも喰らえ！究極魔術……『獄闇』……！」
その言葉の直後……暗黒の空間が現れた！それに飲み込まれた塔の一部は色を失い、暗黒に染まった！恐らく、全ての物質を暗黒の物質へ変える術だろう。これに対処するには、同等以上の力がいる！今の俺なら究極以上の神術も扱える筈だ……！
「究極神術……『神光』！」
塔の周りが、数百ｍに渡って光の空間に包まれる！闇と光がぶつかりあう！
「ウグググ……エファロードが！」
シェイドは、暗黒の空間に更にエネルギーを送り込む……！
「数字で負けても……戦いは俺の勝ちだ！」
シェイドが自分の魔術に集中した瞬間に、俺は瞬時に間合いを詰め……全力で肩から腹まで切り裂いた！
「何だとぉぉぉぉぉぉ……！」
何が起こったか解らないシェイドは驚愕の叫びを上げた！さっきの闇と光は空中で相殺し……砕けた。
そして……胴体が真っ二つになったシェイドを見て俺は安心した。強過ぎる相手だった。

「勝った！」
俺が安堵の息を漏らした瞬間……
「ルナさーん！」
塔の入り口から現れたフィーネが俺の胸に飛び込んできた！
「フィーネ……、ありがとう！君が来てくれたお陰で何とか魔を倒す事が出来た……それはそうと……リバレスは！？」
あれだけの攻撃を受けたんだ。無事な筈がない。
「やっほー！」
変な掛け声と共に、リバレスがフィーネの背中からひょこっと現れた！
「リバレス！無事だったのか！？」
俺は、嬉しくてフィーネもリバレスも纏めて抱き締めた。みんな無事で良かった。
「わたしは気絶しただけよー……それより、フィーネはよく来れたわねー？」
リバレスがくるっとフィーネの方を向いた。
「はい……、私……ルナさんの事が心配で心配で……馬に乗って追いかけました。それで、塔の入り口は魔物がいっぱいだったので、森で爆薬を爆発させて魔物の気がそっちを向いている瞬間に塔に入ったんですよ！」
何という無謀さ……私は、その行動力に感心すると同時に呆れてしまった。

「ルナ！髪と目が元に戻ったわよー！」
私は、フィーネの登場で強くなり……またフィーネの言葉で元に戻る自分が可笑しくて思わず笑顔になった。
「よし！この兵器と塔を封印して帰ろう！」
私が、シェイドの死骸に背を向けてＳ．Ｕ．Ｎブラスターの封印装置を起動させた時だった！
「死ネエェェェ

フィーネが目を覚ました！……しかし、その時！
「（……封印装置が作動しました。一分後にこの塔は消滅します。）」
頭に響く声……！神術でそう聞こえるようにしてあったのだろう！塔が激しく揺れる！今は喜びをわかちあっている場合じゃないな。
「フィーネ、リバレス！しっかり掴まってろよ！」
俺はフィーネとリバレスを抱えて飛び立った！今、俺の背中には翼がある！
激しい光と音を立てて崩壊していくリウォルタワーを背に、俺達は何処までも飛んでいった。
俺の名は……『ルナリート・ジ・エファロード』……俺は一体何者なんだろうか……

第十一節　二人の気持ち

此処は、リウォルタワーと街の間にある森の中だ。目の前には、先程までの戦いとは無縁な美しい湖がある。湖はそよ風で細波が立ち、湖面に映る美しい月が揺らいでいる。風に吹かれる木々の音と水の音以外は此処には無い。また、遠くの山々が月に照らされて雄大な影を落としている。見上げると、下弦の月と一面に広がる星々……まるでこの場所だけ時が止まったかのように感じる。
私達は、静寂と安息の空間に包まれていた。
「私は一体何者なんだろう？」
私は何処にも焦点を合わせずに、独り言のように呟いた。
「ルナは、やっぱり普通の天使とは違うもんねー……でも、さっきはエファロードって言ってたわよー」
リバレスは、不安そうに私を見つめる。その目は、恐ろしさというよりも私自身を心配している目だった。
「……解らない。急に、私の頭の中から意思が湧き上がったんだ。とてつもない力だった。天界で神官と対峙した時よりも……魔と戦った時よりも……私の力は、やはり天使と考えられる域じゃない。私の名は……『ルナリート・ジ・エファロード』なんだろう。
だが……それ以外には全く解らない。私は何なんだ！？」
私は俯きながら、声を落として喋った。私は自分自身が解らない事が不安でたまらなかった。
私は、昔から普通の天使とは違っていた。
それでも、他の者より少し能力が高いだけだと信じていた。しかし……さっきの力は、理解の範疇を遥かに超えている！
「ルナさん……、心配する事はないですよ！私を……私を助けてくれた時のルナさんも、いつもの優しいあなたの瞳と同じだったから……ルナさんはルナさんなんです！」
其処で、フィーネが優しい一言をかけてくれた。さっきまで死の淵にいたというのに……！私は自分の悩みがちっぽけなものに思えた。
「そうだな。私は私だ！ありがとう……フィーネ」
私はフィーネに微笑んだ。気がつくと、私の背にあった翼は消え、真紅の目も元に戻り、銀色の髪も普段の赤に戻っていた。
「ルナさん……、本当にありがとうございました！……うぅ……さっき死ぬかもしれないと思った時は……本当は怖かったんです。目の前から光が消えて……だから……だから……！」
緊張の糸が切れたんだろう。死ぬ思いをしたんだ。私は子供のように泣きじゃくるフィーネを優しく抱き締めた。
「……私は……フィーネが無事に此処にいてくれるだけで幸せだよ」
私はそんな言葉をかけながら、彼女の背中をさすっていた。そんな私達を気遣って、リバレスはそっとこの場を離れていった。

フィーネが泣き止むまで……一体どれくらいの時間が流れたんだろう。それでも、さっきと何も変わらない夜空と湖は、私達を温かく包んでいた。こんな時が永遠に続けばいい……私は心の底からそう願う……
「……覚えていますか……？」
今は私の隣に座り、湖を見つめているフィーネが突然囁いた。栗色の長い髪が風にたなびいて

いる。
「……君と過ごした日々で、私が忘れた事は何一つないよ」
私も湖の方をボンヤリ見ながら、ゆっくりと返事をした。言葉の通り、私は全てを覚えている。
「……さっき言った言葉です。私が死にかけた時に」
その言葉と共に、頬を赤く染めて私を見つめるフィーネの顔が穏やかな月の光に照らされた。
「……勿論、覚えてるよ」
私も照れながら、真剣にフィーネの瞳を見つめた。自然と、お互いの手が重なり合った。
優しさと強さと……純粋さと悲しみ……そして、私を想ってくれている潤んだ目が……じっと私の目を見ている。
伝えようとしている言葉は……リウォルを出る時に言いかけた言葉……死の淵に立って私に伝えようとした言葉……
「……私は……ルナさんが大好きです。世界中で誰よりも……！ルナさんは、優しさをいっぱいくれたから……
私は……ルナさんが傍にいてくれるだけで、温かい気持ちでいっぱいになるんです。強い心を持ち続けられるんです！
あなたは……天使様なのに……私なんかのわがままを何でも聞いてくれて……助けてくれて……怒ってくれて……
ミルドの丘から全てが始まりましたね。初めは、ルナさんの事が怖かったけど……今は大好きです。
私は……あなたといるだけで幸せな気持ちが溢れてくるんです！でも……私は人間……ルナさんは天使……
私の恋は届かない事は解ってます。それに……ルナさんには天界で素敵な恋人がいるかもしれないし……
それでも……私が初めて好きになった人だから……どうしても伝えたくて」
途切れ途切れに精一杯の心を伝えようとするフィーネが愛しくて、言葉が終わる前にわたしは彼女を強く抱き締めた。
「……ありがとう、フィーネ……、人間も天使も好きな思いは関係ないんだよ。いや、人間も天使も魂は同じなんだ。
私は……他人の為に一生懸命頑張って……懸命に生きて……それでも優しさを人に分けられる。
そんなフィーネの方が、私なんかよりずっと素晴らしいよ……君がいたから、私は変わった。君がいたから戦う決意をしたんだ！
君は私に無い物をたくさん持っていて……君が私に心をくれたんだ。だから……
私はずっと君を守る。これから先ずっと……何があっても」

「私もフィーネを愛してるから」

私の正直な気持ちだった。生まれて初めての気持ち……人を愛するという気持ち……何よりも大切に想う気持ち……
「ルナ……、さん」
フィーネは、目を閉じて一筋の涙を流した。その涙は月光に照らされて微かに輝く……
「フィーネ」
私はフィーネをもっと近くに抱き寄せた……そして、彼女の髪を撫でながら……柔らかい唇に優しくキスをした。
それは……二人の気持ちが通じ合った瞬間だった。その瞬間は何よりも尊く……大切な瞬間だ……
心と心がつながって……愛し合う……それが具現化した瞬間なんだ。
私達に言葉は必要無かった。お互いが触れ合うだけで愛しく思う気持ちが伝わってくる。
ずっと、傍にいたい……一緒に過ごしたい……そんな想いが私達の心を強く……強く駆け巡る。
何があっても、私達の心は離れない。どんなに辛い事があっても……苦しい事があっても……
誰にも邪魔はさせない。私達は誰よりも愛し合っているから……
……命ある限りはフィーネと共に生きよう……私はそう決意した。

穏やかな風が私達を包み……湖の細波が祝福してくれた。星は流れ、月は微笑みかけてくれる。私達は、時が経つのにも気付かず……抱き合って、何度もキスをして……夢中で愛を確かめあっていた。

The Heart of Eternity is beginning in this time……

〜街への帰還〜

私達が、我に返ったのは夜空が段々と白み始めたのに気付いたからだ。すると、何だか少し恥ずかしくなった。

「あっ……私はずっとルナさんの傍にいていいんですよね……？」

その様子に気付いたフィーネが、少し不安がってそう訊いた。

「勿論だよ。フィーネがいるから、私は戦い続ける勇気が沸いてくるんだ。それに……君は初めて私が好きになった人だから」

私は、照れながらも安心させる為に正直な言葉を伝えた。リバレスが此処にいなくて本当に良かった。

「……えっ……ルナさんみたいな素晴らしい人が……！？でも……嬉しいです」

本当に嬉しそうだった。天界で恋をした相手がいない事が嬉しいのか、今、自分自身が愛されている事が嬉しいのかは分からないが。

その後、手をつないで歩いてリウォルの街へと向かう途中で突然何者かに声をかけられた。

「遅いー……！」

その声は紛れも無くリバレスだった。私達は咄嗟につないでいた手を離したが……

「もー……バレバレなのよー……仲良くするのよー！」

と、渋々顔のリバレスが飛んできて私の指輪に変化した。その様子に、私とフィーネは声を上げて笑ったのだった。

そして、朝焼けに染まる頃……クタクタに疲れた私達はリウォルの街の宿に帰って熟睡した。

午後三時頃……

「コンコンコン」

私達の部屋のドアを叩く音で、私は目を覚ました。時計を見ると、午後三時を過ぎていた。私にしてはよく眠ったものだ。

宿屋の主人だろうか？私は眠っているフィーネはそのままに、そっとドアを開けた。

「どうしたんだ？」

私がドアを開けると、其処には風格のある初老の男とその付き添いの者が二人立っていた。宿の者じゃないな。

「一つお伺いしますが……リウォルタワーは貴方達が沈めてくださったのですか？」

初老の男が私に尋ねた。その表情からは、何を言いたいのかを察することは出来ない。

「まぁ、そういう事になるかな。それが、どうかしたのか？」

私がそう言った瞬間だった。

「やはり！街の者が、塔へ向かう貴方を見たのです！貴方が向かって数時間後に塔は崩れ去りました。これを偶然とは考えられなかったので……今回、直接貴方の元を訪ねたのです」

初老の男は少し皺のある顔に笑顔を浮かべ、連れ添いの者は手を取り合って喜んでいた。

「それで、他に何かあるのか？」

なかなか本題を言おうとしない男に、少し怪訝な顔をして訊いた。

「私は、この街の長です。今日は、あの忌まわしき塔が消えた記念のパレードを行います！それに、是非主賓として参加して頂きたく此処に参りました！」

随分と頭の低い長だと思ったが……また人間達の祝宴に呼ばれた事に少し戸惑った。

「参加しますよ！」

後ろから声がして、驚いて振り返るとフィーネが立っていた。仕方ない。

「そういう事で、私達は参加させて貰うから宜しく」

私は、長達に少しばかり微笑んだ。あんなに人間を見下していた私も変わったものだ。
「それでは……！今晩六時より、大祝宴会とパレードを行います！時間までに、街の中心の『鉄神殿』にお集まりください！」
鉄神殿……この前には立ち寄らなかったが、街の名物の全て鉄で出来た神殿の事だな。
「あぁ、解ったよ」
私がそう言うと、長達は嬉しそうに帰っていった。
「人間は祝い事が好きねー」
何故か、起きていたリバレスもそう呟いた。
「そんな事はないですよ！ただ、魔の脅威が無くなった事が……それだけ嬉しいんです！私にはよくわかりますから」
フィーネが人間達の気持ちを代弁して微笑んだ。その表情は以前と違った喜びがあるようだ。
「まだ、祝宴まで時間があるし、散歩でもするか」
こうして、私達は時間まで街を散歩することにした。フィーネと二人きりが良かったが、そんなわがままも言えないな……

～一時の安らぎ～

私達は宿を出て街を眺めた。昨日のＳ．Ｕ．Ｎブラスターの傷跡が生々しい……
「あっ！」
街の再建に明け暮れる人々が、私達の姿を見て集まってきた。もう、噂は広まってるみたいだな。
「ありがとうございます、ありがとうございます！」
と、ひたすら感謝する者もいれば……
「あと一日早ければ……あの人は死なずに済んだのに……！」
と嘆く者もいた。また……
「魔物が沢山いるあの塔を沈めるなんて……貴方達は一体何者なんだ！？」
と私達の人間離れした力を疑う者もいた。しかし、概ね塔の崩壊に喜び、街は喜びに満ち溢れていた。
「ルナさんっ！私は、少し街の再建と怪我人の看病を手伝ってきます！」
色んな人に囲まれて、街の様子を見かねた優しいフィーネそう言って走って行く。
「どうも此処には居辛いな……褒められたり悲しまれたり」
フィーネが去って、リバレスと二人になった私達は、この街の外れにある海岸へと向かっていった。
この街からは、全く魔の気配がしないから暫くフィーネから目を離しても大丈夫だろうと思っていた。
「ふぅーやっぱり指輪の姿は窮屈だわー」
段々日が落ちてきている海岸で潮騒を聞きながら、リバレスは元の姿に戻った。
「それにしても……ルナがねー」
と、元の姿に戻った瞬間にリバレスが冷やかすような顔で私をまじまじと見つめた。
「な……何だよ！？」
私は焦って言葉を返す。
「ルナも恋をするのねー」
からかいながら、リバレスは私の頭の上に乗る。
「……見てたのか？」
私は顔を真っ赤にして尋ねた。
「ちょっとねー！ま、でもいいんじゃない。フィーネはいい子だしー大事にするのよー！」
リバレスが私の頬を引っ張った。これじゃあ、まるでリバレスが年上のお姉さんみたいだ……
「……あぁ。解ってるよ」
私は照れながら俯いてそう答えた。やっぱり、見られてたのか……
それから、私とリバレスはフィーネの話や人間界での思い出話で盛り上がっていた。すると……
「噂をすれば何とやらねー……わたしは宿に帰ってるわねー！」
と意味深な言葉に振り返るとフィーネが立っていた！

「あっ……あの……ルナさんとお話がしたいなぁと思って」
両手を前で重ねてもじもじと照れているフィーネだった。リバレスが、一目散に飛んでいく。
「じゃーねー！ごゆっくりー！」
相変わらず……お節介な奴だ。
夕陽が沈もうとする海岸の砂浜で私達は腰掛けた。季節は冬真っ只中になろうとしていた。私が堕天してから毎日どんどん気温が下がってきているのが解る。季節……天界にはそんな物は無いが、その言葉は人間界に来て初めて知ったんだ。
夕焼け雲が美しく、今の私達の心を現しているようだ……
「私は……今、とっても幸せです。ルナさんが私の傍にいてくれるから」
フィーネは恥ずかしそうに私に肩を寄せた。私はその肩を抱き寄せる。
「私もだよ。ずっと一緒に生きよう……フィーネは１７歳。私は１８２６歳。大分年が離れてるけどな」
私は、照れながら冗談っぽくそう言った。
「ルナさんが人間なら、１８歳ぐらいに見えますね。でも……私はどんなに長生きしても１００年も生きられないです」
私はしまったと思った！フィーネがとても暗い顔をした。そうなんだ！どんなに一緒にいたいと願っても……フィーネは人間だから……でも……リウォルタワーの記録であったようにＥＳＧをフィーネに与えれば……！だが、フィーネが天使化する前に拒絶反応で死ぬかもしれない。そんなリスクは背負えない！
「１００年でもいい……私達が出会ってから、まだ一月も経ってないじゃないか！？これから先に何が待ち受けているかは解らないけど……ずっと、ずっと一緒なんだよ。一緒に生きて、幸せになろう。私は君と共に生きる。約束するから」
私は今の思いを必死で伝えた。フィーネが好きだから……悲しませたくないから……！
「はい……、ずっと傍にいて下さいね……私はあなたがいてくれるだけで幸せになれるんです。天国にいるお父さんとお母さんにも、今の私を見せてあげたい……『辛い事もあったけど、私は幸せです』って」
フィーネは、私の手をギュッと握り締めた。その切実な思いが伝わってくる。そして、私もその手を優しく握り返した。
私は、この薄幸な少女を心の底から幸せにしたいと願った。絶対に不幸な目には遭わせない！
「ご両親が見ているんなら、尚更フィーネと仲良くしないとな……魔を倒して、この世界を平和にしたら……一緒に暮らそう。何処か、田舎の方に家を建てて……誰よりも幸せに……！」
私はそう言って、祈るように目を瞑って空を見上げるフィーネに優しくキスをした。昨日から何度口付けを交わした事か……
「はい……、約束ですよ！……ルナさん……、大好きです」
私達は、未来の約束をしていつまでも……いつまでも夕陽を眺めていた。この時間が永遠に終わらないように祈りながら……
そして、今の一瞬一瞬を失わないように愛し合っていた。

～リウォルパレード～
時刻は午後６時。私達はリバレスと合流して、鉄神殿に集まった。外装だけでなく、内装の柱や彫刻に至るまで全て鉄で出来た神殿だ。
その技術力は、天界の住人である私までも目を見張るものがある。
「さぁ、皆の者！リウォルパレードの始まりだ！」
街の長の掛け声と共に、神殿中央の天井からぶら下がっていたクス球が割れて文字が現れた。
『胸に刻もう！この時を！我々は語り継ごう！英雄ルナリートの名を！』
私の名は、宿の名簿で調べたらしい。そんな大袈裟な謳い文句と共に盛大な祝宴は始まった。
私とフィーネは、色鮮やかな花で飾られた滑車のついた台座に座らされて街の人間に囲まれながら、街中を練り歩いた。
「ふふふ……こんなに盛大に祝ってくれて嬉しいですね。まるで、私達二人をお祝いしてくれてるみたいです」
隣の台座に座るフィーネは少し恥ずかしそうに、私の膝を叩いた。

「あぁ。本当だな。いい思い出になりそうだ」
フィーネは、昨日買った花嫁のような白いドレスに着替えていた。今日のこの時に是非、着たかったらしい。
私達は、街の人々が喜びに乱舞する中を通り抜けながら、祝杯を飲んだ。本当に、私達の結婚式を行っているみたいで少し照れくさかった。
「フィーネ……、綺麗だよ」
少し酒が回ったのか、私はそんな言葉を呟く……すると、フィーネも潤んだ目で私を見つめて返事をする。
「ルナさん、愛してます」
私達は、手を取って幸せな時間に浸っていた。リバレスも照れているのか、始終言葉を挟まなかった。
そして、私達は神殿の中に戻ってきた。
「ルナリートさん、そしてフィーネさん！あなたの像をこの神殿に作り、この街の守護神として代々崇拝して参ります！」
街長が、その言葉を口にした時私は流石に遠慮したが、満場一致でそれが実行される事に決まった時には止める事が出来なかった。
神殿にいる者も、街の中にいる者も皆楽しそうに酒を飲み、料理を食べ、踊りに没頭する。また、音楽隊の演奏も加わり、祝宴はますます熱を増していった。その光景は、人間達が短い一生を懸命に謳歌しているかのようで、激しいが……少し切なく感じる。
そして、私に酒の飲み比べで挑んでくる者もいたが、私は無敗だった。だが、人間界の酒であれ樽一つ分も飲んだ私は流石に酔いが回る。
「……人間もいいもんだな。あんなに楽しそうに笑ってる」
私は、少し酔いを冷ますべく神殿の端の方に座っていた。此処には誰も来ない。
「そうねー……本当に人生を楽しんでるって感じよねー」
私とリバレスは、天界では無かったその光景を見て楽しんでいた。フィーネはとっくに酔い潰れて、私の膝の上で眠っていた。
「天使は強い力と長い命を持ってるけど、こんなにも一つの事で幸せになれないからな……短い人生でも、これだけ笑えれば幸せだろうな」
嬉しそうな寝顔を浮かべるフィーネの髪を、私はそっと撫でた。
「ルナさん」
夢の中でも、私を想ってくれてるんだな。私は嬉しくなった。
「まー、堕天は２００年間だし、ずっとフィーネの傍にいてあげるんでしょー？」
その様子を見たリバレスが私の横腹を突付く。
「ああ。私はフィーネとリバレスの３人で、ずっとやって行くつもりだよ」
私は、リバレスの頭をポンポンと叩いた。
「ルナも変わったもんねー！？わたしってお邪魔虫じゃなーい？」
その言葉の直後、彼女は嘘泣きのような顔をする。
「お前は、私がいないと生きていけないだろ？お前もずっと一緒だから、心配するなって」
私が、そう言うと嘘泣きの顔は消えて、満面の笑みで飛んできて、私の肩に座った。
街中の人々は、酔い潰れて我が家へと帰っていく……夜は深まり、星空の下を私は宿へと歩いていた。無論、フィーネを抱きかかえて。
人間界に堕ちて、２週間と少し……楽しい思い出ばかりが蘇る。これが刑なら、願っても無いな……
私は、フィーネをベッドに寝かせてから少しの間宿のバルコニーに一人で立っていた。
神の存在を信じていなかった私が、神に願う……

ずっと……この幸せが続きますように……

そして、宝物の懐中時計も開いた。時刻は、午前２時３８分……明日もきっと楽しいから、もう眠ろう。

私の心は満たされていた。他に何も欲しい物は無かった。

しかし、無情にも『運命の歯車』は、私の願いとは関係なく進んでいく……

ゆっくり……ゆっくりと……

第十二節 嵐の前兆

「カラーン……カラーン」

遠くで鐘が響く音で私は目を覚ました。この澄んだ音は、鉄神殿から聞こえる音だ。

「おはよう、フィーネ」

既に起きて、暖炉に火を灯して朝食の準備をしているフィーネに、私は声をかけた。

「あっ！おはようございます！」

彼女は、嬉しそうな顔と共に、美味しそうな朝食をテーブルに運んできた。

今日の朝食は、この街で買ってきたライスという食べ物と、ベーコンと目玉焼き、そしてトマト風味のスープだった。ライスは今までに無い絶妙な味で、他の料理もいつもより格段に美味しかった。フィーネが恋人になって初めての料理だからだろうか？

「今日の料理は最高に美味かったよ。何だか、いつもより心が込められてるみたいで」

私は、頭を掻きながらそう言った。素直な褒め言葉も、何だか照れくさい。

「えっ……！そんな事ないですよぉ！でも、ルナさんに喜んで貰おうと頑張りました！」

フィーネは、両手を頬に当てて顔を赤らめた。これじゃあ、まるで新婚夫婦の朝って感じだな。

その後、楽しく会話をしながら二人で食器を片付けた。しかし、リバレスはまだ眠っている。

「こら！リバレス」

私が、リバレスを起こそうとした瞬間、何故かフィーネが私の服の裾を引っ張った。

「あの……リバレスさんが起きたら……その」

フィーネが顔を林檎のように真っ赤に染めて、ボソボソと囁いた。何だろう？

「どうしたんだ？」

私は、何を言いたいのかわからなかった。すると、フィーネは更に顔を真っ赤にして囁いた。

「……キ……ス……して欲しいです」

恋愛初心者の私には、仕草だけで望んでいる事までは解らない。私はその言葉で、首まで真っ赤になっていたかもしれない。

「ご……ごめん！気付けなかった！」

私は、リバレスが起きるのを少し警戒しながらフィーネと長い時間キスをしていた。こんな時間が何より大切なんだ。

「……今日一日ぐらいは、魔物の事を何も考えずに一緒にいたいです」

キスを終えた後、フィーネはそう呟いた。そうだ、この前の時はＳ．Ｕ．Ｎブラスターで街が破壊されたんだ。

私達が恋人になって二人だけで過ごす一日が欲しい……私も本気でそう思った。この街を出れば、再び戦いの日々が始まり楽しい時を送るのが困難になる。戦いは明日からにすればいい……それぐらいは許される筈だ……

「よし！今日は、一日フィーネの日にしよう……！」

こうして、この日だけは魔の事や戦いの事……辛い事などを全て忘れて楽しく過ごす事にした。

可哀想だが、リバレスは宿に置いて……

私とフィーネは、手をつなぎ肩を寄せて笑い合いながら街を歩いた。買い物をして、クレープやキャンディを食べたり……ベンチに座って、今までの話やこれからの話に花を咲かせたり……どれを取っても、一つ一つが輝く宝石のような時間だった。そして、一日の終わりに私達は夜の海辺に訪れた。風は冷たいが、優しい海の音と、零れ落ちそうな位の星々を散りばめた空が広がっている。

月もまた……たなびく雲の間から静かに海と私達を照らしていた。

「奇跡ですよね……私達がこうして二人で此処にいられるのは」

フィーネは、星空を見上げて囁いた。

「そうだな。これが、奇跡でも運命でもいい……大切にしないとな」
この広い宇宙で、出会えた事に私は唯感謝するばかりだ。
「はい……、私は、魔に脅かされ続けた事も……あなたに出会う為だったなら、寧ろ感謝しています。もし、この世界が平和ならルナさんに力を借りていなかったかもしれないから」
フィーネは振り返って、私の顔を見つめた。フィーネの顔には少しの悲しみと大きな喜びが入り混じっていた。
「いや……例え、この世界が平和でも私は君を好きになっていたよ。絶対に」
私は、フィーネを後ろから抱き締めた。彼女が、私から離れていかないように……ずっと一緒にいられるように……
「……私はこんなに幸せでいいんでしょうか……？何だか少し怖いです」
フィーネが一滴の涙を流した。こんなに優しくて素直な女性を、どうして不幸に出来ようか……
「いいんだよ。辛かった事の何倍も幸せになって……そうじゃないと、私が怒るぞ」
私は、そう言ってフィーネの髪をゆっくりと優しく撫でた……
「ルナさんは幸せですか……？」
フィーネが涙を浮かべた目で少し心配そうに訊いてきた。
「あぁ、勿論だよ。今までの人生で一番幸せだ」
私は、持っていたハンカチでフィーネの涙を拭いて、今度は正面から抱き締める。
「良かった。やっぱり、私は優しいルナさんが大好きです」
フィーネが目を瞑る。微かな光に照らされて頬が、薄紅色に染まって見える。その様子は今までで一番妖艶に思えた。
「フィーネ……、愛してるよ」
私達は、長く……激しく……口付けを交わした。時間を経る毎に、この気持ちが強くなっていくのが解る。
「あっ……！」
その時、フィーネが驚きの声を上げた。私も周りを見渡してみた……
「……雪ですよ」
いつの間にか空には雲が増えていて、其処から粉雪が降ってきていたのだ。
「これが雪というものか……初めて見たよ」
夜闇に微かに煌く白い結晶……風に揺られて舞い落ちるその姿は言いようが無い程幻想的だった。
「ルナさんと出会った、ミルドの丘……あそこもよく雪が降り積もるんです。綺麗ですよね」
段々と視界が白く染まっていく……確かに、綺麗な光景だ……
「綺麗だな。そうか、今頃あの丘にも雪が降ってるかもな」
私は、フィーネの肩と髪に積もった雪を手で軽く掃った。すると、フィーネから笑顔が零れる。
「ルナさんにもいっぱい雪が積もってますよ！」
フィーネも、クスクス笑いながら私の雪を取ってくれた。私達二人は何だか可笑しくなって、暫く笑い合っていた。
「……ふふ……行きたいですね」
柔らかい笑顔のフィーネが、独り言のように呟いた。
「……ん？何処に行きたいんだ？」
私は、指でフィーネの頬を突付いた。すると、何だか嬉しそうな顔をした。
「……ミルドの丘ですよ。初めて出会ったあの丘で、二人でもう一度雪が見たいんです」
雪は小降りになっていた。大地に雪が積もるには、まだまだ足りないようだ……
「あぁ、絶対に見よう……！約束だよ」
全てが始まったあの丘で、あの時とは違う心で二人で雪を眺めるんだ。
「はいっ！約束ですよ！」
フィーネが嬉しそうに、私の頬にキスをした。また楽しみが一つ増えたんだ。しかし……
「（キィィィィーン……！）」
人間には感じられないだろう、強力な殺気を私は感じて青褪めた！

「どうしたんですか……？」
その様子に気付いたフィーネが、心配そうに声をかける。
「いや……何でもない。冷え込んできたし、そろそろ宿に帰ろう」
私は笑顔を作って、フィーネの手を取って宿へと向かって行った。
「（一体……？あの殺気は確実に私達の方に向かっていた。魔の気配はしなかったのに……！）」
私は、背筋が凍るような感じがした。今までとは違った恐怖……そんな感じがした。

「フフフフフ」
この時……誰もいない海岸に、不気味な笑い声が響いていた事を……私は知らなかった。

～思い出の街からの船出～
翌日、長期間滞在していた宿の主人に惜しまれながらも、別れを告げて私達は街長の屋敷へと向かっていた。勿論、これには訳がある。
さっき宿の主人に、この街を出る前に街長の家に寄って欲しいと頼まれたからだ。何か、私達に話しておきたい情報があるらしい。
そして、街外れにあるなかなかの豪邸に到着した。門は鉄で出来ており、獅子の彫刻がされている。庭は３０ｍ四方ぐらいあり、芝生が手入れされていた。私達は、家の扉をノックした。
「お待ちしておりました。どうぞご案内いたします」
この家の使用人らしい礼儀の正しい女性に連れられて、街長の部屋まで案内された。
「どうぞ、お掛け下さい」
私とフィーネは、言われるままに柔らかいソファに腰掛けた。部屋には多数の絵画と、様々な彫像がある。この街は芸術性にも富んでいるな。
「この度は本当に有難うございました！言葉では言い表せない程に、街の人間共々感謝しております！」
街長はソファの前にあるテーブルに頭が付くぐらいに、深い礼をした。本当に、姿勢の低い街長だ。きっと、この長は街の人々と同じ目線でこの街を統治しているんだろう。なかなか出来た人間だ。
「私は、当然の事をしただけだよ。それより、頭を上げてくれ」
私は、長にはもう少し堂々として欲しいと思った。
「そんなに謙虚になさらなくても……！とにかく有難うございました！」
その言葉の後、使用人が温かい紅茶を持ってきた。私はそれを啜りながら、話を本題へと移していく事にした。
「ところで、私達に教えたい情報とは？」
私は少し身を乗り出してそう言った。街長が、とっておきの情報だと言わんばかりに笑みを浮かべる。
「はい、あなた方に是非一度足を運んで貰いたい場所があるのです。心配なさらなくとも、魔物の巣窟ではありません。偉大なる神官のいるフィグリルの街です。この街の神官は、人智を超えた力で人々に救いをもたらしているという話です。一説では、数百年以上も前から生きているという事……もしかしたら、ルナリートさんに通ずるものがあるかもしれません。貴方は、この街に救いをもたらしてくれましたから」
そんな者がこの世界にいるのか……それは驚きだな。神官と言われるといい思い出が無いのだが、一度会ってみるのもいいだろう。
恐らく、特殊な力を持った人間だろう。魂は人間も天使も同じなのだから……
「ルナさん！行ってみましょうよ！きっと、私達を助けてくれますよ！」
フィーネが何だか胸を弾ませている様子だ。魔の討伐には私だけじゃ不満なのか？と言いかけて躊躇った。
「（ルナー……、顔がちょっと恐いわよー！ルナと私だけで魔と戦うよりも、その神官の力を借りたら少しは楽かもよー！）」
其処で、少し不機嫌になった私にリバレスが即座に言葉を挟んだ。本当に鋭い奴だ……
「……そうだな。一度会ってみようか」

私は気を取り直してそう返答した。
「そうですか！それでは、フィグリルへの船を手配しておきますので正午過ぎに船着場へお越し下さい。それと」
長が、使用人に目で合図を送った。すると、純銀に宝飾された豪華な小箱を持ってきてテーブルの上に置いた。
「これをお受け取り下さい。この箱には、『シェファ』と呼ばれる宝石が入っております。ご存知の通り、シェファとは私達の暮らすこの星の名です。星の名を持つこの石は、世界に二つと無い貴重な石で、永遠に美しい虹色の光を放ち続けます。この宝石を、フィーネさんへ贈る指輪の石にでもしてあげて下さい」
その言葉の後に、長は小箱の蓋を開けた。すると、天界でも見たことの無いような美しい光を放つ宝石が現れた！恐らく、これはとてつもなく貴重な宝石なのだろう。流石に気が引けた。そして、冗談にしてもフィーネへの指輪とはまた気の早い事を……
「流石に……そんな貴重な物は貰えないよ」
私はそう言って、箱の蓋を閉じて長に返した。少し惜しい気もするが。
「いいえ！私はリウォルの街の代表として、これを受け取って貰わなければならないのです！そして、貴方達の像を作るのです！」
急に、必死な形相で長が私の手を握った。本当に街の人の願いなんだろうと私は悟った。
「……解った。頂くことにするよ。それでもし……この石がフィーネの指輪になったら、またこの街に来るから」
私はそう言ってから、自分で恥ずかしくなった。それは、私とフィーネは結婚するかもしれないと明言したのと同じだからだ。
「ルナさんっ……！」
フィーネが、横から私の太腿を叩く。彼女は真っ赤になって俯いてしまった。
「（もー……二人ともいい加減にしてよねー……！）」
リバレスの怒った声が頭に響いて、私達は我に返った。
「ハッハッハ……！貴方達の結婚式は、是非この街でやらせて下さい！街中で、盛大に行わせて頂きますから！」
長も、その話に乗ってきて暫く話に収集がつかなくなったが、またリバレスの厳しい一言で屋敷を出て船着場へと向かって行った。

時刻は、１１時半。天気は晴天だ。海の香りと、潮騒が広がる船着場へと私達は到着した。空には、鳥が群れをなして飛んでいる。
今日は、冬ながらも少し暖かかった。しかし、風が吹くと寒さが伝わってくる。きっと、フィーネ達人間はもっと寒さを感じているんだろう。
そんな事を考えながら、私達が船に乗ると、数え切れない程の街の人々が見送りにやって来た。其処には、長の姿もある。
「さぁ、英雄もご乗船だし、お前ら出航だー！」
やけに威勢のいい船長の船に乗り、私達はリウォルの街を離れていった。人々が、私達に向かって大きく手を振る。
私とフィーネにとって、この街は沢山の思い出が詰まった街になった。また、人々もいい人間が多くて楽しい時間を過ごせた。
そして、何よりこの街は活気に溢れている。この様子なら、街の傷跡もすぐに治る事だろう。
「ルナリートさん！この船は北東にあるフィグリルへの最短ルートを通らずに、南側から迂回して行きますんで宜しくっ！最短ルートでは、『死者の口』に近付くんで危ないんですよ！航行距離は、東に６００ｋｍ、北に４００ｋｍの合計１０００ｋｍ！明後日の夕方には到着予定なんでゆっくりお休みになって下さいよ！」
航行距離が今までで一番長いな……それでも、今回は乗組員がいるので安心だが。今回の船は規模が大きく、他の乗客も１００人ぐらい乗っている。全長は２５ｍ程の中型船で、私達は一等客室に案内された。明後日まで過ごすのには申し分無い程、豪華な作りだ。本棚もあれば、テーブルも椅子もある。勿論照明も完備されていた。しかし……たった一つ問題があった。何故か、ベッドが一つしかない。

「ベッドが一つしか無いな……枕は二つあるのに……？」
私は、その光景が異様に見えた。街長の手配ミスか何かだろうか？
「ルナさんっ！これは、あの……結婚した二人が眠るダブルベッドですよ！」
フィーネがそのベッドを見て、恥ずかしそうに目を伏せた。
「……街長……余計な気を回して……！仕方ない、別の部屋を借りよう」
流石に、このベッドは私達には早いと思った。一緒に眠るのは……全ての戦いが終わってからだ。私は、そう思う。
「ルナー！いいのー？せっかく、街の人が気を遣ってくれたんだから、別の部屋を借りるのは悪いんじゃないのー？」
元の姿に戻ったリバレスが、ニヤニヤ笑いながら私にそう言った。しかし、私はそんな言葉には惑わされない。
「……私が良くても、フィーネに悪いだろ？こういう事は大切にしないと駄目なんだ！」
私は少し顔を赤らめて怒ったような口調でリバレスに返答した。そして、部屋を出ようとすると……
「ルナさん。私はこの部屋でいいですよ」
驚いた事にドアノブに手をかけていた私へ、林檎よりも顔が赤いフィーネがそんな事を言った。まさか、彼女の口からそんな言葉が出ようとは……！？私は暫く言葉が出なかった。すると、フィーネが更に言葉を続ける。
「私は……ルナさんを信じてますから！」
成る程、そういう事か。私が、フィーネには何もしないという事を信じているんだ。それじゃあ、その期待には応えなければな。
「解ったよ、でも私は床の上で寝るからな」
それが精一杯の、私なりの努力だった。しかし……
「ルナさんが床で眠るんなら、私も床で眠りますよ！ルナさんにだけ辛い思いはさせられませんから……！」
フィーネが、驚く程強い口調でそう言ったので私は困った。
「（フィーネは恋人なんだし、一緒に眠りに就く位はいいんじゃないのー？わたしとルナだってよく一緒に眠ってたじゃない。）」
それもそうだ。唯、睡眠を共にするだけじゃないか。私の考えすぎか……
「解った。今日、明日はこのベッドでいいよ……でも、この次に同じベッドで眠るのは……戦いが終わってからだよ」
私は、内心照れながらもそう言って微笑んだ。すると、フィーネの顔も笑みに染まる。
「はいっ！」
この日は、海を見ながら昼食を食べ、３人でゆっくりしていた。そして、夜になって部屋に運ばれてきた豪華な夕食が終わると、あっという間に時刻は夜の１０時位になっていた。すると、フィーネとリバレスが女どうしで話がしたいと言っていたので、私は止む無く一人で甲板に出てきた。空は……昼間の快晴とは違って、厚い雲に覆われていた。何だか少し海が時化ってきた気がする。
「明日で１８日目か」
私は一人で呟いた。明日は、堕天してから人間界で過ごす１８回目の日なんだ。天界での１８日なんて、ほんの一瞬に過ぎないのに……
この人間界ではどれ程多くの事があった事か……でも、その全ての記憶にはフィーネがいる。丘で倒れてから目覚めた時も……魔と死闘を繰り広げた時も……海で死にかけた時も……そして、一人の女性を愛する事を知った。今まで味わった事の無いような温かい心に包まれた。……それは何と素晴らしい事か。天界は住むのには快適だが、自由を束縛された世界だった。人間界は、生きていくのに多少の苦労を伴うが、全てが自由な世界なんだ。私が求めていたものがこの世界にはある。
必ず、フィーネを幸せにする。
それが、例え天界の教えに背いていたとしても……
私に『生きる本当の意味』を教えてくれたのは君だから……

宝石のシェファで指輪を作ろう、それを私は君の指に通す……
それから一緒に暮らすんだ。全ての戦いを終えた後になるけど……

私は、一人で暗い海を見ていた。すると、雨がパラパラ降り出したので船の中へと戻った。中に戻ると雨の勢いは増して、滝のような勢いになっていた。暗い海と激しい雨……船窓から見えるその光景は、何故か物悲しく思えた。全てを吸い込みそうな闇の海が、空が落とす無数の涙を受け止めているように見えたからだ。心が急に穴が開いたように寂しくなったので、私は急いで部屋に帰る事にした。
「お帰りなさい！」
其処には、いつもの笑顔を湛えたフィーネが待っていた。私の心が瞬時に満たされる。
「フィーネ！」
私はリバレスがいるのにも関わらず、フィーネを抱き締めた。
「どうしたんですか？私は此処にいますよ」
フィーネが私の背中を優しく撫でてくれた。私にはもう……君がいないと駄目なんだ。
この晩、リバレスはソファの上で眠り……私とフィーネは同じベッドで眠った。
二人して、寄り添って……何処にも行かないように……髪を撫でながらキスをして眠った。

～嵐の中で～
「ドンドンドン……！」
ドアを激しくノックする音に私は目を覚ました。そういえば、天界でも同じような音で目を覚ました事がある。
「ルナリートさん！大変です！魔物が……！」
魔物……！？それは大変だ！私は、ベッドから抜け出し剣を持った。傍らに置いてある時計は、まだ午前６時にも達していなかった。
「あれ……ルナーどうしたのー？」
リバレスが寝ぼけ眼を擦ってソファから起き上がった。
「リバレスさん！魔物ですよ！」
私とほぼ同時に目を覚ましたフィーネがそう答える。
「二人は此処にいろ。もしもの時は、リバレスがフィーネを守ってやってくれ！」
私は、二人を安全な場所に置いて出発する事にした。全く……ドアノックで起こされる朝はロクな事が無い。
「ルナさん！気をつけて下さいね……！」
フィーネが心配そうに表情を曇らせて私を見送る。その顔は今までに無いくらい不安に満ちている。
「大丈夫だから。すぐ戻ってくるよ。約束する」
私は、微笑んでからドアを開けて外に出た。其処には、真っ青な顔をした船員がいた。腰が抜けているのか、その場に座り込んでいる。
私は神経を集中した。すると、船の甲板の方に魔の気配を感じた……！気配は複数いるようで、なかなかの力の持ち主だ……！
しかし、魔を倒さないとフィーネも守れない！私は、自分にそう言い聞かせて甲板への階段を走り抜けた……
「ビュオオオオオー……！」
甲板に出ると、物凄い雨と風が吹き荒れる大嵐だった。船が右へ左へ激しく揺れる！立っているのもやっとだ……
嵐の所為もあるが、時刻がまだ早かったので辺りはまだ暗かった。だが、微かな明かりの中で転がっている人影を見つけた……！
「大丈夫か！？」
船員だった。血塗れで……瀕死の重傷なのは一目で解る。
「……はい……、僕の事は放って置いて、魔物を……！」
そう言って、船員は気を失った。魔の気配はするが、姿が何処にも見当たらない！

「バシュッ！」
一瞬、そんな音が聞こえたと思ったら、私に槍のような物が飛んできた！私は咄嗟にそれを剣で弾く！
「海の中か……？」
私は揺れる船上を走り、手摺に捕まって海を見た。すると……！
「ギャギャギャァァァ……！」
船の周りを、異様な魔が異様な金切り声で叫びながら囲んでいる！その数１００体以上……！その姿は……体色は黒褐色、全身が鱗に覆われている。まるで、魚と人間のような形を融合したような異形の姿だ……
「ギャッギャー！」
私を見つけた魔は、一斉に魔術で作った槍を私の方に投げた！１００本の槍が私に向かう……！避けきれない！
「中級神術……『結界』！」
私は、自分の周りだけに密度の高い強力な結界を張った。魔の槍が私に届く前に全て消滅する！
「低級魔が……これでも喰らうがいい……！」
私は結界を解き放ち、海に向かって精神を集中した。
「高等神術……『雷光召喚』！」
そう言った瞬間、空中に強力な電場が発生する！
「バリバリバリッ……！」
船の周りの海に、荒れ狂う雷が落ちた！海の成分は電解質で、電流をよく通すのを私は知っていた。
「ギャァァァァァァァ……！」
一層高い金切り声の叫びと共に、魔は海の藻屑と化していった。
「ヨクモ……テシタヲォォォォ！」
魔を全滅させて油断していた私は、手下と同じような姿をした敵の首領に背後を取られているのに気付かなかった！
「くっ……！」
魔は、私を羽交い絞めにする！とてつもない力で絞められた私は剣を落とした！今の私の力では動けない！
神術を発動させるのにしても精神力を使い過ぎていた。何という事だ……！
「ヒャハハハ！シネェェェェェ！」
魔が、尾を伸ばして槍の様な形状にしているのを、私は後ろ目で見た！万事休すか……！
「ヒュッ！」
鋭い槍が私の頬を掠った！必死の思いで体を捩って、何とか直撃は免れたが……次は無い！その瞬間……！
「（キィィィィィィーン……！）」
リウォルの波打ち際で感じたのと同じ殺気を感じた……！こんな時に別の敵か……！
「パキィィィィーン……！」
そう思った瞬間だった。まるで、ガラスが砕けるような音がして私を絞める力が弱まった！即座に私は振り返る！
「フェアロット……サマァァァ！」
すると……其処には意味の解らない断末魔と共に、魔が氷の彫像と化して砕け散っていく姿があった。フェアロット……？
誰の事だ……？いや、それよりも今の魔への攻撃は……！？解らない事が重なって……私が呆然としていると、既に先程の殺気は
完全に消えていた。すると、私は殺気の正体に意識が集中した。
「……私を守ったのか……？……これは、高等神術『絶対零度』……？」
完全に、魔のみを狙った攻撃だった。この凍り具合といい、エネルギーといい……神術の『絶対零度』の跡に酷似していた。
しかも、こんなにも狭い範囲で此処までの力を発揮出来る者は、皆無に等しい……リバレスは高

等神術を使えないし、私でさえ此処まで
正確に……完璧な氷の神術の発動は出来ないのだ。炎を操る神術には自信があるのだが。
「いや……それよりも……私とリバレス以外に神術を使える者がいるのか……！？」
私は思った事を、無意識に口にしていた。それ程の驚きだったのだ。完全無比な氷の神術……
「まさか……いや違う！」
脳裏に一筋の推測が立ったが、私はそれをすぐに打ち消した。それを真実にすると恐ろしい事になるからだ。
私は、さっきの怪我をした船員を医務室まで運んでから戻る事にした。幸い……時間が早い所為もあって、人間離れした戦いを見た者はいなかった。気がつくと、午前7時前になっていて日が昇り始めた。嵐は殆ど収まって、船は安定した旅を続けられそうだ。
部屋に戻ると、泣き出しそうなフィーネが私に飛びついてきた。
「ルナさんっ！心配しましたよぉ……！」
私に抱きつき、フィーネは号泣した。余程、心配だったんだろう。私は、頭を優しく撫でる。
「約束したじゃないか……心配かけてごめんな。リバレスもありがとうな」
テーブルの上に座っているリバレスもうっすらと涙を浮かべていた。きっと、私の肩にでも飛んで来たかったのだろうが、フィーネがいるので我慢しているようだった。この日は、一日中『殺気』の正体を考えていて上の空だった。
そして、夜になってベッドに入って、リバレスが眠りに就いたのを確認してから……突然フィーネが私に話しかけた。
「ルナさん……、一体何があったんですか……？朝から様子が変ですよ」
私の右に寝ていたフィーネが、私の方を向いて訊いてくる。暗がりではっきり解らないが、心配している顔だ……
「……鋭いな……私の様子はそんなにおかしかったか……？」
私もフィーネの方を向いた。お互いの吐息が届く距離だ……
「……はい……、ずっと考え事をしてるみたいで……心配なんです」
そう言われると嘘はつけないな……でも、曖昧な推測でフィーネを不安にさせるのはもっと可哀想だ……
「……ただ、目に見えない敵が恐ろしかっただけだよ。でも、私は何があってもフィーネを守るから……！」
我ながら、余計に不安感を与えそうな返事だったに違いない。しかし、こう言うしかなかった！
「……目に見えない敵……ですか？リウォルの海辺で感じた……恐ろしい空気の事ですよね……？」
何と、フィーネはあの時に気付いていたのだ！私は驚いて目を見開いてしまった！……もう隠せない。
「……ああ、そうなんだ。でも……あれが誰であろうと、私はフィーネを守る！誰にも邪魔はさせない！」
私はそう言って、フィーネを抱き寄せた……今までの不安感を拭い去るように……
「……私は……ルナさんを愛してます。でも……あなたは何処か遠くに行ってしまいそうで」
フィーネは、そう呟くと啜り泣きを始めてしまった。私は、フィーネを強く抱き締める。
「私もフィーネを愛してる。私は命を懸けてでも……君を放さない。そして何処にも行かないよ。……約束する！」
私は優しく……そして強い口調でそう言った。何一つ偽りの無い真実の言葉だ……
「……はい」
私は、フィーネの涙を私の手で拭った。そうすると少し、不安が消えてきたみたいだ……
「フィーネ……、大好きだよ」
「……私もルナさんが大好きです」
それから、私達は優しく……激しく唇を寄せ合った。長く……長く……
そして私は、フィーネが安心して眠りの世界に入るまで……優しく抱き締めて頭を……そして背中を撫で続けた……
あどけない笑顔を浮かべて眠るフィーネを見て、私は決意を更に強固にした。

誰にもこの幸せは邪魔させない！例え全ての天使に忌み嫌われたとしても……！

聞こえるのはフィーネの寝息と、安らかな海の音だけだった。
見えるのはフィーネの寝顔と窓の月だけだ……
何も心配なんかいらない。

そうして、私もいつの間にか眠りの世界へと引き込まれていった。
殺気の正体……フェアロット……いずれも私が出会う運命にあるとは知らずに……

第十三節　永遠の約束

翌日……夕陽に海が染まる頃、フィグリルの街の港が見えた。時刻は午後５時くらいだ。遠目に見るその街は、建物が全て白亜の壁で出来ている美しい街だ。大きさも、リウォルの街と並ぶ程の規模らしい。この街の特色は、交易が盛んな事にある。リウォルにも珍しい品々が集まっていたが、それ以上にフィグリルは世界中のあらゆる品が揃うらしい。そして、もう一つの特色が……今回の目的でもあるのだが、人間を救っているという神官がいる事だ。
「あっ、港が見えてきましたね！私もフィグリルの街に来るのは初めてなんですよ！」
フィーネが甲板の手摺に掴まって、身を乗り出しながらそう言った。
「おいおい、あんまり身を乗り出したら危ないぞ」
そう言いながら、私も一緒に身を乗り出していたのだが……
「真っ白で綺麗な街ですね」
フィーネは、感嘆の溜息を漏らしながら更に身を前に出した。すると！
「キャッ！」
「危ない！」
フィーネが手摺から海に落ちそうになった所を、私は片手でギリギリ捕まえた。
「……相変わらず、フィーネは向こう見ずなんだから。しっかりしてくれよ！」
「（フィーネらしいけどねー！）」
私達二人に同時に責められて、フィーネは甲板の上で一人落ち込んでいた。
「ごめんなさい……反省してます」
私は、怒ってはいなかったのだが、フィーネが余りにも悲しそうな顔をするので慰められずにはいられなかった。
「大丈夫だって。誰だって失敗ぐらいするよ。特にリバレスと比べたら、フィーネはまだまだ大丈夫だ」
私がそう言った瞬間だった。
「痛い……痛い！」
指輪に変化していたリバレスが更に小さく縮んで、指を締め付けたのだ！
「（誰が、いつ失敗したのよー！）」
リバレスが怒る表情が脳裏に浮かんだ。それより、痛い！
「ごめん、ごめん！私が悪かった！」
私は指輪のリバレスに叫んだ。痛くて、思わず指輪のリバレスを叩く……
「ふふふ……相変わらず、仲がいいですね。何だか羨ましいです」
フィーネは、この光景を見て微笑んだ。良かった、笑顔に戻って……でも……！
「リバレス、本気で痛いから！」
そんなやりとりが続いていると、船はいつの間にか港に停泊していた。船員に呼びかけられて、私達は急いで下りた。
「此処がフィグリルの街か……え！？」
港から、街への入り口に入ろうとして私はある事に気付いた！
「どうかしたんですか？」
フィーネが首を傾げて、私に尋ねた。それもそうだ、気付く筈が無い。
「（これはどう見ても、結界よねー……）」

そうだった。これは結界だ。街の入り口のアーチから下……いや、地面から結界が張られている。違う……！街全体が結界に覆われているのだ！街の直径は軽く４ｋｍはあるだろう。その全てが結界に包まれているのだ！途方も無い力だ！

「フィーネ……、この街は魔物に襲われたりしないだろう？」

私は驚きを隠せず、私の目が正しいかどうか確認する為にそう訊いた。

「はい……、フィグリルの街は世界一安全だって聞きますから……それがどうしたんですか？」

やはりそうだった。この結界は、魔を通さないようにする為の強力な結界。こんな結界を張れるのは……

「この街には、強大な力を持った天使がいる。噂の神官がそうかもしれない」

私は、天使がいるという推測……いや確信をフィーネに語った。救いをもたらす神官が天使……？それにしては、こんなに強力な力を持って堕天したという天使を、私は聞いた事がない。それよりも、今現在……人間界にいる天使は私だけなのに……頭ではそう思っても、この結界を見ると天使の仕業としか思えなかった。

「それなら、早く会いに行きましょう！きっと、私達の事を助けてくれますよ！」

フィーネは結界を越えて走っていった。全く……その癖は直らないんだな。私は溜息をついてフィーネを追いかける。

辺りはすっかり暗くなって、街には街灯が灯っていた。走る地面は整然と舗装されており、天界のそれを彷彿とさせた。また、街灯に照らされる白亜の家々は、まるで大理石のように美しかった。走っていく中で、家の窓から見える家庭の風景が温かかったのが印象的だった。

～思い出の天使～

途中で走りつかれたフィーネを掴まえて、私達はフィグリルの神殿へと向かっていた。街の入り口から真っ直ぐに北へと進む……

中央の噴水広場を抜けて、左右に規則正しく街灯が並ぶのを見ながら、私達は神殿の前まで来た。神殿の奥の方から、強い力を感じる。

「この中に天使がいる」

私は独り言のように呟いた。すると、神殿の入り口の衛兵二人がゆっくりとこちらへ近付いてくる。

「失礼ですが……あなたは、もしやルナリート様ですか？」

何故、私の名を知っている？と言いそうになったが、恐らく誰かが連絡しておいてくれたんだろうと思い直した。

「あぁ、私がルナリートだ」

私が短くそう返事すると衛兵は顔を見合わせて私に深く礼をした。

「ルナリート様！神官がお待ちです」

そう言われて、私達は衛兵の後ろに付いて行く。白い神殿の内部は……歩くべき所には赤い絨毯が敷かれてあり、壁には整然と燭台が並ぶ。更に、大理石と思われる彫像が幾つも並んであった。神殿の上層部へと通じる階段は螺旋階段……本当に天界の建物に似ていた。

「ギィィィィ」

そして……神官の待つ扉が、音を立てて開く……

「待っていたぞ……ルナ！」

部屋の奥の椅子に座る神官……まさか……！

「ハルメス……さんですか！？」

私は、中年くらいに見える神官の傍まで一気に駆け出した！まだ自分の目を信じられなかったからだ。

「おぉ、ルナは大きくなったな。俺は正真正銘、ハルメスだぜ」

私は、その言葉を聴いた瞬間……懐かしさに涙が溢れた。

「ハルメスさん……、よくぞご無事で……！」

私は、大理石のテーブルの上で重ねているハルメスさんの手を握り締めた！

「おいおい、泣くなよ……でも懐かしいな。１０００年振りの再会って訳だ」

少し年を取って見えたが、間違いなくハルメスさんそのものだった。耳が見えるくらいに切り揃えられた、銀の髪……そして蒼の瞳……

「はい……、ハルメスさんが、神官によって存在を消されてから１０２８年と１４５日……貴方の事は片時も忘れてはいません！」
　私は溢れ出る涙を拭った。そして、ハルメスさんにもらった銀の懐中時計を、胸の内ポケットから取り出す。
「おぉ、まだそれを持っていてくれたのか……！ありがとうな。俺は、お前達には知らされずに人間界に飛ばされた。あれから１０００年……早いもんだな。お前が成長したように、俺も年を取ったよ……今じゃあ、３６４７歳になっちまった」
　ハルメスさんは、再会した事で照れくさそうに笑った。
「私……いや、僕も今では１８２６歳です。貴方が、天界の教えに反発して神官に裁判を起こされた時は泣きましたよ……更に、僕達は裁判を傍聴する事も出来なかったですから……僕達が兄のように慕っていた貴方の行方は、誰にも知らされなかったんです！」
　私の一人称が……この人の前ではおかしくなる。でも、ハルメスさんが生きていてくれて……再会出来て本当に嬉しい！
「でも、お前が此処にいるって事は俺のように堕天したんだろう？俺の考え方を、ルナだけは理解してくれていたからな」
　少し皺の出来た顔でハルメスさんは申し訳無さそうな顔をした。何でもお見通しだな。
「はい……、僕は貴方の意思を受け継いで、天界で神官と戦ったんです！それで、天界を変える事が出来たんですよ！」
　この事を一番聞いて欲しかった人に、ようやく今伝える事が出来た……胸が一杯になる！
「……そうか！ようやく……まぁ、積もる話は後でゆっくりするとしよう」
　私はハルメスさんを前にして話したい事が山程あった。しかし、会話に参加する事が出来ないフィーネとリバレスにも気を遣わねば……
「もう一つだけ聞かせて下さい！何故……貴方は堕天の刑に服していたんなら、連絡してくれなかったんですか！？堕天の期間は、恐らく満了している事でしょう？」
　私はどうしてもそれを聞きたかった。ハルメスさんは、死んでしまったのかもしれないと心配していたからだ！
「……それについてはすまないと思ってる。俺は、１０２８年前のあの日……堕天の刑を受けた。期間は５００年……でもな、堕天してから１００年間、人間界を全て見て回ったよ。その中で、一人の人間の女性に恋をした。その人と過ごした。天使にしては短い年月……それでも幸せだった。そして、人間界が好きになったんだ。俺は、そんな日々の代償に『天使』の指輪を失った。だから、天界には帰れない。いや、帰らないと言った方が正しいな。俺は、これからも人間と共に生涯を全うするつもりだ」
　遠い目で、ハルメスさんはそう語った。その淡々とした口調の中に隠されている強い意志を私は感じた。
「……そうだったんですか。僕もその気持ちは少しわかります」
　私は、横にいるフィーネを見ながらそう答えた。私も、フィーネの命の為ならば『天使の資格』など安く感じるだろう。
「なる程な。本当に、お前は俺にそっくりだよ。強い心を持った顔つきも……考え方も……隣には人間の女性もいるしな」
　ハルメスさんは、目を細めて私とフィーネを見て何度も頷いていた。
「……僕はハルメスさんを目標にして生きてきましたから。でも……僕は、堕天の２００年が終われば、きっと天界に帰ると思います。
僕は、この世界で永住出来る程の強い心は持っていないですから」
　私は少し俯いて、謝るようにそう言った。２００年後にはきっとフィーネはいない。だから、きっと元の世界に戻るだろう。
「いいんだ。お前に永住なんて強制出来はしないさ。でも……２００年なんてあっという間だぞ、経験者の俺が言うんだ。それはそうと……そちらの女性と、お前の指輪に変化している天翼獣も紹介してくれないか？」
　この人は、昔から鋭かった。この人の前では、隠し事なんて何も出来はしない。
「フィーネです。ミルド村から来ました。宜しくお願いします」
　そう言って、困惑顔をしているフィーネは深く頭を下げた。

「（何で解るのよー！？）リ……リバレスです。初めまして」
元の姿に戻って、驚いた顔をしながらリバレスは躊躇いがちに挨拶をする。
「はっはっは……いい仲間達だ。お前も、今は人間界が楽しいだろうなぁ」
私達の様子を見たハルメスさんは嬉しそうに笑った。
「はい……、思ったよりもずっといい世界ですね。それに、僕は今『魔』と戦っています」
私は、チラッとオリハルコンの剣の柄を見せた。
「ああ、お前の話は聞いていたよ。会いに行きたかったけど、俺はこの街に結界を張ってるから、なかなか離れられなくてな」
確かに、この街には巨大な結界が張られている。あれ程の力を維持するんだ。離れられないのも無理がない。
「そんな事は気にしなくていいですよ！今、こうして再会する事が出来たんですから！」
私は、思わずそう声を上げた。会える筈の無い人に会えたんだ、理由なんてどうでもいい。
「ははっ！そうだな。今日は、宴会にしよう！神殿の者達に用意させるから、お前達は来客用の部屋でゆっくりしていてくれ！」
そうして、私達は神殿で一番豪華な客室に案内された。ベッドが三つと、本棚。更に天井にはシャンデリアが吊るされている。
部屋に入ると、疲れたような声でリバレスが私に話しかけた。
「もー！ルナ！あの天使とはどういう関係なのよー！？」
話が全くわからなかったのだろう。無理もない。
「あの人は、１０００年ぐらい前に私がとてもお世話になった人だよ。私にとっては、兄みたいな……お前が生まれる前の話だから、無理もないな。私が、いつも持っている時計と本……あれをくれた人だよ」
私は、ハルメスさんの事を簡単に説明した。全てを話すには時間が幾らあっても足りない。
「ふぅーん……ルナ、言葉遣いが元に戻ってるわよー！さっきは、『僕』って言ってたくせにー！」
余り興味が無いのか、私の言葉の方をからかうように指摘してきた。
「そうだなぁ……あの人の前では、どうも自分がまだ子供のように思えてくるんだ。あの時は、私は学校にも行ってなかったからな」
私は苦笑を浮かべながらそう答えた。私のこんな所を見せるのは、フィーネは勿論リバレスにも初めてかもしれないな。
「あのぉ……私には何が何だか全く解らないんですけど」
其処で、首を傾げているフィーネが私に問いかけた。確かに、私とハルメスさんの事……そして、１０００年前の天界の事は最初から説明しないと解らないと思い、ハルメスさんに宴会に呼ばれる迄の時間に説明する事にした。

～１０００年前の出来事～
時は遡り、１０２８年前……私が７９８歳の時の話だ……

今日も、僕は朝の８時に起きた。此処は、天界の孤児院。僕は生まれた時から、両親がいなかったのでずっと此処で育っている。でも、寂しくなんかはない。だって、ハルメス兄ちゃんがいるから。兄ちゃんも孤児院で育って、年は２６１９歳。僕より、１８２１歳も年上なんだ。兄ちゃんは１０００歳の時から学校に行っていて、トップの成績を取っているらしいけど、僕にはそんな事関係ない。学校が終わって、兄ちゃんが孤児院に来てくれる事が何よりの楽しみだから。兄ちゃんは、優等生宿舎が与えられてるらしいけど毎日孤児院に帰ってきてくれる。でも、兄ちゃんが帰って来るのは夜だから、僕は遊びに行く事にしたんだ。
「ルナッ！」
僕が、孤児院を出て噴水広場に来た時だった。この前友達になったジュディアに声をかけられた。
「ジュディア！一緒に遊ぼうよ」
ジュディアは、ちょっと年上の９１６歳。可愛くて、賢くて僕のお姉さんみたいだ。
「うん！そう思って、此処に来たの！」

顔一杯の笑顔で、ジュディアは微笑んだ。ジュディアには、お父さんもお母さんもいて羨ましいけど、ハルメス兄ちゃん以外で、僕と初めて友達になってくれた天使なんだ。こうして僕達は遊ぶ事になって、子供の遊び場の森まで歩いた。それで、何をして遊ぼうか考えてると、突然意地悪そうな男の子に声をかけられたんだ。

「何だ、お前男のくせに女と遊んでやがる！アハハハッ！」

「ハハハッ！そうですよねぇ、セルファス君！」

年の割にちょっと大柄な男の子、そしてそれに付き添う眼鏡をかけた細身の男の子……彼らが、後に友人となるセルファスとノレッジだった。

「何よっ！私がルナと遊ぶのがそんなにいけないことなの！？」

其処で、僕の事を守ろうとジュディアが強気でその二人の前に立ち塞がったんだ。

「おう！お前も女なら、他の女の子と遊べよ！俺は後ろの男に用があるんだ！どけ！」

セルファスっていう男の子が乱暴に、友達のジュディアを手で押しのけた。

「キャッ！ルナ、逃げて！」

押しのけられて転んだジュディアが、僕を逃がそうと叫ぶ。でも、僕は何もしてないジュディアが傷付けられるのが許せなかった。

「喧嘩は止めて仲良くしようよ！」

僕が叫んだのにも関わらず、僕はセルファスとノレッジに囲まれた。

「男のくせにだらしない事ばっかり言いやがって！その根性叩きなおしてやるぜ！」

そう叫んで、二人は僕に殴りかかった。でも……

「僕はみんなと仲良くしたいんだよ！」

僕は二人の拳を指一本で止めていた。僕は、みんなと違って凄い力があるんだ。それで、みんな僕を恐がって友達になってくれない。

唯一友達になってくれたジュディアも、お父さんが『命を司る間』の司官で、お母さんが『神術を司る間』の司官。両親が強い権力を持ってるから、他の子供達の両親も恐がってジュディアと遊ばせなかった。だから、家を出たら一人ぼっちの僕達が友達になったんだ。

「お前……強いな！友達になろうぜ！」

「セルファス君！……まぁ、セルファス君が言うんなら友達になりましょう」

僕はこの二人も逃げると思ってた。でも、友達になってくれるって言ってくれた！

「うん！友達になろう！でも、その前にジュディアに謝ってからだよ」

僕がこう言って、二人はジュディアに何度も謝った。それで、僕達は仲良しになったんだ。セルファスは８３８歳、ノレッジは７００歳みたい。

もちろんその事は、帰ってきたハルメス兄ちゃんにすぐ伝えたよ。

「ハルメス兄ちゃん、僕今日友達が二人も増えたんだ！」

僕は兄ちゃんにニコッと笑いながら言った。

「おぉ！ルナ、それは良かったなぁ！」

兄ちゃんも自分の事のように喜んでくれて、僕の頭を撫でてくれた。

「兄ちゃん、学校は大変なの？」

僕はちょっと疲れている兄ちゃんの顔を見てそう訊いた。

「そうだなぁ、勉強は難しくないんだけど……俺は自由を奪う教えは間違ってると思うんだ」

兄ちゃんは、いつもの通り僕に自由の在り方について教えてくれた。僕はそんな兄ちゃんの考え方が好きだ。

「ルナ、でもこんな事を他の天使に言っちゃダメだぞ！恐い神官に捕まるからな！この本は、俺が書いた本だけどお前にやるよ」

僕は、この時兄ちゃんの書いた『自由と存在』っていう難しい本を貰った。内容は、今は解らないけどとっても嬉しかったよ。

「ありがとう、兄ちゃん！一生大事にする！」

僕は、そう言って兄ちゃんに抱きついたんだ。

「大袈裟だって！それはそうと、友達が増えて良かったなぁ！」

兄ちゃんは照れてたけど、嬉しそうだった。

僕はそれから暫く経った日に友達を連れてきた。すると、兄ちゃんはとても喜んでくれたよね。

兄ちゃんは、ジュディアにもセルファスにもノレッジにも慕われてた……僕だけの兄ちゃんじゃ

無くなった気がしたけど、そんな日々が楽しかったんだ。

あるレッドムーンの日……

今日は、大人達が外に出ない不吉なレッドムーンの日。でも、唯一僕達みたいな子供が夜に外へ出ても、バレずに遊べる日なんだ。もちろん、言い出したのはセルファス。彼は昔からレッドムーンの日に遊んでたらしい。それでも、僕達は１０００歳になったら学校に行って、この世界の法律に従わなければいけない。１０００歳を過ぎて、レッドムーンの日に外出したら捕まって死刑になるんだよ。

僕達は、夜の１２時に噴水前に集まった。見つかったら怒られるっていうスリルが凄かった。

「よーし！集まったな！出発だ！」

っていうセルファスの掛け声と共に、僕達４人は森に向かって空を飛んだ。外出するだけでも禁止されてるのに、こんな夜中に飛び回っている事が知れたらどうなるか……でも、何事もなく森に着いたんだ。

「セルファス、何をして遊ぶの？」

ジュディアが、真っ先にセルファスに訊いた。彼は今では僕らのリーダー格みたいだ。

「うーん……せっかく大人達もいないし、『術比べ』をしようぜ！」

『術比べ』っていうのは、公園の外れにある恐い姿をした『魔』の彫像に、『神術』をぶつけるっていう遊びなんだ。

「でも、僕は『神術』なんて使った事がないよ？」

僕はセルファスに訊き返した。神術っていうのは学校に行って習うものだから、子供は知らない筈なんだけど……

「ルナリート君。神術は、精神力を集中して『結果』をイメージするものなんです。例えば、炎の初級神術である『焦熱』を使う場合は、集中して頭の中に炎を思い浮かべて、それを対象にぶつけるイメージと共に『ｆｌａｍｅ』って術式を描くんです」

と、ノレッジは得意げに語った。

「ノレッジは物知りだなぁ……僕は、そんな事全然知らなかったよ！みんなは、神術を使えるの？」

僕は、ちょっとワクワクしながらみんなに聞いたんだ。

「おう！俺は、初級神術の『落雷』を使えるぜ！」

セルファスは自信満々で、自分の鼻をこする。

「私は、『氷結』の神術を使えるわよ！」

ジュディアも使えるんだ。名前からして、氷の神術だろうな。

「ふふん、僕は『衝撃』と『焦熱』の神術を使えますよ！」

ノレッジは、嬉しそうに笑みを浮かべながらそう言った。

その後、術比べが始まった。セルファスの『落雷』は、魔の像から外れて地面を削った。でも、地面が２０ｃｍぐらい抉れてたよ。

ノレッジの『衝撃』は像に命中したけど、「コーンッ」ていう軽い音がしただけだった。『焦熱』は、空中に５ｃｍぐらいの火の玉が出てきてびっくりしたなぁ……その後の、ジュディアの『氷結』。これは凄かったよ！流石にお母さんが『神術を司る間』の司官なだけあって、その術は芸術的なぐらい完璧だった。何せ、高さ２ｍもある像の全体に同じ厚さの氷を張ったんだ！台座には、１ｍｍの氷も張らずに……！

これには、みんな呆然と見とれるしか無かったよ。きっと、ジュディアは将来天界で一番の『氷使い』になるんじゃないかな？

その後、僕の番がやってきた。生まれて初めて使う神術……大丈夫かな？僕は、頭の中に炎を浮かべてみる。すると、何だか不思議な感覚に襲われたんだ！頭の中の炎は、初めは蝋燭の火ぐらいの大きさだったんだけど、目の前まで真っ赤になるくらいの凄い炎になった。

その後に、像にぶつけるイメージを作ると、勝手に術式が浮かんできたんだ。『ｄｅａｄｌｙｆｌａｍｅ』その式が浮かんだ瞬間だった！

「ゴォォォォォォ……！」

直径２ｍぐらいの火の渦が、魔の像に直撃したんだ！

「ルナ！それは、高等神術の『滅炎』よ！」

その後は、みんなびっくりして黙ってた。何で僕は、いつもこうなんだろう。普通の天使に生まれたかったな……そう思って僕が涙を浮かべてると、ジュディアが叫んだ。
「もう！ちょっとルナが凄かったからって……！私だって、もう少し大人になったら高等神術ぐらい使うんだから！」
僕の事を思ってかな？それとも、神術で僕に負けたのが悔しかったのかな？どっちか解らないけど、ありがとう。
「そうですよね！僕だって、大人になったら神術を極めますよ！」
その言葉にノレッジが便乗した。すると、ジュディアは不敵な笑みを浮かべたんだ。
「私は、ルナにもノレッジにもセルファスにも負けないもん！……それはそうとセルファス、何か別の遊びは無いの？」
ジュディアが再びセルファスに訊いた。ジュディアに目を見つめられたセルファスは何だか顔が赤い。
「そうだなぁ……ノレッジ！何かいい案は無いか！？（ジュディアが喜びそうな……）」
何故か、セルファスはノレッジにヒソヒソ声で訊いていた。
「そんな事言われましてもねぇ……ルナリート君はどうですか？」
困ったノレッジは僕に振ってきた。僕は、一つやりたい事があったので即答する。
「僕は、『かくれんぼ』がしたい」
そう言うと、みんな納得してくれてかくれんぼが始まったんだ。大きな木の穴に隠れたり、石の陰に隠れたり……セルファスなんか、地面に穴を掘って隠れてたからびっくりしたよ。ノレッジは、空を飛んで木のてっぺんに隠れてたから最後までわからなかったなぁ……僕とジュディアは同じ所に隠れたりしてたから、すぐ見つかったよ。楽しい時間はすぐに過ぎて、夜中の４時くらいになった。早く帰らないと、早起きの人に見つかってしまうんだ。
「急ぎましょう！」
それに気付いたノレッジが真っ先に、翼を広げたよ。それに続いて、僕達も『神殿』に向かって飛んでいく……何だか、少し空が明るくなって来た時は焦った。でも、何とか誰にも見つからずに、神殿の２階の民間天使居住区まで辿りついた。居住区の中央で僕達は翼をたたんで別れたんだけど、セルファスとノレッジとジュディアは同じ方向で、僕は孤児院だから逆の方向なのが寂しかったな。そうして、僕はゆっくりと一人で歩いてた。すると、三階へ続く階段の上から大きな声がしたんだ。
「……ですから……というんです！？」
ハルメス兄ちゃんの声だった！誰かと言い争ってる！？僕は息を殺して、忍び足で階段を上がっていった。
「貴方は、成績が最優秀でありながら……学校の教えが気に入らないと言うのですか！？」
もう一つの声は、神官ハーツ様の声だった！この天界で最高の権力を持つ……！
「私は……神の存在を否定しているのではありません！唯……厳しい戒律と、思想の画一化を推し進める、『貴方が作った学校の教え』が間違っていると言っているんです！」
兄ちゃんは、神官に反抗している！？言葉の意味は解らないけど……神官に反抗したら捕まるんじゃないの！？
「いい度胸ですね。私に其処まで歯向かうとは！そうです！あの教えは全て私が作ったもの……そう！戒律も！それを知った貴方は……どうなるか解っていますね！……数時間後にハルメス、貴方は捕らえられます！せいぜい、余生を楽しむことだ」
そう言って、神官は去っていった。僕は、すぐに兄ちゃんの元に駆け寄る！
「兄ちゃん！？どうしたの！」
僕は、青褪めた顔をしているハルメス兄ちゃんに泣きついた。
「ルナ……！最後にお前に会えて良かった。俺は……いなくなるんだ。多分……帰ってこれない」
兄ちゃんは意味深な言葉を言った。でもそれが悲しい事なのは解る。
「ハルメス兄ちゃん！何処にも行かないでよ！僕には兄ちゃんが必要なんだ！お願いだよぉぉ……！」
僕は、必死で兄ちゃんに抱きついた。すると、兄ちゃんは僕の頭を撫でる。
「よく聞け……ルナ。俺は明日からもういない。でも、俺はちっとも悲しくない。それはルナ、

お前がいるからだ。お前が大人になって……この世界を変えてくれるって俺は信じてる」
兄ちゃんは、泣き続ける僕を慰めようと、ポケットからある物を取り出した。
「ルナ……、これは、俺の宝物だけどお前にやる。だから泣くな……！」
そう言って僕にくれたのは、『銀の懐中時計』だった。でも、僕はそれよりも兄ちゃんが大事なんだ！
「やだよ！時計は要らないから……！兄ちゃん……！兄ちゃん……！？」
ハルメス兄ちゃんは、僕の制止を振り切って部屋の中に入った！兄ちゃんの目には涙が溢れてた……
「ルナ……！俺は、お前を本当の弟みたいに思ってる！……後はお前に任せるからな……！」
それが、僕の聞いたハルメス兄ちゃんの最後の言葉だった。
その後、神官の兵隊が来て兄ちゃんは連れて行かれた。
兄ちゃんは裁判にかけられたけど、僕はそれを見る事も許されなかった。
後で大人の人に聞いたら、兄ちゃんは殆どの力を消されて遠い所に行ったと聞いた。
僕は、兄ちゃんの本を毎日のように読んだ。更に、あらゆる知識を吸収した。
そして、学校に入り兄ちゃんと同じ矛盾を感じたのだ。
『僕』は成長して……『私』になった。
私は……貴方の遺志を継いで……天界を変えたんです。
でも……貴方は生きていてくれた。
今度は……どんな指針を私にくれるのですか……

～再会の宴と永遠の夜～

私の話が終わるまで、二人は一言も漏らさずに黙って聞いていた。私は、遠い目をしていたかもしれない。
「ルナにそんな過去があったなんてねー……だから本と時計を大事にしてたのねー」
長い付き合いだが、そんな過去を聞いたリバレスはしみじみと語った。
「あぁ、別に隠してた訳じゃないんだが……ちょっと辛い思い出だったからな」
私は、リバレスの頭をポンポンと優しく叩いた。辛い思い出も、ハルメスさんは生きていたんだ。きっといい思い出に変わる。
「ルナさん」
其処で、何だか悲しそうな顔をしているフィーネがボソッと呟いた。
「ん、どうしたんだ？フィーネ」
フィーネの表情の理由がわからずに、私は聞き返す。
「……今の話を聞いて……何だか、ルナさんがとても……とても遠い存在に思えました。私はたった17年しか生きていなくて、そんなに沢山の過去は持っていません。それに、私は空を飛ぶ事も出来ないし……あなたに、私みたいな人間は相応しくないんじゃないかって……そう思うと、悲しくて」
そう言って、フィーネは俯いた。目には今にも涙を浮かべそうな程に……不安なんだろう。
「心配いらないよ……私は、君の知ってる私のままだし……気持ちも変わらない。それに、私は遠くなんかにはいかない。私は、ずっとフィーネの傍にいるから。君がいてくれる限り、絶対に何処にも行かないんだ」
私はそう言って、フィーネの手を握り締めた。私は決意している。命を懸けてでも、フィーネを守り傍に居続けることを……
「……はい……、でも」
一筋の涙を流し、フィーネが何かを言いかけた時だった。部屋の扉を叩くノックの音が聞こえる。
「宴会の準備が整いましたので、どうぞお越し下さい」
ハルメスさんの遣いだった。仕方ない。話は後にしよう。
「さぁ、今日は1000年振りの再会を祝って乾杯にしよう！」
神殿の中にある大広間に案内されて、円卓に座るとハルメスさんが歓喜の声を上げて祝宴が始まった。

天井には一際大きく豪華なシャンデリア。壁際には、銀の燭台。更に、美しい彫像の類が整然と並んでいる。本当に天界に似ている。

「ハルメスさん……、僕はこの日をどんなに待ち望んだ事か……！話したい事が山程ありますよ……！」

私は、再びハルメスさんを前にして感情を抑え切れなかった。リバレスは、人間の女性に変化してフィーネと話しているようだったが、今の私の目には映らない。そして、音楽隊の演奏や他の衛兵や、招待客などの声も耳には入ってこない。それ程までに、私はハルメスさんと話がしたかったのだ。生き別れた大切な『兄ちゃん』に会えたのだから……

私達の話は１０００年前から始まった。小さい頃の思い出……天界の孤児院の話。ジュディア達の話……そして、この１０００年間で私が歩んだ道……その後に、神官ハーツとの事件の話になり……『神』の話もした。

「そうか……あんなに俺にくっついてばかりだったルナが、よく頑張ったな！お前は俺の誇りだよ」

そう言って、ハルメスさんは私の頭を撫でてくれた。懐かしい感覚……記憶に埋もれていた感覚だった。

「はい！貴方が僕に教えてくれたから……ようやく『ハルメス兄ちゃん』の夢が実現したんです！」

私は、子供のような笑顔でそう言った。褒めて欲しかった。この思いを伝えたかった。

「ああ！今日は生涯で忘れられない嬉しい夜だぜ！」

私達は共に、勝利の美酒に酔いしれた。そして、一時も休まる事なく語り続けた。

話は、ハルメスさんが堕天してからの話……『ティファニィ』という人間の恋人がいたという話……それは詳しく教えてくれなかったが……

そして、私とフィーネの話になった。私とフィーネが出会ってから、此処まで来た話をした。

「お前も立派な大人だな。大切にするんだぞ！絶対に失わないように……！」

ハルメスさんは嬉しそうだったが、何故か少し悲しげな目をした。余り多くは語らないティファニィさんと何かあったんだろうか……

「はい……！私は、絶対にフィーネを守り通します！」

此処で、私の言葉遣いは元に戻った。ハルメスさんの前であっても、ずっと子供ではいられないと思ったからだ。

「よし！それでこそ、俺が見込んだ男だ！その誓いを忘れるなよ！」

ハルメスさんは、笑顔でそう言って私の背中を強く叩いた。私を少しは大人と認めてくれたんだろう。

「はい！……いつかは、ハルメスさんとティファニィさんの話も聞かせてくださいね！」

私は、ハルメスさんの言葉に応えた。そして、どうしてもハルメスさんと恋人との話も聞きたかったのでそう言った。

「おう！……この戦いが終われば話す……必ずな！」

そう約束してくれた。絶対に、魔との戦いを終結させよう……フィーネの為に……私の為に……そしてハルメスさんの為に！

２００年あれば……私とハルメスさんが共に戦えば恐いものなど何もない。何故なら、ハルメスさんは私よりも強い力を持っている。

１０００年前に、ハルメスさんは天界一の頭脳と力を誇っていた。この街の結界を見れば、今もその力は健在な事が解る。

「必ず……やり遂げましょう！」

私とハルメスさんは強く手を組んだ。誰よりも心強い人と再び、共に生きられる。私の心に、不安の影は何処にも無くなったのだった。

「ルナ、それはそうとフィーネさんを放っておいたらマズいだろ」

そう言われて私はハッとした。周りにはフィーネは愚か、他の人間は誰もいなかったからだ。

「あの……今何時ですか！？」

私は焦って、そう訊く。

「今はなぁ……夜中の３時だ。早く戻ってやれよ！」

私は、その言葉の直後立ち上がって、ハルメスさんに一礼してから部屋への道を駆け出したの

だった。

「ガチャッ」

私は、自分の客室に戻って扉を静かに開けた。見渡すと、リバレスが眠っていてフィーネの姿は無かった！

「フィーネ……！」

私は思わず叫びそうになったが、私のベッドの上にあるメモ書きを見つけたので声を押し殺した。

『愛するルナさんへ　屋上のテラスで待っています。凍えない内に会いに来て下さいね……フィーネ／ディアリー ハート』

綺麗な文字だった。それよりも、今は冬……！急がなければ！私は、メモ書きを懐に入れて全速力で屋上まで駆け出した。

「やっと来てくれましたね」

外に出た私は、その寒さに身震いした。人間界に来て一番の寒さ……なのに、フィーネは！

「フィーネ！何で、君はそんなに無茶な事ばっかりするんだ！」

私は、涙が出そうになるのを堪えながらフィーネを強く……強く抱き締めた。体が冷え切っている。

「私はね……ルナさんと二人きりになりたかったんです。もしかしたら、来てくれないかと思ってました」

フィーネは、冷気でこわばった顔に笑顔を浮かべる。その様子がとても儚げで……悲しかった。

「来ない訳が無いだろう！私はフィーネを愛してる。だから……！」

心の昂りを言葉にする事も出来ず、私はフィーネに強く口付けをした。唇までも凍てつくように冷たい……だから、私はフィーネが温まるまでずっと抱き締めて、私の熱を送り込むような……長く深いキスをした。

そして、暫くの時が流れた。

「ルナさん……、ありがとうございます」

フィーネの頬は朱に染まり、抱き締めるフィーネの胸から温かい鼓動が伝わってきた。

「ごめんな……もう二度とフィーネから目を離したりしないから……！」

私は深く謝った。幾らハルメスさんとの再会に舞い上がっていたとはいえ……目を離すのは言語道断だ。

「いいんですよ。ルナさんはこうして、私を抱き締めに来てくれましたから」

そう言うフィーネの顔は、何よりも優しくて私を包み込んでくれる。そして、どんな事よりも心を満たしてくれる。

遠くには、フィグリルの街の灯火が見えた。点々と……温かい色で……そして、冬の透き通った空は煌く星の海になっている。

しかし、さっきまで見えていた月は、いつの間にか南東の山に跳ね返った雲に包まれていた。

「ルナさん、私は幸せですよ」

唐突に、フィーネがそう言った。潤んだ目が、私の目を見つめる。

「あぁ、私もフィーネが傍にいてくれるだけで幸せだよ」

私も、優しくその目を見つめ返してそう返答した。

「……別の世界に生まれた私達が、出会って此処にいます。それだけでも、奇跡なのに……ルナさんは、私を愛してくれたんです。無理なお願いばっかりした私を……たくさん思い出を作りましたね。それを思い返すと、とっても幸せです」

フィーネは空を見上げて、涙を流した。でも、これは幸せなだけで出る涙じゃないと私は直感した。

「フィーネ、何か不安な事があるんなら言って欲しい。そうじゃないと、私が不安になるから」

私は真剣な眼差しでフィーネを見つめた。すると、空を見ていたフィーネが私に視線を移した。とても悲しい目……

「……やっぱりルナさんにはお見通しですね。何だか、ルナさんと一緒に生きられる時間って凄

く短い気がしたんです。もし、ルナさんが私と１００年間一緒にいてくれたとしても……それはルナさんにとっては、とても短い時……いつかは、私が思い出に変わってしまって……貴方は天界に帰って……私は思い出からも消えるんじゃないかって……今日のルナさん達の話を聞いていたら、私がちっぽけな存在に思えてきたんです。ルナさんは優しいから、ずっと一緒にいてくれるって約束してくれましたけど……でも……でも……！」

その後、フィーネは言葉を話す事も出来なくなった。無数に零れ落ちる涙がそうさせたからだ。

「フィーネ……、心配しなくていいんだよ。もし、肉体が死んでしまったとしても『魂』は不滅なんだ。だから、二人で一生懸命生きて……どちらかの体が消えてしまったら、『魂』を探す旅に出ればいいんだ。空にある数多の星の中から、一つを選び出すくらい難しいけど……私は絶対に見つけ出せる。その時、きっとフィーネは寂しそうに私を待ってくれている筈だから……何度でも、何度でも私はフィーネを見つけるよ……それで、生まれ変わってもずっと一緒に生きるんだ。『永遠』に」

私は、フィーネの震える頭を抱き寄せて、優しく撫でながらそう言った。この言葉は私の真実だ……それから、少しの時が流れる。

「……グスン……ふふ……わかりました。それなら、私も……絶対にルナさんを見つけます。ルナさんは、いつまでも私を優しい目で待ってくれている筈だから……でも、魂が離れ離れになった時に集まる場所を決めた方がいいですね」

ようやく不安が晴れたようで、フィーネは冷たい手で涙を拭った。今日は本当に寒いな……

「あっ……！ルナさん、掌を開いて上に向けてみてください！」

フィーネがそう言ったので、私は言われた通りにした。すると……粉雪が、舞い落ちてきたのだった。

「雪か……よし、集合場所は『雪の降るミルドの丘』にしよう！」

煌く星と、街灯の灯に照らされた雪はうっすらと輝きながら、ゆっくりと『永遠の時』を告げるかのように空間を埋め尽くした。

「私も同じ事を考えていました！……でも、この冬の内にミルドに帰れたら一緒に丘に行きましょうね！」

それはそうだ。気の早い話だった。今から、死後の集合場所を決めたって仕方ない。

「ああ。フィグリル周辺の魔を倒したら、一旦ミルドに帰ってみよう。二人が出会った丘の村に……！」

私はフィーネの手を握った。フィーネもまた、強く私の手を握り返す。

「やっぱりルナさんは凄いです。不安な事も全部取ってくれるから……あと……一つだけお願いしてもいいですか……？」

フィーネは嬉しそうに微笑んだ後に、恥ずかしそうに顔を真っ赤にした。

「フィーネのお願いなら、聞かない訳にはいかないな」

そう言いながらも、私まで何だか照れてしまった。

「……あの……一緒に……いたいんです」

フィーネは、小声で囁いた。余程恥ずかしいんだろう。私の耳にも聞こえない。

「……私は、ずっとフィーネと一緒にいるつもりだけど……？」

恋に疎かった私には、フィーネが言おうとしている事がわからなかった。天界で教わった勉強は全く役に立たない。

「……朝まで……二人で」

ようやく、フィーネの言いたい事が解った。彼女にこんな事を言わせた自分を悔やんだ。

戦いが終わるまでなんて……もう待てない。

「……今日は、二人だけで一緒に眠ろう」

私は、恥ずかしくてフィーネの目を直視出来なかったが、フィーネも真冬なのに火照った顔で頷いた。

私達は、雪の降る中……神殿を抜け出して、街の宿まで走った。笑いながら、手をつないで……

明日の事なんて考えていなかった。今、此処にフィーネさえいればいい。大好きなフィーネが……

戦いの事もどうでも良かった。魂が触れ合える、今この瞬間を大切にしなければならない。

私達は、二度と離れる事が出来ない深い恋に堕ちた……まるで、筒から覗く宇宙のように……

私達は、この夜『永遠』を誓った。恐ろしい『死』さえも、私達を引き裂く事は出来ない。

沢山約束をした。幸せになる為に……未来にも、夢を持っている。この愛を失わない為に……

しかし、無情にも……愛し合う私達を包む空から、純白の雪と共に天使の羽が降り注ぐ……

終焉を告げる歌声と共に……

第十四節　無音の狂奏曲

「キラキラ」

宿の窓から降り注ぐ、S．U．Nの光とそれを反射する雪の輝きが眩しくて私は目を覚ました。

「フィーネ」

穏やかな笑顔を浮かべて、隣で眠る最愛の人の髪を、私は優しく撫でた。

「ルナさん……、おはようございます」

薄っすら目を開けて、フィーネは私の背中に手を回して抱きついた。吐息が私の首にかかる。

「おはよう、フィーネ」

私もフィーネを抱き締めて、キスを交わした。昨夜の余韻に浸るように……

それから、暫くの時が流れて私はふとベッドの机の上に置いた時計を見た。すると……

「フィーネ！もう１２時だ……！」

神殿を離れてから、既に８時間以上が経っている。心配されているかもしれない！

「１２時……！昼のですよね……！」

私達は、急いで旅の服に着替えて、支度を済ませて宿を出た。

「うわぁ……一面、真っ白ですね！」

宿を出た私達の目に飛び込んできたのは、白亜の街に雪が降り積もり、何もかもが純白に染まっている光景だった。

「私も、こんな光景を見るのは生まれて初めてだよ」

天界に雪は降らない。私は、初めての銀世界に感動していた。そして、この光景は私達を祝福しているかのように見えた。

「ルナさん」

フィーネは白い息を吐き、私の手を握り締めた。そして、彼女の頬は薄紅色に染まっている。

「ん？フィーネ、どうしたんだ？」

私も手を握り返し、神殿へと歩く中で私はそう聞き返した。

「……昨日の事……私、一生忘れませんよ。ううん、生まれ変わっても絶対に」

フィーネは、私の目を見つめた。お互いの頬がどんどん朱に染まる。

「ああ、私も絶対に忘れないよ……これからも、ずっと仲良くやっていこうな」

私は、人目も気にせずフィーネの体を抱き締めて優しく持ち上げた。

「ルナさんっ！……大好きです！」

顔を真っ赤にしながらも、フィーネは満面の笑みでそう言った。

「私も、フィーネが大好きだよ。よし！このまま神殿まで走るか！」

私はそう言って、フィーネを抱えて神殿まで走った。このまま、未来を二人で走りたかったからだ。

そう……私達は幸せだった。誰よりも……何よりも……

～第一楽章『氷の歯車』～

私達が、神殿の前まで着くと、怒ったリバレスと呆れたハルメスさんに囲まれた。

「おいおい……恋の逃避行かと思ったぜ……！」
ハルメスさんが私の肩を叩く。何も言い返せずに、私は頭を下げるしかなかった。
「ルナとフィーネの馬鹿！心配したんだからー！」
リバレスが、私を何度も叩く。怒られても仕方ない。
「リバレス（さん）、ハルメスさん。すみませんでした！」
私とフィーネは同時に深く謝った。これからは、愛し合っているとはいえ勝手な行動は慎もう……
その後、私達は昼食を取った後に神官の部屋に集合した。今後の作戦を決める為だ。
「さぁ、始めよう。作戦は大体決まっている」
ハルメスさんが、神官の椅子に座る。そして、その一番近くに私が……続いて、フィーネとリバレスが座った。
「どんな作戦ですか？」
私は率直に訊いた。ハルメスさんの事だから、きっと凄い作戦なのだろう。
「……最近、そうだな。つい二ヶ月程前に『輝水晶の遺跡』という遺跡が、南南西およそ１００ｋｍの地点に発見された。この遺跡は、リウォルタワーよりももっと昔……人間界が中界だった頃の遺跡だ。俺は行ったことが無いが、派遣した兵が持ち帰った『記念碑の破片』の文字を解読すると……『獄界への道……封印』と書かれてあったんだ。獄界の道とはこの世界で言う『死者の口』の事だ」
ハルメスさんは、真剣な眼差しで私を見据えた。私の答えは決まっている。
「……少しでも可能性があるのなら、行きましょう。もし……獄界への道を封印出来れば、魔は現れないでしょう」
私はそう言って、フィーネとリバレスに目を合わせる。二人は、迷う事無く頷いた。
「お前ならそう言うと信じてたぜ！俺も行きたいんだがな……結界が消えると、この街は即座に魔の餌食になる。この街の武力を強化しない限り、俺はこの街を離れられないんだ。これを見てくれ」
そう言って、ハルメスさんは私にナイフを渡した。これは……！
「オリハルコン！？何処で手に入れたんですか！」
私は驚きの余りそう叫んだ。オリハルコンは天界でしか創れない金属なのに……
「これは、レプリカだぜ。リウォルタワーから取ってきた本物を真似て俺が創ったんだ。これが完成したら、人間でも魔と戦える。もし、フィーネさんを連れて行く気なら持たせてやってくれ」
私は、オリハルコンのナイフを受け取った。そして、フィーネの目を見た。
「私は、ルナさんが行くんなら何処にでもついて行きますよ！絶対守ってくれるって信じてますから！」
そう言って、フィーネはナイフを取った。確かに、フィーネの精神力があれば強い武器になるかもしれない。
その直後の事だった！
「ギャァァァァ……！」
扉の向こう……遠くの方で、断末魔の悲鳴が聞こえた！この声は衛兵の声だ！
「魔なのー！？」
リバレスが、その声を聞いて叫んだ！私とハルメスさんは、瞬時に剣を抜いた！
「いや……！魔は結界に阻まれる！……まさか……！」
扉の向こうで、恐ろしい力が集約されているのを私達は感じた！その瞬間……！
「パキィィィィーン……！」
数十本もの氷の刃が扉と壁を切り裂いた！これは……これは……中級神術『天導氷』……！
フィーネを庇いながら、氷の刃を避けた私は攻撃が来た方向を睨み付ける！
すると……破壊の後に出た砂埃の中から、よく知る人影が現れたのだ！
「お前は……ジュディア！」
崩れた壁とドアの向こうに立っている者……それは、天使ジュディアだったのだ！

「……久し振りね……ルナ……、そして、ハルメスさん……、いいえ、堕天使ハルメス！」
腰まで届く程の金の髪……そして、完璧過ぎるまでに整った顔は私の方を見ていた。
「ジュディア！一体何のつもりだ！？」
危険な空気を察知したハルメスさんが叫ぶ！しかし……
「堕天使ハルメス……！あなたに用は無いの！引っ込んでなさい！」
ジュディアがそう言った瞬間、ハルメスさんは５ｍ程遠くにあった壁に叩きつけられた！しかも、ハルメスさんは何故か動けない！そんな神術を使いこなすなんて……この短期間で、どれだけ成長したんだ！？
「ジュディアー！争いはやめましょーよー！」
リバレスも見兼ねて其処に割って入った。
「リバレス！あなたは、ルナの天翼獣なのに何故……！？」
ジュディアは、途中まで言いかけてリバレスを弾き飛ばした！リバレスは床にぶつかり、動けなくなった！
「止めろ！ジュディア！お前は私に用があるんだろ！？」
私はジュディアの前に立ち塞がった。だが……彼女の力は天界の頃の数倍いや、それ以上に膨れ上がっている！
「ルナ……、可哀想に……！こんな人間の女に毒されて……！」
ジュディアは、フィーネの方を睨んでそう言った。私は、フィーネを守る為にジュディアに剣を向ける！
「待て！フィーネに手を出すな！」
私はフィーネとジュディアの間に入り、精神力を剣に集中した。最悪の場合ジュディアを斬る覚悟で……！
「ルナ！まさかあなたは……こんな女に……！？でも……無駄よ！今の私は、お母さんの力を完全に受け継いだ。神術で私に敵う者はいない！」
その言葉の直後に、私の体は動かなくなった！これは、高等神術『拘束』……！呼吸すら苦しい……！
「ルナさんっ！ルナさん……！」
その場に倒れこんだ私を、フィーネは必死に抱き起こす……
「フィーネ……、逃げろ……頼む」
私は息も絶え絶えにそう呟いた。このままではフィーネが……！
「嫌です！ルナさんを置いてなんて行けませんよ！」
フィーネは、私の胸に泣きついた。でも……私は動けないんだよ。
「この女……！ルナの心を奪い……毒した！……絶対に許さない！」
ジュディアの目が殺意を持った、氷のような目に変わった！
「ジュ……ディア……殺すなら、私を殺せ……！」
私は、必死に声を振り絞った。ジュディアの耳に聞こえるように……！
「……そんなにも……あなたの心は毒に侵されたのね。……私は、１０００年前からずっとあなただけを愛してきたのに……！あなたが望めば、私の美しい顔も体も心もあなたの物になるのに！非の打ち所の無い私をあなたは捨てたのよ……！」
ジュディアは、一筋の涙を流した。だが、その目は再び凍てつく氷に変わる！
「……まぁいいわ。あなたを改心させればいいだけの事……！あなたに見せてあげる。下等な人間に情を持ち……救おうとする愚行の代償を！……『輝水晶の遺跡』で待っているわ」
ジュディアは、不気味な笑みを浮かべてフィーネを抱えた！
「ルナさん！ルナさんっ……！」
フィーネは、手足をバタつかせるが逃れられない！そんなフィーネを無視して、ジュディアは神殿の外壁に穴を開けた……！
其処から飛び去る気なのだろう！

「フィーネー……！」

私の叫びも虚しく……フィーネは空に消えていった。
何故こんな事に……せっかく幸せを掴んだばかりだったのに……
守ると約束したのに……ずっと一緒に生きて行こうと……
私は、『拘束』が解けるまで……悔しくて……歯痒くて……悲しくて……ずっと下唇を噛んでいた。
絶対に助ける。例え、私の命が失われようとも……何を犠牲にしても構わない。
約束したんだ。二人で幸せになると……ミルドの丘に戻ろうと……
私はフィーネを愛している。初めて、自分よりも大切な人だと思えたんだ。

『私は永遠を信じる！』

～第二楽章『儚き水晶』～

一時間ぐらいの時が流れ……ようやく『拘束』が解けて動けるようになった。
「はぁ……はぁ……ハルメスさん！私は今から輝水晶の遺跡に向かいます！」
私は、背中を強打して壁際に座り込むハルメスさんに声をかけた。
「ルナ……、今のジュディアの力は危険だ……！だが、まだ間に合う……！街の者に遺跡まで送らせるから……急げ！」
ハルメスさんは、そう言ってよろけながら立ち上がった。
「ルナー……、わたしも行くからねー！」
床に倒れていたリバレスも起き上がる。私はすぐさま、ハルメスさんとリバレスに『治癒』の神術を使った。
「ルナ！……愛する人を失う事は……死ぬより辛い……それは俺が一番よく知っている！絶対に……絶対に、フィーネさんを不幸にするな……！そして、必ずフィーネさんを連れて此処に戻って来い！」
ハルメスさんは、驚く程大きな声で……そして真剣な顔で叫んだ。そんなハルメスさんの過去が気になったが、今はそれどころじゃない！
「はい！行ってきます！」
私は、リバレスを肩に乗せて全力で港まで走った！一刻も早くフィーネを救い出す為に……！港に着いて、すぐさま船に乗り込む！そして、船は南南西へ舵を取り進む……しかし、その遅さがもどかしい……！
今、空を飛べたら……すぐに助けに行けるのに……！一分……一秒……過ぎるのが狂おしい程長く感じた……！
そうして、気が遠くなるような三時間が過ぎて……遺跡のある島へと辿りついた。時刻は午後５時……空は夕闇に染まり始めていた。
夕陽が、冷たい海と雪の大地を照らし……眩しかった。しかし、それとは逆に遺跡の入り口は漆黒の闇に閉ざされている。
「行くぞ……リバレス！」
リバレスは強く頷く。フィーネを助けたい……その気持ちは彼女も変わらないのだろう。
遺跡の入り口は、神殿のような門で……やはり大理石の古代建築様式だった。門をくぐれば、地獄へ続くような地下への階段が伸びている。
私とリバレスは、臆する事無く階段を急ぎ足で下りて行った。周りが殆ど見えない闇の階段を……
「あっ……何よーあれは？」
階段が終わり、地下１階に到着した時だった。急に、部屋が『赤色』の光に照らされた。すると、部屋の様子が見えてきた。
「中心にある水晶の壇の光だな」
部屋の中心にある、赤色に光る輝水晶で出来た壇が輝いている。
「あっ！何か文字が書いてあるわよー！」
そう言って、リバレスは壇の上にあるオリハルコンの記念碑を指差した。今は一秒でも先に進みたいのだが……

『始まりは……中界と共に』
私は記念碑を一読したが、一部文字が解読出来ない。古代文字よりも更に古い文字が混ざっているからだ。
「この遺跡は古いのねー……でも、読んで行った方が良さそうよー」
部屋を見渡すと、床も壁も天井も立派な大理石……しかし、所々ひび割れていた。そして、リバレスの言う通り記念碑には重要な事が記されている気がする。記念碑を読みながら、先を急ごう……！私達は、更に下層へ続く階段を駆け下りた。
「フィーネ……、無事でいてくれ！」
私は祈るような気持ちで走る。フィーネさえ無事でいてくれたら……私は何も必要無い！
そして、再び視界が開けた……今度は『橙色』の輝水晶だ……こんなにも輝水晶を多用するのには、余程大事な事が隠されているのだろう。
輝水晶は、星の始まりからごく少量のみ存在しているらしいが、余りに貴重なので天界でも殆ど目にする事は無いのだ。
「ルナー！また記念碑よー！」
リバレスが言い終わる前に私は、それに目を通す。
『この遺跡は……獄……を……封じ……ある』
この文章が、ハルメスさんの元に届いたのだろう。確かに、この遺跡が獄界と封印に関係している可能性は高い……
「……今は、何よりもフィーネを助ける事が優先だ……！魔との戦いは後でいい！」
私は、其処で正直な気持ちを叫び更に階段を下りる！
「キャー！」
再び視界が広がった地下３階で、急にリバレスが声を上げた！それもその筈だ……
「魔の死骸の山だな」
『黄色』の輝水晶の周りで、２０体近くの魔が殺されていた。氷漬けになって……！
「ジュディアが殺したのねー」
１０ｍ四方程の狭い部屋に、これだけの死骸がある事に私は恐怖さえ覚えた。しかも、ついさっき殺されたように氷の刃の跡が生々しい……
「私に秘められた強大な力を……自在に操る事が出来たら……！」
魔との戦い……フィーネやリバレスの危機で、幾度か発動した力を……今使う事が出来ない事が腹立たしく……悔しかった。何故、こんな時に力を使う事が出来ない！
「ルナー……、大丈夫よー！ジュディアなら……話せば解って貰える筈よー！」
そんな私を気遣って、リバレスが私に声をかける。だが……
「私は……ジュディアの性格を良く知っている。何故、人間界に来たのかは解らないが……私は、堕天する前にジュディアと約束した。『人間には毒されない』と……あいつを怒らせたらどうなるか解るだろ？……それでも、絶対にフィーネは取り戻す！」
私は身震いしたが、すぐさま意志を強く持った。話し合いで解決するとは思えない。だが、何をしてでもフィーネは返して貰う！
「ルナー……、わたしはルナの考えに従うから……行きましょー！」
リバレスはやはり頼りになる。私は、リバレスの頭を撫でてこの階の記念碑を読んだ。
『機構は……深……あ……エネル……を……必要……る』
しかし、この階の記念碑は解読が難しかった。もっと先を読まなくては……！
地下４階は『緑色』の輝水晶だった。地下１階から続く、輝水晶の色の変化……恐らく『虹』の並びと同じだろう。
『エネルギ……源……は……である』
少し理解した。この遺跡にある何らかの『機構』は『エネルギー源』を必要とするのだろう。
私は、この遺跡の謎に興味が沸いたが……何よりも、フィーネの事が心配で気が狂いそうだった。
そして、階段を飛ばして駆け下り、地下５階に到着した。案の定、『青色』の輝水晶……
『起動……は……１００００の……が……必要』
私の頭に恐ろしい想像が巡ったが、それを無視して更に歩を進める。ジュディアの力が近付いてくる気がした！
地下６階は『藍色』の輝水晶だった。恐らくは、次が最後……！

『を……虹の祭壇へ……捧げ』
この記念碑を読み……私は悟る。この遺跡は危険だ……！何か大切な物を捧げなければならないのだ。
私は、剣を抜き階段を慎重に歩いた。もしかしたら、次の階にジュディアがいる！
しかし、予想とは裏腹に地下７階にも彼女の影は無かった。それどころか、それより下へ続く階段すら無い。
「ジュディア……いないわねー？」
リバレスも不思議そうに周りを見渡す。私はどうする事も出来ずに、『紫色』の壇にある記念碑を読んだ。
『魂……生け贄……！？』
私は思わず叫んだ！最悪の想像が真実に近付いた。フィーネの身が危ない！
「ルナさぁぁぁぁーん……！」
その時、『紫色』の輝水晶の壇が動き……更に下へ続く階段が現れた！フィーネの叫びが下から響く……！
私は、儚い光を背に階段を駆け下りていった。

～第三楽章『終の狂奏』～

「フィーネ！」
やっと、フィーネを見つけた……！しかし……フィーネは、『虹色』の輝水晶で出来た祭壇に仰向けで拘束されている！
唯……顔だけがこっちを向いていた。
「ルナさん……！危険だから……逃げて！」
身動き出来ないフィーネが、最初に発した言葉がそれだった。余程恐い目に遭ったのだろう。
「遅かったわね。でも、いいわ。お陰で準備は整ったから」
ジュディアが、驚く程冷酷な笑みを浮かべた……そして、フィーネと私の間に立ち塞がる！
「何をする気だ！フィーネを返せ！」
私は、剣をジュディアに向ける！ジュディアの出方によっては、本気で剣を振る覚悟だ。
「ふぅ……そんなに焦らないでよ。そんな物騒な物を私に向けて……私は、あなたに協力しようとしてるだけなのに」
予想外の返事だった。協力だと……？
「協力って何よー！？」
リバレスが叫ぶ……！一体ジュディアは何を考えている！？
「そう、協力よ。知ってる？この遺跡の意味を」
ジュディアは、からかう様な口調で私を見つめた。
「……獄界への道を封じる装置のようなものだろう」
私は、記念碑を総合してそう答えを出した。一つ気になるが……
「流石ね……でも、そのエネルギー源は何なのか解る？」
ジュディアが不気味な笑みを浮かべた……
「……まさか……本当に『魂』……なのか！？」
私は顔を蒼白にして、訊き返した！この答えは間違いであってくれ……！
「……その通り！でもね、この遺跡を作動させるには……１００００の魂が必要なの」
其処で、ジュディアはフィーネの方を振り返った！
「ジュディア……！フィーネを生け贄にするつもりか！？」
その瞬間に、俺の髪は銀色に変わった！力が膨れ上がる！
「ルナ、話は最後まで聞く物よ」
ジュディアは、その言葉の直後……俺に奇妙な術をかけた……
「究極神術……『不動』よ。『拘束』よりも遥かに強力で、指先を１ｍｍ動かす事も出来ない。それと同時に、体の変化を停止させる。今の私じゃあ、それ以上力の増えたルナは相手に出来ないから。でも安心してね……口だけは動かせるようにしたから」

全く動けない！同時に、力の増大も停止させられている！
「……ふざけるのは……いい加減にしろ」
何とか動かせる口で俺はそう言った。しかし、ジュディアは俺を無視して続ける。
「まぁ、結論から言えばこの娘は名誉ある『生け贄第１号』って事になるわね。最近、魔の進行が激しいのはあなたもよく知っているでしょう？このまま行けば、天界まで侵略される恐れもあるの。それで、獄界への道を封じる手段を探しに私が天界から派遣された訳。私はこれが成功したら表彰されるし、ルナだって魔と戦わなくてよくなる。一石二鳥じゃない」
ジュディアは淡々と話を進める。だが、フィーネを生け贄にするだと！？
「……魔なんてどうでもいい……！だが、フィーネを殺したら俺がお前を殺す！」
俺は、ジュディアを睨み付けた……！すると、今まで淡々と話していたジュディアの顔と口調が急変する！
「私を殺す……！？とうとうそんな世迷言を！……あなたは最高の天使なのにも関わらず、下等な人間に情を抱いた！……許せない！どうして、そんなにもこの女にこだわるの！？私がいるのに！何故、下らない人間の為に命を懸けるの！？人間なんて、天界のゴミに過ぎないのに！？この世界は、ゴミ捨て場なのよ！」
ジュディアは、感情を剥き出しにして叫ぶ……！そして、俺の襟を強く掴んだ。
「……黙れ……お前のような高慢な心では、生涯理解できはしないさ」
俺は動けなかったが、ジュディアにはっきりと言い放った。
「ジュディアー！人間の魂だって、天使と変わらないのよー！」
其処で、リバレスが加勢する！俺は、そんなリバレスを誇りに思う……
「『蝶』は黙りなさい！」
しかし、加勢も虚しくリバレスは『拘束』されて地面に落ちた……
「……まさか、此処までルナの心が蝕まれているなんて……哀れだわ。でも、仕方ないわね。私が、３日で人間を１万人殺してあげる。……それで、あなたの呪縛は解けるわ。フフ……だから、まずはこの娘に死んで貰う！」
ジュディアに、とてつもないエネルギーが集約されてくる！『魂砕断』よりも強力な力が……！
「待て！待ってくれ……！殺すなら……俺を殺せ！フィーネは助けてやってくれ……！」
本気でフィーネを殺そうとしているジュディアに俺は懇願した！フィーネが助かるなら俺はどうなってもいいんだ！
「……いいんですよ、ルナさん……、私が悪かったんです。天使のあなたに……無理なお願いばっかりして……さぁ、ジュディアさん……、私を殺して下さい……それで、ルナさんを許してあげて下さい」
フィーネは涙を流しながら、俺を見つめて優しく微笑んだ。それを見た俺の目からも涙が溢れる。
「人間如きが、気安く名前を呼ぶんじゃないわよ！……ルナ、あなたは馬鹿だわ。人間の女なんかに想いを寄せるなんて……
私はずっと……ずっと……あなたの事を愛していたのに……受け入れてくれなかった」
ジュディアは……愛せない。俺はフィーネだけを愛しているんだ。
「お前には悪いと思うが……俺はフィーネを愛してるんだ！これからは、俺の事など相手にしなくていい……忘れてくれてもいい！
だから……お願いだから……邪魔しないでくれ！」
俺は動かない顔の……殆ど動かない目でジュディアを見つめた。今は瞬きをする事も出来ない。
「……決めた。この娘を殺すのはやめにする」
ジュディアは急に微笑んだ。しかし、助けてくれるなら何でもいい！
「……本当に助けてくれるのか……！？」
俺は、必死の思いでジュディアに訊いた。
「……フフフ」

「……獄界へ堕ちるがいいわ！」

その言葉の直後、フィーネの胸の上に『漆黒の剣』が出現する！
魂が獄界に堕ちる。それは……魔に忌み嫌われている『人間の魂』が獄界に来る事を意味する！
堕ちた魂は……切り刻まれて……汚されて……壊される！
しかも……天界と人間界で死んだ者の魂は転生するが……獄界に堕ちた魂はどうなるか解らない！
「殺すのよりも……ずっとひどいじゃないのー！」
「止めろぉぉぉぉー……！」
俺達は同時に叫んだ！しかし……！
「禁断神術……『堕獄』！」
禁じられし神術の刃が、たった一人の心優しい少女の胸を貫く！

「ルナさぁぁぁぁぁ……ん！」

俺は……目を閉じる事も出来ずに……！唯……魂を裂く刃が……最愛の人に突き立てられる瞬間を見るしかなかった！それと同時に……俺の心の一部が、音も立てずに砕けた……そして、心が狂奏曲を奏でる。無音の……
「いい気味ね……これで、正気に戻ったでしょ。ルナ？」
フィーネに刃を突き立てた張本人が、悪びれた様子も無く俺に語りかける！
「……ジュディア……貴様に解るか！？俺の心が……！」
俺を包む『不動』の膜に亀裂が入る。呼吸が際限なく早くなる！
「……さぁ……解らないわね」
ジュディアは答えながらも、俺の異変に気付いて後ずさりを始めた。
「……様々な感情……愛情……憎悪……後悔……悲嘆……全てが……俺の心の中で今……濁流となって荒れ狂っている！……心が熱い……頭が熱い……俺の全てが炎に包まれる！」

「うあぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

俺を包む炎の濁流は、俺の意識さえも支配し始めた！
髪は銀色……目は真紅……光の翼が現れ……普段の俺の意識も遠くに感じた……
「……な……何なの！？」
『不動』を解除して、歩き始めた俺にジュディアは驚きを見せる。しかし、逃げようとはしない！
「其処をどけ！」
俺はフィーネに向かって歩いて行こうとしているようだった。今は自分を制御出来ない！
「……嫌よ！」
今の俺の力は、恐らく普段の数万倍だろう。俺に敵対するなど……何と無謀な事か……！
「……それならば、死ぬがいい！俺は全てを超越する者……エファロードの後継者……！俺の邪魔をする者は……全て滅ぼし尽くす……！」
制御出来ない俺は、勝手にそんな事を話した！だが、フィーネに近寄る為にはそうするしかないのは理解できる！
「……（ルナー……、何て怒り……憎しみ……それよりも、今までの変化よりも桁違いに大きな力……此処にいるだけで焼き尽くされそう……！）」
リバレスがそう思っているのが、俺に伝わった。今の俺にはそんな能力まであるのか……！？
「……私は本気よ！絶対に行かせない！」
圧倒的な力の差に震えながらも、俺の心を引き戻したいのだろう。必死に食いついてくる。
「……愚かな……力の差も見抜けぬ下衆め……覚悟するがいい！」
それからはよく覚えていない。唯、ジュディアの放つ攻撃の神術は俺の皮膚にさえ届く事は無かった事は確かだ。
そして……

「エファロードのみが使える神術だ……『滅（ｒｕｉｎ）』……！」
俺はそう言い放った。すると、全てが滅びる直径３ｍ程の虚無の空間が現れた。空間は、部屋を駆け巡り触れる物全てを飲み込む！
外壁、輝水晶……空気さえも残らない！呼び出された虚無はジュディアの翼と肩の一部も飲み込んだ！
「……クッ……！……絶対に……後悔する事になるわよ！……どうせ２００年後には……！」
『滅』で大怪我を負ったジュディアは自分自身に『転送』を使い消え去った。
すると……制御出来なかった意識は俺の元へと戻ってきた！
「フィーネー……！」
俺は、すぐにフィーネの元へと駆け寄った！

～第四楽章『魂の離別』～

「……ル……ナ……さん」
俺が大声で呼びかけると、弱々しい声でフィーネは答えた。良かった。まだ生きている！
「フィーネ……！すぐ治してやるからな！」
俺は、何者も超越する力で『蘇生』の神術を使った。これで、致命傷からも蘇る！
「ルナ……、さん……、ダメですよ」
どんな傷でも、治す事が出来る『蘇生』を使っても……フィーネの傷は塞がらなかった！俺は慌てて、フィーネの手を握り締めたが……冷たい……氷のように……！
「フィーネ！フィーネ……！お願いだ！……戻ってきてくれ！」
俺は、自分の精神力を限界まで酷使してフィーネの治癒に全力を尽くす……！しかし……
「……もう……今の私には……多分……何も効果がない。ですよ。目の前が真っ暗で……感覚も消えそうで……唯……ルナさん、あなたの言葉だけが聞こえます」
フィーネは中空を見ていた。焦点が合っていない。手も冷たい……体も……！
俺が誰よりも愛する女性は……救えない！……俺の目から、涙が止め処なく溢れ出てきた。
「……ウソだ……ウソだぁぁぁぁぁぁ！俺には……俺にはフィーネさえいればいい！俺は解ったんだ！天界も……人間界も……天使も何も必要無い！……唯、君だけが俺には必要なんだ！ずっと……ずっと……一緒に生きて行こうって約束したじゃないか……！……お願いだ……いつものように微笑んでくれよ！」
俺は、動かないフィーネの体を抱き起こして……強く……強く抱き締めた！戻ってくれる事を願って……！
「……ふふ……ルナさん……、笑ってくださいよ……私は……あなたが笑ってくれる時の……優しい目が大好きなんです。あの日……初めてルナさんと出会った時から……私は助けられっぱなしでしたね……ルナさんは……とても……とても……優しかった。私は……ルナさんからいっぱいの事をもらったんですよ。ルナさんといた時間……幸せだった。だから……私の人生は決して不幸だったとは思いません。短くても……大好きなルナさんと愛し合えたから」
フィーネは、今にも消えそうな声で……だが、強い意志で懸命に口を動かす……！そして……瞳を閉じて微笑んだ。
体が更に冷たくなっていく……まるで……決して溶けない氷の人形を抱いているかのように……
「……そんな事はいいんだ！救われたのも……たくさんの事をもらったのも俺の方なんだ！……フィーネが……フィーネが俺の心を暖めてくれたんだよ！一生懸命生きる事も……人を愛する喜びも……全部君が教えてくれたんだ！フィーネがいたから……俺の人生は価値のある物に変わった。なのに……なのに……！」
俺は……目の前が涙で曇って何も見えなかった。何よりも大切で……守りたかった物が……無情に崩れていく……
「ルナさん……、きっと……私の為に涙を流してくれてるんですね。私も……あなたと過ごした事……考えたら……やっぱり泣けてきますよ……もっと一緒に生きて……今まで以上の幸せがあったんじゃないかって……戦いも終わって……一緒に暮らして……ルナさんの子供を生んで……でも……それは叶わない事……贅沢過ぎる夢」

「……私は……もう……死にます。それが解るから」

「フィーネ……！イヤだ！……フィーネー！」
儚く微笑みながら……フィーネは一筋の涙を流す……俺は……そんなフィーネを抱き締める事しか出来ない！
「……いつも……私が悲しんだらルナさんがいつも……慰めてくれましたね。今度は私の番ですよ。
雪の降る昨日の夜……私達の最初の夜……約束したじゃないですか……『永遠』を……例え、何があっても……
『死』が訪れても……私とルナさんは離れないって……私が死んでも……悲しまなくていいんです。私は……ルナさんが……私の『魂』を見つけてくれるって信じてますから……どれだけ遠くても……絶対に」
フィーネは俺を信じてくれている。そうだ……俺がこんなに気弱でどうする！
「フィーネ……、君の言う通りだ……！……例え君の体が消えたとしても……俺は……命をかけて……
１００年でも……１０００年でも……一生をかけてでも君の……いや、フィーネの『魂』を見つけ出すから……！」
俺は流れ出る涙を拭い、そう叫んだ！フィーネの魂は獄界に堕ちる。魂は普通に探しても絶対に見つからない。
それでも……俺は億に一つの希望を持ってフィーネに叫んだ！
「……やっぱり……私は……ルナさんが大好きですよ。でも……暫くのお別れですね。
あなたが迎えに来てくれる日まで……それまで……私は……あなたを愛し続けて待ってます。
私の……ルナさんへの想いは永遠に……あなたに出会えて本当に良かった」

……そうなんだ。フィーネは死ぬんだ。
……温もりを感じる事も……声を聞く事も出来なくなる。
……魂を見つけ出せても……記憶は消える。ほぼ確実に……
……愛し合った事も……過ごした日々も……楽しい事も悲しい事も……
……でも……約束したのは俺だ……魂は絶対に見つけ出すんだ。
……それでも……！フィーネの声は二度と聞けない。二度と抱き締められない！
……俺が愛する『フィーネ』という人間は消えてしまうんだ！転生しても違う人間になる！

「フィーネ……！君は……俺に……本当の『心』をくれたんだ！『心』は温かくて……包み込んでくれる。
『心』は溢れ出して……優しさとか……強さとか……大好きな気持ちに変わるんだ！
……フィーネが俺を愛してくれているように……俺も君を誰より愛してるよ……『心』から……
そして君は……『永遠』を信じてくれているから……俺は……『永遠の心』を信じる！
俺の『心』も……フィーネの『心』も……『永遠』なんだ。信じる心も……愛する心も……！
何度死んだって……何度生まれ変わったって失いはしない。『永遠の心』を持って、何処にいても必ず迎えに行くよ
だから……安心しておやすみ」

俺は……必死の思いで笑顔を作って……フィーネの冷たい唇にキスをした。殆ど……息が無い！
苦しかった。不安だった。魂を見つけるのも困難……更に……転生して『心』を失わないのは奇跡を超えた奇跡だ……
心が張り裂けそうに痛い……フィーネを不安にさせない為に……俺は気が狂いそうな悲しみを堪えてそう言ったんだ。
でも……この約束さえあれば……乗り越えられる。死による別れの痛みも……！

「……『永遠の心』……信じます。あなたと過ごした日々も……愛する心も全部『永遠』に……忘れません。
でも……寂しいから……早く迎えに来てくださいね……もし……私が『心』を失いそうになって

いたら……
『約束の場所』へ連れて行って……下さい……行きたかった。あの場所へ……
そろ……そろ……時間……みたい……ですね。光も音も……消え……て」

フィーネを流れる時が……止まろうとしていた。我慢していた涙が再び堰を切ったように流れ出す……！
今のままの……フィーネの声を聞けるのは……これで最後なんだ。
栗色の長い髪も……強さを秘めた優しく純粋な目も……
そして……私に見せてくれた可愛い顔も……
失われる。

「……おやすみなさい……ルナさん……、大好き」

それが……愛するフィーネから零れた。最後の言葉だった。

「フィーネ――――……！」

俺は……声が枯れるまで泣き叫んだ！
冷たくなって動かないフィーネの体を抱き締めて……！
永遠を誓っても……目の前にある別れの痛みは心を抉り……耐えられない！
昨日まで温かかった心には……吹雪が吹き荒れている！
この痛みをどうすればいいんだ！魂を探す……その前にあるこの心の痛みを！
俺は……俺は……！
俺は……目の前が真っ暗になった。息の仕方も忘れてしまいそうだった。
声はとっくに枯れ果てて……涙まで出なくなってしまった。
頭の中は混沌に満ちていた。今は何も考えられない。

唯……命を失ってなお……フィーネの顔には微笑みが浮かんでいた。

第十五節　一筋の光

一体……幾時間……いや、幾日過ぎた事か……唯此処にあるのは、意識の混沌……
そして、目覚める事のない。愛する人……
何も出来ない。俺は、此処から動くことも出来ずにいた。

だが、時間の感覚も消えてしまいそうな中で声が聞こえてきた。
「ルナー！」
聞き覚えのある声……その声が、意識の外側から響く……
「ルナー！しっかりしてよー！」
「バシッ！」
その声と共に、俺は頬を叩かれた。すると、意識が少し戻った。
「……リバレスか？」
俺は、ゆっくりとリバレスの方を向いた。
「ルナー！悲しいのはすごくよく解るけど……いつまでも、此処にいたって始まらないわよー！」
リバレスも泣いていたのだろう。瞼が腫れていた。
「……そう……だな。一体あれからどれぐらい時が流れたんだ？」
俺は泣き叫んで枯れた声でそう訊いた。
「……あれから3日よー……！」
リバレスにそう言われて、俺は少し驚いた。そうか、3日か……フィーネが死んでしまって……

「フィーネ……！」
俺は、意識が戻ると同時に悲しみも蘇ってきて、枯れた筈の涙が再び溢れ出た……
「ルナー！しっかりしてよー……！」
その後……涙が収まってから……俺は、フィーネの冷たい体を抱きかかえて、遺跡の階段を上っていった。
遺跡の中も……外の世界も……とても寒かった。全てが凍りつく……そんな冷たさだった。外に出ると……吹雪で前が見えなかった。今の俺は、冷たさすら感じないが……
フィーネの体に降り積もる雪が悲しくて……必死に雪を手で掃い続けていた。
「ルナー……、今からどうするのー？」
俺の肩に乗り、吹雪が目に入るのを手で遮りながらリバレスが不安そうに訊いてきた。
「フィーネを……誰にも触れられないように」
俺はそう言って、吹雪の中を歩いていく……今は、夕暮れ時だが目の前は真っ白だった。歩き続けて……俺は、この島の西にある断崖までやってきた。
この島の遥か西の方角には、ミルドがあるから……君が育ち、俺達が出会った。
俺は、断崖の先端付近に穴を掘り……フィーネの体をゆっくりと入れた。
その瞬間、また涙が溢れ出て……俺も死んでしまいたいとさえ思った。
しかし……『約束』がある。此処で、希望を捨ててはダメなんだ。
その後、フィーネが何者にも触れられぬように……フィーネの周りに強力な結界を張る。人間すら触れられないような……
そして……『フィーネ』の姿を見られる最後の時がやってきた。フィーネの体はどんどん雪で覆われていく……
俺の心とは裏腹に……フィーネの顔は安らかだった。まるで……何も不安な事が無いかのように……
「ルナー……、フィーネは、きっと最後までルナを信じてたのよー……それで、今も何処かでルナが来るのを待ってる」
俺の心を見透かしたかのように、リバレスが呟いた。そんな風に俺を励ます彼女の目からも涙が流れ落ちていた。
「……そうだ……『永遠の心』を持った魂は消えはしない」
俺はそう言って、フィーネに土を被せ始めた。永遠を信じていても……この瞬間が余りに悲し過ぎて手が進まない。
涙で何も見えなくなるのを、歯を食い縛って耐えた。何故……こんなにも優しい女性を俺が葬らなければならないんだ！
何故……誰よりも愛する人を……！眠っているだけのように見えるのに……！
「ルナー……、ごめんね」
フィーネを直視する事も出来ない俺に、リバレスはそう囁いたと思うと、俺に『神術』を使った！
「……リバ……レス」
中級神術『催眠』だった。3日以上眠っていない俺の意識は……暗闇の底に沈んでいく……
リバレスは……俺をこれ以上……悲しませないように……

俺は夢を見た。フィーネと過ごしてきた、楽しい日々の夢を……
ミルドの丘……レニーの街での祝宴……ルトネックからの漂流……リウォルの街……初めて愛が触れ合ったリウォルの湖……
そして……永遠を誓ったフィグリルでの夜……
そんな、シーンが流れた後に……フィーネが獄界に堕とされる最悪の情景が現れた！
それが消えた後……最後に俺は何も見えない闇に包まれる。

俺が……俺が間違っていたんだろうか……？俺の所為でフィーネは死んだ。消えない本当の幸せを知る事なく……
それでも君は幸せだと言ってくれた。俺に、フィーネを守る力が初めからあれば……！何て非力

なんだ！
いつも君は俺に微笑んでくれた。俺も最初から、もっと優しくすれば良かったな……ごめんな……もし……時が戻るなら、俺は絶対に君を離しはしないし……辛い目にも遭わせないのに……！
……いや……それは、単なる現実逃避に過ぎない。
フィーネを救う……それには、たった一つだけ方法があるんだ。恐ろしくて踏み出せないだけで……！……でも、君は俺を信じて……『死』すら恐れずに……最後まで微笑んでくれた。俺は、何を恐れる必要がある？……『永遠の心』……
俺達は魂にそれを刻んだ。俺が、命をかけて君の魂を開放する。普通は、転生したら記憶も心も消えるけど……
フィーネなら大丈夫だよな……？１００年……１０００年……一生かけるって言ったけど……どうやら無理みたいだ。
心が、冷たくて痛くてどうしようもないんだ。今すぐ迎えに行ける方法があるから、すぐに行くよ……どんな苦しみよりも……痛みよりも……そして死ぬ事よりも……君の魂と離別する事の方が辛いって解ったんだ。
俺が……フィーネの魂を開放出来たら……代わりに俺が命を失うかもしれない。いや、その可能性の方が高い……
それでも、俺は恐れない。もし、そうなってもフィーネが俺を見つけてくれるから……！

たった一つの方法……それは、俺自身が『獄界へ乗り込む事』……

天界と敵対する獄界……会う者は全て敵……たった一人の天使が其処で何を出来るかなんて解らない。
普通に考えたら……殺されるに決まってる。いや、魂の破片すら残らないかもしれない。
でも……俺は……フィーネの為なら何でも出来る自信があるんだ。

迎えに行くよ……獄界に……

～新たな目覚め～
眩しい……俺は、強い光が瞼の向こうから射しこんで来る所為で目を覚ました。
「ルナー……、半日以上眠ってたわよー」
目覚めた俺の目の前には、心配そうに顔を曇らせたリバレスがいた。そして……フィーネの体が眠る地には、大理石の墓が出来ていた。
「リバレス……、これはお前が作ってくれたんだな？」
俺がリバレスに訊くと、彼女は黙って頷いた。俺にあれ以上の悲しみを与えないようにしたんだ。
「リバレス……、すまない」
俺は、リバレスの頭をそっと撫でた……そして、俺はフィーネの墓碑を見つめていた。
「ルナー……、これから、どうするのー……？」
遠い目をする俺に、リバレスは不安げに尋ねる。しかし、この時俺の行くべき道は決まっていた。
「……俺は……獄界へ行く。獄界に乗り込んで、フィーネの魂を解放させるんだ」
俺は、夢の中で決めた意志を伝えた。すると……
「な……！獄界って……！幾ら何でも、危険過ぎるわよー！『魔』の支配する世界よー！ルナが強いからって……絶対に殺されるわよー！」
リバレスは、顔を真っ赤にして叫んだ。当然の反応だ……もしも逆に、魔が天界に単身で乗り込んできたなら間違いなく始末される。本当に強い力を持つ者は、獄界に幾らでもいるだろう。リウォルタワーに現れた、シェイドのような力を持つ者……そして、それを操る『神』と同等とされる『獄王』……そんな強者から、『魂』を取り戻さなければならない今の俺の力……髪は銀色で目は真紅のままだが……
光の翼は失われていた。この力では……シェイドレベルの魔が精一杯だ。でも……俺は、フィーネの為なら何でも出来る！

「解ってる。……でもな、フィーネは俺を信じて死んでいったんだ。俺は、約束したよ……何年かかっても絶対に見つけ出すって……でも、俺は待てないんだ！獄界でフィーネの魂が傷付けられるのも耐えられない。それ以上に、離れてしまった心が苦しいんだよ！俺には、フィーネが必要なんだ！……でも、お前には獄界へ来いなんて言えない。お前まで危険に晒したくないから」

俺は正直な気持ちを叫んだ。リバレスは来なくていい……俺がフィーネを助けるのは、俺の問題なんだ。

「……それで万が一、フィーネの魂を解放出来たって……永遠を心に刻んでいたって、転生したら記憶は失われる！それが、現実なのよー！甘い幻想を見るのは、いい加減にしてよー！」

リバレスは、必死で俺を止めようと辛い現実を叩き付けた……そんな事は理性では解ってるんだ！

「……幻想だっていい！俺は『永遠の心』を約束したんだ！でも……もし……転生して、フィーネが全てを失っていたら……それでもいい……それが……俺がフィーネにしてやれる唯一の事だから……！」

この言葉でリバレスを納得させられるとは思わなかった。それでも、俺は真剣な目で彼女を見つめた。

「……もー！また、ルナは勝手にそんな事を決めるでしょー！……じゃー、わたしが自分の意思で獄界に行くのも勝手でしょー？わたしだって、フィーネを助けたい。それ以上に、ルナが心配なのー！……それに、わたしはルナがいないと生きていけないから」

今度は、リバレスがそんな事を言ったので俺は驚いた！

「何で、そうなるんだよ！？獄界が危険なのは解ってるだろ！？大人しく、人間界で待ってるんだ！」

俺は、必死でリバレスを制止する。これじゃあ、立場が逆だ……

「ルナー……、勝手なのはお互い様よー……！ルナが、わたしを心配するように、わたしはルナを心配してるのー！何でも、一人で出来ると思ったら大間違いよー。ね？早く、フィーネを助けに行きましょー！」

と、リバレスは微笑みながら言った。これじゃあ、まるで俺が子供だな。

「……ありがとう……お前は最高のパートナーだよ」

こうして、俺達は『獄界』へ行く為にフィグリルへ戻る事にした。ハルメスさんに、神術を使って合図を送る。すると、夕暮れ頃に迎えの船が来た。船に乗って、島を離れる時……白い大地が夕陽に照らされ、温かい光を放っていた。その中で、断崖にポツンと立つフィーネの体の眠る標は……悲しそうに輝いている。俺は、それを見て再び涙が溢れるのを感じた……

でも……フィーネを助け出すまでは、もう泣きはしないよ……そう誓った。

少しの間、寂しいかもしれないけど……信じて待っていてくれ……すぐに行くよ……

君の魂を助け出して……俺も無事だったら……今度こそ、永遠の幸せを掴むんだ。

いや……絶対にそうしてみせる！……永遠の心……お互いが信じている限り負けはしない！

俺達は、悲しみの満ちた島を離れ……新たな旅の決意を固めた。

日はすっかり暮れて、雪の降りしきるフィグリルの街を歩いた。街灯に照らされた雪が物悲しい……

こんな景色を……再び君と歩く為に……俺は戦うんだ！

俺とリバレスは、無言で神殿への道を歩いていった。リバレスは、指輪の姿に変化しているが……

「ルナ……！フィーネさんは……！？」

神殿に着き、赤い絨毯の上で体の雪を掃っていると、ハルメスさんが全速力で駆け寄ってきた。

「フィーネは」

俺は、事情を説明しようとしたが言葉に詰まってしまった。喉から声が出てこない。

「お前のその髪……そして、その目……その力……それでも救えなかったのか」

ハルメスさんは、全てを察したかのように俯いた。沈黙の時が流れる。

「お前も……エファロードだったんだな」

ハルメスさんがポツリと呟いた。お前も……？

「ハルメスさんはエファロードを知っているんですか……！？まさか、ハルメスさんも……！？」
俺は驚いて、思わず叫んだ。
「いや……、俺はエファロードの責務を捨てた男だ。それにしても……お前は本当に、俺にそっくりだよ」
彼は遠い目をして語った。意味が深すぎて理解出来ない。一体何を言いたいのだろう？
「エファロードとは……何を指す名前なんですか？」
俺は単刀直入にそう訊く。俺は自分が何者なのか知りたかったからだ。
「いずれ解る。力の覚醒の第四段階に達したならな……それよりも、お前が今からすべき事があるんじゃないのか？」
遠い目をしていたハルメスさんは、急に力強い目をして俺を見据えた。そうだ、今は思案を巡らせている場合じゃない。
「俺達は……『獄界』に行きます。フィーネの魂を救いに……！」
深呼吸して、俺は彼に応えた。リバレスも元の姿に戻る。
「獄界！？流石にそれは無謀だぞ！」
俺の言葉に、ハルメスさんは驚愕の表情を見せた。其処までは予想していなかったのだろう。
「構いません。無謀でも。もし……あなたの恋人の、ティファニィさんの魂が獄界にあるとしたらどうしますか……？」
俺は真剣な目をしてハルメスさんに問い返した。答は解っていたが……
「……無論、命をかけて取り戻しに行くさ。そうだな。俺もそんな事があったんだ。ティファニィが『魔』に殺されかけた時が……
俺はその時……『天使の指輪』の力を使って、あいつを蘇らせた。指輪は、一度外すと二度と天使には戻れないんだ。無論、天界にも戻れない。あいつを救う為なら、天使としての自分なんてどうでも良かったよ……命さえ惜しくなかった。……本当に……お前は、余計な事まで真似してくれるな」
そう言ったと思うと、間髪を入れずに彼は続ける。

「人間界は俺が守るから……行ってこい、獄界に！」

過去の真実を語り、ハルメスさんは俺の肩を強く叩いた。勇気と力が溢れてくるのを感じる！
「はいっ！……あと、一つ聞いてもいいですか？」
俺は、力強く返事した後にどうしても一つだけ質問したい事があった。
「ルナー、あんまり昔の事を訊いたら失礼よー！」
其処で、リバレスが俺を制止する。きっと、俺がハルメスさんの心の傷を掘り返すと思っての事だろう。
「構わないぜ。何でも聞いてくれ！」
予想に反して、ハルメスさんは強気に笑いながら答えた。やはり、この人の広さにはまだまだ及ばないな……
「ハルメスさんは……『永遠の心』は転生しても消えないと思いますか……？」
これが聞きたかったんだ。この答が……例え気休めでも、肯定の言葉を。
「……ああ、勿論だ。現に……ティファニィの心は俺の中にある。信じていれば、叶わない事などないさ」
言葉の意味は深かったが、俺はそれ以上聞かない事にした。だが、信じる心が更に強さを増したのは確かだ。
「あのー……、ところで獄界にはどうやって行けばいいんですかー？」
其処で、リバレスが本題を切り出す。そうだ、その手段が無いと始まらない。
「それは、たった一つの方法しかない。獄界への道……死者の口を通る事だ。全ての魔は、其処を通って人間界に現れる」
それが意味する事……それは、獄界から人間界に来る魔の全てと対峙しなければならないという事……俺は身震いした。
「……内部の構造はわかりますか？」

俺は恐ろしさに唾を飲み込みながら、そう訊いた。人間界と獄界との接点はどんな構造なんだろうか……？

「詳しくは解らないが……天界の書物によると巨大な塔のような構造らしい。数千階もの高さの……そう、天界と人間界をつなぐ贖罪の塔と同じ高さらしいが。何にせよ、苦しい戦いになる」

ハルメスさんは深刻な顔をした。きっと、俺を心配しているんだろう。

「獄界への道へはどうやって行けば……？」

心配している彼に、更に質問をする。俺の心は焦っていた。こうしている間にも、フィーネの魂はどうなるか解らないのだから……

「……明日の日の出と共に、俺が獄界への道の入り口まで送ってやるぜ。要塞のような島だからな……俺がこの街を離れると、街の結界は消えるが……今はそれどころじゃない。他でも無い、ルナとフィーネさんの為だ」

そう言うと、ハルメスさんは目を閉じた。数秒たって、目を開けると目は真紅に変わっていた！そして、背中に光の翼が生まれた！

「ルナとそっくりーじゃないのー！？」

リバレスが驚くのも無理はない！顔は違えど、感じる力や姿の変化は俺にそっくりだったからだ！

「ふぅ……ルナ、リバレス君、今日はゆっくり休むんだぞ……明日からの重労働に備えてな！」

元の姿に戻ったハルメスさんが優しく言った。焦る気持ちは強いが……この夜が、人間界での最後の夜になるかもしれないんだ。

俺は、自分の命にかえてもフィーネを救う気だ……

「はい……、ハルメスさん……、俺は貴方に、感謝しています。心から」

俺は、深く礼をしてから部屋への道に就いた。貴方に会えて、俺は強くなれました。

明日は獄界に向かう……俺の事を理解する、最高のパートナーと共に……

部屋は暖炉の火に暖められて、窓は曇って真っ白だった。それを、指で擦ると美しい空の月が現れた。

少し窓を開けると……雪は止み……澄んだ空気と……肌を刺すような冷たさを感じた……

君は今何処で何を見ているんだろう。今は、同じ景色を見る事は出来ないけど……必ず、ミルドの丘に行こうな……

俺は、窓際を離れて、ベッドに戻った。そして、疲れたのかぐっすり眠っているリバレスの頭を優しく撫でる。

「リバレス……、ありがとうな。明日からもっと辛いけど、俺はお前を守るから……お前も俺を助けてくれよ。頼りにしてるぞ」

そう言うと、リバレスは眠りながら笑顔を見せた。俺には守る物が多いな……そう思うと、照れくさかったが心強かった。

今日はもう休もう……俺は、人間界に堕ちてからの日々を思い返して眠りの世界へと吸い込まれていった。

～光を求めて～

「コンコンコン」

まだ日も昇らない早朝、ハルメスさんがドアをノックする音が響いた。既に、俺達は準備が出来ている。

ハルメスさんに連れられて、俺達は屋上に集まる。そう、フィーネが凍えながら俺を待っていたあの屋上だ……

「ルナ、どうかしたのか？」

ハルメスさんは、俺の表情を読み取ってそう訊いてきた。

「いえ……ただ、早く助けてあげたいと思ったんです」

正直、俺はあの時の事を思い出して悲しみが込み上げていたのだが、そんな弱音は言えない。今は、前に進む事が大事なんだ。

「そうか……解った」
ハルメスさんは力強く頷く。まず、リバレスが俺の指輪に変化した後にハルメスさんの翼によって『獄界への道』まで送って貰うのだ。
「ルナ、出発する前に一つ伝えておく事がある」
そう言って、ハルメスさんは真剣な面持ちをした。
「……はい、何ですか？」
俺は、その様子に少し緊張しながら答えた。
「天使の指輪についてだ。天使の指輪は、天使である証であると同時に、持つ者に対して力を与えているんだ。だから、人間が天使の指輪を付けると、天使と同等の力を得られる。そして、逆に指輪を外した天使は力を失っていくんだ。ＥＳＧを摂り続ければ別だがな。これは、一般の天使の話……俺とお前、つまりはエファロード……俺達は、生まれた時から天使以上の力を持っている。そんな俺達が、指輪をつけるとどうなるか？力を与える筈の指輪に力を奪われるんだ。要は、俺達の力は天使の指輪によって制御されているという事だ」
そうだったんだ。指輪にそんな役割があるのは知らなかった。俺が驚いているのを余所に、彼は話を進める。
「俺が何を言いたいのか……？お前が、フィーネさん……、そしてリバレス君を守る最後の手段……それは、指輪を捨てる事だ。天使としての自分を捨てる覚悟があるなら、お前は制御されないエファロードの力を発揮出来る筈だ。だが……忘れるな。二度と『天使』には戻れない。天界に住む事も出来ない」
ハルメスさんはそれで指輪を外したんだ。ティファニィさんを守る為に……本当に、貴方は俺の人生の師だと思う……
「……わかりました。もし、俺が指輪を捨てるような事があったら……人間界ではお世話になりますね」
俺は、二人を守る為ならば天使としての自分など惜しくは無い。
「よし、任せろ！でも、それは最後の手段だからな！……そろそろ行こうか！」
彼は意識を集中して、光の翼を開いた。光で編まれた美しい翼が……これが、制御されない力なんだ。
「準備はオッケーでーす！」

リバレスの掛け声と共に、俺達は天高く舞い上がった。
神殿や街が遥か下に見える。遠くに見える山々から朝陽が顔を出してきた。
その光は山々を照らし、街を照らし……やがては海を朱に染めた。
こんな光景を次に見られるのはいつだろう。君と二人で雪の降る丘で会えるのは……
真冬の空は……人間じゃない俺達にも凍える程寒かった。でも、君はもっと冷たい思いをしてるよな……
人間界に来てからの時間……短かったけど、俺の一生の半分以上の出来事があったような気がするな……
永遠の心……そして、愛する心……まさか、知る事になるなんて……
天界では、自由を求めるだけだった。それを皆に与えるのが使命だと思ってた……
でも、今は違う……自由よりも何よりも……フィーネに会いたいんだ。
俺は戦うよ……命も魂もかけて、君を取り戻す……幸せになる為に……

大海原をハルメスさんは、高速で飛んでくれて丁度正午頃に目的地が見えた。海の真ん中に突き刺さるような、高い岩山に囲まれた島……あれが、『獄界への道』……通称死者の口か……植物は一本も生えておらず、大地は暗黒に染まり……光さえも反射しない。
恐らく……獄界からの、闇のエネルギーが漏れている所為だろう。天界と人間界は、Ｓ・Ｕ・Ｎの光に支えられている光の世界……
だが、世界が３つに分かれた時から獄界は『暗黒の海』の中に存在している。天使が踏み込んだ事の無い世界だ……
「リバレス、行くぞ！」
地上１０ｍぐらいまで降下した所で俺は、ハルメスさんから離れて島へ飛び降りた。

すぐさま、数十体の魔に囲まれたが、ハルメスさんの神術で魔は瞬時に消滅した！

「必ず……全員無事で戻ってこいよ！」

ハルメスさんは力強くそう叫んだ。俺達が獄界で戦っている間は、ハルメスさんが人間界を守ってくれる。何も心配いらない。

「行ってきます！」

俺は、人生の師を背に……最高のパートナーと共に……何よりも愛するフィーネを今から救いに行くんだ！

§第二章　人間界§

ー　完　ー

第三章　獄界

第一節　歩むべきは荊の道

俺は今……リバレスと共に獄界への道、通称死者の口の入り口に立っている。周りは火山の跡のようで切り立った岩で囲まれている。
入り口は、リウォルタワーと同じようにオリハルコンの扉……だが、その扉は開かれている。もう引き返せはしない。行こう。
「リバレス、準備はいいか……？」
俺は、肩の上に乗っているリバレスに問いかけた。
「うん、行きましょー！」
俺達は、意を決して扉の奥へと歩を進めた。
「これは……！」
俺は、内部の様子に驚いた。見たことも無い古い作り……内部は円形で、半径が２０ｍ程で高さが１０ｍ程の広い作り……また、リウォルタワーや、天界のどの建物よりも古い……だが、大理石の壁……いや、塔全体が強力な結界で保護されており朽ちる様子は無い。恐らく……２０億年前に、天界、中界、獄界に世界が分割した時から存在するのだろうが。彫刻は、宇宙の星々を象ったもの……そして、海や大地に生い茂る木々などの彫刻が多かった。更に、壁には灯火が整然と並んでおり、今も神術か魔術かの力でゆらゆらと燃えている。俺は、その無限の力に眩暈すら覚えた。
「ルナー、あれは？」
俺が驚いているのを余所に、リバレスは中央に光を模した彫像の下に輝くオリハルコンのレリーフを見つけた。
「これは……古い文字だな。輝水晶の遺跡よりも」
こんな文字は、今だかつて見た事がない。しかし、俺の真紅の目がそれを眺めていると、何故か意味が理解できた。その感覚は、意識がエファロードに支配されていたジュディアとの戦いの時に似ていた。ジュディア、その名を思い出すだけで殺意さえ覚える。
もし俺が、次に奴に出会ったら容赦はしないだろう。しかし……今はフィーネを救うのが第一だ。その他を考えるのは後だ……
「此処は……封印されし塔の３０００階……中界に通じる扉……獄界に生まれし者は開けるべからず」
何という事だ……やはり、この塔は２０億年前に神と獄王の争いの結果生まれたもの……！そして、下には３０００階もの階段が続くのか……！更に、人間界への扉はかつては封印されていて平和が保たれていた。そう、神が天界の維持の代償に人間を中界に置くまでは……俺は歴史の深さに身震いした。しかし……！
「貴様は……！……堕天使ルナリート！探す手間が省けたようだな」
階段を登って来た魔……！それも、強大な力を持った魔が俺の前に立ち塞がったのだ！
「（リバレス、指輪に変化しろ！そのままの姿でいると、すぐに殺される！神術のサポートを頼む！）」
俺は、リバレスが魔に狙われる前に彼女にそう促した。
「解ったー！」
瞬時に、リバレスは指輪に変化した。彼女には、『保護』や『治癒』などで助けて貰うのだ。
「俺様の名は……イレイザー……シェイドと同じく司令官クラス……生命力はシェイドよりも上だ！」
体長は２ｍ程で漆黒の体だが、俺達天使のような姿で背中には翼が生えていた。だが、それよりも持っている大鎌が巨大だ！
柄の部分で３ｍ以上……！更に、鎌の長さも２ｍ以上はある！接近しては戦えないだろう。それにしても、塔の入り口でこんな強者に遭遇するとは……！俺は、道のりの長さを思うと不安を覚えた。しかし、俺はフィーネの為なら何でも出来る！

「俺は……獄界に用がある。此処を通してくれないか？」
俺は、そう言いながらも力を限界まで高めて剣に集中した。いつ襲いかかられてもいいように……！
「数多くの仲間が、貴様に殺された！貴様にどんな理由があろうと、俺様が貴様を通す必要はない！」
イレイザーは、力を解放した！シェイド以上の力が、このフロアに充満する！戦いは避けられない！
「俺は……自分の選んだ道に従うだけだ！行くぞ！」
今まで魔を倒してきた事に罪の意識を感じない訳ではない。だが、俺はフィーネを愛し、人間を守るという道を心に決めた。迷いはない！
「生命力２２０万如きで、３００万の俺様に刃向かうかぁぁ！？死ねぇぇぇ！」
その瞬間！激しい攻防戦が始まった！イレイザーの鎌が頬を掠める！俺は、それをギリギリで避けて渾身の力で剣を打ち込む！しかし、それは鎌の柄で弾かれる！
「ガキンッ……！」
そんな音が、連続でフロアに響き渡った！
「高等神術、『滅炎』！」
武器での攻防戦の合間に、俺は炎を連続で放つ！
「甘いわぁぁ！」
奴は、高速で飛び交う炎を避けて更に大鎌で俺の首を狙う！
「カキィィィィ……ンッ！」
金属どうしがぶつかりあう乾いた音が響く！俺は、鎌を何とか剣で弾き返したが手が痺れてしまった！
「引き裂かれるがいい！」
容赦なく、大鎌は振り下ろされる！
「ズシャッ！」
大鎌が突き刺さった！結界が張られた床に……！俺は、紙一重で鎌を避けていたのだ！
「グッ！」
深く突き刺さった鎌はなかなか抜けないらしい。俺はその隙に精神力を集中した！
「究極神術……！」
鎌が抜けるまでは０・３秒程だった！すばやく、イレイザーは鎌の柄で俺の胸を強打した！
「ミシミシッ……！」
体内でそんな音が響くのを聞きながら俺は、壁に向かって弾き飛ばされている！しかし……
「……手遅れだ……『神光』！」
壁にぶつかる寸前……俺は究極神術を発動させた！フロアの全てが眩い光に包まれる！
「ギャァァァァァァァァァァァァ！」
目も開けられない光の中から、イレイザーの痛烈な叫び声が響いた！
「（勝ったのねー？）」
消えていく光の中でリバレスが話しかける。倒した筈だ……だが！
「貴様は此処で死ぬ……しぬ……シヌノダァァァァァァァァァァァァ！」
左半身が消失してなお……奴は片手で大鎌を振ってきたのだ！
「クッ！」
剣でのガードが間に合わず、鎌は斜め上から振り下ろされる！
「ズシャッ！」
鎌は俺の胸を掠った！傷は深いかもしれない！だが……
「（保護を使ってるわよー！）」
間一髪、リバレスが俺の体を保護してくれたお陰で掠り傷で済んだようだ。
「今度はこっちから行くぞ！」
光が消えて、俺がそう叫んだ瞬間だった。イレイザーは、床に倒れこみ絶命していた。
「死ぬまで攻撃を止めないか……恐ろしいな」
俺はその様子を見て青褪めた。まだ、塔の屋上だというのに……地下への３０００階はどんな地獄が待ち受けているというのか……？

「ルナー！此処で止まってる場合じゃないわよー！」
身震いする俺にリバレスは喝を入れる。そうだ、俺達は先に進まなければならない！俺は、下へ続く階段を駆け下りていった！

どんどん地下へと降りていく中で、一体どれ程の魔が現れた事か……！数は数百体……！だが、イレイザーのような力を持つものはいなかった。階段を何段おりても、フロアを走っても景色は変わらない。魔を倒しながら進むので思うように先へ進めない！
不眠不休で５０時間程走っただろうか……？ようやく、レリーフのある部屋まで下りてきた。早速、そのレリーフに目を通す。
「此処は……塔の２０００階……天界の者は進んではならない。獄界は……危険な役割をもつ」
意味深な事が書いてあった。獄界の役割……危険？その意味は解らないが、俺は行かなければならないんだ！
「はぁ……はぁ……行くぞ……リバレス！」
休みもせず、魔と戦いながらの２日以上は辛かった。それでも、俺は足を引きずって前へ進む……！
「ルナ！急ぐ気持ちは解るけど、そろそろ休まないとダメよー！もう３日近く寝てないんだからー！」
リバレスが叫ぶ。確かに意識が朦朧とする。先へ進みたいが、もう動けなかった。
「でも……フィーネが！」
俺は、気力だけでそう叫ぶ。こうしている間にもフィーネの魂が壊されるかもしれないんだ！
「ダメ！そんな状態で強い魔に会ったら殺される！それじゃー意味ないでしょー！だから、このフロアの階段に結界を張って休みましょー！」
リバレスは、俺を気遣ってそう言った。そして、強引に階段に結界を張る。確かに、こうすれば低級魔なら通れないな……
「リバレス……、すまない。３時間だけ寝るから起こしてくれよ」
俺は、そういい終わると同時に眠りに落ちた……疲労が限界だった。

フィーネ……、もう少しで助けに行くから……少し休ませてくれ……ごめんな……

～譲れぬもの～
「パリーーンッ……！」
俺が目覚めたのは、フロア中に響くその乾いた音の所為だった。
「うーん……！？」
その音の正体……俺は、目覚めたリバレスよりもいち早く察知した！
「リバレス！早く、指輪に変化しろ！」
俺は寝ぼけ眼を擦るリバレスに叫ぶ！
「ゆっくり休むなんて出来ないみたいだな」
リバレスが指輪に姿を変えて、俺がそう呟いた時には俺は１００体以上の魔に囲まれていた！
結界が破壊されたのだ！
「突き進むしかない！」
俺は、自分の体を強力な結界で守りながら走る！目の前を塞ぐ敵は全て剣で薙ぎ払った！どれだけ斬れば済むんだ？
全身を倦怠感が包む……剣を振る腕が痺れる。走る足が重過ぎる。そして何より頭の中が混濁していた。
結局俺が眠れたのは２時間程……そんな状態で走り続け、戦い続ければ自然と何も考えられなくなってしまう。
それでも……たった一つ、フィーネの顔を思い浮かべてひたすら前に進んでいった。
そして、３０時間以上走った時……再びフロアの中心に、海を模した彫像とレリーフを見つけた。
「……此処は……塔の中心……１５００階……これより下は獄王の領域……神の光届かぬ闇の世界」
俺は、その言葉を頭で理解するよりも先に体で感じていた。塔を下っていく毎に、段々と体に

妙な重圧感を感じていたのだ。
体が重い……それは疲労の所為だけではないみたいだ。かつて聞いた事がある。神は光の力を持つ。そして、獄王は闇の力……
リウォルタワーで見た真実、神はＳ・Ｕ・Ｎから力を生み出している。神と獄王は相反するが故に、獄王は闇から力を生み出すのだろう。
歴史の中で獄界は、暗黒の海に浮かぶと聞いた事がある。暗黒の海は、生きる者の邪悪な念や、２０億年前の大戦の際に犠牲となった死者の魂を吸収しているらしい。これは、天界が作り上げた話かもしれないが……その時！
「ゴォォォォォォォ……！」
フロアの周りが、黒い炎に包まれた！体の芯まで焦がされそうに熱い！
「何者だ！」
俺は、精神を集中して剣を強く握った！この力は危険だ……本能でそう感じる！
「お前が……！お前がルナリートか！？」
黒い炎の中から現れた影……それは、想像とは異なる女の魔だった！それも、天使や人間とほぼ同じ姿……身長や体格も変わらない。しかし、もっと驚いたのは魔の目から涙が流れていた事だった！
「ああ、俺がルナリートだ……此処を通してくれるなら、お前に危害は加えない」
今までとは様子の違う魔に戸惑いながらも、俺は魔にそう言った。出来る事ならば、不要な戦いは避けたい。
「私の名はソフィ……！……お前がイレイザーを……私の最愛の魔をお前が！」
まさか……！？俺は、構える剣を驚きの余り下ろしてしまった。
「死ねぇぇぇぇ！」
怒りと悲しみと憎しみが込められた火球が俺を襲う……！それが目の前に迫った時、俺は我に帰った！
「くっ……！」
俺が体を保護で守ると同時に、並の天使なら跡形もなく消滅しそうな炎が胸に直撃した！
「ドォォォォォォォォォーン！」
俺は壁に激突する！『力』で守られている筈の壁に、まるで隕石が落ちたかのような跡が出来た……！
「ドシャッ」
俺は、床に倒れこんだ。致命傷では無いが、体の後ろがズキズキ痛む……後頭部も強打してしまったので、立ち上がれない。
「お前は、私の最愛の魔を殺した！でも、私はお前が獄界に来た理由は知っている。お前の恋人の魂を救う為なんでしょう？お前にそんな心があるなら、何故イレイザーを殺した！？」
俺が殺したイレイザーの恋人……？いや、妻だろうか……ソフィと名乗る魔が俺の頭を踏みつけながら叫ぶ……しかし、何故フィーネの事を知っている！？フィーネの事を考えると力が沸いてきた！
「俺にも話をさせてくれ……！」
俺は、ソフィの足を持ち上げ弾き飛ばした。そして、俺はゆっくりと立ち上がった。
「フィーネは……人間として生まれながら、魂を獄界に堕とされた。もしフィーネが人間界で死んだだけだったら、俺はこんな所までは来なかった。人間界で魂を探し出して転生を待てばいいからな」
俺が、話し終わる前にソフィは叫ぶ！
「黙れ！お前の話など聞きたくは無い！お前は、イレイザーの仇なんだ！」
女はありったけの力を込めて、俺を炎で包んだ！高さ１０ｍある天井も焦がしそうな火柱だ！
「お前の愛する者を殺したのは、申し訳ないと思ってる」
いつの間にか背中に現れた、光の翼で俺は炎を完全に打ち消した。そして、力の尽きた女に俺は歩み寄った。
「殺せぇぇ！私も、イレイザーの下へ送ってくれぇぇぇ！」
彼女は、死を覚悟したのだろう。戦いの中では、力の無い者は死に行く運命だ……
「すまなかった。お前が、イレイザーを愛し続けるんなら魂を見つけてやってくれ……お前に、

死ぬ程の覚悟があるんなら出来るだろう？俺は先へ進むから、もう邪魔しないでくれ」
俺は、ソフィに背を向けて階段へと歩いていった。
「（放っておいていいのー？）」
魔に背を向ける俺に危険を感じたのだろう。リバレスは、そう問いかける。
「ああ……愛する者を奪われる痛みは、俺もよく知っている。その痛みは、復讐なんかでは癒されない。命を賭して、愛する者を取り戻すしかないんだ。例え、生まれ変わって記憶が消えようとも愛した心は消えはしないからな」
俺は、魔にも聞こえるように話した。これでもまだ、背を向けた俺を襲ってくるならば倒すしかない。
「お前の言いたい事は解った。だが、お前は魔にとって災いでしかないんだ！お前が、愛する人間を救う為に魔を殺すのを善とするならば、私は死ぬまでお前と戦うしかないんだ！」
魔が力を振り絞って、炎を作りだす。この女の力で俺を倒す事は出来ない。それは解っている筈なのに！
「俺は……自分を完全な善だとは思っていない。唯……俺は、自分の心を信じて……愛する人を信じて道を歩むだけなんだ。その為に俺は戦う……例え、何者が俺の前に立ち塞がろうとも。……俺は、お前を殺したくない。出来ることならば……彼の魂を見つけ出して……幸せになってくれ」
俺の進むべき道……それに一番大切なのはフィーネだ。フィーネを取り戻して、幸せになる為なら何だって出来る。
魔は……憎むべき存在だと思っていたが、俺はこのソフィという魔に会って少し考えが変わった。魔も愛するという心を持っている事……
フィーネの為に……人間の為に『魔を滅ぼす』のは正しい道ではない。そんな気がした。戦いの先に見えるのは何なんだろうか……？
「お前の愛する人間の魂は……獄王様が保管している。早く此処から消えて！」
ソフィは、そう叫び炎を放ちながら俺を階段へ追いやった。これで、彼女を殺さずに済む……
俺は階段を駆け下りた。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」
すると、階段の上から大泣きの声が響いた。彼女の愛も深かったのだろう。俺は心が痛んだ。
「（ルナー、大丈夫ー？）」
再び走り出した俺に、リバレスは心配そうに言った。
「あぁ。フィーネの魂は獄王が持っているらしいからな……何があっても、獄王に会いに行く！」
フィーネの居場所が解った！だが、獄界の支配者に会いに行く事は危険この上無いだろう。神と同等の力を持つ王、それが恐ろしいのは事実だが、フィーネの事を考えると恐怖は薄らぐ……
俺は、光で織られた翼を広げた。ソフィとの戦いで発現した、この翼で塔の内部を飛んでいけば戦いは最小限で済む。この姿に変わって、不思議と疲れが取れて力が満ち溢れてきた。この姿が、エファロードの力の第３段階なのだろう。ハルメスさんは言っていた。第４段階になれば、エファロードの意味が解ると……俺もそれを理解することになるのだろうか？それは解らないが、今は先へ進むだけだ。
俺は驚異的なスピードで塔を飛び回り、襲ってくる魔のみを倒しどんどん下層へと下っていった。
飛行を始めて僅か４０時間。俺はついに塔の最下層へと下る階段の前まで辿りついた。この下に、獄界へ通じる入り口がある。
この塔に入って５日間……殆ど眠らずに此処まで辿りついた。此処から先に、真の苦難が待ち構えているに違いない。
俺は翼をたたみ、最後の階段を駆け下りた。すると、部屋の中心に彫像とレリーフがあるだけで扉は見当たらなかった。
「（出口が無いわねー……？）」
リバレスも不思議がるので、俺はレリーフに目を通した。
「此処は……獄界へ通じる間……闇を模したこの像に……獄王の名を叫ぶ事で……獄界へと招かれる」

何という事だ！此処まで来て……神の名すら知らない俺が獄王の名を知る筈もない！
「無駄だ。堕天使ルナリート……！」
背後から声がした。全く気配など感じなかったのに……！俺は振り向きざまに剣を構える！
「ワシの名は、ファング。獄王様の側近……ワシを殺したいのならば殺すがいい。だが、貴様は獄界へ行く事は出来ん！」
巨大な狼のような魔……黒色の体に金色の目……体長は３ｍ近くあるだろう。力も半端ではない！
「俺はフィーネの魂を救いたいんだ！頼む！此処を通してくれ！」
無理な事は解っている。俺は魔を殺し過ぎた……その魔の同族が俺の肩を持つなど有り得ない。だが、頼むしかなかった！
「いいだろう」
驚いた！何故かファングと名乗る魔がそれを了承したのだ！
「すまない！」
俺は思わず頭を下げた。こんなに上手くいっていいものだろうか……？
「だが、獄王様の命令で一つ条件がある」
やはりそういう事か……獄王が俺に出す条件とは……？俺の首でも望みだろうか……？
「言ってくれ」
俺は意を決してそう訊いた。
「『天使の指輪』だ。貴様の強力なエネルギーを吸収した指輪を獄王様に献上する事が条件だ。それを呑めば、獄界に案内しよう」
そんな……！天使の指輪を外せば、俺は天使としての資格を失い……天界には二度と戻れない！更に、指輪を渡すという事は俺の力を獄界の者が得るという事だ……！それはつまり、獄界の者は神術も魔術も全て使えるようになる。天界の力が獄界に渡るんだ。俺一人の所為で！だがハルメスさんは言っていた。指輪を外せば、俺の力は制御されないようになると……
フィーネの為に俺が天使としての自分を捨てるのは容易いが、獄界の力が増大するのは不安だった。
「（ルナー！ダメよー！）」
リバレスが叫ぶ！それはそうだ……世界を変えるような決断なのだから……！俺は暫く迷っていたが、結論が出た。
「いいだろう」

俺はそう言って、右手中指にＩ８２６年間光り続けた指輪を外した。俺には、世界よりも……フィーネが大切なんだ。

天界や人間界を危険に晒すのは承知していた。しかし、指輪の力は俺の力の一部……魔が大軍で攻めて来ても俺が全力で守ればいい。
いや……ハルメスさんと共に戦えばいいんだ。俺も、この時ハルメスさんと同じように天使ではなくなってしまった。
「ルナー……！」
リバレスがテレパシーも使わずに大声で叫んだ。無理も無い。俺はもう天界には帰れないのだから。
だが、不思議と未練は無かった。天界に戻る理由もない。フィーネさえ生きていてくれれば……！
「確かに受け取った。そんなにも、あの女の魂が大事か……！貴様のエゴが、天使や人間を破滅させる事になるというのに」
奴はニヤニヤ笑っていた。確かに常識的に考えて、愚かな選択だと思う。そう……君に出会うまでは……
「約束通り、獄界に案内しよう……其処からは、自分の力で獄王様に辿りつくんだな！指輪は、獄界に招く条件だ。
その後の交渉は貴様次第という訳だ！」
そういう事か……！これでフィーネを救えるという訳では無いんだ。予想はしていたが、まだ

道は険しい……
「さっさと案内しろ」
俺は内心、この魔に怒りを覚えていた。俺はうまく騙されたのだから……！だが、獄界まで行ければまだ希望はある！
「ハッハッハ……！愚かなエファロードよ……獄界で後悔するがいい！」

『フェアロット・ジ・エファサタン！』

魔が、獄王の名を叫んだ瞬間だった！体が、霧のようなエネルギー膜に包まれていく……！
恐らく、此処から獄界に転送されるのだろう。
指輪を外して、未だ体に変化は無い。
段々意識が遠のいてきた。

フィーネもう少しだ……

俺は、これから先に待ち受ける幾多の運命をこの時は何も知らなかった。

第二節　真紅の歴史

「うぅ」
塔から獄界へ転送されて、一体どれだけの時間が流れたのだろう？時間の感覚がわからなかった。
此処は獄界……俺はそう確信する。想像していた獄界とは違い、見渡す限りが血に染まったような『赤』の世界……大地も岩も、空さえも……
それなのに獄界と疑わない理由……それは、この世界そのものから感じる空気が重々しく、体は締め付けられ呼吸するのも苦しかったからだ。
俺は、そんな赤い熱砂の大地……その真ん中に倒れていた。
「うーん……ルナー、大丈夫？」
何故か元の姿に戻っているリバレスも目覚めて、俺に問いかける。
「あぁ、大丈夫だけど……この空気は苦しいな」
蒸しかえるような熱気、そして重圧感。その全てが、異界からの来訪者を拒んでいるように思えた。
「うん……わたしも体が重くて、うまく飛べないのー……あっ！」
よろめきながら中空を飛んでいるリバレスが何かを見つけたかのように叫んだ。
「熱い訳だ」
リバレスが見た方向、丁度俺の背の方……其処には、果てしなく広がる溶岩の海があったのだ！俺達は、人間界から下ってきた。此処は、星の最下層にあたるのだろうか？背後には溶岩の海……目の前には、地平線すら見えない真紅の砂漠と岩山……俺は、この広い世界で獄王の所まで辿りつき、フィーネを取り戻さなければならないのだ。先は長いが、やるしかない！
「元の世界に戻れそうも無いし、頑張りましょー！」
リバレスは元気いっぱいの表情で声を上げる。本当に、こいつは頼りになる。そして、彼女の言う通り元の世界には戻れなさそうだ。周りには、塔も無ければ転送装置らしきものもない。俺達を獄界に連れてきたファングの姿すら無かったからだ。
こうして、俺達は決意を固めると共に短く食事を摂った。今後、そんな余裕があるとは限らないからだ。

「行くぞ！」
俺の掛け声と共に、リバレスは指輪の姿に変化した。どうやら、獄界でも神術は使えるようだ。指輪になったリバレスをそっと撫でて、俺は光の翼を開いた！俺達は上空２００ｍぐらいまで舞い上がる。
「（なにも見えないわねー……！）」

彼女の言うとおり、先は見えなかった。唯、熱砂の砂漠の遥か……遥か向こうの空が段々暗くなっているのが見えただけだった。
「恐らく、此処は獄界の最果て……あの暗闇の中心が獄界の本拠地だろう」
俺はそう直感し、その方角に飛んでいく事にした。俺がこの姿になって、飛べるようになった事はフィーネを早く見つける為には幸いだった。
「（そうかもねー、急ぎましょー！）」
リバレスの声よりも早く、俺は全速力で赤い空を切って飛んでいた。
俺は急いだ……渾身の力で翼を震わせて……しかし、１時間……３時間……６時間経っても一向に風景は変わらなかった。
「（後ろに溶岩の海は見えなくなったけど、見えるのは砂漠と岩山だけねー……）」
俺の心を察知したのだろう。リバレスがそう声をかける。
「仕方ないさ……俺達は誰も入ったことの無い世界にいるんだ。出来る事は、前に進む事だけだ」
俺も正直不安だったが、今よりも前に前に進む事で心の迷いを振り切った。こうしていく事がフィーネに近付く事なんだ！
無情にも時間は過ぎ去る。１２時間、２４時間……そして、空を飛び始めて２日が過ぎた。
「あーっ！」
急にリバレスが叫ぶ！それもその筈だ……砂漠が途切れて、何よりも深く暗い闇……漆黒の海が現れたからだ！
「うっ」
それが目前まで迫った瞬間、俺は砂漠へと落ちた……とてつもない、『何か』に全身を捕われたからだ！
「（ルナー！どうしたのー！？）」
赤砂の上で身動きすら出来ない俺に、リバレスは心配そうに問いかけた……
「はぁ……はぁ……あの海は危険だ」
俺は咄嗟に感じたことを呟く……

「Hファロードオオオオオオオオオオオオオ」

その時、頭が割れそうな呪いの声が脳裏に響いた！
「うわぁぁぁぁぁ……！」
俺は頭を押さえて転げまわる！
「どうしたのよー！？何があったのー！」
リバレスが叫ぶ！どうやら……この声は彼女には届いていないらしい。

「呪ってやるぅぅぅぅぅ……恨んでやるぅぅぅぅぅ……許さないイイイイイイイイ」

未だに声は響く……！一体……何の声なんだ。この世の者とは思えない憎しみに満ちた怨みの声……
エファロードを憎む声……魔だろうか……？いや……もしかすると……
「お前は誰なんだ！？」
俺は必死の思いで立ち上がり、海の方に向かって叫んだ！

「貴様らの戦いの所為でヒヒヒ……犠牲にいいいいイイイイ」

貴様ら……？犠牲……？どうやら、俺の声は殆ど届いていない。だが、思い当たる事は二つある。
一つは、俺が人間界で殺した魔の怨みの念……そしてもう一つが……

「世界がぁぁぁ……血に染まりイイイイイイイイ……割れてしまうウウウウウウウウウウウ」

俺は激しい頭痛の中で、この声の正体を理解した。この声は、２０億年前の大戦の際に犠牲にな

った者の叫び……
血に染まる世界……そして、割れる世界……それは全て２０億年前の事実だからだ。
だが、何故俺に叫ぶ……？エファロードに……？
そう考えていると、いつの間にか声は消えていった。
「ルナー！？どうしたのー……大丈夫？」
気付くとリバレスが元の姿に戻り、涙を浮かべて俺の顔を覗きこんでいた。
「あぁ……あの海から、亡者の無念の叫びが聞こえてきただけだ」
俺は、少しやつれた顔をしてリバレスに返答した。
「亡者！？わたしには、何も聞こえなかったけど……本当に大丈夫なのー！？」
彼女は余計に心配そうな表情をする。
「大丈夫だ。この海を越えれば……獄王の所に辿り付ける気する。行こう！」
本当にそんな気がした。まるで、俺はこの風景をかつて見た事があるかのように……
この場所は、眼下に海が広がる断崖……そして、砂漠の果て……記憶の中にそんな光景が確かにあるのだ。
しかし、俺は余計な考えを捨ててリバレスと共に大海原に飛び立った。ドロドロとした。光の一閃すら通さない暗黒の海……
俺は、一刻も早くこの海を越えたかった。天界での話の通り、この海には死者の魂や念が沈んでいる。転生すら出来ない不浄の魂が……
断崖を飛び立って、また1日が過ぎた……獄界での時間の経過は、時計でしか知る事が出来ない。何故なら、Ｓ・Ｕ・Ｎ（太陽）の光などは無くて……獄界を包む無限の溶岩が、獄界の空を照らしているだけだからだ。時間が経過しても、景色が変わることは無い。
「ついに来たか」
獄界に来て４日目……今まで、この恐れが実現しなかっただけマシだろう。そう……魔が現れた。数え切れない程の……！
「（な……何て数なのー！）」
リバレスが驚くのも無理はない。空一面を覆い尽くす程の大群……数万はいるかもしれない！
「此処は、魔の世界……それは初めから解っていただろ？リバレス……、フィーネを連れて、生きて帰ろうな！」
俺は優しく指輪のリバレスを擦った。此処からが、真の戦い。戦いが終わるまでは、リバレスに優しくする事など出来ないからだ。
「（うん、解ったー！絶対に帰りましょーね！）」
その直後だった！魔の大群が、俺に向かって魔術を一斉放射したのは……！
「これは『結界』程度では防げない！」
魔術の一つ一つの威力は弱くとも……その数は数万！俺は、咄嗟に究極神術を発動させた！
「『光膜』！」
結界の数千倍の強度を持つ光の膜、それで体の周り半径１ｍを包んだ！その直後……！
「ドゴォォォォォォーー……ン！」
魔術の全てが光膜に炸裂する！とてつもない衝撃だ……！
連続魔術を受けて、周りは何も見えない！そんな猛攻撃が５分程も続いただろうか……？急に敵の攻撃は止んだ。
「（キャァーー！）」
視界が晴れていくと同時に、リバレスの叫びの正体を知る。何という事だ！
「魔術の猛攻の内に囲まれたな」
俺は呟く……俺達の周り、前後だけでなく上下も、全て魔だったのだ！
「エファロードを殺して、世界を我々の物にするのだぁぁぁぁぁぁぁ！」
そんな叫びと共に、大軍の総攻撃が始まった！
「ルナー！」
リバレスが叫ぶ！言いたい事は解ってる！
「俺は前に進む！死にたくない者は、道を空けろ！」
俺は、声を張り上げて魔に勧告した！それを聞くとは思えないが、こっちも本気だという事を知らせなければならない！

俺は、体の周り数ｃｍに光膜を圧縮させて剣を抜いた！これで、俺に対して普通の魔の攻撃は無効だ！
その後は修羅場だった！力は圧倒的にこちらが上だが、数が多過ぎる！更に、人間界の魔よりも皆強い……！
それでも俺は剣を振り、炎を操り、光で焦がし……漆黒の海の上で命を削りながら戦い、前へ前へと進んだのだ！

３日……また３日過ぎてしまった。だが、長い長い戦いの果てに、ついに獄界の中枢が見えてきた！
暗黒の海に浮かぶ巨大な島……直径は１００ｋｍ程だろうか？その中には、高度な文明の街……深い黒色の建造物が、まるで無限に続くように立ち並び、薄赤い光が整然と並んでいた。そして、その街の中心に巨大な宮殿があったのだ！
しかし……
「リバ……レス……遂に来たぞ」
もうすぐ獄王と対面出来るというのに、俺の体はもう限界だった。エファロード、そんな強大な力を休みもせずに使い続けたんだ。
「（ルナー！しっかりしてー！後少しじゃないのー！）」
リバレスがそう言ったのを聞いたのが最後だった。
「フィーネ……、ごめんな」

操作を失った俺の体は、ゆっくり……ゆっくりと虚しく……悲しく堕ちていった。

第三節　闇の血筋

「ガシャン……ガシャン」
俺の意識が戻ったのは、そんな無機質な音が耳に響いてきたからだ。
「此処は……？」
俺が思わず呟く。すると、そんな俺の様子を察知した魔が走り寄ってきた。
「ガハハハハハ！無様だな、ルナリートよ！エファロードでありながら、貴様は拷問の末に処刑される運命だ！」
此処は……牢獄か。壁も床も黒一色……無機質な音の正体は、牢の番兵が鉄格子を叩く音だったようだな。
「（リバレス……、いるか？）」
気配のしないリバレスに俺は意識を転送する。指輪に変化していた筈だが……
「（無事よー……今は、ルナの内ポケットに隠れてるわー！）」
良かった、無事だったか。それにしても、あんな所で力尽きるなんて不覚だ……剣や荷物も取り上げられたようだ。
「（無事で良かった。それはそうと、此処は何処であれからどれぐらい経ったんだ？）」
意識を失ってからの事は何も解らない。俺は状況を把握する為にリバレスに問いかけた。
「（ルナが空から堕ちて、６時間ぐらい経ったわー。此処は、獄王の宮殿の地下牢よ。沢山の魔に囲まれてルナは殺されかけたんだけど、獄王の声が響いて、ルナは此処まで運ばれてきたのー……それよりも、今のルナの髪は銀色だけど赤い目じゃないし、翼も無い。）」
リバレスが不安気に囁いた。確かに、今の俺の力はさっきまでに比べて激減している。さっきまでが、第３段階だったのに今は第１段階の力に戻ったからだろう。もうすぐ、獄王に会うかもしれないのにこのままではまずいな……
「エファロード！俺を無視するとはいい度胸だ！」
そんな事を考えていると、牢の番兵が俺に罵声を浴びせてきた。こんな奴はどうでもいいが……
「バキバキバキッ……！」
俺は、とりあえず鉄格子の３本を軽くへし折って牢の外に出る。この程度の強度しかない牢ならば、紙箱の脆さに等しい。

「誰が、拷問の末に処刑されるんだ？」
立ち竦む番兵を睨みつけて俺は問いかける。すると、番兵は必死の形相で逃げ出した！
「貴様は……獄王様に殺されるんだぁぁぁぁ！」
俺は、番兵が逃げていった階段をゆっくりと歩いていった。恐らく、獄王に会うのは力づくでしかないだろう。
剣も無く力も少ない今の俺で何処までやれるかどうか心配だが、もうすぐフィーネに辿り付ける筈だ！
俺は、上に通じる扉をゆっくりと開いた。すると……

「よく来たな……ルナリート・ジ・エファロードよ……我こそは獄王……フェアロット・ジ・エファサタンだ……
我は、この宮殿の屋上にいる。申したい事があるのならば、己が力で辿りついてみせよ！
お前が正しいというのならば……力で示してみるがいい」

荘厳な声が響いた。重く……力を感じる声……俺はその声が獄王本人であることを確信した。
声だけで感じる力……それは、神にも引けをとらない。恐ろしい力だ……
「……わかりました。俺は、必ずあなたの元に辿りついてみせましょう！」
神にも等しき、獄界の王……俺の口からは自然と敬意の言葉が出てきた。
このフロアは……一辺が１００ｍはある大広間。上に続く階段は見当たらない。唯、奥に扉が一つだけ見えた。
「ハッハッハ……！そんな言葉は、ワシを倒してから言うがいい！」
その言葉の先を追うと、獄王の側近……ファングがいつの間にか扉の前に立っている。またも気配すら感じなかった！
「どうした！？エファロードよ、あの時より格段に力が落ちているではないか！？ワシの生命力は８００万……今の貴様は、２５万如きしかないぞ！……まぁいい、此処で死ぬがいい！」
その言葉の直後だったと思う……巨大な狼の姿をしたファングの姿が消えた！
「ドンッ……！」
次の瞬間に見えたものは……体当たりしてくるファングの姿……！
「バキバキッ……！」
「ドゴォォォォォォォォォォォォォーー……ン！」
俺のあばらが砕ける音……壁に激突する音……意識がそれを理解する前に音だけが響いていた！
漆黒の壁の形状はまるで荊のようで……荊が突き刺さった俺の体はたった一撃で致命傷を負った。
「愚かなエファロードよ……たった一人の人間如きの為に……ハッハッハッ！フィーネとかいう女だったかな？……穢れの無い綺麗な魂の色をしていたぞ……今から、切り刻んでから食すとしよう！」
フィーネを切り刻む……？貴様が食す……！？
「ゲホッ……フィーネは……貴様のような愚物に……触れさせない！」
俺は血反吐を吐きながら立ち上がった！折れた骨も修復されてきた！
「（ルナー！大丈夫なのー！？）」
リバレスが叫ぶ。俺は致命傷を負ったからな……
「（大丈夫だ……俺は、フィーネの為なら戦える！）」
俺は、そう言った。体は完全には、修復されていないが……
「エファロード……第２段階か……生命力、２４０万！……それでも、ワシには及ばん！死ね！」
次の瞬間、ファングの口から無数の雷弾が放射された！それと同時に、ファングの姿も消える！
「其処だ！」
俺は、宙に飛び上がり拳を突き出した！
「バキッ！」
ファングの腹部に命中する！だが大した手応えもなくファングは飛び退いた！

「ハッハッハッ！効かんなぁ……！だが、もう遊びは終わりだ！」
ファングは、俺との距離を最大限に広げた！一体何をする気だ……！？
「禁断魔術……『死闇』（シオン）！」
その言葉が聞こえたと同時……！このフロアの全てが……深い深い闇の螺旋に変化していく！
ファングの姿も見えない！今俺は……螺旋の中心を猛スピードで落ちている！空間自体が変化したのか！？
「ルナー！？どうなってるのー！？」
リバレスが叫ぶ！この異空間の螺旋の一番下まで落ちれば……死！いや、魂すらもこの空間に閉じ込められるだろう！
「リバレス！飛ぶんだ！」
俺は叫ぶ！落下を食い止められれば……！
「ルナー！飛べない！この螺旋の中じゃ、飛べないみたい！」
リバレスが半狂乱になって叫ぶ！飛べなければ、死に向かって落ちるだけ……！？
「フィーネ……！力を貸してくれ！もうすぐなんだ！」
俺が目を瞑って、そう叫ぶと体が軽くなった！そう……光の翼が現れたのだ！
「これで安心……？じゃない！」
光の翼を開いて、上に戻ろうとするが全く戻れない！下に何か見えてきた！暗黒の海だ……！
「ルナー！下にいるのは、全部死人よー！」
暗黒の海に浮かぶのは……哀れな骸骨の群れ……そして、呪われた彼らは俺達を引き込もうとしている！
「ルナー！何とかしてー！お願い！」
リバレスが泣きながら叫ぶ！そうだ……この螺旋が、魔術で作られた『空間』ならば……！
「禁断神術……『滅』（ｒｕｉｎ）！」
俺は、宝石シェファを握り締めて叫んだ！この宝石は、俺とフィーネ……、二人の幸せな未来の為の象徴……！頼む！俺はこんな所で終わりたくは無い！
「キィィィィィィィーー……！」
耳が張り裂けるような音が響いた！その音で目を開けると、死の海が眼前に迫っていた！
「キャァァァァァァァーー！」
リバレスの叫び声が響く！その瞬間、突如目の前が光に包まれた！
「カッ……！」
光が消えてゆく中……俺はゆっくりと目を開いた。
「見事だ」
目の前には、ファングの金色の目があった！死の空間は消えたようだが、俺はすぐさま身構える！だが……
「ワシは、もう貴様と争う気はない。今の貴様の生命力は２２００万。『死闇』も破られた今、ワシに勝ち目はない。だが、次の階のお方には貴様は絶対に勝てない。だから、此処は通してやろう」
突然、ファングがそう言って口の中から鍵を取り出した。
「……いいだろう。俺は、本来戦いなんて望んでいない。お前に怒りが沸かない訳ではないが、負けを認めるなら手は出さない」
力が戻った今の俺が、ファングと戦えば確実に勝てるだろう。奴は狡猾な魔だが、今此処で殺す必要も無い。
俺は、鍵を取って扉へと歩いた。一応、背後からの奇襲にも警戒しながら……
「ルナー、あいつはやけに往生際がいいわねー……次に待ってる奴がそんなに強いのかしらねー？」
リバレスが無用心にも元の姿に戻って、緊張感なく話しかける。
「こら！元の姿に戻るな！次が誰であろうと、俺は進むんだ。それが、唯一俺に出来る事だからな」
俺は、そう言って扉を開けた。すると、風景が変わり……まるで内臓の中のような赤く……そ

して禍々しく波打つ空間に出た。そんな階段を駆け上り、俺は上層の扉を見つけた……だが、鮮血を塗りたくったようなこの扉をどうしても開けたくない。
俺の本能が……この扉を開けてはいけないと叫んでいるからだ。
だが、本能を押し切り俺は扉を蹴破った。

〜受け継がれる力〜

「随分遅かったね」
内臓のような部屋の真ん中に佇む者……それは、たった一人の魔の少年だった。身長は俺より１０ｃｍ程低く、小柄で華奢な少年……
髪はストレートで耳の辺りまで伸ばし、端正な顔立ちをしている。皮膚が黒くなければ、人間と見分けがつかない。だが……
「お前は……何者だ？」
俺は、その少年から感じる異様な程の力に後ずさりしながらそう訊いた。
「僕は、フィアレス・ジ・エファサタン。君がエファロードなんでしょう？」
臆面もなく、その少年は聞いてくる。そして、少年……いやフィアレスは歩み寄ってきた。
「ああ、俺がルナリートだ。獄王に会わせてくれないか？」
俺は、身構えながらも主旨を伝える。俺の本能が、少年との戦いを拒んでいるからだ。
「お父さんには会えないよ……僕を倒さないとね」
やはり……！この少年は獄王の子供……何という力だ！
「僕はこの前やっと１５００歳になって、人間や天使と戦う許可をもらったばかりなんだ。僕は、自分の力を試したくて！獄界の皆じゃあ、僕の相手は務まらないからね。これは、君の剣でしょ？返すよ」
無邪気に話しながら、フィアレスは俺の剣を返してきた。
「一体どういうつもりだ？」
俺は返された剣を腰に携えた。紛れも無い、オリハルコンの剣……
「だから、僕は君と戦いたいんだよ！僕の生命力は３０００万らしいから、同じような力を持つ君を倒すんだ！」
そう言うと、フィアレスは手をかざし無の空間から禍々しい形をした。一筋の光も反射しない黒の剣を取り出した。
「あー……ゾクゾクするなぁ！僕は君を殺す気で行くから、君も本気で来てね！」
その言葉の直後だった！フィアレスは一瞬で背後に回りこみ斬りかかって来る！
「クッ！」
俺はその動きを何とか察知し、剣で弾き返した！
「キンッ……！」
剣がぶつかりあう音が聞こえる頃には、フィアレスはもう俺の正面に移動していた！何という速さ！
「へぇー……！今のを防ぐなんて。普通の魔なら、あれで一撃なのにねー。じゃあ、本気で行くよ！」
こっちも殺す気でいかなければ……確実に殺される！俺は、今ある力を戦いに全て集中させた！
「ガキンッ……！」
「キンッ……！キンッ……！」
そんな音が絶え間なく続く！
「これでどうだ！『獄闇』！」
かつて、リウォルタワーのシェイドが用いた究極魔術……！それの１０倍以上のエネルギーだ！フロアの全てが、闇に染まる！
「『光膜』！」
俺はその闇に対抗させる為に、高濃度の光で体を覆う！
「ドォォォォォォーーン……！」
闇は、光膜を打ち消す程の威力……！俺は、光膜の維持に力を注いだ！
「（ルナー！危ない！）」

異変に先に気付いたのはリバレス！
「ヒュッ！」
闇と共に、フィアレスの剣が見えた！
「パァーー……ン！」
「ズシャッ……！」
光膜が割れ……俺の胸を縦に裂く刃……！俺はそれを必死で避けたが……！
「ルナ！大丈夫ー！？」
鮮血が流れ落ちた……致命傷ではないが傷は深い……！
「はぁ……はぁ」
俺はそれでも何とか立っている。
「エファロードって、この程度？僕を失望させないでくれよ！」
その言葉と同時に、フィアレスは無数の斬撃を浴びせてくる！
「カキンッ！」
「ブシュッ……！」
「ギンッ……！」
「ズシャッ！」
奴はいたぶるように、俺に傷を加え続けた……！俺は致命傷になるのを防ぐので精一杯……！
「うーん……僕は、愛ってよく解らないけどそんなに大事なの？」
フィアレスは、余裕で腕組しながら可笑しそうにそう訊いてきた。
「当たり前だ……お前みたいな子供には解らないさ」
俺は、奴を睨み返してそう返事した！
「僕を子供扱いするな！……まぁ僕には負けるけど、それだけの力を持ってる君の宝物。僕が貰っちゃおうかなー？」
フィアレスは、剣先を俺の目の前にちらつかせて挑発してくる。
「フィーネの魂を傷付けるなら……俺はお前を殺すぞ」
俺も剣をフィアレスの眼前に突き出した。
「こんなに力の差があるのに、どうやって僕を殺すのかなぁ……？おもしろいね」
奴が油断した瞬間だった。俺は、全力を込めてフィアレスの腹部に蹴りを放つ！
「うぐっ……！」
奴は宙を浮き、壁に向かって激突する。と思えたが……！
「……ふぅ……今のは効いたよ。油断したらダメだね」
奴は、闇で翼を作り出しその力で衝突寸前に力を無効化させたのだ！
俺も光の翼を開く……空中戦で決着をつける！
「『滅炎雨獄』！」
俺はそう叫び、炎の雨を作り出す！しかし……！
「『獄炎』！」
奴も炎を呼び出し、フロアは赤い炎と黒い炎で満たされる！逃げ道は何処にもない！
「行くぞ！」
俺は、全速力で滑空し剣に精神を集中させる！
「来い！」
俺達は、炎に焦がされながらも激しい攻防を続ける！炎のダメージを気にしていたら、剣が防げない！
「『神光』！」
「『死闇』！」
光と闇の破片が、フロアを埋め尽くす！この世界で、最高レベルの力と力がぶつかりあう！
「（なんて戦いなのー……）」
リバレスが呟く……それはそうだ、普通の者には目で追う事すら出来ない速さと力……！
「くっ……！エファロード、やるじゃないか！生命力がまた上がってきているよ！」
楽しそうに、剣での戦闘中にフィアレスは叫ぶ！
「お前こそ……！でも……俺はフィーネに約束したんだ！」
その言葉に乗せた剣での一撃が、防御するフィアレスの体ごと弾き飛ばした！勝機……！

「禁断神術……『滅』！」
今までの『滅』の中で一番巨大な……半径１５ｍぐらいの『虚無』の空間がフィアレスを襲う！
「僕は負けない！」
避けきれない筈の『滅』を眼前にし……フィアレスの姿は消えた！
「シュウウウウウウウウウ」
『滅』は、壁を消し……床を消し……闇も光も飲み込んで消えていった。
「はぁ……はぁ……はぁ」
早い呼吸……俺がそれに気付き振り返ると……右腕から肩にかけてを失ったフィアレスが立っていた！
「危なかったよ……今のは……！君の指輪に記憶されていた『転送』の神術で、自分を消さなければ死んでた」
よく見ると、奴の首から下がっているネックレス……そのチェーンには俺がつけていた天使の指輪があったのだ！
「早くも利用されてる訳だ……だが、もう勝負はあっただろう！」
俺は満身創痍のフィアレスに叫ぶ。しかし……
「僕は……誇り高き獄王の皇太子！こんな所で逃げる訳にはいかない！」
流石は獄王の息子……左手一本で剣を取り、俺の方に向けた。だが、その様子も痛々しい……
「此処を通してくれないなら……戦うしかないな」
俺は、仕方なく再び剣を強く握り締めた。

「待つのだ！フィアレスよ……！今回は大人しく負けを認めるのだ。お前は此処で死んではならぬ！」

獄王の声……子供を心配しない親はいないか……
「はい……、お父さん……、悔しいけど、今回は負けです。エファロード！今回は僕の負けだけど……君は今からお父さんに殺される！だから……お父さんの跡を継ぐ、僕が最強なんだ！」
そう捨て台詞を残し、フィアレスは鍵だけ残して消えていった。
「ルナー……、次が」
リバレスが心配そうに囁く……俺だって不安だ。この次に待つのは……獄界の王……最強の力を持つ者……

「ルナリート・ジ・エファロードよ……我の元に来るがいい……お前は生まれてきた事すら後悔する事になるがな」

俺は、フィーネとの思い出……愛……永遠の心を抱き締めて最後の螺旋階段を上がって行く……ついに此処まで来たよ……俺は……永遠の心を証明するんだ。
この戦いが終われば……幸せに生きよう……！

～闇より生まれし王の末裔～
「ドクン……ドクン」
目の前にある。巨大な扉……漆黒の中に豪華な宝石が散りばめられた扉……それを開こうとする俺の手は震えていた。
だが……この扉には何だか見覚えがあった。こんな所には一度も来た事がない筈なのに……おかしな感覚だ……
「リバレス……、行くぞ！」
俺は、恐れを振り払って叫んだ。
「オッケーでーす！」
リバレスは元気よく返事を返す……
「ギィィィ

「よくぞ此処まで辿りついたな……エファロードよ」
この空間は……！？異様だ……！壁も床も無い。そして、振り返ると扉すらも消えている！
上下左右の全てが、暗黒の海……そして、無数の星々……重力も無に帰すような空間……そして、果てしなく広がる空間……
その中で……獄王……十字架に鎖で繋がれた獄王が、空間の中心に浮いていた。
「一体此処は……？」
俺は、この異様な光景を聞かずにはいられなかった。
「此処は、獄界の中枢、『断罪の間』。全ての界で生まれし、悪魂を滅する場所……エファロードはそんな事も忘れてしまったのか……？」
肩よりも長い髪……やつれ果てた顔……フィアレスが老いたら、こんな顔になるだろうか……それより獄王はまるで、俺がこの場所を知っているのが当然であるかのような口調で話してくる。
「俺は……こんな所に来た事はありません。それよりも、フィーネの魂を返してください！」
俺は叫んだ！獄王の話……この場所……俺には理解できない筈なんだ！
「エファロードよ……１００万年振りの再会だというのに……何も思い出せないのか……？それとも、まだ記憶が継承されていないのか？」
獄王が、真紅の瞳で俺を見つめた！何故だろう。俺は……その顔に懐かしささえ覚えてきた。
「神は天界と中界に魂を生み出す……獄王は、獄界に魂を生み出す……神の役目は、天界の維持とＥＳＧの製造……そして、魂の転生。我の役目は悪魂を滅し魂の転生を行う事。そしてもう一つ……強大な力を持ち……我の力でも完全に滅する事の出来ない悪魂を封印する『深獄』の扉を閉ざし続ける事だ」
獄王は尚も話を続ける。神と獄王は、魂の転生を行う……？深獄……？獄王はそれを封印している？
「神は……天界で処理できなくなったエネルギーを消費させる為に、中界を占領した！獄界には何の相談も無く……
それなのに、我がエファロードであるお前に手を貸す必要があるだろうか？」
獄王が、そう言って空間の中から水晶で出来た宝石箱のような物を出した。
「フィーネ！」
宝石箱の中に収められた魂……薄桃色に光るそれは……間違いなくフィーネのものだと確信した！
「やはり解るようだな。エファロードよ。魂を扱えるのは……ロードとサタンのみ」
獄王はそう言って、宝石箱を消した。どうすれば、解放されるんだ！？
「俺は……エファロードは……どうすれば？どうすればフィーネを解放して貰えるんですか！？」
俺は叫ぶ！叫ぶと同時に剣を抜いた。獄王の力は恐ろしい程に伝わってくる。十字架に繋がれながらも、俺は近付く事さえ出来ないだろう。力の桁が違う……
「『エファ』は始まりの者……そんなお前が、たった一人の人間の為に戦うなど愚かだとは思わないのか？確かに、この魂への一切の権限は我にある。だが、我と戦ってまで……この女を取り戻したいのか？」
獄王の声が空間中に響く……体が後退りする。此処にいるよりは、死んだ方がマシだと思えるような恐怖……
「俺は……フィーネを何よりも愛しています。彼女が戻ってくるのならば、他には何も必要ありません。俺の命さえも……
彼女は、他の人間の事を考え……優しさを与え……俺に暖かい心をくれました。そして、俺達は『永遠の心』を誓ったんです。だから……俺は戦います。俺達を引き裂くのならば……天使であろうと魔であろうと……神であろうと、獄王であるあなたであろうと！」
俺は体の震えを止めてそう言った。これが……俺の正直な気持ち。
「己の信ずる道ならば……死すら辞さぬその心……変わらぬな。エファロードは昔からそうだった。よかろう。ロードとサタンは、戦いでしか相手を理解できぬもの……それが、真理。光と闇は混ざり合わぬ……だが、互いに必要なもの」
その言葉の直後だった。鎖で繋がれた獄王の影から、獄王に似た生命体が生まれた。

「何故、あなたは戦おうとしない！そんな魔術で作った生命体で、俺の相手をしようというのですか！？」
俺は、十字架から動こうともしない獄王に怒りを覚えた。俺は命懸けで此処まで来たというのに……！
「我が……この十字架から動けぬ理由……神が……天界の封印の間から動けぬ理由……それすらも解らないルナリート・ジ・エファロードならば我の影すらも倒せはしない！」
意味深な言葉だ……俺は、その理由を理解しなければならないのか……？
「……獄王……あなたの影を倒せば……フィーネを解放して貰いますよ！」
俺は、剣に極限まで精神力を集中した！
「無駄だ……我の影は、我が力の１割を注いでいる。生命力は『２億３０００万』を超えるのだ」
獄王が静かにそう話した瞬間の出来事だった！
「スッ」
影が動いた。というよりも、視界から消えた。
「ブシュッ……！」
そんな音がしたので、俺は音のする方を向く……！すると……俺の左腕が切り落とされていたのだ！
「うぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
俺は思わず叫んだ！痛みが急激に押し寄せる！大量の出血に意識を失いそうになる！
「ルナー！『治癒』！」
リバレスが治癒の神術を使うが……全く効果が無い！
「エファロードよ……早く第４段階の力を見せたらどうだ……？次は右腕を切り落とす」
第４……段階だと……？第１が銀の髪……第２が真紅の瞳……第３が光の翼……それよりもまだ上があるのか……？
「ズシャッ……！」
考える間も無く……影の獄王が俺の右腕を切り取った！剣も虚しく地面に落ちる！殺される。
影の獄王は漆黒の剣を構え、表情一つ変えずに獄王の命令を待っている。
「はぁ……はぁ」
両腕を失った俺に勝ち目はないだろう。大量の出血と痛みで立っているのもやっとだ……
「まだ目覚めぬか……？それならば……この魂を『深獄』に堕とすまでだ！」
宝石箱に収められたフィーネの魂を『深獄』へ堕とすだと……！
俺の意識が消えていった。いや……ジュディアとの戦いの時のように……何者かに奪われていく……
「……待て、サタン！深獄へ向かわせるべき魂ではないだろう！？」
俺じゃない。何かがそう話す。
「ようやく来たか……ロードよ。久々だな」
獄王は懐かしいといった顔をした。
「ああ……１００万年振りだ。それにしても、酷く傷付けてくれたな」
何かがそう言った瞬間、切り落とされた筈の両腕は完全に再生した。
「相変わらずの力だな。ロードよ。影はもう必要ないだろう」
獄王がそう呟き、陰を消した。
「ルナリートとハルメスは『愛』を命題に生み出されたエファロード……『深獄』は、我々よりも危険な力を持つ魂を封じ込める場所だろう？其処に、たかが一人の人間を堕とす必要もなかろう？我からの願いで、解放してやってはくれまいか？」
何か……いや、俺の分身がそう語る。段々、俺はその『何か』の意識を理解してきた。
「確かに……女の魂など我にはどうでもいい存在。お前の願いも理解出来るが……それでも、勝手に中界を侵略した事は到底許すことは出来ないぞ……！」
獄王が怒りながら、そう叫んだ。中界は、天界と獄界の緩衝帯だったのだ。それを天界の維持の為の犠牲にしたのは許されないか……
「それはかつての神の過ち……だから２００年後の計画で水に流すのではないか……？」
２００年後の計画……？俺が天界から堕ちる時に神が言っていた計画の事か……？

「……果たして、『愛』を背負ったエファロードがそれを実行出来るかどうか……？」
獄王が、重々しい口調で問いかける。まだ、俺？いやエファロードを信用していないようだ……
「それは……シェドロット・ジ・エファロードが最後の責務として行う。安心するがいい」
シェドロット……？誰の事だ……？
「ふ……聡明なるシェドロットの最後の責務を『計画』に託すか……よかろう。だが、一つだけ条件を出す」
獄王は、苦笑の後に俺の目を見据えた。
「困難な事ではあるまいな？」
俺の意識が、自動的に受け答えをする。
「記憶が継承されつつあるエファロード……ルナリートの力を見せてみよ。その力が、我の影を越えるならば魂は解放する。普段は獄界の存続と深獄の封印に注ぐ為の力……たまには、戦いに使うのもよかろう」
獄王がそう言うと、再び獄王の影が現れた。しかも、さっきの影よりも強大な力を感じる。漆黒の剣を携え、体全体が強いエネルギー膜に覆われている。そして、全てを弾き返す闇物質で出来た鎧……
「その姿……かつての戦いの時と変わらぬな。よかろう。行くぞ！」
そう言うと、俺を支配していた意識は消えていった。いや、半分俺と同化したというのが正しいか。
指輪を外した俺……ルナリート・ジ・エファロード……第４段階の意味……制御されない力。それは『記憶』の継承……
連綿と受け継がれる『記憶』……エファロードの記憶……俺は理解した。エファロードの意味、自分の力を……
エファは『始まりの者』……サタンは『獄王』……そしてロードとは……『神』……

俺は……『神』を受け継ぐ者……

「キィィィ

「キンッ！」
「ガキンッ……！」
「ピキィィィィン……！」
翼を持つ俺達は、空間でぶつかり一旦離れ……またぶつかる！
互いに２億以上の生命力を持つ者……６５億年前から続いてきた生命の始まりから続く者……
幾度争ってきただろう？俺達は戦う事でしか理解出来なかった。
でも、俺は今までの『神』とは違う。俺はたった一人の人間の為に戦っている。
フィーネの為に！
「光（ｓｕｎｌｉｇｈｔ）！」
神はＳ．Ｕ．Ｎという光から無限の力を生み出す。『光』は、瞬間的にＳ．Ｕ．Ｎと同等の光を生み出す術。無論神のみが使えるものだ。
「キィィィィィィィィーン！」
光と熱が、この『断罪の間』を埋め尽くす！無よりも膨大なエネルギーだ！
「闇海（ｄａｒｋｓｅａ）！」
獄王は、闇の海から無限の力を生み出す……影の叫びと共に、光に反する闇の海が空間に溢れ出した！
光と闇の波がぶつかりあう！これに負けたら、俺は消える！
光の力と闇の力……最初は拮抗していたが光が押され始めた！
「俺は……大好きなフィーネに再会するんだ！それまでは死ねない！」
俺はありったけの精神力を光に変える！だが、それでも暗い波に光が追いやられてくる！
「『愛』を命題にしたエファロードの力はそんなものか……？それで神を名乗るのは、愚かなり！」
波が目の前まで迫る！頭が割れる程……いや、命を削って『光』を放っているのに……何故だ……！
「ルナリート、お前は覚悟が足りないのだ。我々……神と獄王は、力の全て……命の全てをそれぞれの『界』に捧げて生涯を終える。其処にあるのは、永遠の孤独。その運命の重さに、瞬間的な『愛』如きが勝てる筈がないだろう！」
フェアロットの声が脳に響く……！そうだ、ロードもサタンも『界』の為だけに生きて……それだけの為に死ぬ運命なんだ。
だから……シェドロット……今の『神』も俺達の前に姿を現せなかった。俺はそんな使命を背負えるのか……？
「ルナー！フィーネに『永遠の心』を誓ったのを思い出してー！」
俺が獄王の言葉と力の強さに半ば諦めかけた瞬間……リバレスが力強く叫んだ！
そうだ……フィーネは俺との『永遠の心』と愛する気持ちを信じて死んでいったんだ！
最後まで笑顔で……最後まで俺を信じて……だから俺は此処まで来たんだ。迎えに来たんだ！
フィーネは言った。『寂しいから……早く迎えに来てくださいね』と……！もう、君に辛い思いも痛みもさせはしない！
「俺は負けない。絶対に！今度こそフィーネを守り抜いて見せる！」
俺は目を見開き、闇の波に向けて手をかざす！
「『光』！」
膨大なエネルギーを消費する『光』をもう一つ放った！さっきの光は、闇海を押し返す為……
そして、今放った光は凝縮して波を貫き……獄王を倒す為のものだ！
「キュイィィィィィィィィィィーン！」
光は波を貫いた！そして……！
「グォォォォォォォォォォォォォォォォ！」
そんな叫びが聞こえた瞬間……空間を埋め尽くしていた『光』と『闇』は消え去った。
「見事だ」
俺が最後に聞いた声……それは十字架から降りてきた獄王が、倒れ行く俺を支えながら言ったその言葉だった。
力を使い果たしたな……

～新たなる時へ～

「目覚めよ……ルナリートよ」

頭が痛い……あれからどうなったんだ？俺は恐る恐る目を開いた。

「ルナー！ようやく起きたー！」

元の姿に戻っているリバレスとフェアロット……！？俺はすぐさま立ち上がろうとした。が。

「無理をするな……エファロード最終段階に達せずに、あれだけの力を発揮したのだ。我はもう戦う気はない」

此処は……宮殿の中だろうか……？王の間だろう。フェアロットは玉座に座り、苦笑を浮かべている。

「くっ……フィーネは……！？」

俺は何とか起き上がり、獄王にそう訊いた。俺は影を倒したのだろうか……？

「ルナリートよ……お前は神としての力を受け継ぎながら……数奇な運命を背負ったものだな。シェドロットが行う『２００年後の計画』があるというのに。何故、お前は『愛』を命題に生まれてきたのか……？」

十字架を背に獄王は足を組みながら、俺に問いかけた。

「現在の神……シェドロットの意向、計画は俺にはわかりませんが……俺が『永遠の心』と愛を持つ事は真実です」

俺とハルメスさんは……『愛』をするように生まれてきた。俺がフィーネを愛するのも必然だったかもしれない。

しかし、この心……『永遠の心』は俺達が築いたもの……定められた事などではない。それが、俺の真理だ。

「やはり『計画』は知らぬか……エファロードの記憶は継承されるが、計画はお前達二人のエファロードが生まれてから決められた事。その事実をお前達が知る筈はない」

フェアロットは、計画について意味深な事をほのめかす……何を意味するというのか……？

計画は、シェドロットの最後の責務で……中界侵略を水に流す程重大なもの……

「一体『計画』とは何を指すのですか……？それが、俺とフィーネに何らかの影響を及ぼすとでも……！？」

俺はなかなか本音を打ち明けないフェアロットに叫んだ。

「我は……約束どおりフィーネという人間の魂を解放する。だが……お前が『永遠の心』……いや、愛を命題に持ち続けるならば近い未来お前は……シェドロットに会わなければならない」

フェアロットは魂を解放してくれる！俺はこの瞬間……心に喜びが満ち溢れてくるのを感じた！

しかし……彼の言葉の意味は深かった。

「俺とフィーネが愛し合うならば……俺は神に会わなければならない。そういう事ですか？」

俺は喜びを抑えながらも、言葉の意味を理解しようとした。

「そうだ……それだけは忘れるな。……その力と心で真理を貫くのだ。例えその道が、シェドロットと相反する物であったとしても！」

正直に言うと……獄王の言う事は深すぎて完全には理解出来ない。だが、悪意は感じられない。神と獄王は……憎しみあい……戦うだけじゃない。何処か根底で繋がっている気がした。

「わかりました。俺は、自分の信じる道を進みます！だから……フィーネをお願いします！」

俺は、そう返答し……愛するフィーネの魂を解放してくれるように頼んだ。

「魂を扱うエファロードなら知っているとは思うが……転生すれば、高い確率で記憶も心も消える。お前が……『永遠の心』を信じていても、転生した女はお前を覚えていないだろう。それでもいいのだな？」

フェアロットは、俺にそう勧告した。それは解っていた事だが……俺は、フィーネとの約束を信じる。

「はい……、俺……いや、『私』はフィーネと約束した心と想いを信じます」

私の髪は真紅に戻り……翼は消え、目もコバルトブルーに戻った。フィーネの魂を助ける事が出来た。安心したんだ。

「よかろう。たった今、魂は解放された！２００年後に、新たな人間として転生する事になるだろう」

薄桃色のフィーネの魂は、光に包まれて空の彼方へ飛んでいった。向かう先は人間界。
「ありがとうございました！」
私とリバレスは、フェアロットに深く礼を言った。獄界から、人間界へは『転送』の神術で戻る。私の力はもう制御されていない。

フィーネ……、寂しい思いをさせてごめんな……２００年後に君は生まれ変わる。でも『永遠の心』は消えはしないから……
私は会いに行くよ……生まれ変わった君と永遠の幸せをつかむ為に……だからもう少しだけ、安心して待っていてほしい……

§第三章　獄界§

ー　完　ー

第四章　シェファ

第一節　変革は眠りの中

「此処は―……？」
リバレスが目を覚まして辺りを見渡す。獄界から私達を『転送』させた地……それは、フィグリルの街だった。
「此処はフィグリルだ。『転送』は、私がイメージ出来る場所なら瞬間的に移動出来るみたいだ」
私は、改めて今の自分の力に驚いた。獄界に行ったからこそ、力は覚醒した。もう二度と行きたくは無いが……
「フィグリルって事は、ハルメスさんに会いに行くのねー？」
リバレスは、私の顔を嬉しそうに眺めながら宙を舞っている。それもその筈だ……長く苦しい戦いから解放されたのだから。
「ああ！リバレス、よく頑張ってくれたな！」
私はリバレスの頭を優しく撫でる。こいつがいなければ、フィーネを解放するのは無理だっただろう。
「わたしは何もしてないわよー！ルナが頑張ったからじゃない！でも、ルナが『神』の名を受け継ぐ者だったなんて……ビックリよー！」
リバレスが大げさに頭を振る。私が神であろうが天使であろうが、私とリバレスの関係は変わらない。
「私とリバレスは何も変わらないよ。私は、エファロードとしての力と記憶を継承したけど……心までは変わらないからな」
私はリバレスに微笑んだ。すると、リバレスも嬉しそうに笑う。本当に……お前はベストパートナーだよ。
「さぁ、行こうか！2週間近くは獄界にいたんだ。きっと心配してる！」
私はそう言って、リバレスは指輪に変化して……ハルメスさんの待つ神殿へと駆けていった。

「お帰り！心配したぜ……どうなったんだ！？指輪は……！？」
神殿の前で立っていたハルメスさんが、私を見つけて走り寄って……私を抱き締めながら叫んだ言葉がそれだった。
立ち話をするのには長過ぎるので、ハルメスさんの部屋で話をする事にした。
獄界へ行くまでの過程……魔にも愛がある事……指輪を渡した事……暗黒の海での声……そして、戦いの連続……
フィーネの魂は２００年後に転生する事になった事……そして……
「フィーネさんを助ける事が出来て本当に良かったな……！そして……ついにエファロードを知ってしまったな」
ハルメスさんは、まるで自分の事のように喜んでくれた。でも、エファロードの話になった時には真剣な顔に変わった。
「はい……、私とハルメスさんは『愛』を命題に生まれた、『神』の後継者なんでしょう……？」
私がそう言った時……ハルメスさんは何とも悲しい顔をした。
「確かにそうだ。でも、俺は『愛』をするように生まれてきたんじゃない。ティファニィだから愛せたと信じてる」
彼は俯いていたが、顔をあげて強い心を持つ目で私を見据えた。
「私もそうです。決して作られたものなんかじゃない。そう言い切れる自信があります」
私達は、同じ考え方を持っている。それが何だかおかしくて笑ってしまった。
「ははは！やっぱりお前は俺の『弟』だよ！俺達は同じ血を引く本当の兄弟だからな！」
ハルメスさん……、ハルメス兄ちゃんがそう言った。そうなんだ、慕っていた人は本当の兄だったんだ！

「私も……貴方を兄さんみたいと思っていましたけど、本当の兄弟なんですね！嬉しいですよ！」
私達は、エファロードで兄弟。同じような考えを持ち、同じような生き方を送る。それは当然だったのかもしれない。
でも、私は今まで知る事の無かった自分の事や兄弟、親を知る事が出来て嬉しかった。ハルメスさんが兄だったなんて……
私には自分がエファロードである事よりもずっと大切な事に思えた。
「俺も嬉しいぜ！ルナがそれに気付いてくれてな……！フィーネさん奪還の祝いもあるし今日は盛大に祝おう！」
ハルメス……兄さんはそう言って、私の肩を叩いた。
「良かったわねー……！」
リバレスも涙を流しながら喜んでくれた。そうだ……私も兄さんもリバレスも家族なんだ。
「今日は……酔い潰れるまで飲みますよ！」
そう言って、嬉しい宴会が始まる事になった。唯……フィーネが此処にいないのが残念だったが……
いや、フィーネもティファニィさんもいたら最高だったのに……でも贅沢ばっかり言えない。フィーネはすぐに戻ってくる。

今晩は……いい夜だった。雪の降る中……フィーネと愛を交わしたテラスで料理を食べ、美味い酒を飲んだ。無論、寒いので私達の周り数mを『結界』と『焦熱』で覆うのは忘れない。その中で、今までの話……これからの話が大いに花咲いた。
一番印象的だったのは……兄さんの恋人ティファニィさんの魂は、兄さんと同化したって事だった。確かに、それならずっと一緒にいられる。
転生して記憶を失う事もない。でも……私はフィーネと約束したんだ。再会する。再会してもう一度愛し合う。
魂の同化……それは、心が離れる事が無くなる代わりに1対1で愛し合う事は出来ない。心や考えを全て共有する事になるからだ。
私は、エファロードの記憶を完全では無いが継承した。だから、魂についてそんな事が解るんだ。
私が２００年間、フィーネの魂が転生するまでどうするか……？それは、一つの選択肢しかない事も理解している。

暫くはこんな夜を過ごす事は出来ないということ……

薄明かりの中でひらひらと雪が舞い降り、大地や街を白に染める。
きっと今頃は『ミルドの丘』も純白に覆われている事だろう。
フィーネと約束した丘……私達が初めて会った場所。旅の始まりは其処からだった。
私は、掌を開く……この場所でフィーネに言われた通りに……すると、掌には真新しい結晶が積もってゆく。
あの時のフィーネはもういない。私は、フィーネを助け出すまでは泣かないと誓った。
フィーネの魂は救うことが出来た。でも……あの時のフィーネはもう戻らない。
私の頬を一筋の涙が伝った。これは思い出への涙……
兄さんとリバレスが眠りについた後も、私はずっと雪の世界を眺めていた。

「寂しいよ……フィーネ」

私は雪に向かって呟いた。すると、雪が降っているにも関わらず雲の間から月が顔を出した。
まるで私の声に反応するかのように……悲しみを訴えかけてくるような月明かりが私を照らしていた。

〜時に包まれて〜

翌朝、私とリバレスは兄さんの元を訪れた。これから先の事を話す為に……

「おはようルナ！今日は何だか浮かない顔じゃないか？」
兄さんは何でもお見通しだな。私は、伝えたい事を単刀直入に伝える事にした。
「兄さん、私は２００年間……眠りに就かなければなりません！」
俯いていた私は目を見開き、真剣な眼差しで兄さんを見据えた。
「ルナー！どうしたのー！？２００年間、ハルメスさんと一緒に魔と戦うんじゃないのー？」
リバレスが驚き顔で私を見つめて叫ぶ。それもその筈だ……この事は、リバレスにさえ話していないのだから。
「……力の反動か。お前は、エファロード第４段階に踏み込んだ。そして、獄界で限界まで力を酷使した。当然の結果だろうな……
エファロードの強大な力を使い続けると命の消耗も激しい。ま、心配するな！２００年ぐらいなら俺一人で何とかするから！」
兄さんは笑顔で私の肩を叩いてくれた。私はそんな兄を持って幸せだ……
私は……人間界と獄界で力を使い過ぎた。最終的には獄王の影も倒す程の力を……堕天した最初の頃の数万倍の力を急速に解放したんだ。その反動で正直、私の体と精神力は疲労の限界となっている。今もし、私が第４段階の力を使えば間違いなく死ぬだろう。
だから、眠りについて体を休めなければならない。本当は、１０００年ぐらいは眠らないと完治しないだろうが……
「本当にごめんなさい！せっかく、兄さんと一緒に戦えると思っていたのに……こんな所で！」
本当に、ずっと戦いたかった。出来れば、フィーネが転生する頃までには平和な世界にしたい……！
でも……限界なんだ。体を休めなければ死に至る。だから、次に目覚めた時には、今度こそ平和を手に入れる！
「気にするなって！でも、フィーネさんが転生する頃には起きてこいよ！」
兄さんは、尚も力強く微笑む。本当に、この人には勝てないな。
「はい！２００年……お願いします！でも……もし転生が早まればその時はお任せします！」
私は深く頭を下げた。今の私が出来るのはこんな事ぐらいだ。
「ああ、お前が目覚めるより前にフィーネさんが転生したら、俺が守っておいてやる。約束だ！」
言葉も無い。私には、これ以上の願いなんて無い。
「ありがとうございます」
私は、嬉しくて涙を流した。その様子を見ていたリバレスも、つられて泣き出す。
「俺達は……この星……『シェファ』が始まって以来、初めての『二人のエファロード』……助け合って当然だろ？」
そうだ……私達は、『二人のエファロード』。今まで、数１０億年間……神は常に一人しか子を創ってこなかった。
神の子……エファロードは、殆どが神と同じように創られる。それに……母親を必要としない。
神は単独で子を創るからだ。
なのに、私達『二人のエファロード』は『愛』を命題とされ……女性を愛する事が出来る。愛する人の為に命を懸ける。
神は何故……私達のようなエファロードを生み出したのだろう？何故……二人の子が必要だったのだろう？
「はい……、でも、私達が二人いる事には何らかの強い意味があると思います。きっと、生まれる前から決められていた『使命』……そんなものがあるのでしょう……それでも、私にはフィーネという愛する人がいて……ハルメスという兄がいるだけで満足です」
私は正直な今の気持ちをハルメス兄さんに伝えた。すると、兄さんは嬉しそうに笑い出した。
「ははは っ……！やっぱり、お前は俺の弟だよ。その通りだ、エファロードの意味や使命なんて関係ない！俺達は、自分の信じる物……そして愛する者の為に全てを懸ける。２００年後、期待してるからな！」
兄さんは笑う。力強く……そして強い心を持って。

「はい！２００年後には必ず……誰もが、平和で幸せになれる世界にしましょう！」
私は、そう叫ぶと同時に前のめりに倒れそうになってしまった。それを兄さんが支える。もう、体力の限界のようだ……
「約束だぜ！今から、お前を安全な場所へ『転送』させる。リバレス君はどうするんだ？」
兄さんはリバレスにそう訊いた。私は、リバレスの選択がどちらでも構わない。私と離れたくないならそれでもいいし、２００年間兄さんと共に待っていてくれてもいい。でも、彼女の選択は私の思った通りだった。
「わたしは－……ルナと一緒に眠ります」
こうして、私達は『眠りの祠』に転送される事になった。その祠は兄さんが作ったもので、強力な結界が張られている上に周りからは何も見えない。フィグリルの街から東へ１００ｋｍ地点に浮かぶ小さな島……その中に『眠りの祠』はある。

「２００年後、『心』を信じて戦おう！たとえ……この身が朽ち果てようとも！待ってるぜ……弟であるルナよ！」

それは兄さんが、眠る前に伝えてくれた最後の言葉だった。『この身が朽ち果てようと』は、少し大げさな気がしたが心強かった。
祠には、ＥＳＧと保存食が完備されていた。食べ物一つ一つに『停止』の神術が施されており、腐る事はない。
私とリバレスは食べきれないぐらいの食糧を摂取した。２００年間もの間眠って体を休める為には、特別な神術を要する。
「それはそうとルナー、今から２００年間眠ったらわたしの年は倍近くになっちゃうわよー！」
さあ眠ろうという時になって、リバレスはそう言ってショックを受けていた。
「心配するなよ。体の老化は殆ど進まないから。でも、２００年後だから私は２０２６歳。お前は４２４歳だな」
私はそう言って、リバレスの頭をポンポンと叩いた。
「ガーン！４２４歳……ルナにとって２００年って小さいけど、わたしにしたら深刻なのよねー」
リバレスは大げさに頭を垂れた。天使の寿命は約１００００年、天翼獣は約３０００年程度だからだ。
そしてエファロードは……長くて３０～５０万年は生きる。それだけ長生きする事は……幸福ではなく孤独だろう。
「私はもう、この神術を使ったら動けない。準備はいいか？」
時が迫っていた。もうこれ以上伸ばすと、神術は発動出来ない。私は、神術を使う為に力を解放した。
銀の髪、真紅の瞳、光の翼も発現する。
「相変わらず強引ねー……準備はオッケーでーす！おやすみなさーい！」
リバレスが笑顔で私の肩の上に乗った。
「禁断神術……『光包』！」
術が発動した瞬間、柔らかい光に体が包まれる。この光は、Ｓ．Ｕ．Ｎからエネルギーを吸収して私達の体を癒してくれる。
祠の祭壇……其処に、光の毛布は完成した。勿論、この場所は結界越しにＳ．Ｕ．Ｎの光も取り入れられる。
「おやすみ、リバレス。そして……フィーネ」
『光包』は……精神も包み込む……もう目を開ける事も体を動かす事も出来ない。リバレスはもう眠ってしまった。

一体……２００年後の世界はどう変化しているんだろう。
フィーネ、転生しても……約束通り……永遠の心……持っていてくれよ……

フィーネ……、リバレス……、兄さん……、そして、人間界よ……おやすみ……

意識は……暖かい光の中に吸い込まれていった。

～５０年後『天界』～

「只今を持ちまして、獄界との和平策である『新生・中界計画』の実行責任者及び実行日時が決定されました！」

天界の神殿……その屋上でそう叫んだのは、死を司る間の司官『ノレッジ』だった。

この日は、天使ルナリートが堕天してから丁度５０年と半年経った日だった。現在天界は神官ハーツの権力が無くなり、３人の天使が協力して司官を務めている。力の司官『セルファス』、神術と命の司官『ジュディア』、そして死の司官『ノレッジ』である。

もしルナリートが天界にいたままだったならば、彼らを纏めていたのは間違いなくルナリートだっただろう。

しかし、歴史は不可逆で失われたものは戻らない。

「『新生・中界計画』の責任者は、私達３人の司官。そして、その最高責任者は『神』であるシェドロット様です！」

翼の半分が欠け肩に痛々しい傷跡が残る美しい天使、司官となったジュディアはノレッジに続けて声を張り上げた。

「実行日時は、今から丁度１５０年後の日。午前０時より実行されます！」

ジュディアの肩の傷を庇うように優しく擦る天使、セルファスが声を続けた。セルファスとジュディアは、現在では結婚している。

５０年前に、大怪我をして天界に帰ってきたジュディアをセルファスが必死に看病したのが二人の関係の始まりだった。

ジュディアの心は長い間閉ざされていたが、序々にセルファスの優しさと力強さに惹かれていったようである。

また、ルナリート不在のノレッジは全ての学力テストで天界１の頭脳を発揮していった。そんな彼らが司官に就いたのは偶然ではない。５０年前に天界を変えた英雄天使ルナリートの仲間だったからだ。

「かつての英雄ルナリートは……下賤な人間と恋に落ちた挙句、司官ジュディアに致命傷まで与えました。ルナリート、及びハルメス……二人のエファロードはもはや私達の仲間ではありません！私達の神は唯一人、シェドロット様です！共に戦いましょう！」

ノレッジは一際大きな声を張り上げた。すると、観衆である天使達から拍手が沸く……

そうだ、一般の天使には人間界や人間の意味など知らされてはいない。彼らにとって人間は、獄界との争いの火種……そして、塵のような存在に過ぎないのだ。だからこそ……『計画』は実行される。血も涙もない『恐ろしい計画』が……

『計画』はシェドロットの最後の責務……そして、獄界と天界との間に平和をもたらすもの……

だが、それが実行される時……『愛』を命題に生まれた二人のエファロードは、熾烈な運命と戦う事になる。

～１００年後『人間界』～

「……本当に、ルナの奴は目覚める気配がないな。やはり獄界での戦いで費やした力は並大抵じゃなかったんだろう。それにしても、俺がフィグリル皇国の皇帝になった事を知れば驚くだろうな」

フィグリル皇国皇帝のハルメスは、皇座に座り一人呟いた。この１００年間、人間界の進歩は目まぐるしい。産業は発達し、街は整備されていく。人口も１００年前の数倍に膨れ上がった。

それを支えたのが、皇帝ハルメスの力と強力な武器を作り出した人間の科学力だ。人間は、強大

化する魔の力に対抗するべく数々の武器を生み出してきた。魔の固い装甲をも破る、爆薬を応用した『銃』や『大砲』。また、火薬の精度や威力も向上しており『爆弾』は生命力数千程度の中級魔にもダメージを与える事が出来る。人間は武器を取り、協力して魔と戦ってきた。

しかし、持て余す力は自らの崩壊を招く。１０年前くらいから、支配欲を持った人間が台頭してきたのだ。そんな人間が『リウォル王国』を作った。リウォル王国は、過剰なまでの武器を作り出し魔と戦うだけでは飽き足らず、人間界を統一国家で支配する為に動いているのだ。リウォルはフィグリルを攻撃する。皇帝ハルメスの存在を消す為に……

「人間界の進化の速度は計り知れない。ついには、俺にまで攻撃の矛先が向けられた。でも、人間達は解っていない。１００年後に訪れる惨劇を……こんな事をしている場合じゃないんだ！」

ハルメスは大理石のテーブルを叩いた。途端にテーブルは粉砕する。勿論、ハルメスが本気を出せばリウォル王国など一夜の内に滅ぼす事が出来る。しかし、ハルメスは人間を愛している。だから、何度もリウォルに和平の交渉をしてきたのだが受け入れられる事は無かった。

そして、ハルメスは知ってしまった。１００年後の計画を……計画は、司官のノレッジにより知らされた。その理由は、計画の為に力を尽くす事を誓えば天界に戻れるという取引を持ちかけられたからだった。ハルメスの力があれば、『新生・中界計画』はスムーズに運ぶ。だが、人間を……いや、ティファニィを愛する彼がそれを受け入れる事は無かった。１００年後、全ての人間とハルメス……そしてルナリートが協力しなければ、人間界の未来は闇に閉ざされる事になる。だからこそ、ハルメスは歯痒かった。人間どうしの争いが。そして、それを収められない自分が……もう一つ、頼れる弟が眠ったままになっている事が……

「ルナ！早く目覚めてくれ……！お前の力があれば、戦乱を収めて人間達を一つにまとめる事が出来るんだ」

ハルメスは叫んだ。フィグリル皇国城の窓から……空は夕闇に染まっていた。それは訪れる長い夜と、安息の朝の遠さを物語るような虚しい色だった。ルナリートが目覚めるまであと１００年……それは、ハルメスにとって気が遠くなるような時間に思えた。

～１５０年後『獄界』

「お前達、計画は５０年後だ！それまで、存分に力をつけておけ！」

獄界の宮殿のテラスから群集を見下ろすフィアレスは、魔を鼓舞する為に叫んだ。

「ウォォォ

私は涙で何も見えないままに叫んだ！すると……愛するフィーネの姿が闇に浮かび上がる！
「私も会いたかったですよ。ずっと……でも、これ以上傍には行けません」
フィーネが悲しそうに俯く……もっと近付きたいのに……！
「何故だ……何故なんだ！？」
私は訳がわからずに声を張り上げる。すると……
「フフ……相変わらず馬鹿ね」
フィーネの前にジュディアが立ちはだかったのだ！
「ジュディア……貴様……！其処をどかないなら、今此処で息の根を止めてやる！」
私は、『力』を発動させようとするが……全く体が動かず、力も入らない！
「獄界に堕とすだけじゃ甘かったみたいね……魂を砕かれるがいいわ！」
闇の空間が消える程の光がフィーネの上に集まる。『魂砕断』！
「止めろぉぉぉぉぉぉぉぉ……！」
私は喉が潰れる程の声で叫ぶ！

「キャァァァァァァァァ……！」

フィーネが……愛するフィーネが一度ならず二度までも……！
感情が限界を超えた瞬間……私は目を開いた！
「フィーネ！」
私が叫んだ時……風景が変わっていた。此処は……『眠りの祠』。そうだ……私は眠っていた。
さっきのは夢……？
最悪な寝覚めだった。冷や汗が流れる。そして、嫌な予感がする！
「うーん……おはよールナ。あれ、顔が真っ青よー……！」
私の叫びに目覚めたリバレスは、私の顔を見て驚いていた。無理もない。あんな夢を見たら……
「いや……何だか胸騒ぎがするだけだ。恐らく２００年は過ぎた……行こう！」
私の意識は焦燥に支配されていた。悲劇を繰り返してはいけない！人間達を守らなければいけない！そんな焦りだ。
この２００年間の事は何も知らない。だが、何よりも初めにすべき事はフィーネを見つける事。
それだけは解っていた。
手を握り締める。そして、精神力を集中してみる。そうすると、自分の力が完全に戻っている事が解った。
フィーネを探し出す……そして、争いの無い世界にする。私にはやるべき事が山積みだ。私の力はその為にあるんだ！
「うん、行きましょー！」
リバレスが私の肩に乗り、元気よく声を出した。２００年経ってもちっとも変わって無いな。
それで、私の焦りは少し和らいだ。
「兄さん……、今行きますよ！」
私は、フィグリルの街に私達を『転送』させる為に意識を集中した。

これから……私達を待つ『時』はどんな顔を見せるのだろうか……？

第二節　近くて遠い過去と現在

転送の神術を発動させ、向かった先はフィグリルの神殿の屋上だった。沢山の思い出が残る場所だ。しかし……！

「うわー。ずいぶん変わっちゃったわねー！」

リバレスが目を丸くして叫ぶ！無理もない。２００年前とは何もかもが違うからだ。

「白亜の美しいフィグリルは……面影も無いな」

時刻は午後５時。空はまるで血のような赤に染まっている。その光が照らす街、フィグリルは不気味に輝いているのだ。

外壁は黒色の金属に覆われて、それらの周りは有刺鉄線が巡らされ、見張り台には３６０度見渡せるように多くの兵が常駐している。

また、街を見下ろすと武装した兵が殆どで一般人の姿は見えない。兵は、剣でも槍でもない妙な『筒』のような武器を携えている。

人間が変わった以上に街も大きく変わっている。街の敷地面積が数倍の規模になり、レンガと金属で作られた小さな家がびっしりと画一的に立ち並ぶ。恐らく人口が増大したんだろう。だが、何より驚いたのが街の中心部にある巨大な城だった。周りを数１０ｍの堀で囲まれ、直径４００ｍ、高さは１００ｍ近くあるだろうか。一際大きなその城は、夕陽を背に受け堂々と構えているのだ。

「変わってないのは神殿だけねー……あっ！？」

彼女はそう呟いた直後に何かを見つけたようだ。

「手紙か。兄さんからだ！」

兄さんは、私が目覚めたら此処に来ると解っていたんだろう。しかし手紙の色は変色しており、年月の経過を示している。

「一体あれから何年経ったのかしらねー？」

私は不安になった。私は、確かに２００年で目覚めるように眠った筈なのに……！

「とにかく読んでみよう！」

私は、手紙の封を急いで切った。

「最愛の弟ルナへ

まずこの手紙を書いたのは、お前が眠ってから１９０年後に書いたものだ。安心してくれ。この手紙を此処に残したのには理由がある。

それは、この手紙が無いとお前は俺に会えないからだ。現在人間界は魔に脅かされるだけでなく、人間どうしの争いも起こって

混沌としている。しかし、俺一人の力では、全ての平和的解決は出来ない。もうすぐ恐ろしい

『計画』が実行されるというのに！

これを見たら、急いで城まで来てくれ！だが、城は兵で固めているから部外者は誰も入れない。

空にも俺の結界が張られている。

だから、お前の為に地下水路を作った。この地下水路を使えば容易に入る事が出来る。詳しくは地図を見てくれ。話したい事は山程ある。一刻も早くルナの力が必要なんだ！

兄であるハルメスより」

これを読み終えた瞬間、私は手紙を握り締めて走り出した。急がなければ……何か、とても悪い事が起きそうな気がする！

混沌とした世界……そして『計画』……！

「ルナー！もー……待ってよー！」

指輪に変化したリバレスと共に夕闇に染まる城への坂を全速力で駆けていく。通行人や兵には、さぞ怪しい人物に見えた事だろう。

「止まれ！止まらなければ撃つぞ！」

坂の上に数十人の兵……彼らは、全員白の戦闘服を着ている。恐らく、兄さんのデザインだろ

うがそんな事は関係ない。
兵達は、一斉に筒のような物を私に向けて『撃つぞ』と脅してくるのだ。
「私は、『ハルメスさん』の知人だ！どいてくれ！」
私は、そう叫びながらも走るのをやめなかった。すると……！
「ドンッ……ドンドンッ……！」
筒が火を噴いて、金属の破片が私をめがけて飛んできたのだ！
「キンキンッ……！」
思わず剣を抜き、金属片を弾き飛ばす。しかし、それでも破片の幾つかは私に命中した！皮膚を軽く抓まれた程度の痛み……
後で聞いた話だが、これは『銃』という武器。低級魔となら、十分に戦える程の武器らしい。
「私は敵じゃない！やめるんだ！」
私は、兵を『衝撃』の神術で弾き飛ばした。最低まで威力をセーブしたつもりが、全員が数１０ｍ遠くまで飛んでいってしまった。
「（ルナー、やりすぎよー！）」
リバレスから注意を受ける。しかし……
「（あれで限界まで力を抑えたんだよ！制御されない力っていうのも問題だな。）」
その後は、地図の通り水路まで辿り着いた。入り口は、神術で封印が施されていたので解除する。中は暗い迷宮のようだ……

～追憶の幻影～
地下水路……此処は、丁度城の外堀の地下になる。幅、高さ共に２ｍぐらいの狭さで、膝の下ぐらいまで水が流れている。
「水が冷たいな」
私は呟いた。今の季節は冬だろうか？だが、眠りに就く前程寒くはない。冬の始まりといった所だろう。
「うん、寒いわー。それにしても、この通路は暗いわねー……えいっ！」
元の姿に戻ったリバレスが神術を使う。結界に焦熱を封じ込めた球体を作り出したのだ。
「器用だな。これで、前もはっきり見えるな！」
その明かりで私達は、地図に示された通りに通路を進んでいく。この地図が無ければ、間違いなく迷宮で迷っていただろう。
とやがて違った風景が見えてきた。水路が途切れて、大理石の床に変わったのだ。そして、その先には長い階段が続いている。
階段にさしかかろうとした時に、私は結界がある事に気付いた。この結界は、天使や人間にも効果のある物理的結界だ。これを破らなければ先には進めない仕組みだ。兄さんは、この城をこの結界で守り『魔』や悪意ある『人間』の侵入を防いでいたのだろう。
「この先に兄さんがいる」
私は、体を『光膜』で保護して結界に向かって走った。
「パァー……ン！」
結界が破れる。後は、城の中にいるであろう兄さんに会うだけだ。私は、階段の上の隠し扉を開けた……
「ギィィィィィ」
光が漏れてくる。隠し扉の先……其処は……
「厨房みたいねー」
そう、城の中の厨房だった。様々な食器類、調理器具、そして食材が所狭しと並んでいる。数百人分の料理は作れるだろうな。
「兄さんは、水路の行き先に何故こんな場所を選んだんだろう？」
私は不思議だった。私は、てっきり兄さんの部屋に直結しているだろうと思っていたのに……
「あなたは……！？」
私とリバレスが首を傾げていると、一人の侍女に見つかってしまった！幸い、リバレスは一瞬で食器に変化したので彼女に見えたのは私だけだろう。いや、城の兵でも無い私がこんな所にいるのは十分に怪しいな……正直に訳を話すか……？

「私は怪しい者じゃない！……私の名はルナリート。ハルメスさんの弟だ」
私は侍女の目を真剣に見つめて答えた。偽りでない事を解って貰う為だ。
「皇帝様の弟様ですか……！？確かに、目は似ていますけど……それなら、何でこんな場所にいるんです？」
確かに、この場所に突然現れるのは不自然だ。皇帝の弟ならば……？皇帝！？
「兄さんは皇帝なのか！？」
私は思わず叫んでしまった！これでは、私が兄さんの事を知らないのと同じじゃないか！
「やっぱり貴方は……？侵入者！」
侍女……いや少女は背を向けて走り出そうとする！
「待ってくれ！」
私は少女の肩を掴んだ。すると、少女は涙目で振り返る。この世の汚れた部分など知らないような、純粋で優しい目をしている。
「放してください！」
そんな遣り取りをしている間だった。
「ギィィィィィ」
私の後に続いてきた影があったのだ！
「動くな！」
私が驚いて振り返ると、其処には５体の魔が立っていた。鋭い剣を携えた人型の魔だ……恐らく、私の後に続いてこの城に侵入したのだろう。背後に警戒を怠るなんて……不覚だった。
「魔物！」
逃げようとしていた少女が青褪めた顔で立ち竦む……
「俺達は、上級魔……お前ら人間がどう足掻いても足元にさえ及ばん。俺達は、ハルメスを殺しに来たのだ！」
「ハルメスは、人間界を侵略するのに一番目障りなんだよ！」
魔が口々に叫ぶ。私の見た所、こいつら一人一人の生命力は３００００程度。確かに人間では歯が立たないが……
「お前達は……私の事を知らないのか？」
私はそう言って、『力』に意識を集中させた。髪は銀色に変わり、目は真紅に染まる。
「生命力２５０万……！貴様は……獄界を荒らしたルナリート・ジ・エファロード！」
魔は後退りする。しかし……
「……これは好都合だ！ルナリートを倒せば、『あの方』より多大なる褒美が出るぞ！」
すると、魔の生命力が増大した！一人１０万……この２００年で魔も強大化したという事か……『あの方』……？それより！
「君は早く逃げろ！此処にいるだけで、殺されるぞ！」
私は少女に叫ぶ！戦いの余波だけで人間なら消滅するだろう。
「でも、あなたは！？」
少女は震えながらも私の心配をする。
「私はこいつら如きに負けはしない！早くこの事を兄さんに伝えてくれ！ルナリートが帰ってきたと！」
私は少女の背中を押した。すると少女は走り出す……！
「私達を殺すという以上……覚悟は出来ているだろうな？」
私は剣を抜いた。２００年振りの戦いで体がなまっていなければいいが……
「上等だ……死ね！」
５人で５０万以上の生命力……それに、こんな場所では強力な神術は使えない！
「（わたしはどうしよー！？）」
リバレスはこの状況で慌てて叫ぶ……！
「（いつも通り、フォローを頼む！）」
そう言った瞬間、魔の激しい攻撃が始まった！あらゆる角度から攻撃が来る！だが、私はそれを全て紙一重で避ける。
「ギンッ！」
魔の剣どうしがぶつかり、火花が散った！これを受ければ、私も無傷では済まないだろう！だ

が……
「その程度では、フィアレスや獄王には程遠いな」
私は、渾身の力でオリハルコンの剣を振りぬいた！今の私には魔の動きが止まって見える！
「ザシュッ……！」
一振りで、３体の魔を真っ二つにした！その直後、私は狭い範囲に神術のエネルギーを集約させる！
「神光！」
厨房内が光に包まれ、魔の断末魔の声が響く……！
「ギャァァァ
「その程度では、フィアレスや獄王には程遠いな」
私は、渾身の力でオリハルコンの剣を振りぬいた！今の私には魔の動きが止まって見える！
「ザシュッ……！」
一振りで、３体の魔を真っ二つにした！その直後、私は狭い範囲に神術のエネルギーを集約させる！
「神光！」
厨房内が光に包まれ、魔の断末魔の声が響く……！
「ギャァァァ
「ゲホッ……！」
突然の不意打ちで、煙を吸い込んでしまった！体が痺れる上に、煙で前が見えない！この隙に私を殺す気か……？
「ルナー！私がこの煙を消すわー！」
リバレスが元の姿に戻り、神術を発動させる！
「中級神術……『風刃』！」
風と刃が吹き荒れる！厨房が、風の刃に刻まれていくと同時に煙も晴れていった。しかし……！
「魔がいない！」
痺れがとれて、視界が晴れた頃には魔の姿は無かった。一体何処に……？
「ククッ……其処を動くな！」
厨房の外……上層へと続く階段の上に魔はいた。それも、さっき逃げた筈の少女を人質に！
「外道が」
私は魔を睨みつけた。私が人間に持っている情を利用する気なのだろう。
「剣を放して其処を動くな！」
魔が少女の首に刃を突きつけながら叫ぶ……
「言う通りにするから、その子を放せ」
私は剣を放した。カシャンと音を立てて、私は無防備になる。魔の為に人が死ぬ所など見たくは無いんだ！
「ルナリートさん！私の事など構わずに逃げてください！貴方は……この世界に必要な方です！」
少女はそう叫ぶと、魔の持つ刃を握った！少女の手から大量の血が流れ出る。本気なのだろう。
「人間の……少女はみんなこうなのか……？」
私は、自分の身を犠牲にしてまでも私を逃がし……この世界の為に死のうとするこの少女の姿が、儚くも懐かしかった。
「動くんじゃない！喋ってもダメだ！この娘を殺すぞ……！」
殺す……冗談じゃない。私の為に人間を二度も死なせはしない！
「そうだ……動くなよ……今から俺の炎で焼き尽くしてやる！」
魔に力が集まる。暗黒の炎を私に放つ気のようだ！
「死ねぇぇぇぇぇぇ！」
「キャァァァァァァァァァ……！」
目の前が炎に染まる！しかし……
「死角を増やしたのが命取りだ」
炎が炸裂する直前に私は自身を転送させたのだ。
「滅炎！」

私は魔の体に向けて凝縮した炎を放った！
「フィアレス様ァァァァァァァァ……！」
魔は完全に消滅した。眠りから醒めていきなり戦いとはな。黒幕は……王子フィアレス！私にまだ怨みを持っているんだろうな……
それはそうと……！
「おい！大丈夫か！？」
手が血塗れになって座り込んでいる少女に私は問いかけた。大丈夫な筈はないだろう。
「はい……、大丈夫です！でも良かったぁ……貴方が無事で」
少女は私の顔を見て微笑んだ。何という強い人間……！自分の身よりも他人の事が心配か……
「手を見せてくれ」
私が心配しながらそう言うと、少女は恐る恐る深い傷が出来た手を差し出した。
「何て無茶な事をするんだ！これに懲りたら、二度と魔には近付くんじゃないぞ！」
私はそう言って『治癒』の神術で傷を完全に治した。
「あ……ありがとうございます！申し送れましたが、私はシェルフィアです。この城で料理を作っています！さっきは、疑って本当に申し訳ありませんでした！貴方が皇帝の弟様である事……信じます！」
少女シェルフィアは、私に向かって何度も何度も頭を下げた。……そして、心なしか顔が赤らんでいた。
「ルナー！厨房と階段、焼け焦げちゃったわよー！余計な兵が集まってくる前にハルメスさんの元に行きましょー！」
リバレスが叫んだ。確かにもっともな話だ。先を急ごう！
「……（妖精？）ルナリートさん……、皇帝は最上階におられます！でも、階段の先には衛兵がたくさんいますよ！」
さっき兄さんの元に行ってくれるように頼んだのに、この少女はこの場所から離れなかったみたいだな。全くもって『誰か』にそっくりだ。
「シェルフィアと言ったな。人の心配をする優しい心は素晴らしいが、無謀な事を繰り返しているといつか誰かが悲しむ事になる」
私はフィーネに言いたかった忠告を少女に言い聞かせた。
「は……はい！気をつけます！」
その声を背に私は翼を広げた。見上げると、最上階まで吹き抜けの構造になっている。私が帰ってくる事を想定してだろうか？
「さっきの事は忘れません！本当にありがとうございました！」
私とリバレスが上層へと飛んでいくのを、少女シェルフィアはいつまでも見つめていた。肩まで届く金色の髪を揺らしながら……
純粋さと強さを秘めた茶色の大きな瞳でいつまでも……いつまでも。
それを見ると……不思議な事にフィーネが重なって見えた。姿は全く違うというのに……

～狂えし歴史の歯車～
最上階に到達すると、バルコニーがあったので其処に私は降り立った。其処にある扉を開けようとした時……
「ルナ！お帰り！」
扉がバンッと開き、兄さんが駆け寄ってきた。２００年前より少しやつれた顔……
「兄さん、長い間お待たせしました！」
私がそう言うのを待たずに、兄さんは私を痛いぐらいに抱き締めた。
「ああ……大変だったぜ」
兄さんは泣いていた。私にとっての２００年は眠りながら過ぎた刹那の時間。しかし、兄さんにとっては長い長い時間だったのだろう。
こうして私達は、暫く再会の喜びを分かち合っていた。

「ところで」
兄さんは、さっきの魔の騒動に気付いていたようでその事について聞いてきた。私が倒した事、

シェルフィアの事などを伝えた。
「そうか……すまなかったな。俺が行こうとした瞬間に魔の気配が消えたから不安だったんだ。それはそうと、シェルフィアはなかなかいい子だっただろう？」
兄さんは、微笑みながら何故かシェルフィアの事について訊いてきた。理由は解らないが。
「はい……、性格がフィーネに似ていましたね。人間の女性はみんなあんな感じなんでしょうか？」
私は、それを疑問に感じたので聞き返してみる。
「ははは っ！やっぱりお前らしいな。人間の女性も色々いるさ！まぁ、稀に似ることもあるけどな。シェルフィアは、今世界で起こっている戦で両親を失った所を俺がこの城に連れてきたんだ」
兄さんは笑い出す。その真意は読めない。何故其処までシェルフィアに固執するのだろう？
「ハルメスさん、ルナはずっと鈍いんですよー」
リバレスまで笑い出す。一体どういう事だ？
「その話はまた後にして……お前に話す事がある」
そう言うと、さっきまでの柔らかい顔とは変わって兄さんの顔は真剣そのものになった。私もすぐに身構える。
「はい、どんな話でも聞きましょう」
そうして、私達３人は兄さんの個室に向かった。個室は豪勢で、金銀宝石で装飾された兄さん専用の椅子。シルクのベッド。天井にはシャンデリア。そして、誰だか解らないが女性の彫像があった。その彫像は美しく、とても優しい目をしていた。それは恐らくティファニィさんを象ったものだろう。そう考えていると、沢山の美味しそうな料理が山程運ばれてきた。話の準備は整ったのだ。
「何から話そうか……まず、俺が皇帝になったのは知っているな？」
兄さんは椅子に腰掛け、大理石のテーブルに手を重ねて私の目を見てそう質問してきた。
「はい。少し驚きましたけど、何故皇帝なんかに？」
兄さんが皇帝になったのは、私にとって不思議な事だった。兄さんは権力など欲しない筈なのに。
「ふっ、それは俺が進んでやのった事じゃない。群集に半強制的に任命されてな」
其処で兄さんは溜息を漏らした。これだけの規模の街……いや、国を治めるんだ。大変な事だろう。
「確かに兄さんならば、頼りにされて当然ですよ」
私は微笑んだ。私が誰より頼りにしている兄なんだ。人間が頼ってきても不思議はない。
「堅苦しいのは好きじゃないんだがなぁ……まぁ、それを知っているなら話は早い。俺が説明したいのはこの２００年と、これから起きる事についてだ」
兄さんは照れていたが、すぐに真剣な面持ちに変わった。
「一体何があったんですかー？」
私の肩に座るリバレスが即座に聞き返す。
「人間界の進歩は目まぐるしい……この２００年で凄まじい違いだ」
兄さんは一瞬遠い目をした。確かにこの街の変化を見れば、昔の面影は神殿にしか残されていない。
「どのように変わったんですか？」
私もテーブルの上に手を重ねた。話は長くなりそうだ。
「まず……文明の高度化だ。もしかすると、近い未来には天界に匹敵するかもしれない程だ。そしてその文明で人間は武器を作り、ある程度の魔となら対等に渡り合える程の武力を得た。そんな中で、力と強い支配欲を持った人間が現れたんだ。それが、『リウォル王国』の国王だ。国王は、俺が治めるこの『フィグリル皇国』に対して宣戦布告をし、世界は二つに分かれて戦争中なんだ！」
兄さんは悔しそうにテーブルを叩く。すると、大理石のテーブルに亀裂が入った。
「何故そんな事に！？兄さんの力なら、そんな人間など押さえつける事など容易なことでしょう？それに、人間どうしで争っている余裕などあるのですか？戦うべき相手は魔でしょう！？」
私もドンッとテーブルを叩いた。テーブルの亀裂が増える。

「……そうだ。俺が力を使えば、一つの王国を滅ぼすのは容易い。しかし、それは何の解決にもならないんだ。次は別の人間が同じような考えを持ち、戦争を起こそうとするだろう。だからこそ、全ての人間が納得いく形で平和的解決をするしかないんだ」

兄さんはガックリと頭を垂れた。兄さんの言う事はもっともだ。それに、私達は人間を愛している。滅ぼす事なんて出来はしない。

「悪い事を考える人間もいるもんねー」

リバレスもガッカリしたように首を振った。彼女の人間観も変わったものだ。昔は、あんなに人間を見下していたのに。

「それだけならまだ良かった。争いは、ルナとリバレス君と一緒なら必ず解決出来る。問題は、もう一つの事だ」

そう言った瞬間……兄さんの目が恐怖に満ちた。余程の事だろう。私は覚悟した。

「……『計画』ですか？」

私は心臓が高鳴るのを感じながらそう言った。

「……その通りだ。『計画』……現在の『神』が打ち出した獄界との和平策……それがどんなものだか解るか？」

兄さんは声のトーンを下げてゆっくりと訊いてきた。

「……想像していた事とは違う事を願います」

私は祈るように目を閉じた。最悪の想像が頭に浮かぶ……

「お前の思う最悪の事か……それ以上の事だ。お前が眠ってから、魔の侵略は小規模なものだった。皮肉にもそれが人間の戦争を起こす原因にもなったのだがな。それよりも、魔の侵略が今まで小規模だった理由……それは、『計画』の為に力を温存していたからだ。魔だけじゃない、『計画』には全ての『天使』達も加担する。１００年前に、俺に無駄な取引を迫った司官ノレッジより知らされた内容……

たった３ヶ月後……『天使』と『魔』……そして、『神』によって行われる計画……その名は」

『新生・中界計画』！

司官ノレッジ……！？いやそれよりも、計画の名は最悪の想像通りだ……いや、天使と魔が共に行う計画というのが想像以上だ……！

それに……３ヶ月後……！？もう僅かな期間しか残されていないじゃないか！？

「聞きたくはないですが……詳細は……？」

まさか……いや、其処迄残虐な行為は許される筈がない！

「……人間界を……中界として再生させる計画だ……人間界にいる人間……いや、全ての生物が殺し尽くされる！」

その言葉を聞いた瞬間……私と兄さんとリバレスは同時にテーブルを叩いた！テーブルは粉々に砕け散る。

「そんな事は絶対に許さない！私が……いや、皆で必ず阻止しましょう！」

私と兄さんとリバレスの思いは一つだった。天界や獄界の都合で、この世界が滅ぼされるなどあってはならない！

元々、人間界は天界の都合で創ったものだろう！？天界の為に生きてきた人間が……罪の無い人間がこれ以上の苦痛を味わってはいけないんだ！魂は……みんな同じなんだ。心も変わらない。私は命を懸けて戦う！

「ルナ、そしてリバレス君。共に戦おう……！俺達は、人間界を守る！そして……最後に目指す姿は解るか？」

私達は手を取り合った。そして、兄さんがわかりきった質問を私に問う。

「解っています。私達が最後に目指す姿は……全ての者の幸せです。人間、天使、魔、エファロード、エファサタン、そして全ての生命にとっての……！」

兄さんとリバレスは強く頷く。その為に戦おう！しかし、その前にやるべき事が一つある。

「兄さん……、その前に私はどうしてもやるべき事があります！」

私は強くそう叫んだ。私にとっては何より大切なもの……それを見つける事だ。

「解ってる。フィーネさんは、ちゃんと転生してるぜ！獄王が、気を遣って早めに転生させたの

かもしれないな……転生して、もう１９年が経ってる。彼女は、今１９歳になったばかりだ。しかも、この街にいるぜ！」
　私は、その言葉の終わるか終わらないかの瞬間に、この部屋を飛び出した！翼を広げ、街に飛び立つ！兄さんもリバレスも置いて……
「フィーネ……、会いたかった！今行くからな！」
　会えば解る！探せば見つかる！私はそう信じて、夜のフィグリル皇国の空を舞うのだった！

～月が照らす下で信じる永遠～
　時刻は、午後８時になっていた。街を、美しい月と無数の星々が照らす。私は、翼を消して賑やかな街を歩き回った。
酒場や宿屋で聞き込みを繰り返す……しかし、有力な情報は得られない。転生したら姿は変わるんだ。姿でフィーネを探すのは無理だ。
どうすればフィーネが見つかるのかを考えた。私が、獄界で獄王にフィーネの魂を見せられた時は直感ですぐに解った。となると、あの時のような力を使えばいい……しかし、こんな場所であの時の力を解放すれば近くの人間は愚か空間が消えてしまう。私は、空高く舞い上がる。そして、力を解放する。空間が揺れ、眩い光が放射される。この街の人間は驚くかもしれないが、今の私はフィーネに会いたい一心でそんな事を考える余裕は無かった。私は目を閉じて意識を集中する。すると、この街にいる全ての人間の魂が見えた。
だが、街中を見渡してもフィーネの魂は感じられない。兄さんの言う事が間違っていたのだろうか……？私は一旦城に戻る事にした。
兄さんが伝えておいてくれたのか、私が空から城に近付いても兵の警戒は無かった。時刻は午後１１時を回っていた。
月は空高く、その光が優しく届いているテラスに私は降り立った。
「あっ……お帰りなさいませ」
　其処で待っていたのは、冷たい夜風に当たっているシェルフィアだった。
「あ、あぁ……ただいま。どうしたんだ、こんな夜中に？危ないぞ」
　私は何だか様子がおかしい彼女に問いかけた。
「あの……此処にいれば、あなたに会えるような気がして」
　頬を赤らめている。俯き加減で、きれいな髪を風に揺らしている。だが、こんな寒い夜にたった一人で、こんなテラスに立っているのは何故だろう？私に会いたいから……？
「そうか、何か私に用があって待っていたのか？」
　私は無難な質問を選んだ。兄さんの言付けか何かかもしれない。
「いえ……ただもう一度ルナリートさんに会いたかったんです。あっ、ルナリート様ですね」
　ただ私に会う為に待っていたのか……？
「さっきの事なら、全然気にしなくていいぞ。私は、自分の思う通りにやっただけだから」
　また無難な答えを選んだ。すると……
「私は……！あれからずっと……胸が高鳴って……会いたくて……お話がしたくて……ずっとその事ばかり考えていたら、自然と此処に足を運んでいたんです。貴方が街から帰ってくるのは此処だと思ったから」
　此処まで言われると……流石に返答に困った。だが、そうなると私はこう言うしかなかった。
「君がどう思っているかは知らないが……私の事を考えているのならばやめた方がいい」
　私は、少し冷たく声を発する。彼女は私の事を想っているかもしれない。そんな気がしたからだ。すると……
「えっ」
　シェルフィアはとても悲しい顔をした。今にも泣き出しそうな目……純粋な目が悲しみに満ちていく……私の予感は当たっていたようだ。
「すまない。私は、２００年前に約束した人がいるんだ」
　フィーネを裏切るような事は絶対に出来ない。多少冷たくても……優しくして傷付けるよりはマシだ。
「……そうなんですか……でも……２００年も前なら……その人はいないんじゃぁ……？」
　もっともな質問だ……しかし、私が２００年以上生きている事に疑問は抱いていない。兄さん

が長生きなのを知っているからだろうか。
それよりも……約束した人がいると言われてまで……まだ私を想うのか……？
「そうだな。その人は死んでしまった。でも、また生まれ変わったんだ。そして、生まれ変わったら幸せになる事を約束したんだ」
不思議と私は多弁だった。さっき会ったばかりのこの少女に対して……それは、フィーネに似ていたからだろうか……？
「そうですか……残念です。貴方のような人には二度と会えないと思ったのに」
すると、シェルフィアの目から一筋の涙が流れた。それが月明かりを反射する。それが、とても切なくて私の心を締め付けた……
「本当にすまない。私なんかの為に」
私は頭を下げた……私に出来る事は謝る事ぐらいだ。
「いいんですよ。私の方こそごめんなさい……貴方は、皇帝の弟様……そして、世界にとって大切な方……私にとって夢の人」
そう言うシェルフィアの肩は震えていた。寒いのか泣いているのか……それは解らない。
「ふふっ……こんなに寒かったら……ミルドの丘は雪で真っ白かもしれませんね」
ミルドの丘……！？シェルフィアはミルドの事を知っているのだろうか？
「君の故郷は……？」
私は何故だか気になったので訊いてみた。
「私の……故郷はわかりません。物心つく前に戦場で皇帝様に拾われたんです。でも……絵で見た事のある、真っ白なミルドの丘がとても好きで……戦争が終われば必ず行きたい……いえ、行かなければならない気がするんです」
シェルフィアは、遠い目をして優しく言葉を返した。まさかとは思うが……
「フィーネ」
私は自然とフィーネの名前を囁いていた。すると……！
「えっ……！？何故貴方がその名前を……！」
シェルフィアは驚いたように一歩退いた。シェルフィアは何かを知っている！
「フィーネを知っているのか！？」
私は自分でも驚くような声を出した！
「止めてください！その女性は、私の夢に度々現れるんです！その名前を聞いたら……胸が壊れそうに締め付けられるの……！自分が自分で無くなってしまいそうで！」
そう叫ぶとシェルフィアは頭を抱えた！そうか……彼女が生まれ変わりなんだ。だから兄さんやリバレスはあんな風に……！
「フィーネ！私だよ。ルナリートだ！」
私は、シェルフィアを抱き締めた。彼女は……フィーネの記憶を完全には失っていない！必ず戻る筈だ……！

「あぁぁぁぁぁぁぁ……！」

シェルフィアは叫びながら気を失った。私がフィーネと叫び過ぎたからか……？
「シェルフィア！しっかりしてくれ……！」
私は、治癒の神術をかけるが効果は無かった！どうなってしまうんだ！？
「やっと気付いたか、ルナ」
其処に兄さんが現れた。リバレスも一緒だ。私は間違った事をしたのだろうか……？
「シェルフィアはフィーネです！でもどうすれば……！？」
私は兄さんに詰め寄って叫び、その場に崩れ落ちた……
「……彼女は……シェルフィアの心とフィーネさんの心の二つを持っているんだ。ずっとフィーネさんの心は眠ったままだったが、お前が現れた事で眠りから完全に醒めようとしている。それとシェルフィアの心が葛藤しているんだよ。最悪の場合……二つの心が崩壊するかもしれない！」
兄さんは、私にそんな驚愕の事実を打ち明けた……何故そんな重要な事を今更になって！
「ルナー……！『永遠の心』忘れたの？信じるしかないでしょー！？」

リバレスが私を励ます為にそう言う。でも……！
「必ず戻る保障なんてないじゃないか……！」
私は気が動転して首を振りながら弱気に叫んだ！
「ルナ！お前は、愛した女性を信じられないのか！？お前達が信じあっていたから、フィーネさんの魂は戻ってきたんだろう！？」
兄さんが私の肩を強く叩く……そうだ……私が逃げ腰になってはいけない！
「……はい！私は……フィーネが戻ってくるまで、ずっと傍にいます！」
私は強く言い放ち、シェルフィアの体を抱きかかえた。そして、寝室に寝かせた。
「フィーネ……、私はずっと此処にいるからな！」
私は、心が戻ってくるまで片時も離れずにいると決めた。ずっと手を握り締めながら……
フィーネは……２００年前に私から離れて行った時に言った最後の言葉……それは……

『おやすみなさい』

決して別れの言葉なんかじゃなかった。永遠の心を約束してるんだ。
だから、誰よりも大好きなフィーネが目覚めたら伝えよう……

『おはよう……お帰り』

そして、幸せになろう！誰よりも……！私達はずっと愛し合っているから……！

第三節　交錯する記憶と存在

此処は何処……？私は……誰……？
見渡す限り闇……その中で私は一人歩いている。いや、歩いているというよりも空間に浮きながら前に進んでいるというべきだろうか……？
そんな事は今の私にはどうでもいい事……私は……私じゃないのだから……
私は……『シェルフィア』の筈……なのに、どうしても心がもう一つあるような気がする。
闇の中を一体どれくらい歩いたか解らない。それでも歩き続けていると、微かに光の破片が浮かんでいるのを見つけた。
「これは何……？」
光の破片に私の指先が触れる。すると……！
「……化け物……ルナさん……、あなたも魔物なんですか！？」
私の脳裏に見たことも無い光景と声が現れた！何処かの洞窟のような場所で、ルナリートさんに向かって叫んでいる？
頭が痛い……ルナリートさんとはさっき会ったのが初めてなのに……！？
私は、光の消えた闇の中を再び歩き出した。すると、今度は急に闇が晴れて夕焼けの丘に変わった。
その丘に『私？』は立っている。一体何をしようとしてるんだろう？
「……私が、魔物を全て倒しに行くんです！私から全てを奪った魔物を！」
何故だろう？そう叫んでいる『私』……いや、『もう一人の私』の悲壮な決意が伝わってくる。
お父さんもお母さんも、魔物によって殺されたんだ。それで、ルナリートさんに戦ってくれるように頼んだ。
そう……優しいルナリートさんは、私のわがままを聞いてくれて……一緒に旅をする事が出来たんだ。

もう一人の私……その名は『フィーネ』……私の心のもう一人の住人……でも、あなたは私に過去を見せるだけなの？

「……例え脆くても……この素晴らしい世界に生を受けて、たくさんの人に恵まれて一生懸命生きることはきっと幸せなんです」

フィーネ、あなたは両親が殺されても……魔物に虐げられてもこの世界が素晴らしいと言う。しかも、両親の墓前で……

『私は強くない。唯、私を大切にしてくれた人がいたから。お父さんやお母さん……、そして、ルナさん。』

驚いた！今まで１９年間……何度と無く、フィーネの夢は見てきた。でも……でも！フィーネ本人が話してきたのは初めてだった！

「……私はシェルフィア……、どうして、あなたは私の心の中にいるの！？」

周りの風景が闇に戻り、フィーネの姿だけが私の方を見ていた。

『私は、２００年前に死んだ。……でも、ルナさんのお陰でシェルフィアとして生まれ変わったの』

フィーネは、悲しそうな顔をして私の目を見つめる。

「シェルフィアは私よ！私はあなたのものじゃない！」

私は叫んだ！私の心は私のものなんだ！

『そう、だから……あなたも私もフィーネでありシェルフィアなの。本来……人の魂は生まれ変わると、全ての記憶を失う。でも、私はルナさんと約束した。だから、シェルフィアとして生まれ変わっても……フィーネとしての心も消えていないの。』

フィーネは微笑んだ。嘘偽りの無い表情……でも、そんな事は信じられない！

「私は私なの！フィーネなんかじゃない！私の心から出て行って！」

私は、フィーネを力の限り押そうとした。しかし……！

『フィーネを拒めば……シェルフィアも消えるわ。私達の心は二つで一つ。その為に、今からあなたに私の全てを見せる。』

フィーネがそう言うと、私の体の中に入ってきた！

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

頭が痛い！体中が熱い！……苦しい！意識が混濁する！

……混ざり合った意識の中で、フィーネの記憶の映像が鮮明に流れてきた。記憶だけでなく、心の動きも全て感じられる。

「どうして……どうして争いは無くならないの！？何故殺しあわなくちゃいけないの！？……私はどうすればいいんですか！？」

此処は、魔物によって廃墟と化した村……其処で、『私』は無意味な争いを嘆いているんだ。

「……君はよくやっているよ。今は……争いが無くならないのは仕方ないんだ。でも、それを少しでも無くす為に私達は此処にいるんだろ？」

あなたは……！ルナリートさん……、いえ、ルナさん！嘆く私を優しく慰めてくれましたね。それが、すごく心強かったんです。

ルナさんの事を少しずつ思い出していくと……私の心はどんどん満たされていきます。

色んな事がありました。行く街で祝宴をやってもらったり、私の作った『辛いトースト』を美味しいって食べてくれたりもしましたね。

ルナさん……、ずっとあなたと一緒に過ごして……私の心はどんどん温かくなっていったんです。

そして、あなたを助けたい一心で飛び込んだリウォルタワー……私は剣で胸を貫かれて、やっと正直な気持ちを言えたんです。

「ルナさん……、あなたが大好きです」

そうだ……私は今でもルナさんが大好きなんだ。シェルフィアとしての私がルナさんに、恋しようとしたのも偶然なんかじゃない。
私は……フィーネであり……シェルフィア……、でも、まだ完全に一つにはなれない。
今まで生きてきたシェルフィアが、フィーネとしての心を受け入れる事をまだすこし拒んでいるから……
今までの自分が無くなりそうで恐い……
でも……！拒んでも……昔の記憶と心がどんどん蘇ってくる！
ルナさんと過ごした日々が……そして、『約束』が……！

「私もフィーネを愛してる」

ルナさんがそう言ってくれた時、私は人生で一番幸せだった！大好きなあなたと心を通じ合わせる事が出来たから……！
でも……人間の私と天使のあなたの一生の長さは違う……それで私が困らせると、あなたは優しい約束をしてくれました。

「フィーネ……、心配しなくていいんだよ。もし、肉体が死んでしまったとしても『魂』は不滅なんだ。だから、二人で一生懸命生きて……どちらかの体が消えてしまったら、『魂』を探す旅に出ればいいんだ。空にある数多の星の中から、一つを選び出すくらい難しいけど……私は絶対に見つけ出せる。その時、きっとフィーネは寂しそうに私を待ってくれている筈だから……何度でも、何度でも私はフィーネを見つけるよ……それで、生まれ変わってもずっと一緒に生きるんだ。『永遠』に」
　ルナさんは、私を抱き締めて頭を撫でてくれながらそう言いました。
「……グスン……ふふ……わかりました。それなら、私も……絶対にルナさんを見つけます。ルナさんは、いつまでも私を優しい目で待ってくれている筈だから……でも、魂が離れ離れになった時に集まる場所を決めた方がいいですね」
　私もルナさんを信じてこう言ったんです。
でも魂が離れてしまったから、その場所に私は行かないといけませんね……あなたと一緒に……

「フィーネ……！君は……俺に……本当の『心』をくれたんだ！『心』は温かくて……包み込んでくれる。『心』は溢れ出して……優しさとか……強さとか……大好きな気持ちに変わるんだ！……フィーネが俺を愛してくれているように……俺も君を誰より愛してるよ……『心』から……そして君は……
『永遠』を信じてくれているから……俺は……『永遠の心』を信じる！……俺の『心』も……フィーネの『心』も……
『永遠』なんだ。信じる心も……愛する心も……！……何度死んだって……何度生まれ変わったって失いはしない。
『永遠の心』を持って、何処にいても必ず迎えに行くよ……だから……安心しておやすみ」

私がフィーネだった頃に聞いたルナさんとの約束……『永遠の約束』……私は信じて生まれ変わりました。
あなたが……私の魂を救い出してくれたから……魔物の世界で命を懸けて……ありがとうございます。
そして、２００年間辛い思いをさせてごめんなさい……

「……『永遠の心』……信じます。あなたと過ごした日々も……愛する心も全部『永遠』に……忘れません。
でも……寂しいから……早く迎えに来てくださいね……もし……私が『心』を失いそうになって

いたら……

『約束の場所』へ連れて行って……下さい……行きたかった。あの場所へ」

『永遠の心』……それを大切に抱えて、私はシェルフィアになったんです。

私は、フィーネでありシェルフィア……、でも、『心』がまだ不安定……

だからルナさん……、連れて行って下さい……

フィーネとしての私の故郷……

ルナさんと初めて会った場所……

そして、何より『永遠の約束』の場所へ……

それで、私の心が一つになって目が覚めたら……

あなたの優しい笑顔で『おはよう』って言って下さいね……

その後で、２００年前に約束した通りに幸せになりましょうね……

……絶対ですよ。

第四節　約束の時

「う……うぅん」

フィグリル城にある豪華な寝室で眠り続けていたシェルフィアが、突然声を漏らした！

「シェルフィア……！いや、フィーネ！？」

私は彼女が倒れてから３日間、一睡もせずに手を取り続けていた。

「ルナ……、さん」

やつれた顔で微笑む……姿は違えど、その優しい目は間違いなくフィーネだと確信した！

「フィーネ！」

私は涙が溢れて止まらなかった！そして、強く強く抱き締めた！

「……不思議な気持ちです。私の心の中には、フィーネだった自分とシェルフィアとしての私が同居しているんです」

シェルフィアは、フィーネの心を取り戻したがシェルフィアでもあるという事か……！？

「記憶……ううん、心は戻ったんじゃないのー！？」

其処で、リバレスが声をかけた。リバレスもまた、シェルフィアを心配してずっと傍についていたのだ。

「……とても切なく……悲しい……そして、強い心の半分は私と共にあります。フィーネの想いが痛い程に」

其処で、シェルフィアは一筋の涙を流した。金色の美しい髪を揺らしながら……その姿はやはりフィーネを連想させる。

「私は……フィーネと約束をした。永遠の約束を……それを、フィーネは守ってくれている。でも……君はシェルフィア……、フィーネの代わりじゃないんだ。それも解る！でも……！」

そうなんだ。フィーネが転生してシェルフィアになった。でも、心は二人のもの……私はどうすれば……！

「ルナさん……、そんな顔しないで下さい……フィーネとしての私が大好きだったルナさん……、シェルフィアとしての私が出会ったルナさんはもっと優しい顔ですよ。心配はいりません。これは、私の心の問題だから」

シェルフィアはそう言うと、私の頭を優しく撫でた……まるで、母親が子供をあやすように……

私は泣いていた。まるで幼子のように……私が愛するフィーネは此処にいるんだ。シェルフィアと共に……

「……思い出して下さい……私が『心』を失いかけたとしたら何処へ行くのか……？」

シェルフィアは囁いた。優しい無垢な瞳で……私はその中にフィーネと同じ強さを見つけた…

…！

「そうだ……！すまない。君の心を一つに出来る場所があるんだ。……行こう！」

私は涙を拭って立ち上がった。２００年前の約束を……今こそ果たす時が来た！

２００年前に約束を交わし……魂の再会場所と決めた丘……

私達が初めて出会い……２００年前には帰れなかった丘……

「雪の降るミルドの丘へ……！」

私とシェルフィアは同時に叫んだ！今から其処へ向かう。転送の神術で……！

私は兄さんとリバレスを置いて、シェルフィアと共に城のテラスに立った。Ｓ．Ｕ．Ｎが地平線に沈もうとしている。

その夕陽を浴びた城下町……石と金属で造られた世界は何故かとても力強く見えた。

ミルドは……今はどうなっているんだろう？変わっているんだろうか。丘は無事だろうか……？

「ルナさん……、連れて行ってください。私は、何が現れても受け入れます！」

シェルフィアは力強く微笑んだ。心のままに受け入れる決心が出来たのだろう。

「ああ。必ず君の心は戻る。いや、一つになるから！私を信じていてくれ」

私はそう言うと、シェルフィアを抱きかかえた。そして意識を集中する！

『転送！』

私達の体はフィグリルから消え去った！瞬時に景色が塗り替えられていく！私達は目を閉じて……固く手を結んでいた。

〜信じる心〜

「こ……此処は！？」

私達が転送してきた場所……其処は、全く見覚えの無い場所だった。

「変わってしまった。何もかも……あの時の面影は何処にも……！」

そう……目を疑う程の変化……ミルドには見えない！レンガ造りの家々……舗装されていない土が剥き出しの道……そして、溢れんばかりの自然や美しい小川のせせらぎが聞こえていた村の姿は何処にも無い。今見えるのは、薄汚れた石畳の道と煙を噴き出す家々……

そして、黒煙を出す工場……恐らく、２００年前に鉱山として生計を立てていたこの村は成長して金属加工を主として行っているのだろう。

その証拠に、家の屋根……扉、窓、外壁にいたるまで薄い金属で覆われている。それが、ススで汚れているのだ。

目を開けると痛い程の有害な空気……金属を熱する火の熱気……この村はそれに支配されていた。

「丘へ向かおう……変わっていない場所が必ずある筈だ！」

私は、この場を離れる為にシェルフィアの手を取った。その手は震えていた。寒い訳じゃない。不安なんだ。

丘へ向かう道……村の中心を離れて私達は急いだ。鉱山から離れていくので、民家や工場は減ってきたがまだ昔の影は無い。

「フィーネの家もありませんね」

シェルフィアは、かつての自分の家の場所を見つけた時そう呟いて落胆していた。やはり、故郷の姿は変わっても解るものなんだ。

「大丈夫だ……この先必ず……！」

私はまるで自分に言い聞かせるようにシェルフィアに言った。２００年という年月の長さを噛み締めながら……

「あれは……！？」

二人とも黙って歩いていくと、初めて見覚えのあるものを見つけた……！

「シェルフィア！」

私は走っていく彼女を追いかけた。そして、立ち止まった先には……

「フィーネのお父さんとお母さんの」

墓だった。辛い世界で、フィーネを愛し育んできたご両親の……私は、此処でフィーネの強さを感じたんだ。

「……はい……、此処に来ると、鮮明に思い出します。グスッ……フィーネは、こんな辛い思いをしたのに旅に出ようと決心したんですね。

まるで、胸が焼かれそうです。私は……フィーネ程強くない。でも、私の心にはフィーネがいる。おかしいですよね……？」

シェルフィアは……フィーネの心と葛藤している。私にはそれが痛い程解った。彼女をフィーネだと感じる時と、シェルフィアだと感じる瞬間……それが繰り返される。彼女の心は不安定なままなんだ。私は、この先に不安を感じた……約束の場所でシェルフィアの心が壊れてしまったら……！？私は、いつの間にか俯いて青褪めた顔をしていたのだろう。

「ルナさん……！行きましょう！私は大丈夫です！」

シェルフィアは叫んだ。シェルフィアも同様に強い心の持ち主だ……私はそう感じた。立ち止まっては行けないんだ！

「……丘はもうすぐだ！約束の時が訪れる。何も心配はいらないよな！」

私は前をじっと見据えた。シェルフィアもそれに続く……そして……！

「ミルドの丘」

私達は呟いた。何と、此処だけはかつての姿を残したままだったのだ！唯一変わっていたのは、私が堕天した時に出来た穴……

其処には立派な大木が立っていたぐらいだった。落陽に照らされる村の美しさは変わらない。レンガの家が鉄に変わろうと……工場が煙を出そうと……其処に住まう『人間』達の生きる美しさは変わらないんだ。

とても懐かしかった。此処から全てが始まったんだ。私達の絆……旅が……そして、心が……

胸がいっぱいだった。この丘は私達の幸せの象徴にする筈だったんだ。

でも、あの時その願いが果たされる事は無かった。

それでも２００年……私達は心を失わず、再びこの場所に来た……！

約束の場所へ！

「フィーネ」

私は、また涙を流した。２００年前の深い深い愛が込み上げて、理由もわからずに目から雫が溢れるんだ！

「……ル……ナさん……！？あぁぁぁぁぁ！私が壊れそう！」

私が『フィーネ』と呼びかけた瞬間……！シェルフィアに異変が現れた！

「大丈夫だ！私は此処にいる！だから……だから安心して帰っておいで！過去を拒まずに……新しい未来を作る為に！」

私は迷わない！不安もない！私は『永遠』を信じる！心を！そして、君を……！

私は、シェルフィアを優しく……そして強く抱き締めた！私達の心は何があっても離れたりはしない！

すると、シェルフィアの頭の中に響く声が私の頭にも響いてきた！

『私は……ルナさんが大好きです。世界中で誰よりも……！ルナさんは、優しさをいっぱいくれたから……

私は……ルナさんが傍にいてくれるだけで、温かい気持ちでいっぱいになるんです。強い心を持ち続けられるんです！

ミルドの丘から全てが始まりましたね。初めは、ルナさんの事が怖かったけど……今は大好きです。

私は……あなたといるだけで幸せな気持ちが溢れてくるんです！』

『ありがとう、フィーネ……、私は……他人の為に一生懸命頑張って……懸命に生きて……それでも優しさを人に分けられる。そんなフィーネの方が、私なんかよりずっと素晴らしいよ……

君がいたから、私は変わった。君がいたから戦う決意をしたんだ！
君は私に無い物をたくさん持っていて……君が私に心をくれたんだ。だから……
私はずっと君を守る。これから先ずっと……何があっても……私もフィーネを愛してるから』

『ルナさん……、きっと……私の為に涙を流してくれてるんですね。私も……あなたと過ごした事……考えたら……やっぱり泣けてきますよ……もっと一緒に生きて……今まで以上の幸せがあったんじゃないかって……戦いも終わって……一緒に暮らして……ルナさんの子供を生んで……でも……それは叶わない事……贅沢過ぎる夢』

『俺は……命をかけて……１００年でも……１０００年でも……一生をかけてでも君の……いや、フィーネの『魂』を見つけ出すから……！』

『あなたが迎えに来てくれる日まで……それまで……私は……あなたを愛し続けて待ってます。私の……ルナさんへの想いは永遠に……あなたに出会えて本当に良かった。』

「永遠の心は……どんなものよりも強く……幸せな未来を創り出す為にあるんだ！」

私は、声を限りに叫んだ！悲しみはもう十分だ……此処から新しい幸せな明日へ歩み出す……その為に私達は此処にいる！

「ルナさぁぁぁぁぁぁーーん……！」

シェルフィアは私の胸に倒れこんだ。精神力が限界を超えたんだろう。でも、私の心に不安は無い。心を信じているからだ。
目覚めたら伝える言葉があるんだ。

～結ばれる心～

夜になった。空は半分が雲に覆われて、残りは月と星が私達を照らしている。村の窓からは明かりが漏れ、まるで地上の星のようだ。
此処にあるのは、優しい光と……私の腕の中で眠っているシェルフィアの寝顔……
「ルナ……、さん」
冬の空気が冷たく私達を包んでいる中で、シェルフィアは静かに目を覚ました。
「おはよう……フィーネ。そしてお帰り！」
私は心の底からの優しさと愛しさを表情に出して……微笑んだ。
「ルナさん……、ルナさんっ！」
私の顔を見た瞬間、首に抱きついてくる！間違いない、フィーネの心は完全に戻ってきたんだ！
「フィーネ！」
「ルナさん！」
抑えていた感情が洪水のように堰を切って溢れ出す……！
「んっ……！」
私達は夢中でキスを交わした。会いたかった！ずっと……ずっと……！
寂しかった！悲しくて……辛くて……！
君のいない世界なんていらない！だからもう二度と離れたりしない！
「……会いたかった！私は……ずっと、真っ暗で何も見えない闇の底にいたんです。でも……でも！」
フィーネは、涙で声にもならないままに叫んだ！
「……いいんだよ。君はこうして戻ってきた！それだけでもう何もいらない！言葉さえも！」
世界の誰よりも愛するフィーネの心が戻ってきた！傷ついていた心が一瞬で癒されていく……！
「でも……どうしても一つだけ言いたい事があるんです！」

フィーネは顔を真っ赤にして私の胸に顔をうずめる！私も伝えたい事がある！２００年間言えなかった言葉……！

「愛してる！」
「愛してます！」

私達の声は重なった！想いは同じ。約束は今果たされたんだ！幸せの為の約束が……！
私は、嬉しくてどうしようもなくて……フィーネの体を持ち上げて、ぐるぐるこの場を歩き回った！嬉しい涙が止め処なく溢れる！
「あっ……！ルナさん！掌を開けて空に向けてください……！」
その台詞は聞いたことがある。私はフィーネの言う通りにした。
「本当に約束どおりになったな」
涙で滲む眼に映ったのは……真っ白な雪だった。２００年前に約束を交わした時と寸分違わぬ光景……
「……はいっ……！ルナさん、寂しい思いをさせたけど今帰りました。ただいま！」
私はそんなフィーネが愛しくて……抱き締めて、頬を寄せて再会の喜びを分かち合っていた。それだけで、今まで苦しかった心が解き放たれる！やっぱり、私に必要なのは君なんだ！
私には世界よりも、天界よりも……自分の命よりも大事な存在なんだ！君がいなければ私は何も出来ないんだよ。
「ルナさんっ！お願いがあるんです。聞いてくれますか？」
フィーネは、頬を朱に染めながら私にすがりつく……お願いなら何だって聞こう。
「何でも聞くよ……今日は、君の心が戻ってきた記念日だから！」
私は、フィーネの頭を優しく撫でた……一度死んで、また再会出来たんだ。お願いを聞くなんて容易いものだ。
「それじゃあ……一つ目は、ルナさんにとっては慣れないかもしれないんですけど……私の事は『シェルフィア』って呼んで欲しいんです。
私の心は一つになったんですけど、シェルフィアとして生まれて今まで生きてきました。……だから生まれ変わった私は、新しい気持ちでルナさんともっともっと幸せになりたいんです！もし、ダメだったらフィーネでいいですけど」
フィーネ……、いや、シェルフィアは首を傾げた。確かに、シェルフィアとして見たらもっともな事だな。
「解った！名前と姿は変わっても、心は変わらない。シェルフィア、宜しくな！」
私は、そう言うとシェルフィアに優しく口付けした。すると、彼女はとても嬉しそうに微笑む！
「良かったぁ……実は、シェルフィアとしての私もルナさんの事が好きだったんです！名前を呼んで貰えて幸せです！」
そうか……心が一つになったから、二人分の事が全て解るし想いも共有出来るんだな。
「いっぱい思い出がありますね……私は全部覚えてますよ」
シェルフィアは潤んだ目で私を見上げた……そんな彼女が、狂おしい程に愛しい……！
「私も全部覚えてる。でも、今からもっと楽しくて幸せな思い出がたくさん増えるから忘れないようにな！」
私は、微笑みながらシェルフィアの頬を撫でた。
「忘れませんよぉ！ルナさんこそ、忘れたら怒りますよ！」
シェルフィアは、首を振りながら怒ったような素振りを見せた。こんな他愛の無いやりとりでも、私達の心は幸せで満たされる。
「……それはそうと、お願いがまだあるんじゃないか？」
私は、急に真剣な顔をしてシェルフィアに尋ねた。すると……彼女の顔が朱に染まり、耳まで真っ赤になった。
「……はい……、えっと……いっぱいお話したいんです」
この様子は見覚えがある。もはや、二度も言わせてはいけない。
「……私もだよ。今夜はずっと二人だけでいような……いや、これから先もずっとずっと…

……！」
私は、シェルフィアの肩を抱く……今日からが、『約束』の続きなんだ。永遠に続く幸せの……
「……はいっ！……ルナさん……、大好きです！」
私達は、雪の積もり始めた道を歩き出した。私達の未来の足跡は見えないけど、信じていれば二人で歩んでいける。
これから先には険しい道が続くかもしれない。でも、シェルフィアがいる限り私は何処までも強くなれる。不可能なんてないんだ。
だから、今夜は２００年届かなかった思いを届けよう。大好きなフィーネ、シェルフィアに……

We have The Heart of eternity to become happy and strong for future. So we believe.

第五節　終末への秒読み

「あっ、おはようございます！」
私が目を覚ますと、横にはこれ以上無い程の幸せ顔のシェルフィアがいた。此処は、ミルドの宿だ。
「おはよう！」
私もその光景が嬉しくて微笑んだ。こんな朝を一体どれくらい待ち望んだことだろう？
「ルナさん……、私は幸せです」
シェルフィアは頭を私の胸に寄せる。私はそれを優しく抱き締めた。
「私も幸せだよ。これから先もずっとな」
私はそう言って、シェルフィアとキスを繰り返した。もう二度と放しはしない。強く心に誓いながら……
「はい……、私はもうルナさんから離れません。だから、あなたも私から離れないで下さいね」
彼女の強い思いが伝わってくる。もう、私達を引き裂くものは何もない。私も、ありったけの心を彼女に届ける。

それだけを考えていると、いつしか時間は過ぎ去り……時は朝から夕方になっていた。
いつまでも、この幸せな時間を過ごしていたい。戦いも、天使もエファロードも何もかも忘れて……
でも、このまま何もしなければ3ヶ月後には『人間界』の終焉が訪れる。シェルフィアとの愛を続けるならば、戦うしかないんだ。
そんな事を考えている間に、シェルフィアは丹精込めて作った料理を運んできた。
「さぁ、ルナさん！いっぱい食べて下さいね！私……料理うまくなったんですよ！」
シェルフィアは、フィグリル城で料理を作っていた。その腕前は確かで、見た目も味も最高だった。
「本当だ……上達したなぁ……でも、昔の味も味わってみたいな」
私は料理を美味しく食べながら、つい一言そんな言葉を漏らした。
「それじゃあ……これを食べてください」
豪勢な肉料理やスープ、サラダや美酒が並ぶ中でシェルフィアが差し出したものは1枚のトーストだった。
「これは……！？」
私はそれを一気に頬張る。懐かしい……思わず、私の目が滲んだ。
「からくて美味しいな」
そう言いながら、私の胸は締め付けられた。シェルフィアは、フィーネの事もちゃんと覚えている。それが嬉しかった。
「ありがとうございます。私は、そんなルナさんの優しい所が大好きなんですよ」
恥ずかしそうに俯く……その仕草がフィーネにそっくりで、私は思わず席を立って抱き締めずにいられなかった。

「ルナさん」
彼女は頬を赤く染める。純粋な瞳が私を見つめる。私はその目を見て決断した。
「シェルフィア、話す事がある」
私は、この幸せな瞬間を消し去るかもしれない話をする事を決断したのだ。
「えっ……何ですか？」
私は不安そうに目を見開くシェルフィアにゆっくりと話を始めた。
そう……『新生・中界計画』についてだ……話が終わるまで、シェルフィアは黙って私の目を見つめていた。
「ルナさん、今のお話を聞いて一つお願いがあるんです」
それ程混乱した様子もなく、彼女は私に対して真剣な眼差しを向けた。これは覚悟した者の目……！？
「一体何のお願いだ……？」
まさかとは思ったが、私は冷静を装ってシェルフィアに聞き返した。
「私も戦います。もう、私はあなたに守られているだけじゃダメなんです！皇帝も、リバレスさんも人間の為に戦ってくれるのに……！人間の私が戦わないのはおかしいじゃないですか！？」
シェルフィアは驚くような大声で叫んだ！
「ダメだって！君の力じゃあ、戦う事は出来ない！天使や魔がどれ程の力を持つかは知ってるだろ！？」
私も叫んだ！シェルフィアを二度と危険には晒したくないんだ！
「これでも……ダメですか？」
そう言うと、シェルフィアは目を閉じて意識を集中し始めた！すると……！
「ゴォォォォォ……！」
シェルフィアの体を炎が覆ったのだ！一体……！？
「一体……君はどうしてそんな力を……！？」
私は叫んだ。人間がこんな強大な力を使える筈がない！魔が言う生命力の数値化を行うと……１０万は軽く超えている！？
「私の心が一つになった瞬間……こんな力が使えるようになったんです。きっと……フィーネだった頃に、ルナさんに何度も力をもらったから……そして、獄界に堕ちて再び転生する事が出来たから……こうなった理由は解らないけど、この力はあなたを助ける為にあるんです！」
こんな事があるんだろうか……？私が強大な力を彼女に用いたから……？確かにそうかもしれない。天使と人間の魂は同じ……
「その力でも……勝てない敵はたくさんいる。だから」
私がそう言いかけた瞬間……
「今の私には戦える力があります！これで、本当の意味で私はあなたから離れなくていいんですよ！私達は、ずっと一緒にいると約束したじゃないですか……？だから！」
彼女は一度決めたら変わらない。それが私とソックリだった。何を言っても説得するのは難しいだろう。
「解った。でも、私は君を最優先で守るからな」
これが譲歩出来る限界だ。シェルフィアは私の生きる意味そのものなのだから……
「はい！私も……あなたを最優先で守ります！」
彼女にとっても私の存在は同じなのだろう。少し不安だが、彼女には傷付けさせたりはしない。
私は決意した。
「そろそろ、戻らないとな」
時刻は夜の８時……きっと、兄さんやリバレスは心配しているだろう。
「あっ……その前にもう一度だけ」
シェルフィアの体を覆う炎のオーラが消えて、また元の可愛い少女に戻った。
「大好き」
私達は長い長い口付けを交わした後に、名残惜しくもフィグリルへ戻ったのだった。

～作戦会議～
「流石だな、ルナ。よく戻った！」

フィグリル城の屋上にある会議場で、私達は集っていた。城の屋上は、空と街が３６０度見渡せる壮観な会議場だ。
冷たく澄んだ空気、満天の星空と街の灯火の光が私達を包んでいる。世界の広さと美しさを私は感じる。
「お帰りー！フィーネ、シェルフィア！」
兄さんとリバレスに迎えられた私達は、喜びを分かち合っていたがそれも長く続ける訳にはいかない。
「ありがとうございます！しかし、本当の意味での祝杯は、３ヶ月後を乗り越えてからにしましょう」
私は椅子から身を乗り出して、兄さんの目を真剣に見つめた。
「その通りだ。その前に一つ聞きたいが、シェルフィアの力……どうしたんだ？」
兄さんも感じ取ったらしい。通常の天使を遥かに上回る程の力だからだ。
「皇帝、私はルナさんとの約束の為に生まれ変わりました。だからきっと、私の魂が共に戦う事を望んだのでしょう」
シェルフィアは恐れも無くそう答える。彼女の決意は固い。兄さんもそれを感じ取ったようだ……
「そうかもしれないな……ただ、シェルフィアから感じる力は天使の力でも無くエファロードの力でもなく、勿論魔の力でもない」
兄さんは首を傾げる。一体何を言いたいのだろうか……？
「皇帝……私の中にはフィーネとシェルフィアの心。そして、ルナさんからもらった力……そして、獄界から解放された力……そんな力が宿っているんです。私が此処に存在する為に、色んな人から力を貰いました。だから、私が戦う意味はわかります」
シェルフィアは突然そんな事を言い出した。自分の力……それを理解し始めたのだろうか？
「シェルフィア？」
私が問いかける。すると、彼女は私に微笑んでから話を続けた。
「私の力は、ルナさんを助ける為の力。もう二度と悲劇を繰り返させない力……そして、平和を創り出す力なんです！」
シェルフィアは力強く叫んだ！それは、私達の願いの本質だった。
「シェルフィア、お前は強くなったな。俺が拾った時とは格段に……解った、ルナを……そして、俺達を助けてくれ！」
兄さんが頭を下げる。シェルフィアは、そんな兄さんの様子に慌てた。
「皇帝！私はあなたに感謝してもし尽くせません！あなたは、ルナさんと再び出会うこの日まで私を大切に育ててくださいました！
私は……ルナさんと作る未来の為に……そして皇帝の為に……戦います！」
シェルフィアは叫んだ。もう私には止められない。昔から彼女は変わらないな……
「シェルフィア、そしてリバレスも私が守ります。だから、共に戦いましょう！」
私が手を差し出すと、全員がそれに手を重ねた。結束の証だ。
「わたしもちゃんと戦うわよー！」
リバレスも真剣そのものだ。全員の意識が統一された所で、これからどうするのだろうか？
「それで、兄さん……、残り３ヶ月で私達が行うべき事は……？」
私がそう問いかけると、全員の目が兄さんに向けられた。勿論、この場には４人しかいないが。
「課題は３つだ。一つはこの人間界の戦乱を収めて、人間の意識を統一させること。次に、獄界からの侵攻を防ぐ事。そしてこれが最も重要な事だが、『神』に計画を中断させる事だ……人間界を中界にする計画は、神が示した計画。神の考えを変えさせない限り、この計画は終わらない。解るな？」
兄さんは少し青褪めた顔で話した。確かに、これを全て遂行するのは非情に困難だ……
「……わかりました。私はどうすれば？」
私も身震いして返答する。
「ルナ、お前はシェルフィアとリウォル王国へ行ってくれ。お前達が行けば戦乱を終わらせる事が出来る」
何故か兄さんは不敵に微笑んだ。何故私が行けばいいんだろう？

「兄さんでも無理だった事を私達が出来るのですか……？」
私は首を傾げながら問い返す。
「まぁ、行けば解るさ。そして、リウォルは金属と石の加工が最も進んだ国……お前がすべき事もあるだろう」
兄さんはまたも微笑んだ。私にはその真意は理解出来なかったが、行くしかないだろう。
「……わかりました。その言葉を信じて行ってきます。１ヶ月……いや、１週間で戦いを終わらせますよ」
私は覚悟してそう言った。こんな事に１ヶ月も費やしていてはすぐに『計画』が始まる。３ヶ月などあっという間だ。
「流石だな。頼りにしてるぜ！」
兄さんは力強くそう言った。私は咄嗟に強く頷く。
「皇帝、私もベストを尽くします！」
シェルフィアも間髪入れずに返事をした。
「ああ！お前達なら大丈夫だ！」
その声の後に、リバレスは寂しそうに呟く。
「あのー……わたしはどうすればいいんでしょうか？」
彼女は私と離されるのが不服なのかもしれない。
「リバレス君……君は、ルナ達が帰ってくるまでに俺の下で修行だ。これからの戦い、今のままでは危険だ」
兄さんはそう言った。意外だった。今兄さんが出来るのはそんな事だけじゃないだろう？
「……わ、わかりましたー！」
リバレスも驚きながら返答する。
「兄さんは……？」
私は思わずそう聞いてしまった。賢明な兄さんの事だ、当然他にする事があるのだろうが……私達だけ敵国に侵入するのに、兄さんは何の危険も冒さないのか？という私の弱い心が顕れたからだ。
「俺はリバレス君の修行と並行して、単身で『ある調査』をする。この世界の命運を左右する事だ」
兄さんの目は真剣そのもの……そして、自分の命をも懸ける覚悟の顔……私はこれ以上聞く事は出来ないと確信した。
「……わかりました。全員の健闘を祈りましょう！」
私がそう言うと、今度は兄さんが手を差し伸べた。それに全員が手を重ねる。
「その後の作戦については、ルナとシェルフィアが帰還後にしよう！」
そう叫ぶ兄さんの姿は、まるで軍の司令官だった。皇帝という身分に慣れているんだろうな。
「今日は皆、ゆっくり休んでくれ」
その合図と共に、私達は解散した。
私とシェルフィアの寝室。其処にはリバレスもいて、夜遅くまで色んな話で盛り上がった。楽しい一時だった。
２００年前に楽しく過ごしていた光景、それと寸分違わない。その後リバレスが別の部屋に移り、私とシェルフィアは愛し合った。
私はシェルフィアが眠りに就くまで抱き締めて……美しい金色の髪を優しく撫で続けていた。
そして、彼女の可愛い寝顔にそっとキスをして私は一人ベッドを抜け出した。

〜絆と十字架〜
「眠れないのか？」
一筋の風を辿っていくと、その先には兄さんが立っていた。私は、今日兄さんと話をしなければならない。そう思っていた。
「いえ、何故だか無性にあなたと話がしたくて」
私は兄さんの隣に立った。此処は、城のテラス。街の明かりは消えて、漆黒の闇が眼下に広がる。
１２００年以上も前に兄さんにもらった時計……私は月明かりを頼りに蓋を開いた。時刻は午前

3時前……
「その時計か。まだ動いているんだな。俺が神術をかけたものなのにな」
兄さんは嬉しそうに目を細めた。そうか、この時計の動力は兄さんの精神力を使ったものだったんだ。
「はい、宝物ですよ。考えてみると、私達が今此処にいるのは偶然ではなく運命のような気がしますね」
私も兄さんの顔を横目で見た。しかし、兄さんは遠い目で景色を見ていた。
「そうだな。運命とも言えるが、『今』は俺達が切り開いてきた未来だぜ。決して、誰かの力によるものじゃない」
兄さんはきっぱりと言い放つ。確かにその通りだ。
「……私もそう思います。兄さんが天界を自由にする為に戦い、私がそれを受け継いだ……その願いは叶いました。そして、今は愛する人間の為に二人で戦っています。……いや、ティファニィさんも含めれば5人ですね」
私は兄さんと考えを共有し、戦える。そして、互いに愛する者の為に生きられる。そんな幸せを噛み締めながら言った。
「そう。それが、俺達の絆だ……何よりも強く、掛け替えの無い」
兄さんは私の肩を叩いた。そんな頼りがいのある兄が私は心強かった。
「……はい。私達は世界でたった二人の兄弟で……エファロード。兄さん……、ティファニィさんの事を聞かせて貰えますか？」
私は、この時無性に兄の恋人について知りたくなった。戦いが終わった時と約束していたのだが……
「……解った。状況が変わった今……話しておくべきだろう」
兄さんは一瞬悲しそうな顔をしたが、ゆっくりと話し始めた。

出会ったのは、堕天して3日後の事……魔への生け贄として捧げられようとしていたのを助けたのがきっかけだったらしい。
その後、兄さんは食糧や寝床を得る代償に、ティファニィさんのいる村を守っていた。初めは人間の事など信じずに見下していた。
でも、村人達と接していく内に段々心がほぐれていった。そうしていく内に、二人は自然と恋に落ちる。
数年間、その幸せは続いた。しかし……兄さんの弱点が恋人であると知った魔は、隙をついてティファニィさんを連れ去った。
そして……兄さんの目の前で殺された。其処で兄さんのエファロードとしての力が覚醒する。同時に、恋人を救う為に天使の指輪を使ってしまったのだ。その後はまた、しばしの安息が訪れた。
……しかし人の命は限りあるもの。ティファニィさんは人間としての生涯を終える事になる。でも兄さんは孤独だった。だから、恋人の魂を自分の魂と同化させる事にした。
いつでも……兄さんの中にティファニィさんはいるんだ。

「永遠……心は永遠だからな」
話し終わって兄さんは優しい顔で微笑んだ。私とシェルフィアの事を喜んでくれているのだろうか……？でも何だか寂しそうだ……
「はい……、信じあえた心は永遠です」
私も微笑んだ。すると、一瞬兄さんの表情が思い詰めたように曇る。
「（……俺達が幸せだったように……大切な弟の幸せは俺が守る。）」
兄さんは思っている事を言葉に出さない。一体何を考えているんだろう？
「兄さん……、？」
私はそんな兄さんを見ていられずに声をかける。しかし、兄さんは一点を見つめたままだ……
「……それが……エファロードとしての……十字架だ」
確かに兄さんはそう言った。十字架……？何の事だろう？
「あ……いや何でもないぜ！ルナ、明日からの作戦はハードだが頑張ろうぜ！」
今度は我に返ったように叫んだ。その後私達は寝室に戻ったが、私の心にはさっきの兄さんの

顔が深く残っていた。

この時聞いた兄さんの言葉の意味は後々になって知る事になる。

第六節　証

翌朝、私とシェルフィアはリウォル王国へ行く準備をしていた。『転送』が使える今、長旅の準備は必要ない。

「どうやって潜入しましょうか？」

私は兄さんに問う。それを誤ると、戦争を終結させるのは困難であると考えたからだ。

「潜入する必要はないぜ。まず、リウォル上空に二人を『転送』するんだ。その後、ルナが翼を開きゆっくりと本拠地であるリウォル城に降り立てばいい。勿論、『光膜』で体をガードしながらな。銃火器の集中砲火に遭う事を想定してだ」

一体何を言っているんだ！？そんな事をすれば、目立つ上に余計に敵に恐怖を与えるだけじゃないか！？

「皇帝！おっしゃる意味がよくわかりません！私達は何の為に攻撃を受けるのですか！？」

シェルフィアが叫ぶ！当然の事だろう。

「私にもそうする理由がよくわかりません。誰にも知られずに潜入する方がいいかと思うのですが？」

私も問い返した。今回の事は私の理解を超えていたからだ。

「まあ、そう思うのは当然だろう。理由は、まずリウォルに潜入するのには手間がかかり過ぎるという事だ。王国の警備は厳重そのもの。うまく潜入出来ても、国王の下まで行くのは至難だ。勿論、これらはお前達が力を使わない場合だ。だが、ルナが空から降り立ちどんな攻撃も通じないという事を理解させると、お前達はすんなり王に会う事が出来るんだ。それには、お前達の姿を多くの人間に確認させる必要がある。

２００年前の事を思い出せ。かつてのリウォルの街の人間はルナをどう思っていたのか？その伝説は今でも語り継がれているんだ」

私は曖昧ながらも話を理解出来た。確かに……２００年前、私とフィーネは歓迎されていた。しかし……本当に今もそれが？

「わかりました。あなたがそう言う以上は、勝算があっての事でしょう」

私はシェルフィアの顔を見て、互いに頷いた。

「気をつけてねー！」

リバレスが心配そうに私達を見送る。

「お前も頑張れよ！すぐに帰ってくるからな！」

私はリバレス頭を優しくポンポンと叩いた。すると、リバレスの顔に笑顔が溢れる。

「はーい！頑張りまーす！」

彼女は元気よく返事した。その様子を見た兄さんも微笑んだ。

「頼んだぜ！」

兄さんは、私とシェルフィアの肩を叩いた。

「はい！」

私達は兄さんの思いに応える。その後、私は力を3段階まで解放する！

「綺麗な翼」

シェルフィアがうっとりしたような表情を浮かべ、私の翼に触れる。

「シェルフィア、出発するぞ！」

私は、シェルフィアを抱きかかえて意識を集中した。目的地は、リウォル上空……

「はい、いつでも覚悟はＯＫです！」

そう言った瞬間、私は『転送』の神術を発動させた！

景色が歪み……消えていく……！次に目を開ければ……敵国の上空……！

～受け継がれた思い～

此処は……？目を開くと、見慣れぬ街の上空だった。冷たい風が吹き抜ける。

「……此処がリウォル王国です」
シェルフィアが私の耳元で囁いた。成る程……大した変化だな。
街の規模は数Ｋｍ四方……その周りを全て厚く高い外壁によって守られている。外壁の上には見張り台……それも１００ｍ置きに１台。
私の目には見えるが、見張り台の上にはそれぞれ５～１０人が重々しい重火器を携えて監視しているのだ。確かに、これなら街の外から侵入するのは難しい。遠目に見ると、崩れたリウォルタワーの残骸や……フィーネと愛を確かめ合った湖が見えていた。
「思い出の風景が残ってるな」
私はシェルフィアに囁いた。
「はい……、街は変わってしまったけど……自然は残っていますね」
シェルフィアの目は潤んでいたが、今はそんな思いに浸っている場合ではない。降下する場所を選ばなければ。兄さんは城に降り立てと言っていたが……城には無数の兵が配備されている。向こうからこちらは遠過ぎて見えてはいないだろうが、其処に降りれば怪我人が出るかもしれない。城の高さは１００ｍは楽に超えており、外壁には大砲が並ぶ……街の至る所にも武装兵が並び、連射式の銃だろうか……そんな巨大な武器が配置されている。正に戦場……これならば、何処に降りても変わらないか……？
「ルナさん、あの噴水広場はどうでしょう？あの……真ん中に銅像みたいな物がある。あそこなら警備が薄いですよ！」
シェルフィアが指差した。シェルフィアにもあんなに遠い景色が見えるのか……私は彼女の力に少し驚いた。
「そうだな、そうしよう。今から私達の周り半径３ｍを光の膜で包む……絶対に私から離れないようにな！」
私がその言葉を発すると同時に、シェルフィアは私の体にギュッとしがみつく。
「光膜！」
その瞬間、強力な光が私達を包んだ！この光は王国全てに見えている事だろう。
「私は絶対離れないので、もっとスピードを上げて下さい！」
シェルフィアが叫ぶ！私はその言葉を信じ、城下町の噴水広場へと降下を開始した！
「キィィィィィィィィィィィィ……！」
放つ光が音を放つ……！街の噴水まであと１００ｍぐらいまで近付いた時だった！
「ドンドンドンッ……！」
「ドゴォォォォォォー……ン！」
「ダンッ……ダダダダダダ……！」
銃……爆薬……連射銃……あらゆる兵器が私達を襲う……！
「ルナさぁーん！」
シェルフィアが心配そうに私の首に抱きついた。私は彼女の頭を優しく撫でた……
「大丈夫だよ。この程度の攻撃なら、この膜には傷一つつかないさ」
言葉通り、膜にはダメージすら無かった。５分以上にも渡る猛攻撃が続く……砂煙で周りは何も見えない。
やがて、攻撃が止み……砂煙が晴れると周りを数百人の兵に包囲されていた。その全員が銃を構える。
「厄介だな。でもこのまま、此処にいても仕方ないしな」
そう考えていると、兵の後ろから巨大な大砲が現れた。直径は１ｍぐらいあるだろうか？
「あんなのを受けて大丈夫ですか！？」
シェルフィアがまたも叫ぶ……
「大丈夫だけど、膜ごと私達は遠くに飛ばされてしまうかも……？」
私はそう言うと、一人で光膜を出た。シェルフィアは膜に包まれたままだ。
「ルナさぁぁーん！？」
シェルフィアが心配そうに光膜をドンドン叩く……しかし、その程度で割れる膜じゃない。
「いい度胸だ……俺はリウォル王国直属軍総指揮官だ。お前は何者だ？」
大砲と共に現れた男……３０代半ばだろうか？随分と威厳に溢れた人間だ。
「私は……ルナリート。お前達『人間』を救う為に再びこの地に現れた」

私は兄さんが言った言葉を信じて、そう言葉を作った。
「ルナリート……！？まさか……伝説の……！？はっ……！」
指揮官と名乗る男が、私達の後ろにある噴水の中心に立つ銅像を見て言葉を失っていた。
「街長……よく似せて作ったな。しかし」
私もその銅像を見て驚いた。正に、２００年前の私とフィーネそのもの……だが、フィーネの像が私の腕に抱きつくような形だったので恥ずかしかった。
「いや、そんな筈はない！伝説は２００年も前の話……生きている筈がない！魔物の術で騙そうとしている！」
指揮官が剣を取り、私に切りかかる！
「やれやれ」
「パキィィィィン……！」
指揮官の剣を私は素手で折る。すると……！
「撃てぇぇぇ！」
指揮官が飛び退くと同時に、大砲が火を噴いた！このままでは、弾がシェルフィアの膜に直撃する！
「うぉぉぉぉ！」
私は瞬時にオリハルコンの剣を抜く！そして剣に過剰なまでの力を乗せる！
「キィィィィン！」
音は一つ……しかし、大砲の弾には５０斬加えた！
「パラパラ」
大砲の弾は唯の金属片となり、その場に崩れ落ちた！
「うわぁぁぁぁぁぁぁ！」
その様子を見ていた兵達は一斉に逃げ出した。恐らく、この大砲が国の最強武器だったのだろう。
「俺はこの国を最後まで守り抜く……殺せ」
剣を失い、大砲すらも通じない私に指揮官はそう言った。命尽きるまで、国に尽くすとは立派な者だな。
「もう……ルナさん、無茶し過ぎですよぉ！」
光膜を解き、出てきたシェルフィアが私を叱る。確かに少しやり過ぎだったかな。
「ごめん、ごめん。ところで、指揮官さん。私がいつ、敵だと言ったんだ？」
私は指揮官の肩を叩いた。この男には罪はない。唯、自分の信じる事の為に戦っただけだ。
「は……？まさか、あなたは本当にルナリート様……？」
今度は話を聞く気になったらしい。どうすれば信じて貰えるものか？銅像でも信じないのならば……
「２００年前にリウォルタワーを崩壊させたのは私だ。鉄神殿で祝宴を開かれた事もある。それでも信じないか？」
男は動揺していた。恐らく伝説通りなのだろう。それもその筈、私は本人なのだから。
「ならば……街長から『あるもの』を贈られた筈！これは、一般庶民は知らぬ事……！」
成る程……あれは伝説には残らなかったのか。思い出の品……フィーネ、いやシェルフィアとの幸せの証とすべきもの……
私はそれを持っていたが、今シェルフィアに見られるのはまずい。だから、指揮官にそっと見せて耳打ちした。
「……宝石シェファだろう？」
私の様子を察してか、指揮官は黙って頷いた。どうやら信じてくれたようだ。
「……？ルナさん！？私に隠し事ですか！？」
シェルフィアが髪を揺らして怒っている。そうだ、今シェルフィアにこの宝石は見せたくないんだ。
「隠し事なんかじゃないよ。だから、今は何も聞かないでくれ」
私は真剣な顔つきでシェルフィアを見つめた。すると、シェルフィアは少し寂しそうな顔をした。
「わかりましたぁ……でも今度、ちゃんと話してくださいね！」

その言葉の後、私達は指揮官に連れられて王の間に辿りついた。

「本当に、銅像の姿と同じだ……あなたが、かつてこの街を救ってくれた英雄ルナリート様……？」

リウォル国王……年は５０代だろうか？白髪交じりの髪と黒く長い髭。一応はこちらも敬意を払っておくべきかもしれないな。

「はい。２００年の時を経て、この街に再び現れました」

私は軽く頭を下げた。すると、シェルフィアも頭を下げる。

「それで……ルナリート様がこの国に何用で？」

王の目が鋭く変化する。まだ、私の事を完全には信用してはいないようだ。

「単刀直入に言わせて貰います。今から３ヶ月後、この世界……いや、人間達は皆殺しにされます」

私は国王の目を見つめ返した。互いにその目は真剣そのものだ。だが……

「ははは っ！何を言うかと思ったら……かつての英雄がそんな世迷言を！？」

国王は愚か、兵達まで笑い出す始末……確かに現実離れした話だが……真実だ。だから、今度は少しきつい口調で言う。

「リウォル王国国王……私の言う事は真実だ。あなたは人間の王だ……そのあなたが、人間を守ろうとしないでどうするんだ？」

私は国王を睨んだ。途端に場の空気が凍りつく……

「本気……なのか？」

国王は少しおどおどした様子で私に聞いてきた。

「本気だ。そもそも私や、フィグリル皇帝ハルメスは人間じゃない。別の世界から来た者だ。その私達が人間の為に戦うのに、あなたは何もしないのか？事の重大さを知るんだ」

別に脅すつもりはない。唯、人間の王にも戦いを理解して貰いたいだけだ。

「フィグリル皇帝の遣いか！？皆の者、この者を捕らえよ！」

無知な王は、私を捕らえようとする。兵は周りに２００人程。どうやら、王と二人きりで話す必要があるな……

「ルナさん、私に任せて下さい」

私が神術を発動させようとした瞬間、シェルフィアが制止した。

「炎の壁」

シェルフィアがそう呟いた瞬間、私達の周りを巨大な炎の柱が包んだ！高さ２０ｍはあるだろう天井まで焦がす勢いだ……！

「うわっ……私をどうするつもりだ！？」

国王は椅子から転げ落ち、後退りを始める。しかし、それも炎の壁で遮られた。

「すまない。解って貰えないようだから、こんな手荒な真似をするんだ。私の言葉は真実……３ヶ月後までに、全ての人間が手を組み……来るべき時に備えるんだ。３ヶ月後に、数百万の魔物と、数千の天使がこの世界に現れる。人間を全滅させる為に」

私は正直にそれを話した。混乱は必死だろうが……人間の王には伝えておくべきだと判断したのだ。

「３ヶ月後に……魔物と天使が人間を滅ぼしに来る？天使など見た事もないが」

まだ半信半疑のようだ……呆れた王だ。いや、急にそれを理解出来る程柔軟な人間など多くはないだろう。

「私は……元天使だ。この翼を見るがいい」

私は光り輝く翼を広げた。どうやら、それで一応納得がいったようだ。

「そうか……ルナリート……様も……フィグリル皇帝も天使……どうりで何年経っても変わらない訳だ……だが、何故天使が人間を！？」

なかなか頭が働くらしい。その質問にはどう答えるか……？

「ルナリート様と、ハルメス様は唯一人間の味方なのです！……私達人間は、天使にとっても魔物にとっても邪魔な存在……！

だから……消されるんですよ！それを救う為に、ルナリート様もハルメス様も戦ってくださるの

に……私達人間が戦わなくてどうするんですか！？」
其処で、シェルフィアが叫んだ。ルナリート様っていう響きは好きじゃないが……
「我々は消される？人間が……？」
王はボーっと中空を見ていた。頭の整理が追いつかないのだろう。
「国王、あなたが人間の王としてやるべき事は決まっている。人間どうしのつまらない戦争を今すぐに止めさせ、それがいかに無意味であるかを教えるんだ。そして、３ヶ月後に訪れる悪夢に対抗する為に結束する事だ」
私は言い放った。これを理解出来ないようならば、これ以上幾ら諭しても無駄だろう。暫く沈黙の時間が流れた。すると……
「……国王として……あなたの言った事を信じよう……だが、明日から３日間……時間をくれないか……？あなたの言う通りにするのには、もっと時間がかかるが……４日目の朝に納得いく形で結論を出そう」
国王はそう言って立ち上がった。そして、私に握手を求めてくる。
「人間の王も、なかなか見上げた者じゃないか。宜しく頼むぞ」
そう言って私が手を差し伸べた頃には、周りの炎は消えていた。
「皆の者！この二人を最高級の待遇でもてなすのだ！」
その意外な結末に、兵は呆然としていたが、王の命令なので忙しなく動き出した。
「解って貰えましたね」
其処で、シェルフィアがニッコリ微笑んだ。
「それも、君の一言があったからだよ」
私も微笑み返す。とりあえず３日間、リウォルへの滞在が決まったが予定の１週間よりは早いから大丈夫だろう。
私達が案内されたのは、城内部にある来客用のスィートルームだ。ガラス張りの大きな窓、シルクのカーテン、そしてフカフカのベッド。
何より、大理石のバスルームまでついていたのには驚いた。これなら、天界にも引けを取らないな……

～戦士の休息～
国王の対応を確認するまでの期間、私達はリウォルに滞在する。昨日は国王から最高級の料理を出されて、話をしながらそれを味わった。国王も兵も、皆私の話を信じた。夜も更け、私とシェルフィアはスィートルームで眠った。幸せな時を感じながら……
そして、今日……私は一人、シェルフィアが目覚める前にリウォルの街にいる。兄さんも言っていた事だが、私はやらねばならない事があるからだ。私は、リウォルを歩き回って店を探した。
其処は……『リウォル宝飾店』。私は、其処に立ち寄り用事を済ませるとすぐに城に戻った。
そうだ……『今度この街に来る時は』昔言った事を思い出したからだ。いや、忘れてなんかいなかった。
「ルナさぁん！何処に行ってたんですか……！？もう……！」
私が戻ると、シェルフィアが怒っていた。もう勝手に外出するのはやめよう……
「ごめん、どうしてもやらなければならない事があったから」
私はシェルフィアの肩を抱き寄せて、優しくキスをした。しかし……
「また、あの隠し事ですか……？」
シェルフィアの機嫌は直らない。そうだな、不信感を与えてしまったんだ。黙っておきたかったけど、少しだけなら話すしかない。
「隠し事なんかじゃないんだ。きっとシェルフィアが喜んでくれる事だと思う。明後日、全部説明するから怒らないでくれよ」
私は微笑んだ。すると、ようやくシェルフィアも機嫌を直してくれた。
「えっ？私が喜ぶような事なんですか……？それじゃあ許します。明後日、楽しみにしてますね！」
その言葉と共に、シェルフィアは嬉しそうに私に抱きついた。感情のわかりやすい子だな。
「ああ。もう黙って出かけたりしないよ。それはそうと、今日はせっかくだし街の散歩に行こうか？」

私は彼女の頭を撫でて、少し照れながらそう言った。
「はいっ！行きましょう！」
至福を湛えた顔……それは少し幼さを残し、純粋で大きな目が輝いている。背は私より２０ｃｍ近く小さいくせに、体一杯で喜びを表現する。
そんな彼女が、何よりも愛しかった。此処にいるのは、私が愛したフィーネでありシェルフィア……、ずっと幸せが続きますように。そう願わずにはいられなかった。そして、私はシェルフィアの手を取り街へ連れ出した。デートするのも２００年振りだな。
「ルナさん、ルナさぁん！」
はしゃぎながら、私の手を引っ張る。街の警備は国王の命令で薄くなっており、一般人が多く街を歩いていた。
「そんなに走ると危ないぞ！明日もあるんだからな！」
私はそう言ったが、彼女は変わらない。ずっとこんな時を待っていたんだ。私も何も考えずに楽しもう！
私達はこの日と次の日、誰にも邪魔されずに過ごす事が出来た。世界中から集められた珍しい料理を食べ、音楽隊の演奏を聞いた。
音楽隊が２００年以上も続いているのには驚いた。服やアクセサリーも買った。やはりこの時代でも、私の持ち物には価値があり何でも買う事が出来たからだ。買ったものの中には、ペアのブレスレット、白紙の本などもあった。この本には、戦いが終わった時に『時の記憶』を書き記そうと思っている。全ての出来事を永遠に忘れないように……そして、私とシェルフィアの『心の証』とする為に。
勿論、兄さんとリバレスの為にも土産を買った。こうして、夢のような２日間はあっという間に過ぎていくのだった。

〜未来の証〜
明日は、王が結論を出す日。明日からは忙しくなるだろう。私はこの日にすべき事を前々から決めていた。朝食を食べて、ネグリジェを着たシェルフィアが身支度を始める時間……その間に、私は自分を転送させて宝飾店に向かいすぐに戻ってきた。その時間１０分以内だ。歩いて往復すれば４０分はかかる。こんな事をしなければならなかった理由は、長時間シェルフィアから離れると心配される上に不信感を与えるからだ。それに、何より私はシェルフィアを驚かせたかった。今日は忘れえぬ日になるだろう。実行は夜。
「ルナさん、今日は何処にいきましょうか！？」
今日もシェルフィアは元気いっぱいだ。そうだな、今日は晴天。海辺にでも行くか。
「海でも見に行こうか？」
私はそう言った。２００年前にも、リウォルでは砂浜を歩いたな。
「はいっ！ルナさんとなら何処へでも！」
シェルフィアはそう言って、腕を組んできた。少し照れくさかったが、嬉しさの方が勝っていた。
今日のシェルフィアの服は、白のシルクのワンピース。そして、薄桃色のコート。昨日買った服だが、よく似合っていて少し大人っぽく見えた。
私も……今日は、黒の戦闘服をやめた。散々シェルフィアに別の服が見たいと言われたからだ。
私は……黒のレザーパンツとジャケット。それは良かったのだが、赤のセーターを着せられて恥ずかしかった。こんな服は今まで一度も着た事がない。
「シェルフィアはよく似合ってるけど、私の服装はおかしくないか？」
歩きながら、私は顔を赤くして聞いた。
「えっ？すごく似合ってますよ！ほら、みんな注目してるし」
シェルフィアがそう言ったので、私が周りを見渡すと確かに注目を浴びていた。それが羨望なのか、奇異の目なのかは解らないが。
「ルナさん！他の女の子に興味を持ったらダメですよ！」
私が暫く周りを見ていたので、シェルフィアが私の頬をつねる。
「痛いっ……！大丈夫だよ、絶対そんな事は無いから！」
そんな事は無いと言いきれるが、もし誤解で彼女を怒らせたら恐いな……炎で焼かれそうだ。

「冗談ですよっ、ルナさんはそんな人じゃないから」
シェルフィアは微笑んだ。フィーネとシェルフィアが一つになって……性格が明るくなったな。私はそう思っていた。
街で昼食を食べた。ロブスターのグリルが美味しかったのは忘れない。その後、砂浜を二人で歩いた。冬の風は少し冷たかったが、今日は晴れていたので心地良かった。二人で話しながら歩いていると、すぐに時は経ち夕方になり日が落ちようとしていた。

「シェルフィア、目を閉じて」
私は立ち止まり、そう言った。
「え、何ですか？」
彼女は驚いたように聞き返す。
「いい事だよ」
私は短くそう告げる。シェルフィアは何かを悟ったらしい。ゆっくりと目を閉じた。
「いいって言うまで目を開けたらダメだよ」
私がそう言うと、彼女は黙って頷いた。今日、シェルフィアに隠していた事を説明するって言った事を覚えているみたいだった。
「しっかりつかまってるんだよ」
私は、そう言ってシェルフィアを抱きかかえた。そして、翼を開く……景色は瞬く間に小さくなっていった。
「空を飛んでるみたいですね」
シェルフィアは約束を守り、目を閉じたままだ。
「ああ、でももうすぐ着くからもう暫く待ってくれよ」
こうして向かった先……其処は……
「目を開けてもいいよ」
私がそう告げると、彼女はパッと目を開いた。
「此処は……あの時の湖……！」
そうだ……此処は、私達の心が初めて通じ合った場所。２００年の時を経ても何ら変わっていない。しかも、あの時と同じ下弦の月が輝く。
それが遠くの山々の雄大な影を作っているのだ。空には一面の星々……一点の曇りすらない。優しい風が、時折水面を揺らす……
それでも、静かな湖面は柔らかな光を映し出していた。
此処にあるのは、私達二人と……それを包む優しい自然だけだった。
「覚えてるみたいだね。此処に来たのには理由があるんだよ」
驚いているシェルフィアに私は微笑んだ。
「理由ですか……？教えて欲しいです」
清澄な空気の中で彼女の澄んだ声が響く。
「隠していたのは悪いと思ったんだけど、どうしてもびっくりさせたくて」
私は、上着の内ポケットから小箱を取り出した。
「え……何ですか？」
彼女は首を傾げる。真剣な私の様子に、彼女も緊張しているようだ。
「開けてみてほしい」
私も少し緊張してきた。思わず声が小声になる。
「……これは！？」
彼女は驚いた。それもその筈だ……中にあったのは、眩い虹色の光を放つ宝石を纏った指輪だったからだ。
「……シェファで作った指輪だよ」
私は、そっとその指輪を手に取った。

「……私は、永遠に君を愛し続ける。約束するよ……君を必ず幸せにするって。だから……この先に待つ戦いが終わったら」

「……結婚しよう。この指輪はその約束の証なんだ」

私は胸が震えながらも、じっとシェルフィアの目を見つめてそう言った。

「……はいっ……！喜んで……！」

シェルフィアは嬉しさに涙を流していた。私は、そんな彼女が愛しくてギュッと抱き締めた。その後に、シェルフィアの左手薬指に指輪をつけた……そう、幸せな未来の証となる婚約指輪を……

「……愛してるよ」

「……愛してます！」

私達は口付けを交わした。……

ずっと、ずっと……抱き合っていた。お互いの存在を確認しあうように……

初めて出会ってから、もう２００年以上も経ったけど……ようやく約束できたね……

私達の心は愛しさで溢れていた。こんなに心が満たされるなんて知らなかったよ……

永遠の心と愛はこれからも続いていく……どんな苦難が訪れようとも……

例え、肉体が死んでも心は離れない。それも証明されている。

色んな奇跡があって、今私達は此処にいる。

結婚して幸せな家庭を作る。それを約束したんだ。

だから、３ヶ月後の戦いでそれが破られたりはしない。必ず……幸せと平和を守る！

勿論それが天界、人間界、獄界全てにとっての平和ならば最高だ……

だが……私が戦うのは君の為……最後まで私の隣にいるのはシェルフィアだよ。

戦いがどんな結末を迎えるかは解らない。どんなものが失われるかも解らない。

でも一つだけ言える。

私には君だけがいればいい……例え、他に何が失われようとも。

エゴでも偽善者でも構わない。私は一度君を失って解っているんだ。

君は、私の生きる意味そのものなのだから……

二度と……悲しみは繰り返させない。

明日からはまた大変になるな。

永遠は、『今』の積み重ねだ……大事にしなければならない。

この日の夜は……甘く激しい時が続いた。まるで時が湾曲しているかのような……そんな時間だった。

第七節　集いし心

リウォル王との約束の朝、私達は再び王の下に招かれた。

「皆の者！人間の友であるルナリートの言う通り、本日を以って戦争の終結とする！これより、３ヶ月間来るべき脅威の日に備えて全ての人間が手を取り、力を蓄えよう！そして、その後の平和の為に我々一人一人が命を懸けようではないか！」

王が、街を見下ろせる城の演説台に立ちそう叫んだ。そうだ、この日……人間達の争いは終結したのだ。

「わぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

数千……数万の群集が王を称えて叫ぶ。流石に人間達の王だけあって、意識の統一化を進める技術は大した物だ。

「さぁ、ルナさん。皇帝の下に戻りましょう」

薬指に輝く指輪を右手で大事そうに包みこんでいるシェルフィアがニッコリと微笑んだ。
「ああ、戻ろう」
この日を境に人間達は皆３ヶ月後の計画と、私達の存在を知るようになる。私やシェルフィア、兄さんやリバレスの事も……
自分達の世界を守る戦いだ。全ての人間の心は一つに集り、襲い来る恐怖に打ち勝っていた。

～帰還～
「よくやったな！お前達！」
私がリウォル王から受け取った手紙を兄さんに見せると、すぐに兄さんの表情は喜びに変わった。
「はい！後は、来るべき日に備えるだけですね！」
私とシェルフィアも素直に喜んだ。
「ルナー……、シェルフィアー……お疲れ様ー！」
修行で疲労したのだろうか、フラフラのリバレスも喜んでくれた。
「今夜は、祝宴にしよう！そして、その時に……これから先の予定を話すぜ」
兄さんは嬉しそうに……しかし、何処か決意めいた表情でそう言った。
「はいっ！皇帝、今日の祝宴の料理は私も手伝いますよ。私は副料理長ですから」
其処で、シェルフィアが名乗り出る。そうか、彼女は副料理長……どうりで料理がうまい訳だ。
「そうか？お前はゆっくりしていていいんだぞ」
兄さんが驚いたような顔でそう言った。
「いえ、いいんです！リウォルで、嬉しい事があって……今日は、何だか美味しい料理を皆に食べて欲しいんです！」
そう言う彼女の顔は、見ている者まで幸せにするような笑顔だった。
「ほう……なる程な」
「ルナもやるもんねー！」
同時に二人がシェルフィアの指に注目する。何て鋭いんだ。私は顔を赤くした。
「それじゃあ行ってきます！」
シェルフィアは足取り軽く、厨房へと走って行った。
夕食までの時間、私とリバレスは久々に二人になった。
「何だか、最近シェルフィアにルナを独占されて寂しいわー」
開口一番、それがリバレスの最初の一言だった。
「そんな事は無いって！お前のお陰で此処までやってこれたんだから。それはそうと、修行はどうだったんだ？」
私は少し慌てながら、リバレスの頭を撫でた。
「まーいっか。ルナ達が幸せなら、わたしも嬉しいしねー！修行は順調よー！解る？」
少し落ち込んでいたリバレスがそう言って、目を閉じた。途端に、彼女の中から力が溢れ出す……！
「へぇ……すごいじゃないか！以前の１０倍ぐらいの力を感じるぞ！」
兄さんは一体どんな修行をしたんだろう？シェルフィア程ではないが、通常の天使を遥かに上回る力だ……
「すごいでしょー！？秘密の特訓よー！」
彼女は嬉しそうに飛び回った。まだまだ、子供っぽいな。
「ああ、すごいすごい。これで、３ヶ月後大活躍間違いなしだ」
褒めたつもりだった。しかし、彼女は意外な反応を示す……
「……うん。そうねー……わたし頑張るからねー！」
何だか悲しそうな目……一体どうしたんだ？
「……どうしたんだ？」
長い付き合いだ。様子がおかしければすぐに気付く。
「……えっ？何でもないわよー！それより、ルナ君……あの指輪は何かなー！？」
理由は答えず、悲しい素振りを消してすぐに明るく振舞う。深くは聞かない方がいいのだろうか……？それはそうと……

「……指輪！？あぁ……あれは指輪だ」
私はリバレスの突然の質問に戸惑った。知られるのが恥ずかしかったからだ。
「婚約指輪かー……シェルフィアは幸せ者ねー！大事にしないとダメよー！」
リバレスが笑いながら私の背中を叩く。私は何も言い返せなかった。
「……（例え……わたしがいなくてもね。）」
彼女が其処で何か言ったような気がしたが、私には聞き取れなかった。
「……ん？何か言ったか？」
私が尋ねてもリバレスは答えなかった。夕食までの時間、私達は今までの思い出話に花が咲いた。

もし……この時のリバレスの決意を知っていたら……私の心は揺らいだかもしれない。

～審判の日までに～
「さぁ、今日の良き日を祝おう！ルナリート、シェルフィアに……そして、人間界に乾杯！」
「乾杯！」
兄さんの掛け声と共に祝宴は始まった。今日は、城の兵や侍女達……そして、招かれた街の人間まで一緒になった大宴会だ。
リバレスも、もう姿を隠さない。もう、人間達に私達の事を隠す必要が無いのだ。共に戦う仲間なのだから……
「ルナさんっ、どうですか？私が頑張って作った料理……？」
シェルフィアは、手を合わせて祈るように私に聞いてきた。
「うん、とても美味しいよ。これなら、戦いが終わった後の毎日の食事がすごく楽しみだよ！」
私の正直な感想だ。こんな料理を毎日食べれるだけでも幸せだ。何より、大好きなシェルフィアが作るのだから。
「わぁ、嬉しいです！ずっと、美味しいものを作り続けますからね！」
人目も気にせず、彼女は私の腕に抱きついた。よっぽど嬉しかったのだろう。指輪を渡してから、シェルフィアはずっとこんな様子だ。
料理も食べ終わり、会場にいた人間は殆ど帰って行った。しかし、私とシェルフィアは話に夢中でその様子に気付いていなかった。
「ゴホンッ、そろそろこれからについて話そうか？」
そんな私達の様子を見兼ねた兄さんはわざと咳をした。私達はすぐに離れて、俯いた。その頃には、私達４人しかいなかった。
「聞く準備はいいみたいだな。これから先３ヶ月……いや、正確には残り８０日後に計画が実行に移される。ノレッジから聞いた話だが、恐らく誤差はないだろう。だが、万一の場合を考えてこちらが手を打つのは７０日後とする」
兄さんは落ち着いた様子で、冷静に話し始めた。私も平静を取り戻し、兄さんの目を見据える。
「実際には２ヶ月ちょっとしか猶予が無いんですねー」
其処でリバレスが言葉を挟んだ。確かに彼女の言う通りだ。
「そういう事になるな。その７０日間、俺達が出来る事は決まっている。まず、俺は人間達を指導し力を付けさせる。リウォルとの和平が成った今、俺は出来る限りの力を以って人間を一つにまとめなければならない。そしてルナ、シェルフィア、リバレス君は更に力を付けて欲しい。その為に……リバレス君をトレーニングした施設に行くといい」
私達は……この７０日間トレーニングするだけなのか？
「兄さん、本当にそれだけでいいのですか！？」
私は聞かずにはいられなかった。他にすべき事もあるだろう？
「ああ、それだけだ。他に何が出来る？今、人間界にいる少数の魔を倒すのか？それもいいかもしれない。だが、その程度の魔と人間が戦えないようなら……人間界に未来はない。それより、お前達が力を付けるのにはちゃんと理由がある」
兄さんの言う事は理解出来る。でも、今人間が襲われる事も見過ごせはしないだろう？私はそう思ったが、話を最後まで聞く事にした。
「その理由とは……？」

シェルフィアが深呼吸して訊く。恐らく、話の重さに緊張しているのだろう。
「７０日後の為だ。７０日後……お前達３人には『天界』に向かって貰う」
私達が天界！？一体何故！？私には天界に戻る資格などありはしない！
「ルナ、お前の言いたい事はよく解る。天使の指輪は無いからな……だが、それは問題じゃない。指輪を失った天使が天界に戻れないのは、天界の入り口に強力な結界が張られている為だ。しかし、お前が力を使えば結界の一部を破る事など容易い事なんだ。それに、俺達はエファロード……現在の神シェドロットの子だ。神に会って考えを変えさせられるとしたら、間違いなく俺達しかいない」
そういう事か……だがそんな大役を私が……？
「話を続けるぜ。力をつけるのは、『贖罪の塔』を上る為に必要だからだ。贖罪の塔は人間界と天界を結ぶ塔……俺達の内どちらかがそれを使って天界に向かうのは、予測されている事だろう。間違いなく塔には力を持った天使が配備される。エファロードを止める為に配備されるんだ。並大抵の天使じゃない事は容易に想像がつく」
私は、其処でどうしても言いたい事があって口を挟む。
「……『転送』を使えばいいのでは？」
転送を使えば、不要な争いは避けられる筈だからだ。
「確かにな。それが出来れば一番手っ取り早い……だが、天界の構造を説明すれば納得がいくだろう。天界は、神の力によって生まれ維持され続ける巨大なエネルギーの塊だ。その上を雲や大理石が覆っている。その外を結界が覆い、更に『力を無効にする膜』に包まれているんだ。だから、転送で天界内部に入る事は不可能だ」
力を無効に……！？そういえば、かつて私の力が神によって消された事がある。神官ハーツと対峙した時に。
「だから、贖罪の塔を上らなければならないと……其処で、先に進む力をつける為に７０日間トレーニングをするという事ですね？」
私は理解した事を確認する為に訊いた。
「その通りだ。だがルナ、お前がトレーニングをするのは最悪の場合を想定してだ」
兄さんが其処で一呼吸置く……大体想像がつくが、そうならない事を願わずにはいられない。
「神を説得する為に必要とされるかもしれない力の事でしょう……？」
私は目を閉じて訊いた。覚悟は出来ているが……
「そうだな。獄界との和平の為の策を変えさせるんだ。一筋縄ではいかないだろうからな。そして……お前達に其処までさせる俺の役割を話そう。お前達が天界の相手をするのと同じように……俺は獄界の相手をする。獄界に考えを改めさせる事は不可能だ。計画は、神が提示したものなのだからな……俺は、ルナが通った『獄界への道』を完全に破壊するつもりだ」
此処で兄さんはとんでもない事を言い出した！
「それは不可能です！私は、一度行って解っています！あの塔は太古から強力な神術で守られています！それに……３０００階にもわたる規模……傷はつけられても破壊は絶対に無理です！」
私は叫んだ！不可能な事は私が一番良く知っているからだ。
「お前達も無茶な事をやるんだ。兄である俺が逃げてどうする？俺の役目は、人間界に現れるだろう魔の大軍と戦い……その通路である塔を破壊する事だ。それでも、俺は全てを防ぎきる事は難しいだろう。俺の守りをすり抜けた魔を人間が倒すんだ。もうそれしかないんだ」
兄さんは本気だった。命を懸ける覚悟だ……まるで、私が獄界に乗り込んだように……
「皇帝……あなたはたった一人で戦うのですか？」
其処でシェルフィアが心配そうに尋ねる。
「いや、俺は戦う場所が違うだけだ。俺達４人……そして、人間達全員で戦うんだ！」
兄さんの言葉に思わず胸が熱くなった。確かに兄さんの言う通りだ。唯一……他に手段があるとすれば、今すぐ天界に行き計画を止めさせる事だが……力が足りなければ、神と話をする事など出来ない。今の私は限界で獄王の力の１０％と対等だった程度だ……
私の中にあるエファロードとしての記憶の破片が告げている。このままでは、神と話をする事も出来ないと……
「やりましょう！」
私達３人が声を揃えた。７０日間兄さんの言う通りにしてみよう！強くなって……天界に行

く！
私達は手を重ねた。もう泣いても笑っても７０日……全力を尽くすしかない！
……それから、トレーニングの日々が始まった。ある島に行き、其処にある施設で戦闘トレーニングと、生命力を上げる為の装置で眠った。
それらは兄さんの神術で作られた物で、戦闘用に作られた無数の神術人形と戦う。それらの全てが上級魔よりも強力な力を持っているのだ。
これで、主にシェルフィアの戦闘能力が上がっていった。もう一つの生命力を上昇させる装置……これは、Ｓ・Ｕ・Ｎ（太陽）の光をエネルギーに変換して体内に取り込むものだった。確かに、これで生命力は上昇するが……私には何故かこれに見覚えがあった。かつて……私はこれと同じような物に対して嫌悪感を抱いていた。恐らく、これはエファロードとしての記憶だろう。
一週間に一度は休息を取った。勿論、シェルフィアと共に……それは、兄さんにも了承を得た事だ。恋人としての時間が少しでも欲しかったからだ。それがあるから、戦う力と心が沸いてくる。
先に待つ未来の為に戦えるんだ！
こうして……７０日間で、私達の力は大幅に上がった。リバレスとシェルフィアに至っては、私がエファロード第１段階の時に引けをとらない程に成長した。私は……苦労したが、獄王の影と戦った時よりも大きな力を操れるようになった。
決戦の前夜……私達は、フィグリル城に集う……とても静かで優しい夜だった。決して忘れない。

～最後の晩餐～

フィグリル城の屋上の会議場、私達は明日の為に集った。空には無数の星々……そして、柔らかな風が吹いていた。冬は過ぎ去り、もうすぐ春が訪れる。それを感じるような優しい風だった。
屋上には、私達４人と多数の料理……そして、兄さんが精製した美酒があった。その酒は天界のものと同じで、強いアルコールとほのかな甘さがある。私達はそれの入ったグラスを取った。
「集いし心に……乾杯！」
兄さんがそう声を上げると、私達は互いにグラスをキンッと鳴らした。
「やれるだけの事はやりました。あとは全力を尽くしましょう！」
私は周りを見渡し、そう言った。皆はそれに頷く。
「必ず……平和の為に……幸せな世界の為に……！」
シェルフィアも精一杯の強い言葉を発する。
「頑張りましょー！」
リバレスも元気良く声を張り上げる。私達の決意には一点の曇りもない。
「ああ、人間達も一つにまとまっている！この７０日間で、一致団結し強固な守りを作った。俺が驚く程のな……だから、俺達は何も心配する必要はない。ベストを尽くすだけだ！今日は、『人間界』で行う最後の晩餐……しかし、俺達の作戦が成功した暁には『新しい世界』で最初の祝宴を開こう！」
兄さんは上手い事を言うものだ。確かに、計画を中止させ……獄界への道を閉ざせば、この世界は生まれ変わるだろう。
「はい……、必ず！全員……生きて再会しましょう！」
私はそう叫んだ。それが心からの願いだからだ。此処にいる誰も失いたくない。みんな必要なんだ。
「ルナさんの言う通り……約束ですよ！」
シェルフィアは全員の顔をじっと見つめた。その表情は真剣そのものだ。
「ああ、約束だ！」
「約束するわー！」
それに気圧されてか、兄さんもリバレスも即答した。
「ところで、皆今日は何の日か知ってるか？空を見るといい」
其処で、突然兄さんが言った。全員が空を見上げる。すると！
「流星群ですか！」
私が一番にそう言った。空に数え切れない程の彗星が流れているのだ。
「綺麗」
シェルフィアの視線が空に釘付けになる。

「この流星群は、５００年に一度現れるんだ。俺はこれを『ティファニィ流星群』って名付けてる」
兄さんは微笑みながらそう言った。ティファニィさんへの愛がとても感じられた。見たこともないような幸せな顔だったからだ。
「それじゃー、ティファニィさんにも明日からの成功を祈って貰いましょー！」
と、リバレスも何故だか嬉しそうに言った。確かにそれはいい案だ。
「（私達は……この星に生きる者の平和と幸福の為に戦います。どうか、私達が皆無事で再会出来ますように……）」
皆の願いも同じだろう。４人は目を閉じていた。そして、不安なのかシェルフィアが私に寄り添う……
「大丈夫だよ。私達は『永遠の心』と『幸せの約束』で結ばれてる。決して離れたりはしないから」
私はそう言って、シェルフィアと手をつないだ。暖かい……それだけで、恐怖も孤独も悲しみも苦しみも全てが消え去る。
「ルナ、シェルフィアを不幸にするんじゃないぞ！」
私達の様子に気付いたのか、兄さんは振り向きもせずにそう言った。
「ずっと仲良くするのよー！」
リバレスまでそんな事を言い出す。一体、何故今そんな事を言うんだよ？
その後、私達は明日に備えて部屋で休む事にした。リバレスは、何故か兄さんと話があるらしく私の部屋にはいなかった。
明日から戦いが始まる。そんな不安と寂しさで、私とシェルフィアは激しく愛し合った。過ぎる時間が憎い程に……
しかし……いつしか眠りに落ち、運命の日を迎える事になる。
兄さんとリバレスの本当の決意など知る事もなく……

第八節　未来の為に

「さぁ、出発だ！」
運命の朝、日が昇った瞬間兄さんがそう叫んだ。
「行きましょう！」
私とシェルフィアとリバレスはそれに呼応する。此処は、フィグリル城屋上……此処から私達は飛び立つ。
「ルナ、頼むぜ！お前は……最高の弟だ！」
兄さんと私は同時に光の翼を開いた。飛び立つ直前、兄さんはそう言って笑みを見せた。
「はいっ！ハルメス兄さん……、あなたは、私に全てを教えてくれました！あなたは師であり、最高の兄です！」
私達は拳をぶつけあった。もうこれ以上の言葉はいらないだろう。
「シェルフィア！しっかりつかまってろよ！」
私はシェルフィアを抱きかかえて飛び立った。リバレスは、指輪に変化している。
「はいっ！皇帝、行ってきます！それから……どうか、ご自愛を……！」
私達はもう城の上空にいる。兄さんとは、此処で暫くのお別れだ。シェルフィアは、背を向ける兄さんにそんな言葉をかけた。
「ああ、俺の心配はいらないぜ！お前達……何があっても……前へ進むんだぞ！」
何故か兄さんはこちらも向かずにそう叫び、飛び去っていく……！
「兄さん！約束通り、新しい世界でまた会いましょう！」
私は目一杯の声で叫んだ。すると、兄さんは拳を作って空に突き出した。力強い意思表示だった！
「ルナー！私達も行きましょー！」
リバレスの声の直後に、私は『贖罪の塔』へ向けて出発した。一度も行った事のない場所には、『転送』で移動することは出来ない。
塔への距離は、此処から北北西に５００ｋｍ程度。体を光膜で包みながら全速力で飛べば、５時

間もかからないだろう。
「ルナさんっ！帰ったら……結婚式挙げましょうね……！」
塔へ向かう途中、シェルフィアは指輪をギュッと握り締めてそう言った。
「ああ、皆に祝ってもらおうな！」
私がそう言うと、シェルフィアは嬉しそうに微笑んだ。
「はいはーい、ちゃんと祝ってあげるから頑張りましょうねー！」
リバレスの『やれやれ』というような表情が目に浮かぶ。どんな苦難でも、４人なら乗り越えられそうな気がした。
私は更にスピードを上げて、目的地へと急いだ。

～越えるべき障壁～

天高くそびえる塔……其処に到達したのは、丁度昼頃だった。頂上は見えない。恐らく、獄界への道と同じ程度の高さ。
「扉が閉まってるわねー」
リバレスが巨大な扉に触れるがビクともしない。扉だけで高さと幅が５ｍはある。勿論、オリハルコン製だ。
「仕方ない、手荒だが破壊するか」
私が剣を構え、力を集中する。その時！
「ギィ」
何もしていないのに扉が開いたのだ。
「開きましたね。行きましょう！」
開いた扉に最初に入っていくのはシェルフィア。
「おい、待てよ！全く……変わってないな」
無謀な所は変わっていない。私はすぐに追いかけた。
「本当に。急ぎましょー！」
私達が塔に入った瞬間……私は扉が開いた理由を理解すると共に言葉を失った。
「久し振りだな」
塔の１階に立っていた者……それは……
「セルファス……！」
大柄で筋肉質……天使特有の曇りの無い金の髪……そして、強い決意を秘めた目でかつての友は私を見据えていた。
「お前は変わってしまったな……お前は俺が誰より尊敬する存在でライバルだったのに……そして、お前はエファロードであるというのに天界の為すべき責務を阻害しようとしている。俺は……力司官であり、かつての友としてお前の愚行を見逃す訳にはいかない！」
セルファスは一瞬悲しい顔を見せたが、すぐに私を睨みつけ剣を抜いた。天界で鍛え上げられた聖剣だ……司官のみが持つ事を許される。
「私は……自分の信じる道を進む。お前も知っているだろう？人間が生まれた意味を……！？真の心を持たない天界の計画……私は断じて許さない！だから……それを阻むのならば、私はお前と戦う。例え……友としての心を失っていなかったとしても！」
私はそう叫び、剣を抜いた。気迫が、大理石のフロアに充満する！
「初めから人間の辿る道は決まっていたんだ！神の計画は絶対だ……！俺は、天界を守る！お前が何かを守るように！」
戦いは避けられない。セルファスとは一対一で戦わなければならない。私はそう悟った。
「シェルフィア、リバレス！離れていろ、私一人で戦う！」
私が叫ぶとリバレスはすぐにフロアの端に避難した。彼女は、私とセルファスの因縁を知っているからだ。
「ルナさんっ！私も戦いますよ！」
しかし、シェルフィアは私を心配して近寄ってくる！
「ダメだ！こいつとだけは一人で戦わなければならない！心配はいらないから、リバレスと一緒にいてくれ！」

私が真顔でそう叫ぶと、決意を理解したようでシェルフィアは走り去った。
「行くぞ！」
この瞬間、私とセルファスは力の全てを解放した！セルファスの力は……２００年前とは比べものにならない！
「キン！」
「ガキィー……ン！」
力と力がぶつかりあう！その衝撃で空気が割れるように振動する！だが……
「まだまだその程度では、私には勝てないぞ！」
セルファスが剣を振り下ろした一瞬の隙をついて私は、聖剣ごとセルファスを弾き飛ばした！
「ドゴォォォ……ン！」
奴は壁に激突して地面に倒れた！だが、この程度で諦める奴ではない事はよく知っている。
「流石だな。やっぱ、ルナは強いぜ！」
やられたのに、セルファスは嬉しそうだった。やはり……友の心は失っていない。私は直感した。
「高等神術……『雷光召喚』！」
奴は次の瞬間、神術を発動させた！２００年前には考えられない程の発動スピードだ！
「バリッ……バリバリバリ……！」
空間が強い電場に変わる！並の天使なら、これで即死だろうな……
「光膜！」
私は、体を光の膜で包み完全に雷を遮った！
「くっ……！これも通用しねぇな……！もう小細工は無しだ……全力で行くぜ！」
セルファスはまだ本気を出していなかったのか……恐ろしい成長だ！
「究極神術……『雷光』！」
奴はそう叫び、高等神術より上の究極神術を発動させた！一体何を！？
「行くぜぇぇぇ！」
何と、奴は『雷光』を身に纏い聖剣と共に突進してきたのだ！
「ぐぁぁぁ！」
剣は避けたのだが雷光が私を直撃する！私は、腕に火傷を負った！
「はぁ……はぁ……思い知ったか……！？」
倒れた私にセルファスが近寄る！しかし……雷光を纏うセルファスも無事な筈がない。全身が火傷のように変化しつつある！
「セルファス……お前の決意はよく解った。お前が命を懸けている以上、私も全力を出す！」
私は翼を開き、瞬時にセルファスとの距離をあける！
「禁断神術……『滅』！」
空間が萎縮する。そして消滅する！私は強大な『無』のエネルギーを放った！
「これが……ジュディアを傷付けた術か……！？確かにこれじゃあ、どうしようもねぇな！」
ジュディア……？そういえば、奴はジュディアを愛していた。
「うぉぉぉぉぉ……！」
何を考えているのか解らない。何とセルファスは『滅』を避けずに、真っ向から立ち向かったのだ！
「止めろ！死ぬぞ！」
私は叫ぶ！私はセルファスを殺すつもりなど毛頭ない！
「敵に情けかよ……！？相変わらずお前は甘いぜ……！それに俺はこんな術で死なない！」
『滅』と対峙するセルファス……その表情には確固たる自信が溢れている！
「解ったからやめるんだ！」
私の声はもはや奴には届いていない！
「ぐっ……うがぁぁぁぁぁぁ！」
『滅』がセルファスを飲み込もうとした瞬間……！
「パァァァ……ン」
奇跡が起きた！小規模とはいえ、『無に帰す力』を一人の天使が消し去ったのだ！
「やったぜ……俺の……勝ちだ」

何に勝ったのかは解らないが、力を使い果たしたセルファスはその場に倒れこむ……敵の筈なのに、私は奴に歩み寄った。
「セルファス……お前は」
私は倒れているセルファスを抱き起こす。
「……ジュディアが、お前の恋人を殺した時……俺がその場にいたらな……って思ったんだ。あいつはお前にとって許せない事をしたが、俺はジュディアが大切だ。お前が、ジュディアを消そうとした時……俺なら守ってやれるか試したかったんだ。あいつは、本当にひどい事をしたな。許せないだろうが、俺が謝る。すまない」
セルファスは息も絶え絶えにそう言った。その真意は、奴の左薬指を見て理解した。
「お前達は結婚したんだな。だが、私がジュディアを憎む心は消えていない。もし、私がジュディアを殺せばお前は私を憎むだろう？ジュディアは、それ以上の事をフィーネにしたんだ。今は、私が獄界に行き……約束通り再会出来たがな。これから先……私が進む道で、シェルフィアを傷付ける者……私の道を阻む者がいるなら、私は相手が誰であろうと倒す。お前が、心からジュディアを愛するのならば……
私達の前に、あの女の姿を晒すんじゃない」
ジュディアの話……それをすると、私の心が憎しみに満たされていくのが解った。
「確かに……ジュディアを殺されれば俺は許さないな。だから……あいつを殺すのだけは止めてくれ……あいつをどうしても殺すというなら、俺を殺せ。俺にはその覚悟がある」
セルファスはそう言うと、聖剣を自分の胸に当てた……
「お前の気持ちは解った。だが、ジュディアを私から退けさせればいいだけの事だろう？」
私はセルファスの聖剣を奪い、地面に放り投げた。こいつが死ぬ必要はない。
「あいつは……神術と命の司官。お前達から逃げる事は出来ないんだ。だからこそ頼む！」
セルファスはその場に土下座して私に頼み込んだ。だが私は……ジュディアを前にして、殺さないという自信が無い。
「ルナさんっ！私は此処にいるんです！あの人を殺す必要なんて無いんです！許せとまでは言いません。でも、私達と同じ悲しみを増やすのは……苦しいです」
其処で、シェルフィアが近付いてそう言った。その表情には深い慈悲と悲しみに溢れている。
「……解ったよ。シェルフィアがそう言うならな……セルファス、私達は天界へ向かう。異議はあるか？」
私は、全身に火傷を負い……『滅』にほぼ全ての力を奪われたセルファスに問いかけた。
「ルナ……、そして、シェルフィアさん……、ありがとう。そして……すまない！ルナ、俺は動けない。行くんなら行けよ。お前が考えてる事なんだ、何か世界が変わるような重大な事なんだろ？」
セルファスは私達に深く感謝した後に、そう言って笑った。
「ああ、変えてみせる。今は、お前を友とは呼ばない。だが、私が世界を変えられたら……もう一度友に戻ろう」
セルファスとは……また友人に戻れたらいい。それを言葉に出して、私は階段に踏みかかった。
「ルナー！待ってよー！」
慌ててリバレスがついてくる。その直後だった。
「うぉぉぉ……ルナ！お前って奴は……！」
セルファスは号泣していた。人情に溢れた奴だな。そんな所を私は少し尊敬している。
私達は先を急いだ。この先で……ジュディアに出会う事になる。それが不安だったが、前に進むしか道はない！
私は翼を広げ、塔の中を飛び回る。そして、１５時間程で１０００階まで辿りついた。途中、天使の姿は無く同じ構造のフロアが繰り返されるだけだった。大理石の壁と床と柱……そして螺旋階段。壁には神術で灯された燭台……それが繰り返されたのだ。
無論、昼も夜も解らない。フィグリルを出てから既に二十数時間が経過している。シェルフィアとリバレスの顔に少し疲れが見えたので、
此処で暫く仮眠する事にした。食事を摂り、３時間程眠る。
丁度３時間……其処で、最初に目覚めたのは私ではなくシェルフィアだった。

「ルナさんっ、リバレスさん時間ですよ。起きてください！」
シェルフィアが優しく私の体を揺さぶる。
「早いな、シェルフィア」
「う、うーん……そういえば、シェルフィア昔も早起きだったもんねー」
私達は眠い眼を擦って立ち上がった。
「ふふ……ルナさんのご飯を作らなければいけないのに、ルナさんより遅くに起きちゃダメですからね」
緊迫した空気を打ち消す、シェルフィアの笑顔と声はまるで天使のようだった。
「頼りにしてるよ。行こうか！」
私はシェルフィアの頭を撫でて、すぐに出発した。飛行を再開して６時間程が経つ……此処は１５００階だ。
「来ましたね。愚かな脱落者が！」
細身の……何より眼鏡が似合う秀才……ノレッジが私達の前に立ちはだかる。
「お前まで私の道を閉ざそうとするのか……？」
私は失意の目を向ける。すると、彼は見下したような笑みを見せた。
「君のようなクズを通す理由が僕には見当たらない。神の名を受け継ぐ者でありながら、天界を背く愚かさに言葉もありませんよ」
ノレッジは首を振る。この男は……友じゃない。私にはそれが理解できた。
「そうか……お前はさぞ嬉しい事だろう。私が天界から消えて、念願のトップになる事が出来たのだからな」
私は、ノレッジは臆病者だが友だと思っていた。その裏切りに対する思いが、私の口からそんな言葉を走らせる。
「いいえ！元々、僕の方が優れた頭脳の持ち主だったんです！君がいなくとも、僕はいずれ天界一になっていた。それを見せられなかったのが残念ですよ。それに……これから先もそれを見せる事は出来ない。何故なら、君は此処で力尽きるのだから！」
私を殺そうというのか……？私は渋々剣を抜こうとする。が！
「ルナー！ノレッジの相手はわたしがするわー！ルナは疲れてるでしょー？休んでていいわよー！」
私の前にリバレスが立つ！幾らなんでもそれは無茶だろう！？
「リバレス！お前には無茶だ！」
私が叫ぶと、リバレスは強気に微笑んだ。
「大丈夫よー！友情を裏切った奴の相手なんてわたしで十分！いつも守られてばっかりだから、たまにはいいとこ見せるわよー！」
確かに……リバレスは成長した。４００年以上の付き合いだ……信じてみるか。
「解った。無理そうなら言えよ！すぐに助けるからな！」
私とシェルフィアはこうして、フロアの隅に移動した。
「馬鹿にするのも大概にして下さいよ！僕は『死の司官』！天翼獣如きが僕の相手をするなんてね……！リバレス君、君を倒した後に人間界もろとも全員を滅ぼしてあげますよ……！」
ノレッジはそう言うと、かつて神官が使っていた豪壮な杖を掲げた！途端に、神術のエネルギーが漲る！
「人間界は滅びない！滅びるのは寧ろ天界の方よー！」
リバレスも力を解放した！私も、いつでも動けるように身構える。
「リバレスさん……、大丈夫ですか？」
シェルフィアが、戦いが今にも始まろうとするのを心配そうに見つめる。
「少し心配だけど、信じてみよう」
私がそう言った瞬間、戦いが始まった！
「高等神術……『拘束』！」
戦闘開始早々に、ノレッジは『拘束』を放った！これにつかまれば、リバレスは終わりだ！
「いきなりそれは卑怯なんじゃないのー！？……同じく高等神術『光刃』！」
拘束と光刃がぶつかる！
「パキィィィン！」

両者のエネルギーが空中で相殺した！
「天翼獣が高等神術を使うなんて聞いた事がありませんよ！まぁ、それでいい！僕の相手をするのですから！」
二人とも肉弾戦には向かない。恐らく、神術のみの戦いとなるだろう！
「今度はこっちの番よ！『滅炎』！」
私が得意とする炎の高等神術だ……直径数ｍの炎の渦がノレッジを襲う！
「くっ……『氷壁』！」
『氷壁』は高等神術『絶対零度』を守りに用いたものだ。互いに譲らない！
「ゴォォォォォ……！」
炎が氷の壁にぶつかる！だが、氷は殆ど溶けない！
「ははは、その程度ですか！」
氷の向こうでノレッジが笑っている。すると……！
「あんまり油断しない方が身の為よー！」
リバレスが、高速で飛び回る！一体何を……！？
「連続……『滅炎』！」
何と、リバレスは四方八方から炎を放ったのだ！これでは、氷壁では防げない！
「うっ……うわぁぁぁ……！」
炎がノレッジに炸裂する！その瞬間、神術で出来た氷は消滅した！やったのか！？
「そっ……そんなー……！」
煙が晴れて現れたのは……無傷のノレッジ……！究極神術の『光膜』で自身を守っていたのだ！
「今のは危なかったですよ。本気で行かないとダメみたいですね！」
ノレッジは光膜で守られている。その瞬間、神術で出来た氷は消滅した！やったのか！？
レスの神術なら完全に弾くだろう。
「『拘束』！」
リバレスがノレッジの動きを止める為に、『拘束』を放つが……光膜はそれを完全にかきけす！
「動きを止めたいのならば……これぐらいじゃないと！」
ノレッジが杖に向かって意識を集中した。まさか！
「リバレス！逃げろ！」
私の声に気付いて、リバレスが動こうとした瞬間！
「……究極神術……『不動』！」
かつてジュディアが私を動けなくした神術……！それをリバレスが解ける筈がない！
「キャァァァァァァーー！」
リバレスは『不動』に囚われ、床に落ちた……もはや私が出ていくしかないだろう。
「さぁ、終わりです。ルナリート君、早く来ないと大切なペットが死にますよ！」
リバレスをペット呼ばわり……私は怒りが沸いてくるのを感じた！
「（ルナー……、聞こえる？わたしはまだ大丈夫……唯一つお願いがあるのー……）」
其処で、リバレスの意識が転送されてきた！良かった、無事だったか！
「（ああ、何でも言ってくれ！）」
その様子をノレッジに気付かれないように、私は剣を抜き睨みつけた。
「（『あれ』の術式を教えて欲しいのー……）」
まさか……『あれ』は負担がかかり過ぎる！本来、エファロードのみが使える神術だ！
「何をしているんです！？君が来ないのなら、『魂砕断』でこのペットの魂ごと砕きますよ！」
時間が無い！私は躊躇した。だが、教えるしかない！
「（ｒｕｉｎだ！）」
私は咄嗟に意識を転送する！
「（ありがとー！）……禁断神術『滅』！」
「……えっ……！？何だ！？」
エファロードしか使えない筈の、『滅』が発動した！大きさは数十ｃｍ程度だが……光膜を消し去り、ノレッジの精神力を全て吸収した上に杖を破壊して『滅』は消えた！

「……そんな……馬鹿な」
精神力を失ったノレッジはその場に崩れるように倒れた！私はすぐさまリバレスに駆け寄る！
「リバレス！大丈夫か！？」
私は倒れているリバレスを広いあげた。すぐに、私の精神力を注ぎ込んだ！
「……あの神術……やっぱりルナみたいな力がないと使っちゃダメねー……体中の力が全部無くなっちゃったわー」
私が精神力を足しても、リバレスの疲労には追いつかない！リバレスは、意識を失った。
「リバレスさんっ！？大丈夫ですか！？」
シェルフィアが涙目でリバレスを揺さぶる。
「……大丈夫だ。命に別状は無い。教えた私が馬鹿だったんだ！」
私は自分のした事を悔やんだ。本当に命に別状はないが、いつ目覚めるか解らない。
「……くっ」
其処で、ノレッジが立ち上がった！しぶとい奴だ……
「お前の負けだ。それ以上、邪魔をするなら命の保障はしないぞ」
私はそう言って剣を向けた。脅しではない、リバレスを殺そうとしたんだ！
「……僕の負けなのは解ってますよ。今は、妙にスッキリした気分です。僕が間違ってましたね。僕は君が羨ましくて……追いかけて……それでも届かずに……悔しかった。……君は尊敬していました。でも、段々それが憎しみに変わっていったんです。
子供の頃から君と一緒で……劣等感を抱いていました。それで、君がいなくなって僕は優越感に浸りました。でも……僕は虚しかった。何故でしょうね……僕は今解ったんです。僕は……君に認めて欲しかったんだと。僕は最低です。セルファス君と君が夜中に競った時も……天界での裁判の時も僕は逃げ出してばかりだった。君達は……僕にとっての大切な大切な友達だったのに！」
其処でノレッジは泣き出した。初めて見る涙だ。この言葉に偽りはないだろう。私はそう感じた。
「ノレッジ」
私は思わず声をかける。しかし……
「優しい言葉はいりませんよ。僕にはそんな資格はありませんから……でも、一つだけお詫びをさせて下さい」
ノレッジはゆっくりと私の所まで歩み寄ってきた。敵意は全く感じられない。
「これは、濃縮されたＥＳＧです。これをリバレス君が飲めば、半日もあれば回復するでしょう……僕を信用できないのは解っています。
これは捨ててくれても構いません。でも、これが今僕に出来る唯一の事だから」
そう言って、ノレッジは私に袋を渡した。中を見れば、ＥＳＧが入っている。恐らく、これは彼の言う通りのものなのだろう。
「信じるぞ、ノレッジ。私が……計画を止めれたら、またテストで勝負しような……ちゃんと勉強しとけよ！」
私はノレッジの肩を叩いた。よくよく考えれば……神の計画はノレッジにより、兄さんに知らされたもの。それが無ければ、私達は動く事さえなかった。もしかしたら……ノレッジは交渉という名目で、私達に危険を知らせたかったのかもしれない。
「……はは……今度こそ負けませんよ。約束します。そして……ありがとうございます」
其処でノレッジの意識も途絶えた。私は躊躇うことなく、ＥＳＧを取り出す。
「本当に、あの人の言葉は信用出来るんですか？」
シェルフィアはノレッジを信用していない。それもその筈だろう。本気で殺そうとしているように見えたのだから……
「ああ、あいつが本当に殺そうと思っていたならいちいち私に断りなどいれないだろ？私を挑発したのは……私に認めて貰いたかったからだ。こいつはそういう不器用な奴なんだ。でも、この戦いが終われば こいつも友達だよ」
私はリバレスにＥＳＧを飲ませた。途端に、リバレスの体が光る！確かにこれは通常のＥＳＧじゃない。
「友達って難しいものなんですね。私の友達はお城の侍女ばっかりで、みんな優しかったから」

シェルフィアは首を傾げた。確かに、私の友人は少し変わっているかもな……
「お互いを知って、認め合えるのが友達だと私は思うな……今度、シェルフィアの友達にも会ってみたいな」
私がそう言うと、シェルフィアは微笑んだ。
「はいっ！皆にルナさんを紹介します！皆、喜んでくれますよ！」
彼女は嬉しそうだ。しかし、リバレスとノレッジの姿を見ると素直に喜んでいる場合じゃない。
「そうだな、それは楽しみにしてるよ！でも、それは帰ってからのお楽しみだから……今は先を急ごう！」
私がそう言うと、シェルフィアは我に返ったようで顔を赤くした。
「はいっ……そうですね！」
こうして、私達は１５００階を飛び立った。勿論、眠っているリバレスも抱えながら……

途中休憩を挟み、リバレスも回復し……出発して丁度２日、４８時間が経過した頃……塔の屋上への階段が見えた。
屋上には、天界内部への転送装置があるが……その前に立ち塞がる影……それは……！
「ジュディア……！」
その姿を見た瞬間、私は自分の中で怒りが爆発するのを感じた！セルファスと約束したが……私は自分を制御出来ないかも知れない！
「此処に来たって事は……セルファスもノレッジもやられたのね」
ジュディアは悪びれた様子も無く溜息をつく……
「貴様！」
私は我を忘れて剣を抜いていた！
「……その娘……私が獄界に送ったのに戻って来たのね。ルナ……、あなたはエファロードであるというのに、人間なんかに恋をして……獄界を荒らしまわった挙句、今度は天界を壊すつもりなの？愚かだと気付かないの？」
ジュディアは呆れたような顔で私の目を見る。
「……セルファスに頼まれてたが……余程死にたいらしいな！？」
私は走り出そうとする！……しかし！
「ルナさん、あの人は私に任せてください。今のあなたが戦えば……悲しみしか残りませんよ」
シェルフィアが私を制止したのだ！
「何故だ！？あいつは君を殺した上に……獄界に送ったんだぞ！許せる筈がないじゃないか！？」
私はシェルフィアを振りほどこうとしたが、リバレスまで加わって私を止める！
「ルナ！ちゃんと、シェルフィアの言う事を聞いてあげて！」
私は二人に止められて、渋々剣をおさめた。まぁいい、シェルフィアに危機が及べば一瞬でジュディアを消せばいいのだから……
「へぇ……人間の娘如きが私に何の用かしら？」
シェルフィアがジュディアに歩み寄り、ジュディアは見下したようにせせら笑った。
「あなたは可哀想な人。ルナさんを思うばかりに、私を殺してまで取り戻そうとした。でも、私はその気持ちが解る。私だって、ルナさんが誰かに奪われたら絶対に許さないから」
その瞬間、ジュディアの表情が凍りつき怒りに変わった！
「お前なんかに何が解るっていうの！？私の気持ちが解る！？人間如きに愛する人が奪われた私の気持ちが！？」
ジュディアの体からエネルギーが迸る！此処は、塔の最上階……雲の上だというのに、エネルギーの雲が屋上を覆う！
「あなたはそうやって、外見の美しさや神術の力を示す事しか出来ない！大切なのは『心』なのに！」
シェルフィアはそう叫び、彼女もまた力を解放した。ジュディアに負けない強力な力だ……！
「黙りなさい……！お前を見ていると、気が狂いそうになる！私の前から消えるがいいわ！」
ジュディアはそう叫び、精神エネルギーを集中し始めた！命と神術の司官……その力は絶大だ……！

「あなたに理解して貰うには、戦うしかないみたいね……！」
シェルフィアがジュディアと戦う！？危険だ！
「止めろ！シェルフィア！君の力で対処できる相手じゃない！」
事実そうだった。セルファスよりもノレッジよりも……かつての神官ハーツよりも強力な力を持っているのだ！
「ルナさん……、ごめんなさい。私……まだ本当の力を隠してました」
確かにシェルフィアはそう言った！まさか……！？そんな筈が……！
「お前は一体……何者なの！？」
その様子に気付いたジュディアが後退りを始める。それもその筈だ……今のシェルフィアからはエファロード第２段階を超える力を感じる！
「私には色んな力がある。あなたが私を殺した時の力も……ルナさんが私に注いでくれた力も……そして、獄王の力まで……！？シェルフィアは、転生するまでに受けた全ての力を吸収していたというのか！？
「そんな事はありえない！死になさい！『絶対零度』！」
ジュディアの得意な氷の高等神術……！
「本当の冷たさを知ってるの……？魂が愛する人から離れて、一人ぼっちになる冷たさを！？」
ジュディアの氷が到達する寸前……シェルフィアの体の周りに氷柱が立った。高さは数十ｍ……それも恐ろしく冷たい……！
ジュディアの氷は、その氷柱に飲み込まれて消え去った！
「くっ……私は……司官……天界のリーダー的存在よ！究極神術を受けるがいいわ！」
ジュディアは、更に膨大な精神力を集中した！その間シェルフィアは黙ってそれを見ている。
「それであなたの気が晴れるなら……？気が済むまで、神術を使うといいわ」
シェルフィアはジュディアを見つめてそう言った。
「お前の指図は受けない！究極神術……『不動』……『神光』！」
『神光』は究極神術の中で最強の力を持つ神術……！しかも、『不動』と同時に発動……！？
「シェルフィア！」
私とリバレスが同時に叫んだ！その瞬間、『神光』の光で何も見えなくなる！しかも、シェルフィアは動けなくなるかもしれないのに！
「これが、神術とは逆の属性を持つ魔術。究極魔術『暗幕』」
シェルフィアは無傷……その上に、暗黒のカーテンで全ての神術を遮る！
「そんな……私が人間如きに」
ジュディアは、持てる最高の力を使ったのだろう。その場に座り込んだ。私から受けた傷も生々しく見えて、とても小さな存在に思えた。
「人間も天使も……魔物だって、魂の価値は変わらない。唯あなたがそれを受け入れようとしないだけ」
シェルフィアは、『暗幕』を解きジュディアにゆっくりと近付いた。一体何をする気だ……？
「私は死んでもお前の言う事なんて聞かない！殺すがいいわ！」
ジュディアは座り込みながらもシェルフィアを睨みつけそう叫んだ！
「それじゃあ、一度死んでみるのもいいかもしれないわね」
シェルフィアが確かにそう言った！一体何を考えてる！？
「（シェルフィア！……やめるんだ！君がそいつを殺したって何にもなりはしない！）」
私が意識を転送する！返事が返ってくる筈は無いが、それでも聞こえる筈だ！
「（ルナさん、大丈夫ですよ。殺しなんてしません。唯、この人を心の闇から救うだけです。）」
シェルフィアが意識を転送しかえしてきた。私は、シェルフィアの力に言葉もない。
「確か……『不動』と、『堕獄』よね。私を獄界に送ったのは」
シェルフィアはそう言うと、一瞬でジュディアに『不動』をかけて動きを完全に静止させる。
「な……何するの！？嫌！私は死にたくない！セルファスーー！」
ジュディアが見動き一つ出来ずに泣きながら叫ぶ……！
「……禁断神術……『堕獄』！」

シェルフィアがそう叫ぶと、本当に空間に漆黒の剣が現れた！これは本物！？

「キャァァァァァー！」

漆黒の剣がジュディアの体に突き刺さる！と思った瞬間……剣は眩い光と共に消失した。一体？

「……少しは解ってくれた？どれ程恐ろしい事か……？死ぬ前に、愛する人の顔が浮かぶでしょう……？」

シェルフィアはそう言うと、ジュディアに手を差し伸べた。優しい笑顔と共に……

「……ごめんなさい！ごめんなさい！うわぁぁぁぁぁぁぁぁ……ん！」

ジュディアはシェルフィアの手を握り締め、子供のようにワンワン泣いていた。こんなジュディアを見るのは初めてだ……

「解ってくれたらいいのよ。私はルナさんの所に戻ってくる事が出来たんだし……もう誰もあなたを責めないから」

シェルフィアはジュディアを許した。何という慈悲深い心か……私はその心に身震いさえ覚え、自分がちっぽけな存在に思えた。

ジュディアは己の過ちを悔いて……ずっとずっと泣き続けていた。かつて命を奪ったフィーネの生まれ変わりであるシェルフィアの下で……

これから先、ジュディアはもう人間を見下したり他人を傷付けたりはしないだろう。自分がその痛みを知ったのだから……

それにしても……

そんな光景を私とリバレスは喜びの中で見ていたのだが、リバレスの一言が私に突き刺さる。

「ルナ……、もしシェルフィア以外の女の子と仲良くしたら、命が危ないわねー」

ぞっとするような言葉だった。そんな事は有り得ないが、シェルフィアを怒らせたらどうなるか……私は、この戦いで知ったからだ。

恐らく……いや、間違いなく女の子ではこの星で最強の力を持っているだろう。しかも、未だ底は見えていない。

「シェルフィアを怒らせたら恐いな……もしかしたら私よりも」

私がそう呟いた瞬間、シェルフィアが私の方を見て微笑んだ。聞こえてはいないだろうが、ドキッとした。

「……仲良くするのよー！」

リバレスが真顔でそう言った。私は黙って頷く……

それはさておき、天界への転送装置の使い方は私には解らない。それをジュディアに聞くまで、私達は此処で待つ……

ジュディアは……まだシェルフィアに泣きついていた

互いを知り認め合った者が友達だと私は言ったが……もしかしたら、あの二人は友達になれるのかもしれないな。

私は、憎しみや悲しみの先にあったこんな結果に驚きながらも、素直に受け入れていた。

私ももうジュディアを憎む気持ちは何処かに消え失せてしまったからだ。

～もう一人のエファロード～

贖罪の塔で、ルナリート達が頂上に到達するのと同時刻……ハルメスは『獄界への道』の最下層にいた。

「ルナ達もそろそろ天界に着く頃だな」

ハルメスはたった一人、獄界から来る魔の大軍を待ちうける。その心にはやはり幾分かの不安があった。

「ティファニィ……お前が死んでからずっと止めていたが」

彼はそう呟くと、胸ポケットから1本の煙草を取り出した。ティファニィの生まれた村では、煙草が名産品だった。ティファニィや村の人と仲良くなり、彼は煙草を覚えた。そして、ティファニィに貰った煙草に『停止』の神術をかけてずっと持っていたのだ。ティファニィは、ハルメ

スが煙草を吸う姿が好きだった。だが、彼女が死んでから……ハルメスは煙草の吸い方さえ忘れていた。
「これを吸うと、あの頃を思い出すよ」
彼は煙草に火をつける。すると、空間に紫煙が舞い始めた。戦いの前だというのに、穏やかな空気だった。
「……よし。大事な弟の為だ！戦うぜ！」
煙草を吸い終えて、ハルメスは剣を抜いた。久々に着る黒の戦闘服……準備は万端だ。
「俺の勘ではもうすぐ来る！」
計画の開始までは正確に言うと８日残っていたが、彼の勘は魔の襲来は予定より早いと言っている。すると……
「読み通りだな！」
この瞬間、最下層にある彫像が光り出したのだ！魔が現れる前兆……！
「グアァァァァァァァ……！」
次の瞬間、数百体……いや、数え切れない程の魔の大軍がこの最下層を埋め尽くした！
「なかなかの団体様だな。行くぜ！」
ハルメスは体を『光膜』で覆った！これでこの場にいる魔の攻撃は一切無効だ！
「エファァロードハ死ネェェェ

「ファング、全く……お前は役に立たないね」

そんな声が魔の後ろから響いた。一体……！？

「フィアレス様！？どうかお許しを……？……グァァァァァァァァァ……！

この魔……ファングは喋り終わる間もなく漆黒の剣で体を貫かれた！そう……この魔はかつて、ルナリート達を窮地に追い込んだ

獄王の側近……！そして……フィアレス……この男は！？

「失礼したね。ハルメス・ジ・エファロード。この役立たずは、ファング……あっ、もう死んじゃったけどね。僕はフィアレス・ジ・エファサタン。僕はルナリートを殺しにきたんだけど、もう一人のエファロードが此処にいるなんてね。好都合だよ」

ハルメスは一歩後退りした。面と向かった瞬間、フィアレスが獄王の子である事……そしてその力の強大さに気付いたからだ！

「此処に現れた理由は聞くまい……だがまさか、サタンが直接人間界に現れるとは思わなかったぜ」

フィアレスの力はルナリートと戦った時より遥かに増していた。その生命力は数億を超えるだろう。

「僕は早くルナリートに会いたいんだよ。でも君と此処で会ったのも何かの縁。君から先に殺してあげるよ！」

フィアレスがそう言った刹那……！斬撃がハルメスの光膜を襲う……！速く……重い一撃……！

「パァァァァァァー……ン！」

光膜は瞬時に粉々に砕け散った！更に高速の剣がハルメスを捉える！

「キィィィィー……ッン！」

体を直撃する寸前、ハルメスは何とかそれを防いだ……！だが、その重圧で手が痺れる！

「容赦の無い剣だ……だが、俺がお前に負ければ人間界は滅びるだろう。俺は命を懸けてお前を倒す！」

力を温存出来る相手ではない。ハルメスはエファロード第４段階まで力を解放した！

第４段階は『エファロードの記憶の継承』……この段階は、ハルメスが使える最終段階……生命力を著しく消耗する！

「そう来なくちゃね！それでこそ殺し甲斐があるよ！」

フィアレスも、エファサタンとしての力の殆どを継承している。

そう、ロードとサタンの因縁の戦いが此処で再び始まったのだ！

「禁断神術『滅』！」

「ふーん……『滅』なら僕も使えるもんね」

その瞬間、『滅』と『滅』がぶつかりあう！何故フィアレスが禁断神術を使えるのか……！？

「何故神術を！？」

ハルメスが神術に力を込めながらも叫ぶ！

「君の馬鹿な弟の贈り物さ！ほら、その程度なの！？」

そうだ……ルナリートが獄界に渡した『天使の指輪』……それが利用されているのだ！だが、それより……！

「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ……！」

フィアレスの『滅』の勢いにハルメスが押されている！ハルメスは限界まで力を注ぎこんだ！

「くっ……やるね……でも無駄だよ！」

急にフィアレスの『滅』の勢いが弱まる！？一体……！？

「此処だよ！」

フィアレスは『転送』を使い、ハルメスの真横まで移動していたのだ！

「ブシュッ……！」

鋭い斬撃が……ハルメスの胴を両断する！？と思えた瞬間……！

「転送も使えるみたいだな。ぐっ」

ハルメスも転送を使い、何とか剣が致命傷になる前に逃れていたのだ！

「シュゥゥゥー……！」

脇腹を押さえ血を流すハルメスを余所に、行き場を失った『滅』が半径数十mを抉り取って消滅した！

「よく避けたね……絶対に死んだと思ったんだけどね」

フィアレスは余裕そうに笑みさえ浮かべる。ハルメスの傷は……深い……骨も数本切断されているだろう。

「……今まで生きてきて……お前のような強敵に会ったのは初めてだ。俺は獄界に行って無事に帰ってきたルナを誇りに思うぜ」

ハルメスは、自分が此処で死ぬかもしれないと感じ始めていた。だが、彼には守るべきものがある。大切な弟……その恋人……

そして……大好きな人間達……それを守る為には、今此処で死ぬ訳にはいかない！

「ティファニィ……これが俺達の最後の戦いだ。行こう……！」

ハルメスがそう言った瞬間……空間に光り輝く剣が現れた！

「へぇ……それでどうするつもりなの？」

フィアレスは余裕でハルメスのする事を見ている。いつでも殺せると思っているからだ。

「『神剣ハルメス』……俺の最愛の女性が変化した姿だ」

ハルメスは此処で神剣を呼び出したのだ。神剣は魂が剣に変化したもの……ティファニィがハルメスの為に変化したのだ！

「そんな剣で僕を倒せると思ってるの？もう茶番は終わりだ……死んでしまえ！」

フィアレスが猛スピードで襲い来る！目にも見えないスピードで剣が振り下ろされる！

「ザシュッ……！」

傷を負ったのは……フィアレスの方だった！

「……ぐっ……そんな馬鹿な……！？剣が勝手に動くなんて……！？」

フィアレスは予想出来ない攻撃に戸惑っている！

「この剣は、俺とティファニィの意思で動く。直接腕を振る必要も無くな……此処からが本当の戦いだぜ！」

ハルメスはフィアレスを睨みつける。傷の程度は両者とも大差無い。激しい戦闘が始まった！

「ガキィーーン！」

「ブシュッ……！」

「ゴオオオオオオオオオ……！」

「ドオオオオオオオオーン……！」

両者共に体をエネルギー膜で守り、剣でぶつかりあい……互いに剣の傷が増えていく……！全身が切り刻まれていくのだ！

炎……氷……光……闇……神術と魔術が激しくぶつかりあう……！

「はぁはぁ……そろそろ人間界を諦めてくれないか……？」

脇腹を抉られ……肩を斬られ……太腿から大量の血を流すハルメスがフィアレスを睨みつけながら言った！

「ハァ……ハァ……君こそ早く死んで僕を通してくれよ……！」

頬を刺され……左腕を折られ……炎で片目を焼かれたフィアレスが叫ぶ……！

二人はもう立っているのもやっとだ……次が最後の攻撃になる。二人はそれを理解していた！

「……もう終わりにしようぜ！……始まりの神術『光（sunlight）』！」

ハルメスは、全ての神術の中で『始まりである神術』を放つ！エファロードにのみ許された最強の神術……！

「……そうだね……これで終わりだ！……終わりの魔術『闇海（darksea）！』」

『光』とは対極の魔術……！光と闇の波動が空間の全てを埋め尽くす……！あらゆるものが存在し得ない次元だ！

「決着をつけようではないか……サタンよ！」

「ロードとサタン……消えるのはロードだ！」

二人の中のエファロードとエファサタンとしての記憶がそう叫ばせた……！光と闇の波動が更に勢いを増す！その力で、３０００階もある塔が激しく揺れる！そして……塔の下層１００階程が既に消滅した！更に、此処は地下……このエネルギーのぶつかりあいで地下には巨大な空洞が

出来ると共に溶岩が噴き出した！
「ティファニィ……！俺に力をぉぉぉぉぉぉぉぉ……！」
「僕はサタンの末裔……！負ける筈がないぃぃぃ！」
二人とも既に限界を超えていた！傷口から血が飛び出し……服は焼け……翼も皮膚も消失しようとしていた！
そして次の瞬間……！

「ザクッ……！」

剣が胸を貫く音が響いた！
二人の胸を深く深く……！両者は同時に『転送』を使い、正真正銘最後の一撃を放ったのだ！
「ブシュウウウウウウウウ」
溶岩だけが溢れる地の底で……二人は胸から血を噴き出した！
「うぐぁぁぁぁぁぁぁ……俺の……勝ちだな。これで魔は人間界に……来れまい」
剣を支えに……死にも等しい痛みを堪えながら……ハルメスはフィアレスにそう聞かせた……
「ウグゥゥゥゥ……無駄さ……この塔が一部でも残っている限り……転送装置は３日もあれば修復する。束の間の平和を噛み締めるがいいさ……僕の勝ちだ」
獄界の王子フィアレスは動けなかった。流石に胸を貫かれたら……息をするだけでやっとだ……
「３日か……その間に……俺がこの塔を消してやるぜ」
ハルメスも息をするのが精一杯だ……この傷は……エファロードでも癒えないだろう。
「ふん……戯言を……君の人生はもうすぐ終わりだ……未来の心配などいらないだろ……？今度は……必ず……ルナリートを……殺してやる」
フィアレスは強気にもそう言った。死ぬ前の強がりなのかもしれないが……それは誰にも解らない。
「……俺はまだ死なない。だがせめてお前は獄界で死ぬがいい」
ハルメスは身動き一つ出来ずにそう言った。そして……フィアレスを獄界に『強制転送』したのだ。
「ルナ……、何とか追い払う事が出来たぜ……後は」
ハルメスは……血を吐き……足を引きずり……歯を食い縛って……自分自身を転送した。

自分が生まれた意味を完遂させる為に……

～狂気の再来～
「本当にこの道で辿り付けるのかしらねー？」
私達は、この時天界の地下を走っていた。ジュディアに天界の地下通路に転送されたからだ。
「大丈夫ですよ。今のジュディアさんは嘘をつくような目じゃなかったから」
事実そうだった。泣き疲れた後のジュディアはまるで子供のような素直な天使になっていたからだ。
「それもこれもシェルフィアのお陰だ。先を急ごう！」
この地下通路は『封印の間』に直結しているらしい。この道を通らなければ、天界にいる全ての天使を敵に回していたことだろう。
「はーい！行きましょー！」
私達は暗い地下を走り続けた。封印の間にいる神に会う為に……！
走り始めて数時間……やがて眩い光が飛び込んできた！
「出口だ！」
私達は、地上に出る階段を一気に駆け上がった。
「懐かしいわねー」
此処は……『封印の間』の門前の噴水……かつて、セルファスとこの場所まで競争した事がある。そういえば、この事件がきっかけで私は神官と対立する事になったんだな。そして、遠くには神殿が見えた。生まれてから天界を去るまで暮らしていた神殿……

その故郷は夕焼け雲に覆われて、雄々しくそびえたっている。更に、鏡のように磨かれた大理石が紅い光を反射して……まるで私の帰郷を喜んでくれているような気がした。
「此処が……ルナさんとリバレスの故郷……とても綺麗な世界ですね」
完璧な直線で構成された建造物……道……そして、森さえも狂いなく整えられている。
「まさか、こんな形で戻ってくるとは思わなかったよ……でも、この場所に長居すれば他の天使に見つかる可能性がある。私達は敵と思われているんだ。目的を遂げる為に……急ごう！」
シェルフィアとリバレスは遠い景色を眺めていたが、私の言葉を聞いて封印の間への道を急いだ。
門を開け、中庭を走りぬけ……封印の間のすぐ傍まで来た時、この場所には不釣合いな景色に私達は足を止めた。
「可愛らしい花が咲き誇ってますね」
シェルフィアはしゃがみこみ、一面に咲く花を見つめた。何処までも真っ白に咲き乱れる花達を……
「この花は」
私はこの花に見覚えがあった。そう、私が天界に住んでいた頃、部屋で育てていた花と同じ種類の花だ……
「ルナ草ねー」
そう、この花の名は『ルナ草』だ。花が咲き始めるのは必ず満月の夜だからそう名づけられた。そうして私達が暫く花を見ていると、何処からともなく聞いた事の無い声が響いた。暖かく、優しい声。
「（ルナリート様……お久し振りです。）」
頭の中に直接響く声……転送の神術と似ているが少し違う。私達は、声がする方に近付いた。すると……！
「お前は……まさか、私が天界を去る前夜に窓から飛ばしたルナ草か！？」
一際大きく、そして誇らしげに咲き揺れるルナ草に私は問いかける。
「（はい……、その通りです。あなたのお帰りを心待ちにしておりました。見て下さい……この花達を……みんな私の子供なのです。）」
そういう事か……私はこのルナ草を『保護』の神術で守りながら飛ばした。その後の２００年の間に根を張り、実を結び、種を飛ばし……
こんなに広大な花畑に変わったのだろう。それにしても……植物が意識を持つのは天界でもごく稀な事だ。１００００年に一度の奇跡と言える。
「そうか……良かったな。これからも元気に花を咲かせるんだぞ。私達は先を急ぐ……話は後にしてくれ」
私は嬉しかったが、今はそれどころではない。神術で水を作り出して、このルナ草に注いだ後に走り出す。だが……！？
「（お待ち下さい！私が……此処でお待ちしていたのは、あなたの力になる為です！）」
ルナ草がそう言った瞬間……光で出来た眩い剣へと姿を変えたのだ！
「お前は……一体……！？」
私はその剣に近付き、そう話しかけた……
「（私の魂……『神剣ルナリート』として捧げましょう……この先で必ずお役に立ちます！）」
神剣……魂を剣に変えたもの。しかもそれを使う者は、エファロードであり……なおかつ神剣の魂は、そのエファロードを深く信頼していなければならない。だが、それを手にすればどんな剣よりも強大な力を使う事が出来る。その理由は、オリハルコンの剣が精神力の一部を破壊力に変換出来るのに対して、神剣は精神力を注ぎこむ分だけそれが破壊力に比例するからだ。
「お前も私と共に戦ってくれるんだな！ありがとう！」
私は神剣ルナリートを手にした。途方も無い力が剣を持つ手に溢れる！今ならどんな武器にも負けないだろう！
そんな事を考えていたその時……！
「ルナさん……、空に不気味な月が！」
私達は一斉に空を見上げた。すると……まるで鮮血を思わせるような満月が浮かんでいた！今日は『レッドムーン』の日……！？

約１００年周期で訪れるその日は昔から不吉とされる。まさか、天界でもう一度この月を拝む事になろうとは……

「シェルフィアー、あの月は大丈夫よー！何の害も無いわー」

其処でリバレスがシェルフィアを安心させる為に答える。確かにその通りだ。

私達は、紅い月を背に『封印の間』の扉を開けた……！『封印の間』は全てがオリハルコンで作られ、外観は小さな塔だが内部は空間そのものが湾曲しており無限の広さを持つ……これは、私のエファロードとしての記憶が知っている事だ。

「ルナー！危ない！」

私が先頭で『間』に入った瞬間、リバレスが叫んだ！私は咄嗟に体を光膜で覆う……！

「ガキィィィィィィィ……ン！」

神術で出来た巨大な槍が光膜に直撃する！だが、槍は力負けし消え去った！

「くくく……ついにこの日が来ましたねぇ！私の人生を砕いた愚者に対し、破滅をもたらす時がぁぁぁ！」

この男……！私はよく知っている。かつて、天界を誤った方向に導いていた神官……ハーツ！

「元神官ハーツ……私はお前に用は無い。此処を通してくれないか？」

今の私の力は天界でハーツと戦った時とは比べ物にならない。この神官と戦っても勝負は見えている。私は早く神の下へ行かなければならないのだ！

「私は神官ハーツ様だぁぁ！逆らう者は魂を砕かれるがいいいいい！」

彼に私の話は聞こえていない。どうやら、精神の一部が破綻しているようだ……哀れな天使……

「リバレス！シェルフィア！奴の神術は強力だ！だが、油断せずに、『拘束』と『魂砕断』さえ気をつければ大丈夫だ！」

私の叫びと共に、私達３人はハーツを取り囲むように三角形を作る！

「全て消えるがいいいいいい！」

ハーツが絶叫する！その瞬間にハーツの体から光と熱が放射された！だが私達は、神術や氷でそれを防ぐ！

「小癪な……魂を砕かれてしまいなさいいいいい！」

ハーツが光と熱を発した直後、更に追い討ちをかけるように『魂砕断』を同時に複数発動させる！

「昔より力と殺意に満ちているな……動きを止めてやる！」

私は、魂砕断を防ぎながら奴に向かって『不動』を発動させた！捕らえれば奴はもう動けない！だが……！

「甘いですねぇぇぇ！動きを止めるならこうしないと！」

ハーツは不動を軽く避けた後に、リバレスに向かって『拘束』の神術を数百発動させた！『拘束』は『不動』より力は弱いが……

数百の『拘束』は避けきれない！

「リバレス！」

「リバレスさんっ！」

私とシェルフィアが同時にリバレスを助けようとする！

「あんまりわたしを……甘くみないでよねっ！私の最大神術……『重圧環』！」

重圧環！？それは究極神術に属する神術……破壊力は無いが……この環の中にあるもの全てに十倍もの重力が加算されるのだ！

「ぐぅぅぅぅぅっ……！体が重いいいいい！」

ハーツの動きは緩慢になり……『拘束』の神術まで重力に負け消失する！

「シェルフィア！今よ！」

リバレスが大声で叫ぶ！リバレスとシェルフィアは、７０日間のトレーニングの中で多くコンビネーショントレーニングを行っていた！

「わかりました！行きますよ！」

二人が何をするのかは解らない。だが私は、いつでも動ける準備だけはしておく！

「究極神術『不動』！」
シェルフィアが叫んだ！そうか、重圧で動きを鈍らせて『不動』で動きを止めるのか！
「うがぁぁぁぁぁぁぁ！」
ハーツはその場で固まって倒れる！今が好機！
「ルナー！後はお願い！」
リバレスが『重圧環』を解除し、動けないハーツを指差した！
「暫く眠っているんだな！」
私はそう言って、ハーツを雷の渦に飲み込ませた……！
「私は……神官ハーツ様だぁぁぁぁぁぁぁ！」
とっくに意識を失ってもいい筈なのに、ハーツは叫び続ける！
「ハーツ！負けを認めるんだ！そうでなければ死ぬぞ……！私はお前を殺したくない！」
私は電撃を続けながらハーツに叫ぶ……！もう聞こえていないかもしれないが……
「私は……誰にも負けはしなぁぁぁぁいいいいいいいい！」
「カッ……！」
「ドォォォォォォォォ……ン！」
一瞬の出来事だった。一体何が起こった！？目の眩む閃光と爆音……！
「キャァァァァァァ……！」
シェルフィアとリバレスの叫び……！
「ぐっ……！」
私はこの時に初めて気付いた。自分が血塗れになっている事に……！
ハーツは……自分の命と引き換えに……禁断神術『爆』を使ったのだ！
私の傷はそんなに深くない。全身を軽く火傷した程度だ。だが……！
「……シェルフィア！リバレス！」
二人は倒れていた！火傷ではなく、爆風の衝撃で壁に叩きつけられたようだ……私はすぐさま治癒を行う！
「……ハーツ……奴は最後まで救えない奴だったな」
私は、ハーツの杖の破片を見てそう呟いた。それから、1時間ばかり二人の治癒に力を注いだ……！
二人とも気を失い、骨折もひどい……どうしても完全回復させるにはそれぐらいの時間が必要だった。
そうして、二人の治療が終わった時……私の体を強い疲労が襲い、私は眠りへと落ちていった。

この先に待ちうけるのは……何だろう？平和だろうか……戦争だろうか……？
唯一つ確かなのは……私が次に出会うのは『神』であり……私と兄さんの『父』なのだ。
其処で……全てが始まり……全てが終わる。

例え、この先に待つ運命が過酷だったとしても私は立ち向かう……『永遠の心』を持って……
全ては……未来の為に……
君と創る未来の為に……

そして……今を懸命に生きている者の為に……

第九節　この星に生まれて

「……ナ……ルナ」
遠くの方で声が聞こえた。私はゆっくりと目を開く……すると……！
「良かった！気付きましたね！」
シェルフィア……、だけじゃない。リバレス、セルファス、ノレッジ、ジュディアが私を見ている！
「そうか……皆で私を治癒してくれたんだな」

私は皆の目を見た。すると、全員が頷く。
「ルナ、お前は生命力に溢れてるから完全に治癒させるには全員の力が必要だったんだぜ！」
其処でセルファスが私の肩を叩く……私は嬉しかった。さっきまで敵だった３人が私の味方になってくれた事が……
「すまないな……セルファス、ノレッジ、そしてジュディア。私達は、今から神の下へ向かう」
私は立ち上がった。体は……完治している。私は３人に微笑んだ。
「ルナリート君……僕達は、この先で何が起ころうとも君の選択に従う事にしたんです。だって、君はエファロード……そして友達だから！」
ノレッジは強い決意を込めた目で私にそう言った。
「ありがとう……何があっても、お前達の事は信じるよ」
私は手を差し伸べる。その手を３人は固く握った。
「ルナ……、本当にごめんなさいね。私が昔あなたにした事……苦しみを負わせた分……それ以上にあなた達を助けるから……！」
ジュディアはまだ瞳に涙を浮かべてそう言った。彼女は……私の最初の友人……憎しみもあったけど、今はまた友と呼べるだろう。だが……
「あぁ。この戦いが終われば……皆元通りの友達だ。行ってくる！」
友情を再開させるのは、戦いが終わってからだ。私とシェルフィアとリバレスは、上層に続く階段へと歩を進めた。
「良かったわねー！」
リバレスが嬉しそうに私の周りを飛び回る。そうだ……計画を中止させれば……無益な争いを終わらせれば、輝かしい未来が待っている！
私達は、階段を１段飛ばしで駆け上がった！

「此処は……？」
階段を登りきって見た風景、それにシェルフィアは思わず声を漏らした。
「すごい空間ねー……！」
リバレスも思わず大声を出す。それもその筈だ……これは建物の中じゃない！？
「これがエファロードの力だ」
さっきハーツと戦ったフロア、つまり第一階層は何の変哲もない。只のオリハルコンと大理石で出来たフロア。
しかし、この第二階層は一面が『森』だった。『森』の中では小鳥が囀り、小川すら流れている。
「どうやって先に進めばいいんですか？」
シェルフィアが不思議そうに首を傾げる。私の中にはその答えがあった。
「石版を探すんだ。それを読めば自動的に上層に転送される筈だ」
私はそう言った。石版の内容は知らない。いや、覚えていないと言った方が正しいか……
「それじゃーそれを探しましょー！」
リバレスが元気良く手を上げてそう言った。これだけの規模……空から探さなければ無理だろう。
「何処まで見ても森だけだな」
空から森を見下ろすが、生い茂る木々以外には何も見えない。遥か遠く数十ｋｍ先すらも同じ風景だった。
「ルナさん……、この森は変ですよ。きっと、本物の森じゃありません」
其処でシェルフィアがそんな一言を呟いた。鋭い勘だ……！
「シェルフィア、いい勘だ。私の中の記憶がまた少し蘇ったよ……この森は神術で作られた幻影……それを消さなくては先は見えない！」
私は精神力を集中した。……禁断神術を発動させる為に！
「『滅』！」
直径５０ｍ程の無の空間を放出する！これで、幻影そのものが消滅する筈だ！
「シュウウウウウウ……！」
森が消えていく……！すると、大理石の床と共に石版が現れた！この森は……幻影をループさせる事で大きく見せていたに過ぎなかったのだ。実際の規模は数百ｍ四方しかない。

「流石ルナー！とんでもない力ねー！」
私の神術の規模を見て、リバレスが驚き褒める。恐ろしいと言われないだけ有難い。
「さぁ、石版を読もうか」
地面に降りたち私は石版に目を通した。この文字は……最古の文字だ。エファロード以外に読める者はいないだろう。
『この星の名は『シェファ』……『ロード』と『サタン』によって統治される。『ロード』は、S・U・Nの光から……『サタン』は海の中にある闇物質からエネルギーを合成する。両者の合成するエネルギーは膨大で……『魂』や『ESG』などを作る事によって消費しなければならない。そうしなければ、『ロード』も『サタン』も過剰なエネルギー負荷に耐え切れずに存在が消える』
この石版に書いてあった事は既に知っていた事だが、この先に書かれてある事は……何かとてつもない事のような気がした。
「あっ！」
リバレスが異変を感じて叫んだ瞬間、私達は上層へと転送させられた！
「この空間もまた……凝った作りだな」
一寸先も見えぬ程の闇……その中で、レッドムーンだけが地上を照らしていたのだ。
「本当に……何も見えないですね」
シェルフィアの声が背後から聞こえる。その姿すらも見えない程の闇なのだ。
「ルナー、此処から先に進むには……！？」
肩に乗っているリバレスの姿も見えない。私は……先へ進む手段を考える。
「解らないが、とりあえず『光』を出そう」
私は意識を集中し、空間に『神光』を放った！だが……！？
「微かに明るくなっただけねー」
本来ならば眩い光で何も見えなくなる程の光なのだが、此処ではマッチ一つの明るさにしかならなかった。
「此処から先には……エファロードしか進めないとしたら……こうするしかないだろう！」
私はシェルフィア、リバレスから距離を置き全ての力を解放した！
「……始まりの神術……『光』！」
それが発動した瞬間……！闇は消え去り、真っ白な空間の中に石版が現れた！
「あっ！また文字が書かれてますよ！」
シェルフィアが嬉しそうに石版に駆け寄る。私もすぐに後を追った。
『『ロード』、『サタン』の寿命は個人差があるが３３万年以上であり……『死』の直前に『子』を残す……『子』は、『エファロード』、『エファサタン』の名を襲名する。『子』は『親』の記憶、力のほぼ全てを模写されて生まれる。『子』は序々に力を解放していく……その力の覚醒は……５段階存在する。最終段階に到達した時……全てが見える』
そんな……私の力は更にもう１段階覚醒するというのか……？そして、その時に全てが見える！？
私は得体の知れない恐怖を覚えた。一体私の存在は何だと言うのだ！？
そんな事をゆっくり考える間も無く、私達は更に上層へと転送された！
「眩しい……！」
このフロアは光だけで構成されている。真っ白で……自分の体すら見えない！
「此処は……私の出番ですね」
シェルフィアの声が聞こえる。一体どうするつもりだ……！？
「おい……まさか！」
シェルフィアに力が集る。これは、魔術のエネルギー……！？
「ルナさんっ！リバレスさん！力を貸してください！私一人では発動させられませんっ！」
私とリバレスは、シェルフィアの手を握り……精神エネルギーを注ぎこんだ！

「……終わりの魔術……『闇海』……！」
シェルフィアの体が震える！これは獄王しか使えない魔術……！幾らシェルフィアでも使える筈がない！
「ドクンッ」
私の心臓が大きく鳴り響く……その瞬間……私の精神エネルギーが大きく吸い取られる！
「キャァァァァァァァー――……！」
リバレスが叫ぶ……！きっと私と同じように力を吸い取られたのだろう。彼女はその場に倒れた！
「シェルフィア！止めろ！君が死んでしまう！」
私はエネルギーを送りながらも叫んだ！
「……ダメです！こうしないと先に進めないでしょう……！？私を信じて下さい！」
シェルフィアが叫ぶ！彼女の力が尽きかけたその時……！
「ゴォォォォォォ……！」
小規模だが……確かに『闇海』が発動した！辺りの光が消えていく……！
「シェルフィア！」
私はシェルフィアを抱き締めた！強く……強く……！
「ほら……道が出来ましたよ」
シェルフィアはぐったりと目を閉じた……精神エネルギーを使い果たしたのだ。
「……無茶な事ばっかりするなよ！」
私はシェルフィアを思う余りに……涙を流した。一歩間違えれば死んでいた所だ……！
「ふふ……大丈夫ですよ。でも、リバレスさんと一緒に少し休みますね」
シェルフィアはそう言って私の腕の中で眠りに落ちた……とても安心したような笑顔と共に……
「シェルフィア……、リバレス」
私は、荷物袋の中から毛布を出して二人を優しく寝かしつけた……二人は当分目覚めないだろうな……
恐らく……このフロアの石版を読めば……次は神の場所だろう。そんな直感があった。何故なら、さっきはエファロードのみが……
そして此処ではエファサタンのみが使える術を使わなければならなかったからだ。これ程厳重な守り……恐らく、神に会う為には獄王の力も必要だったのだろう。偶然シェルフィアが獄王の力の一部を使う事が出来たから先へ進む事が出来るが……
贖罪の塔に入ってから此処まで殆ど休む事もなく突き進んできた。だが……此処で私は兄さんの事が心配になった。

その頃……

ハルメスは、ある遺跡の階段を下っていた。全身……特に胸の出血で足が言う事を聞かない。
「……はぁ……はぁ……ルナ達はうまくやっているかな……？……俺はもう少し頑張るぜ」
彼の歩いた後には多量の血痕が残っている。出血量はとうに致死量を超えていた。唯……彼を動かしていたのは……強い心……
心臓も損傷している。体内にうまく血液が運搬されない。それでも彼は歩いていた。
「……ティファニィ……あと少しだ」
彼は闇の底へ向かう……ティファニィへの愛と……ルナリート達……そして人間への思いだけが彼を前へと進めているのだ。

～生まれた意味と永遠の心～
「ルナさん」
「ルナー」
シェルフィアとリバレスは時を同じくして目覚めた。眠りについてから6時間程が経過していた。

「……二人ともおはよう。大丈夫か？」
私はまだまだ眠り足り無そうな二人に声をかける。
「はっ……私達ずっと眠っていたんですか！？」
シェルフィアが飛び起きる。どうやら自分でどれだけ眠っていたのかも解らないらしい。
「心配いらないよ。そんなに時間は経っていないから」
私は優しく微笑んだ。それで二人とも安心したようだ。
「うーん……そろそろ行かなくちゃねー！」
リバレスも元気そうだ。次は恐らく神の待つフロア……
「この石版を読めば……戦いが始まり……後戻りは出来ないかもしれない。二人は此処で休んでいてもいい……どうする？」
私は念の為二人にそう訊いた。答は解っていたのだが……
「行きましょう！あなたと共に何処までも！」
「私もルナと最後まで一緒よー！」
訊いた私が馬鹿だったな。私は石版に近付く……
「ありがとう……シェルフィア、リバレス。私が此処までやってこれたのは二人のお陰だよ。この先に何が待っているかは解らない。でも私は二人を誇りに思う。これからも宜しく頼めるかな？」
私は少し目が潤んだ。命を懸けてついてきてくれる二人に深く感動したからだ。
「私は一度死んでもあなたの下に帰ってきたんです。ずっと一緒にいる為に！だから、未来の為に戦いましょう！」
シェルフィアは私の手を握り締めてそう言った。曇り一つ無い強い決意の瞳……
「あぁ！幸せな未来の為にな！ありがとう……シェルフィア！」
私も彼女の手を握り返す。すると、シェルフィアは何よりも嬉しそうな顔をした。そして、リバレスが話し出す。
「ルナは私の親同然よー……例え……この戦いで私がどうなっても……ずっと一緒だからねー！」
優しい微笑みの中に何処か悲しみが見えた。一体リバレスは何を考えて……！？
「リバレス……！お前は……！？」
私が其処まで言いかけた時……！
「何でもないわよー！……早く石版を読みましょー！」
確かにリバレスの小さな瞳から涙が流れていた。一体何を隠しているんだろう？だが、彼女が石版に向かった以上私は訊けなかった。

『『エファロード』の最終段階は……『神の継承』……それは、『ロード』と『サタン』の立会いにより行われる。
全ての『生命』は……この先で始まり……そして終わる。それだけが……果て無き歴史を紡いで行く……
定められし歴史の運命は誰にも逃れる事は出来ない。例え……『神』であろうとも』

やはり、このフロアを越えるのには『獄王』の力が必要だった。しかし、それよりも……その後の語句が私は気に入らない。
まるで、運命からは逃れられずに……生命は終わると書かれていたからだ。私は……永遠の心を信じ……死すらも恐れはしない。
人間を滅ぼす計画が運命であるというのなら、私はそれを変えてみせる！私は神剣を握り締めた。
しかし……シェルフィアとリバレスは震えていた。恐いのだろう。私は……シェルフィアを抱き寄せて、リバレスを肩の上に乗せた。
「……行こう！この星に生まれた事を幸せと言えるように！」
私がそう叫んだ瞬間……！私達の体は『強力なオーラ』に包まれて転送されていく……
この『力』は、かつて私が天界から人間界に転送された時と同じ力……『神』の力だ……！

私達は体を寄せ合った！意識を失わないように……！すると……やがて、景色が変わった！

「ヒュオォォォォォォォォ」

転送された先……此処は、空の上……！？だが、落下はしない。重力が無視された空間だ……上には眩いＳ．Ｕ．Ｎが輝き……辺りは真っ青な空と強い風……そして、眼下には厚い雲が広がっている。

その空間にポツンと……背を向けた椅子が一つ浮かんでいた。機械のようなもので出来た椅子が……！

「……待っていたぞ……ルナリートよ」

椅子が振り返る！？其処に座っていた者は……！

「ルナにそっくり」

リバレスが驚きの余り声を漏らす……それもその筈だ……あれは私が老いた時に見せるであろう姿そのものだったからだ！

「貴方が……シェドロット・ジ・エファロード……神ですか……！？」

私は目の前にいる大き過ぎる存在に話しかけた……こんなにも離れているのに、心臓が止まりそうな程の威圧感……！

「……その通りだ。ルナリート・ジ・エファロードよ……一体お前は何の為に此処に来たのだ？」

神は椅子に座ったまま……私達に近付いてきた。逃げる事など出来ない。体が動かないのだ！

「……私達は貴方に申し上げたい事があり……此処に参りました！」

気丈にもシェルフィアが声も絶え絶えに叫ぶ……！だが……！

「我は……人間の言葉に耳を傾ける気などない。天翼獣と共に黙っておるがいい……！」

神がゆっくりとそう話した瞬間に、二人の体に『不動』がかけられて空間の遠くに弾かれた！傷を負う事は無いだろうが……

「キャァァァァァァァァー――……！」

二人の叫びが響く……！私は有無を言わさないその態度に怒りさえ覚えた！

「何をするのです！？……私達が此処に来た理由、それはたった一つ『新生・中界計画』を中止して貰う為です！」

私は神に近付き、出来る限りの大声で叫んだ！私の鼓動が際限なく早くなる！

「不可能だ。計画は我の責務……獄界との和平策はこれしかない」

神は低い……そして荘厳な声で、表情一つ変える事なく私に言い放った！

「……何故なのですか！？人間界は……天界の存続の為に生まれた！そして……人間達は皆厳しい境遇を苦にせず、私達と変わらない魂を持って懸命に生きている！天界が生きる代償として生まれた人間達を……また天界の都合で滅ぼすと言うのですか！？」

私は更に神を糾弾する。こんな事が許されてはいけないんだ！

「お前が其処まで人間に毒されていたとはな。だが、人間という生物はかつての神が創り出した物。それをどうするかは、我の判断に任されていい筈のものなのだ。お前が口出しすべき事ではない」

尚も神は顔色一つ変えない。何を言っても効果が無いというのか！？

「……私は人間に毒されたのではない！唯……正しい判断をしているだけです！……人間界が獄界との和平で邪魔だというのなら、もう一つ別に『中界』を創ればいい！それを……再び天界と獄界との『緩衝帯』にすればいいのではないですか！？」

私がそう叫んだ瞬間、神の眉がピクッと動いた！

「……エファロードでありながら……人間に心を奪われたお前に、我の何が解るというのだ！？……我の考えは絶対であり不可侵なのだ。もうこれ以上……愚かな話に付き合うつもりはない！」

初めて神が見せる感情的な姿……！『中界』の創造がそんなに気に障ったのだろうか？

「ルナさんっ！」

「ルナー！」

其処で『不動』を自力で解除した二人が戻ってくる！

「私は……自分の信じる道を進む！……後悔しない為に……！そして……未来の為に……！
例えこの道が……『神』……いや『父』である貴方に反するものであったとしても！」
私はそう叫び、神剣を構えた！シェルフィア、リバレスも私に続く！
「私の道はルナさんと共に……！幸せを創り……理不尽な悲しみを無くす為に！」
「私は生まれた時からルナに育てられた天翼獣……凄く感謝してる。だからこの命尽きるまで戦うわー！」
二人の叫びが神に届く……！神は椅子からゆっくりと立ち上がった！すると……この空間が激しく揺れ始める！
神の座る椅子……あれは、天界の維持の為のエネルギーを注ぐ道具……！あれから立ち上がる事は神が力を束縛されないという事！
空間の揺れと共にさっきまでの晴天の景色が消え……嵐に変わった！大雨と雷光と強風が吹き荒れる！
「……我は……絶対神……シェドロットとして……ルナリート、お前の道を砕かねばならない！そして、父として全力でお前を倒す！
来るがいい……怒り……悲しみ……苦しみ……喜び……憎しみ……慈しみ……愛……信念……お前達の全てを懸けて！」
神は本気だ……！今の私の数十倍……！かけ離れた力……でも、今戦わずにいつ戦うというんだ！？
「……シェルフィア……、リバレス……、行くぞ！」
私が恐れを打ち消して叫ぶ！
「はいっ！」
「行くわよー！」
二人にも迷いは無い！……未来を賭けた最後の戦いが始まる！
「禁断神術……『滅』！」
私は息をつかせる間も無く『滅』を放つ！ありったけの力を込めた滅だ！嵐が無の空間に飲まれる！
「なかなかの力だ」
神は『滅』を避けようともしない！？数百mに及ぶであろう最大規模の『滅』だというのに……！
「シュウウウウウウ……！」
『滅』が神に直撃する！跡形も無く消える筈だが……！？
「無駄だ。我の体にはどんな神術も届かぬ……！」
神の体が……光膜……いや、『滅』そのもので覆われている！これではどんな神術も掻き消される！だが……！
「禁じられし魔術……『闇』！」
「連続……『滅炎』！」
一瞬でシェルフィアの魔術とリバレスの炎が炸裂する！
「ドゴォォォォォォォーー……ン！」
神は激しい爆炎に包まれる！しかし……！神の体には傷一つ無い！
「……まさか人間の娘が心を消さずに転生した上に魔術を使うとはな。流石はエファロードが愛する女だな」
何故知っている！？まさか、神は全てを知っている！？
「何故それを……！？」
私は驚き叫んだ！神の口調からは知っているとしか思えない！
「我が知らぬ事は何も無い。我は、この空間にいて全てを見る事が出来るのだ」
神は相変わらず表情すら変えずにそう言った！
「それなら……！貴方は人間達をよく知っている筈でしょう！？なのに、何故滅ぼすのです！？」
私は叫んだ！神は、人間達の懸命な姿を見て何も思わないというのか！？
「我は……神としての責務を遂行するのみ。其処に感情など必要ではない」
神はそう断言した！私は、そんな神の姿に憤りを感じ……剣を握り締め向かっていく！

「これが……星を司る力だ」
神がそう呟いた瞬間……！突然閃光が私達を襲う……！
「カッ……！」
何という高速な発動……！防ぎきれない！
「うわぁぁぁぁぁぁ……！」
「キャァァァァァァ……！」
私達は衝撃に思わず叫びを上げた……！一体……！？
「これが……本来の高等神術『光刃』だ」
神がそう言っているのが聞こえた。私は自分の傷を確かめる！？
「ポタッ……ポタッ」
刃によって……体中が切り刻まれている！致命傷では無いが……出血が多い……！それより……！
「シェルフィア、リバレス！」
二人は……何とか無事だ！私よりも距離が離れていた分、ギリギリでシェルフィアが『暗幕』を発動させたようだ……だが！？
「とんでもない威力ですね。私の魔術で防ぎきれるレベルじゃない」
暗幕は損傷していて……シェルフィアは腕が抉れる程の切り傷を負っていた！
「シェルフィア！」
私はすぐさま彼女の下に飛んで行く！勿論治療の為だ……！
「治癒！」
私は全力で治癒を施す……！リバレスも出血が激しい……！私は、自分自身を含めて全員の治癒の為に精神力を注ぎこむ！
「戦いの最中に……我に背を向けるなど、愚かであると知るがいい」
治療に専念した瞬間、神は私の背後にいた！
「邪魔するな！」
私は振り返りざまに剣を振りぬいた！その剣は……何故かとてつもなく重い一撃を放つ！
「グッ……！」
何と、神を弾き飛ばしたのだ！『滅』の守りすら破って……！
「二人とも、もう大丈夫だ……！神の力は強大だ……私にしか相手は出来ないだろう。少し離れていてくれないか？」
私は治癒が終わってそう言った。私は……神を相手にしながら二人を守りきる自信が無い！
「いやですよ！私はあなたと共に戦います！」
シェルフィアが潤んだ目で叫ぶ……！その思いを止める事は出来ないようだ……
「わたしもよー！シェルフィアー……『あれ』で行きましょー！」
リバレスもまた同じ……だが、『あれ』とは？
「『翼』に変化よ……！わたしがシェルフィアの翼になる！」
リバレスは叫び、シェルフィアの背中に乗った！そして、純白の翼に変化する！
「これで足手纏いにはなりません！行きましょう！」
シェルフィアが私の目に訴えかけた。そうだ……私が皆を信じずにどうする？
「ああ、行こう！」
私とシェルフィアは飛び立つ！だが……神は、次の攻撃態勢に入っていた！
「我に手傷を負わせるとはな……ならばこちらも力を出そうではないか」
神が神術を発動させる為に必要な時間は十分の一秒足らずだ……！だが、私には次の手が読めた！
「シェルフィア！『滅』が来る！回避だ……！」
私は叫んだ！その瞬間、途方も無い規模の『滅』が発動した！
「上へ！」
私とシェルフィアは出来る限り空高くに飛び上がった！見下ろすと……眼下の景色が『滅』に飲み込まれていった！
「ザァァァァァァァァァァ」
雨の音だけが聞こえる。神の姿は……無い！？

「此処だ」
背後で声が……！？
「ガキィィィィィーー……ン！」
殺気を感じたので剣っを後ろに振りぬいた瞬間……何か固いものに激突した！
「何だ、その剣は……先程のは奇跡だったのか？」
神は……素手で私の神剣を防いでいたのだ！確かに……今の一撃はさっきよりも遥かに軽いものだった！
「くっ！私は貴方には負けない！」
私は剣に力を込めた！微動だにしない神に激しい刃の雨を浴びせた！
「キキキキキキキィィィィィン……！」
「カキィィィィィーーン！」
「キィィィ……ン！」
だが、神の体は固く……私の手が痺れるだけだ……！
「お前は……神剣の使い方を知らぬようだな。神剣はこうして使うのだ！」
神がそう言った直後……！長さが２ｍはあるだろうか……光り輝く大剣が雷光の中から現れた！
「『滅』……剣！」
神が剣を握りそう言葉を発した瞬間、私は背筋が凍るような感じがしたのでシェルフィアを抱えて遠くに転送で逃げた……！
「ゴォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ……！」
神が剣を振りぬいた先……数ｋｍ先まで空間が抉れて消滅していた！一歩間違えれば死んでいた！
「神剣は……神術のエネルギーを吸収して発する事が出来るのか」
私は咄嗟にそう判断した。さっき神を弾いた時は、治癒を使っていた。その時のエネルギーを吸収していたのだろう。
「ルナさんっ！危ない！」
シェルフィアの声……！？
「ズシャッ……！」
「キャァァァァァァァァァ……！」
振り向いた瞬間……私を庇ったシェルフィアが斬られた！肩から腹部にかけて容赦無く……！
「貴様ぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
神をシェルフィアから遠ざける為、渾身の一撃を放つ！だが、神はそれを転送で避けた……！
シェルフィアは……！？
「シェルフィアー！傷は……深い！わたしが治癒するから……ルナは神を食い止めて！」
リバレスが瞬時に元の姿に戻り、治癒を始めた！何という事を……！
「よくもシェルフィアを……！相手が神であろうが関係ない！彼女を傷付ける者は殺す！」
私の意識が……『俺』へと変化する！既に俺はエファロード４段階であるというのに更なる力が溢れてきた！
「始まりの神術『光』……を剣に乗せる！」
俺は、神剣に最強の神術を注ぎこんだ！そのエネルギーで、雨は蒸発し……雲は消され……雷が吸い込まれた！
「そうだ……それでいい。お前が全力で来る以上……我もそれを力の限りで迎え撃つ！」
神も神剣を構える。注ぎこんでいるのは同じく『光』……！俺と神の間にはどんな物質も存在しえないだろう！
「キィィィィィィィィィィィィィィィ……！」
互いの剣が眩い光に包まれる！激しい嵐が消え、この空間は『光』一色だ……！
「行くぞ！」
俺達の声が重なった！勝負は一瞬……！
「カッ……！」
光が走る！
「ゴゴゴゴゴォォォォォォォォォォォォォォォ……！」

エネルギーどうしがぶつかり合う……！
「ドゴォォォォォォォーー……ン！」
そして膨らんだ力が炸裂した！直径数ｋｍに渡って、波動が全てを焼き尽くす……！
「余程……あの娘が大事らしいな。愛を命題にしたエファロードは此処まで強くなれるのか……？」
神は立っている！左腕が潰れて、上半身は激しい火傷を負っているのにも関わらず……！
「そうだ……俺は彼女の為ならば何処までも強くなれる。父よ……俺は貴方を超える！」
俺はそう叫んでいたが、俺の傷もかなり深かった。右腕は半分融解して剣を掴む事は出来ない。左目も光で焼かれた！
「ルナー！大丈夫なのー！？シェルフィアはもう大丈夫だから！」
遠くの方でリバレスの声が聞こえた。そうか、シェルフィアは無事か！少し安心した。
「（……ルナさんっ！私達の力の全てを送ります！）」
その時、シェルフィアの意識が転送されてきた！途端に体に力が漲る！左手なら、剣を握れる！
「（さぁ、ルナリート様……これが最後の一振りとなりましょう……我が魂、貴方の為に！）」
神剣となった『ルナ草』の声が響く……そうだ、幸せな事に俺を信じてくれる人がいる！
愛するシェルフィア……、ずっと一緒のリバレス……、そして、セルファス達……神剣……！
「（シェルフィア、帰ったら結婚式を挙げような！……リバレス！俺の世話をまた焼いてくれよ……！）」
俺は、シェルフィアとリバレスに意識を転送する！絶対に負けられない！
「（ルナさんっ！必ず……約束ですよ！）」
「（ルナー！世話なら幾らでも焼いてあげるから！）」
俺の心は決まった。神剣に再び、『光』を込める！さっきよりも、もっともっと念を込めて……！
「これが時の変わり目……我が息子よ……全てを懸けて……行くぞ！」
神も剣を片手で持ち……『光』を注ぎこむ……！さっきとは比べ物にならない光を放ちながら……！
「キュィィィィィィィー……！」
光り輝く二つの神剣……嵐は消え……いつの間にか、辺りは夕焼け空に変わっていた！
眼下に広がる、茜色の雲と沈む直前のＳ．Ｕ．Ｎ……！この剣が放たれた時……日の出を見るのは俺達か？……それとも神か？
「うぉぉぉ

ている！
「ふ……これが、『神の継承』だ……我の全ての力はお前に託した」
エファロードの最終段階……それが『神の継承』……！何故……父が俺……いや私にそれを……！？
「私は……貴方の計画を阻止する為に来ました。それなのに何故……！？」
私は息も絶え絶えの父を強く抱き締める！この人は神……でも、たった一人の父親なんだ！
「我は……この星に二人の子を遺した。我にはもう寿命が迫っていたのだ」
目をうっすらと開けて父は微笑む……私は堪らなく悲しくなり……涙が頬を伝う……
「父さん……！死んじゃダメだ！」
私はすぐに治癒の神術を施す……だが……
「無駄だ……『聖命』を行い、『神の継承』を行った今……我を救う手立ては無い。お前達は……『愛』を命題にした子供達……此処まで強く成長するとはな……ハルメスもまた……己の信じる道を進んでいった。だが、もう我もお前も奴に会う事は出来無い」
父さんが意味深な言葉を言う……すると、空に兄さんの姿が浮かび上がった！これは……映像の転送……！
「ふ……親父も……最後に俺の姿が見たかったのかい……？」
兄さんはこちらに気付いているようだ……あんなにも血を流して……！それに……この場所は……！
「ルナ……、此処は輝水晶の遺跡だ……悪いな……約束は守れないぜ……後の事は宜しく頼んだ。獄界への道は……俺の魂で封鎖させる。シェルフィアといつまでも仲良くやれよ」
兄さんが……そんな馬鹿な！？帰って祝杯を上げるって約束したじゃないか！？
「兄さん！止めろ！止めてくれ！」
私は喉が張り裂けるような声を上げる！届いてくれ！
「ルナ……、そんな悲しい顔をするなよ……見えなくても俺には解ってるんだぜ……俺の魂は……この装置の作動に使うけど……消える訳じゃない。俺はティファニィと一緒なんだ。心配するなよ……唯、会えなくなるだけだ……
これが……俺の生まれた意味だからな……ティファニィを愛し……獄界を閉ざす事が」
兄さんはもう目も見えていないのか……！？私は映像の場所まで全速力で飛んだ！だが……！

「またな」

「兄さん……！兄さぁぁぁ

るんだ！？」
　私は溢れそうになる涙を堪えながら叫んだ！
「……それは……お前が、我の大切な息子であり……ハルメスが愛した弟だからだ。お前にも解るだろう？自分以外の誰かを大切に思う心……『永遠の心』を……？そして……これから先……どうなるか解るか……？」
　私は父の手を握った！段々……冷たくなってきている！
「……心はわかります！でも、でも……！」
　私は首を振りながら声を上げる。すると、父さんが私の頭を撫でた……！
「心配するな……ルナリート……我々の事は心の片隅で覚えてくれているだけでいい……その心は永遠だからな……
そして……この後……どうするかはお前が決めるんだ。あの椅子に座るかどうかを」
　父が指差した先の椅子……あれは、天界の維持にエネルギーを注ぐ椅子……
「……今、『神の継承』を受けて……『記憶』が全て目覚めました。私は……天界の統治者……
でも、あの椅子はもう必要ありません。天界は……今日を持って人間界と同化します」
　私はそう言い放った。今までの神は全て、天界を維持し続けてきた。しかし……私には天界の必要性が見当たらない。天使も人間も……
同じ魂を持っているのだから……！
「そうか……運命を変えるのだな。それも良かろう。今日が歴史の変わり目となる。……ＥＳＧを摂取出来ない天使は、やがて力を失い人間と同化していく事だろう。人間だけが創り出す世界……だが、例外はある。お前と……シェルフィアだけは力を失う事は無い。お前達が……人間界を支えていくんだ。そろそろ……時間だ……我もハルメスの下へ」
　其処で……父さんの体は……砂のように消えていく……
「必ず……良い世界を創ります！」
　最後に父さんは微笑んだ。その顔は神としての顔ではなく……子を持つ一人の父親の顔だった。
「ルナさん……、？」
　シェルフィアが私の手を握り締める。私は、それに優しく微笑む。
「……これから大変になるだろうけど……シェルフィア、君がいれば大丈夫だから……唯……全ての人々の幸せの為に……いや、
何より私達の幸せの為に生きよう……！帰ったら……式を挙げような」
　私がそう言うと、シェルフィアは嬉しそうに私に抱きついた。私はその頭を優しく撫でる。
「リバレス、お前もこれからずっと宜しく頼むよ」
　そう言って私はリバレスの方を見た。すると……リバレスはとても穏やかな表情で笑っていた。
「良かったわねー……ルナ、シェルフィア」
　何処か遠い目をしている。私は理由がわからず問いかける。
「急にそんな顔をしてどうしたんだ？」
　今までずっと一緒にいたけど、こんなリバレスを見るのは初めてだった。
「……今までありがとう……ルナが主人で良かった。そして、大切な人が出来たからわたしは笑ってサヨナラ出来る」
　さよなら！？一体何を言ってるんだ！
「何を言ってるんだ！？変な冗談はよせよ！」
　私はリバレスを捕まえようと手を伸ばすが……飛び回って逃げる。
「……わたしは『天翼獣』……天界で生まれ……天界と共に消えるの……わたしはその事を知ってたわ。
ハルメスさんと約束したの……ルナとシェルフィアを幸せにしようって」
　戦いが始まる前から二人は……犠牲になるつもりで……！だからあんなに悲しそうで……！
「リバレスさん！行かないで！」
　シェルフィアが叫ぶ……！突然の別れの話に取り乱す……
「私が……あの椅子に座ればお前は救われるんだろ？」
　私はそう言って、椅子に向かおうとする。だが！？
「絶対にダメ！あれに座ったら、ルナはこの場所で一生一人ぼっち……そんな事はわたしが許さない！」

リバレスはそう言って、滅炎で椅子を焼き払った。何という事を……！
「リバレス……、お前は……最高のパートナーなんだ。行くなよ……！」
私は……此処で涙を堪えきれなくなった。こいつが生まれた時から一緒なんだ。なのに！
「ルナー……、ありがとう……楽しかったわ。私はルナの事死んでも忘れない。だから、少しだけ肩の上に座ってもいい……？」
リバレスは尚も微笑みを絶やさずに私の事を見ていた。
「……あ……あぁ……お前の好きなだけ座ってるといいよ」
私がそう言うと、リバレスは嬉しそうに肩の上に座った。
「……わたしは此処が一番好きなのー……でも……今度生まれ変わる時は……人間がいいな」
それを言い終えた時……彼女の目にはうっすら涙が滲んでいた。
「リバレス！……さよならは無しだ……必ず……また会えるからな……！」
私が指で彼女の頭を押そうとした時だった。指が彼女の頭をすり抜けたのだ！
「……うん……それじゃー……起こしてくれるのを待ってるから……おやすみなさい」
リバレスは穏やかな顔をしていた。眠っている赤子のような安らかな顔だった。
「おやすみ」
やがて……私の肩が軽くなったのを感じた時……それが暫くの別れだと気付いた。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

私とシェルフィアは……暫く悲しみに暮れていたが……やがて立ち上がった。
「シェルフィア……、大切なものをたくさん失ったけど……私はずっと君を愛していくから。誰よりも幸せにならないと……皆に怒られるよ」
私はシェルフィアを優しく……そして強く包みこむ。周りはいつの間にか星が瞬く夜だった。
「はい……、私もずっとあなただけを愛していきます。フィーネだった時からの夢……これから叶えていきましょうね！」
私達は……星空の中で夢中になってキスをした。此処には私達以外に誰もいない。でも此処で、生涯一人で生きてきた父さんはきっと孤独だったんだろう。だから、愛の為に生きることが出来る私達を生んだ。私はそんな気がした。
……もし、私が此処で死ぬまでシェルフィアと二人だったとしても孤独など感じないと言い切れるからだ。

「あっ……ルナさん……、掌を開いて空を見上げてください」
シェルフィアが私に囁く……私は言われるままに空を見上げた……
「雪だな。もしかしたら……皆が降らせてくれたのかもしれない。帰ろうか……私達の故郷に！」
私はそう言ってシェルフィアを持ち上げた……まるで、ミルドの丘で再会した時のように……
「はいっ！……ルナさん……、大好きです！」
シェルフィアが私に飛びついてくる。もう何も心配するような事はないんだ。
「私もシェルフィアが大好きだよ。……ずっと『永遠の心』に皆の事も刻んで……一緒に生きて行こう！」

リバレス……、兄さん……、そして、父さんのお陰で今の私達はある。
皆が作ってくれた未来……大切にしなければならない。
何があっても私達は決して負けない。『永遠の心』が存在し続ける限り……
夢を持ち……それを信じて生きて行けば……強い想いがあれば必ず叶う日が訪れる。

人に『心』がある限り……私達の物語は終わらない

幻想小説ハートオブエタニティ

第一部 永遠の心

著作 焔火 紅

― 完 ―

エピローグ

心……それは、自分を強くするもの……そして時に脆くもある。人は、一人では孤独なもの……だから心を持ち、誰かと寄り添うのかもしれない。『永遠の心』、それを持つ事が出来た私は幸せだ。リバレス、兄さん、父さんと『心』が離れてから2年の歳月が流れた。
天界は人間界と同化し、天使達も力を失いつつある。現在、人間界は兄さんに代わって私が治めている。
「皇帝、ミルドを治めているセルファス様とジュディア様がお見えになっていますが、いかがいたしましょう？」
私はフィグリルで皇帝となった。セルファス達には各地の街を守ってもらっている。今、私に意見を求めているのは一人の人間の兵だ。
「ああ、通してくれ」
私がそう言うと、兵を走って行き二人を迎え入れた。
「ルナ！久し振りだな。お前達の結婚式以来だよ！」
嬉しそうに私に走り寄るのはセルファスとジュディア。
「おめでとう！でも、シェルフィアの姿が見えないみたいだけど……？」
ジュディアが不思議そうに周りを見渡す。そう、この場所にはシェルフィアはいないのだ。
「そろそろ……だから、今はゆっくり休んでもらってるんだ」
私は少し照れて頭を掻いた。シェルフィアには、無理に動いて貰う訳にはいかない。
「ルナリート君！おめでとうございます！」
其処で、リウォルを治めているノレッジが飛び込んできた。
「まだ早いよノレッジ……！皆も、今日はこの城でゆっくりしていってくれ」
私が顔を真っ赤に染めてそう言うと、3人は可笑しそうに笑いながら兵によって最高級の部屋に案内されていった。
「さてと……シェルフィアの所に行かないとな」
私は王座を離れ、私とシェルフィアの寝室へと急いだ。
「ルナさん、心配かけてごめんね」
シェルフィアが半分涙目になりながら私の手を握る。この2年で、彼女はもう敬語を使う事は無くなったが『ルナさん』だけは直らない。
「いいんだよ。シェルフィアはゆっくりしていればいいんだから」
私はそう言って、そっとキスをした。すると、彼女は嬉しそうに微笑む。
「うん……でも、今日はずっと此処にいて欲しいの」
シェルフィアはまだ不安なんだ。今日は、世界の事は忘れてシェルフィアの傍にいてあげよう……
「解ったよ……だから、安心するんだよ」
彼女の髪を撫でる。それでホッとしたのか、シェルフィアは穏やかな表情と共に寝息を立て始めた。
私は風になびくカーテンを開け、仄かな月明かりの下でシェルフィアの手を離さなかった。
「ルナさん……、うっ……！」
突然……シェルフィアが苦しそうになる！
「シェルフィア！大丈夫だ……頑張れ！」
ギュッと手を握り締める！今私が出来る事はそれぐらいだ……！その後、数名の女性が部屋に入ってきた！
「皇帝！少し離れていてください！」
女性が叫ぶので私は離れているしか無かった。そして、気が遠くなるような時間が過ぎていく……
やがて夜が明けた時、待ち焦がれていた瞬間が訪れる。
「おぎゃぁ……！おぎゃぁ……！」

私とシェルフィアに待望の子供が生まれたのだ！長い歴史の中で……エファロードと人間との間に生まれた最初の子だった。

「シェルフィア！よく頑張ったな……ありがとう！」

私は思わず涙を零した。だが、シェルフィアは喜びに満ち溢れた最高の笑顔で私に話しかける。

「永遠の心が形になって現れたの……大切な大切な宝物。ずっと一緒に育てていこうね……！」

そんなシェルフィアが愛しくて、私は涙が止まらなかった。そんな中で、助産婦の女性が私達の子供に柔らかい布を着せて、シェルフィアに抱かせた。シェルフィアは微笑みを絶やさずに、我が子を優しく擦っていた。

「私にも触らせてくれよ……！」

そう言って、私は自分の子に触れた。とても、不思議な気持ちだった。自分が親になるなんて……そして、今にも溶けそうな程柔らかかった。女の子だ……私はずっと男の子が生まれるものだと思っていたが、予想に反して我が子は可愛らしい女の子だったのだ。

「リルフィ」

シェルフィアがそう囁く。一体……？

「この子の名前よ……ずっと考えていたの」

彼女は私の方を見てニッコリ微笑んだ。生まれる前から名前を考えていたんだ。私には内緒で。少し驚いたが、嬉しい。

「いい名前だな。でも、その名前は何処から来たんだ？」

私にはそれだけが気になった。

「それは、自分で考えてください……！」

意味深な態度……彼女は少しふくれていた。だが、答は簡単だ……その答を私はシェルフィアの耳に囁く。

「……当たりー！やっぱりルナさんっ……大好き！」

シェルフィアが私の頬にキスをする。周りに大勢の人がいるというのに……！朝だというのに私の顔は夕陽よりも赤く染まった！

「おめでとう！」

そんな様子を誰もが祝福してくれた。もう『悲劇』は終わった。後は幸せに生きていくだけだ。

『永遠』と共に……

番外編

リバレスとの出会い

「シェルフィア」
私は少し遠い目をしながら、誰よりも愛すべき女性に呼びかけた。
「ルナさん、どうしたの？」
私達は今寝室にいる。夕刻の時間、窓から見える景色は茜色に染まっている。２００年前とは比べ物にならない程発展した街、空と雲……そして人々も穏やかな夕闇に包まれていた。そんな風景を私と共に眺めていたシェルフィアは、視線を私に移した。此処は、フィグリル城。神である父との戦いが終わった数ヵ月後の事だ。
「リバレスの事を思い出したんだ」
私は、シェルフィアの顔を優しい目で見つめた。
「リバレスさん……、今、私達が此処にいられるのも皇帝とリバレスさんのお陰。……そう言えば、私はリバレスさんの事あんまり知らないわ。教えて欲しいな」
シェルフィアは、私の手を握った。フィーネだった時から、何かお願いをする時は手を握る。昔から変わらないその仕草に、私は愛おしさを感じる。しかし……今こうして彼女と共に生きていられるのは掛け替えの無いものを失ったからだ。私は少しずつ……今にも笑い声が聞こえてきそうなリバレスの事を思い出していった。

～今から４２４年前～
此処は天界、私は現在１６０２歳だ。ハルメスさんがいなくなってしまった後、私は１０００歳の誕生日に天使学校に入学した。今は午前８時、いつも通りジュディアが迎えに来る時間だ。
「ルナー！学校に行くわよ！」
殆ど寸分の狂い無く彼女は迎えに来た。私も既に準備は出来ている。
「解った！今行くよ」
この日も、６０２年間変わらない退屈な授業だった。私は、入学してから常にトップの成績を保ち続けている。それは、私が物事を覚えようとすれば一度で覚えられる事もあったが、何よりもハルメスさんがいなくなった後私がこの天界を変える事を決意したからだ。この天界を変えるには、最高の成績を修めて神官となる事が最短の道だと思っている。
午後８時、授業の終わりと共に少しばかりの自由な時が訪れた。１０時までに部屋に戻ればいい。私とジュディア、セルファスとノレッジは噴水前に集合した。
「さて、今日はどうする！？」
相変わらず元気なセルファスが皆に問いかける。短い自由時間だ、出来る事は限られているが少しでも羽を伸ばしたい。皆そう思っている。
「そうだな、久々に森に行くのはどうだ？」
私はそう言った。森は心が和む。自然は、束縛された私達の心とは無関係にいつも悠然と生きているからだ。
「私はその意見に賛成よ」
「僕も、それでいいですよ」
ジュディアとノレッジは同時に答えた。昔から、私達は森でよく遊んでいた。かくれんぼをしたり、神術比べをしたり……
「よし！じゃあ、森に向けて出発！」
セルファスの掛け声と共に私達は翼を開く。空を飛べる貴重な時間、私を含め皆この瞬間が大好きだ。束の間の自由を噛み締めながら、数分後に森に到着した。
其処で、まずは神術比べをした。この時点で私とジュディアは高等神術をかなり使いこなせていた。ノレッジもそれに続き、最近になって高等神術を使えるようになってきていたが、セルファスはまだまだ中級神術も完全には使えなかった。だが、セルファスの『雷系』の中級神術だけは

高等神術に並ぶ程だった。
私が得意なのは、威力の高い炎の神術。ジュディアは、微細なコントロールの出来る氷の神術。ノレッジは拘束系、セルファスは雷系というように皆それぞれに得意分野が出来つつあった。神術比べの後、私達４人は空を見上げていた。
「空は自由でいいな」
私が呟く。
「そうだな、俺もテストさえ無かったら毎日が楽なのにな……！」
セルファスが頭を抱える。相変わらず大袈裟な奴だ。
「私は、天界にもっと優秀な天使が多ければ皆幸せになれると思うわ」
ジュディアは視線を空から、私に向けてそう言った。セルファスは、ドキッとしたようにジュディアの方を向く。
「僕も優秀な者だけがこの天界にいれば、皆の悩みも軽減されるような気がしますね」
ノレッジもジュディアの意見に同調する。
「私はそうは思わないな……確かに、優秀な者だけがいればいいという考えも解らないではない。でも、テストや勉強だけで天使達の価値なんて測れはしないよ。皆に等しく、未来に対する自由があれば……と私は思うんだ」
その後なかなか皆の意見は合わなかったが、皆は昔からの友人。結局は、論争など忘れて楽しく語っていた。
「お！そろそろ時間だぜ！」
時刻は９時３０分。余裕を見て、そろそろ帰らなければいけない。私達が帰路に就こうとしたその時だった。

「うわぁぁぁーー……ん！」

小さい子供、いや生まれたばかりの子供の泣き声に似ていた！
「行こう！」
私達は、声の聞こえる茂みの方に走る！
「天翼獣……！」
ジュディアが叫ぶ。そう、其処には妖精のような……蝶のような姿をした小さな小さな天翼獣がいた。その傍らには、既に死亡していると思われる親の天翼獣……恐らく、この子供を生む時に死んでしまったのだろう。私も、親の命と引き換えに私が生まれたと聞いている。私達は同じ境遇……そう思うと、この天翼獣に何ともいいようの無い程の共感が生まれたのだった。
「うわぁぁぁーー……ん！」
さっきよりも泣き声が弱々しい……私は無言でその子供の天翼獣を掌に抱いた。
「ルナ！？どうする気なの！？親のいない天翼獣には、天使は関与してはいけないのよ！」
ジュディアが叫ぶ。しかし、私は答えた。
「連れて帰る。生まれた時から親のいない悲しみが解るか？この子は、私と同じ独りぼっちで生まれてきたんだ！」
すると、皆は目を伏せた。皆には家族がある。私の事は解ってくれていても、この悲しみは解らないだろう。
「でも、ルナリート君！法律で、天翼獣と暮らす際には『天翼獣が５０歳以上で、尚且つ言語能力を持ち天使の生活に適合出来る事が絶対条件』なんですよ！神官ハーツ様に厳しく罰せられます！」
ノレッジは叫んだ。勿論知っている、その法律を……
「でもな！この子は、一人では生きていけない！此処で見捨てたら死んでしまう……！」
私はどうしても、この子を見捨てる事など出来なかった。生まれた瞬間から否定される存在など悲し過ぎる！
「ルナ！お前の言いたい事はよく解ったぜ……それなら、明日無理を承知の上で神官に頼んでみろよ。お前の成績なら、あの神官も許してくれるかもしれないぜ」
的を射た意見だ。セルファスは人情家だが、こういう時には的確な事を考えつく能力を持っている。

「セルファス、ありがとう！そうするよ」
こうして親の天翼獣を手厚く埋葬した後に、私は生まれたばかりの天翼獣の子供を部屋に連れて帰った。まだ体の大きさは５ｃｍ程度だったが、少しでも元気をつけさせる為に私が今日摂取する分のＥＳＧを与えた。そして、水で体を洗った後に布で作った即席の服を着せた。すると、この子は安心したのか眠ってしまったので私も眠りに就くのだった。

そう、これがリバレスとの最初の出会いだった。

～翌日～
次の日の早朝、私はいつもより早く目覚めた。ハルメスさんに貰った銀の懐中時計が午前６時を告げている。
「大丈夫か？私がお前の世話を見られるように頼んでくるからな」
私は目覚めた次の瞬間に、言葉を喋る事は愚か名前すらない天翼獣の子供の頭を撫でながら呟いた。
「ん」
寝言のように音を発したこの子は女の子だ。生まれたばかりの無垢な顔で穏やかに眠っている。
「何も心配せずに、暫く眠っていてくれよ」
私はこの子に微笑んだ。笑うのは久し振りだ……ハルメスさんが私の前から姿を消してから……そして無意味と思える学校が始まってからは、笑う機会が減ってしまったからだ。しかし、今の私はこの子を救いたい一心だ。そうする事で、私自身の心も救われるような気がするからだ。
服を着替え、窓際で育つルナ草に水をやり部屋を出たのはまだ７時前だった。
「これで良し」
私は部屋のドアの前にメモ書きを置いた。それはいつも迎えに来るジュディアに向けてのメッセージで、先に行くという内容のものだった。

午前７時半、私は学校内の神官ハーツ専用の部屋の前にいた。本来ならば、神官であるハーツには『様』を付けるのが妥当なのだが、私は彼を深く憎んでいる。幼い私からハルメスさんを奪った彼を……！ハルメスさんと言い合っていた言葉の意味は当時はわからなかったが、彼の所為でハルメスさんがいなくなったのは間違いない。
「コンコンコン」
私は息を整えてドアをノックした。やはり、天界最高の権力者……そして裁きを実行する者の前では緊張する。
「誰ですか？こんな時間に？」
眠そうな顔はしているが、冷たく鋭い目をしたハーツが私の前に現れた。
「天使ルナリートです！本日はお願いがあって参りました！」
私は、深々と頭を下げながら声を張り上げた。彼には、最上級の礼儀を尽くさなければならない。
「おや、君は天界始まって以来の天才、ルナリート君ではありませんか。君が私に願い事とは一体どうしたのです？」
彼は私の成績及び授業態度に対して天才だと思っている。決して、私自身の人格を見ている訳では無い。そんな神官ハーツに私は部屋に招かれた。豪壮な部屋だ……壁は全て大理石、机はオリハルコン……ソファに至っては、何らかの動物の毛皮で出来ていた。そして、彼の権威と力の象徴である『杖』には様々な宝石があしらわれている。神術のエネルギーを増幅させる力があるらしい。天界に殆ど存在し得ないその杖は全て彼の部屋にあった。
「なる程……君は親のいない天翼獣を救いたいと。それが法律に違反すると知りながら」
事の顛末を聞いたハーツの表情が変わる事はなかった。彼にとって天翼獣の命などどうでもいい……という事か。
「私は何でもします！だから、どうかお願いします！」
私は机に額を押し付けた。このままでは、生まれながらに頼るべき者を失った彼女を救えない！

「普通は絶対に不可能です。しかし……君程優秀な天使が其処までする覚悟があるのなら……方法が無い事もありません」
神官は冷笑を浮かべた。その裏には何が隠されているかは解らない。しかし、方法があるのならば私は何だってする！
「その方法を教えてください！」
私は椅子を立ち上がり、ソファでくつろぐハーツに近付いた。
「それは、『虹の輝水晶』を手にいれる事です。虹の輝水晶は、神術のエネルギーを最大限に高める宝石。天界にはごく微量しか存在しておらず、私でさえそれを所持していません。それがあれば、『天界を守る』私の力を高める事が出来ます。それは皆にとって最上級の幸せとなるでしょう」
ハーツはそう言い放った。『天界を守る』……神官ハーツが？罪の無い天使達に厳罰を与える者が……そんな者の力を増幅させる宝石を私が手に入れろと言うのか……？しかし……あの子の命は掛け替えの無いものだ。それを見捨てる事は、命を軽んじる神官と変わらないじゃないか……暫く私が考え込んでいると……
「さぁ、どうするのです！？私は忙しいのです！答が無いのならば、それはノーと取りますよ！」
少しの沈黙に苛立ったハーツが私を睨む。彼は自分の思い通りにならない事が何よりも嫌いだ。
「……やります！この身を尽くして、『虹の輝水晶』を神官ハーツ様に献上します」
私は必死の思いでそう言った。あの子を救いたい……その思いの強さがあったからだ。
すると……
「よろしい。それでこそ私の見込んだ天使です。早速ですが、『虹の輝水晶』の入手方法を教えましょう」
醜い笑みが浮かんでいた。全ては、自分の思い通り……その欲望を満たした顔だ。
「お願いします」
私は短くそう返答した。余り長時間ハーツと話はしたくない。
「『光の山』を知っていますね？此処から森を抜けて、『封印の間』を越えた所にそびえる山です。その山頂には、『白い聖獣』がいて『虹の輝水晶』を守っているようです。元々、虹の輝水晶は天使の持ち物。それを、白い聖獣から取り戻して欲しいのです。決行は……そうですねぇ。本日の授業終了から、明日の授業開始まで。それまでに私に宝石を渡せたら、『天翼獣の子供の養育』を認めましょう」
言っている事が滅茶苦茶だ……聖獣は、天使よりも圧倒的に強い力を持つ者。そして、光の山の番人……そんな『強大な者』から、宝石を奪え。彼はそう言っているのだ。欲しい物が手に入れば、私の命などどうでもいいのか？それとも、無理を言って私を諦めさせるつもりなのか……？どっちに転んでも、彼にとって不利益は無い。そういう事なのだろう。しかし、
「……確かに約束しましたよ」
私はそう強く言い切った。その瞬間、彼の表情は驚きに変わったがすぐにまた元の非情な顔に戻る。
「約束です。今日は夜の外出と、特別に『オリハルコンの剣』の帯剣許可を与えましょう。但し危険が伴う為、一人で行くように。また、友人らにはこの事は口外しないように。宜しいですね？」
友人にも口外させない。それは、何処かハーツには後ろめたさがあるからだろう。結局は、自分の欲の為だと言っている事の証明のようなものだ。しかし、どの道私は友を危険に晒すつもりはない。
「わかりました。それでは失礼します」
私は、最後に一言そう言ってハーツの部屋を出た。

この日の授業は、全く耳に入らずセルファス達との会話も上の空だった。そんな様子をジュディアは心配そうだったが、話をする事は許されない。私は授業が終わると同時に、一人で真っ直ぐ部屋に戻ったのだった。

～白い聖獣～

「うわぁぁぁー……ん！」
部屋に戻ると、天翼獣の子供は泣いていた。私は急いでＥＳＧを与えたが泣き止まない。しかし、約束の時は刻一刻の迫ってくる。早く用意をしなければ……私は、オリハルコンの剣とＥＳＧ、そしてお守り代わりにハルメスさんに貰った時計と本を持った。
「うわぁぁぁぁぁー……ん！」
……さっきよりも大きい泣き声。私は困った。すると……
「ガチャ」
私の部屋のドアが開いた。
「全く、ルナリート君は何でも一人で抱えようとするから」
「その子は私達が見ているから、行っても大丈夫よ」
何と、ノレッジとジュディアだった！二人は私と同じく、天使学校の特待生宿舎に住んでいる。しかし……何故？
「……私は何も話していないのに？」
私は思った事をそのまま口に出した。
「ルナ、あなたの表情を見れば誰だって解るわよ。何処に行くのか解らないのが心配だけど……気をつけて行ってね！」
「ルナリート君、無事を祈ってます」
私はこの時、友人という存在の有り難さをヒシヒシと感じた……
「あぁ、行ってくる！」
私は駆け出した。特待生は、神殿の３階に住んでいる。一気に階段を駆け下り、神殿を出ようとしたその時……
「ルナ！頑張れよ！」
セルファスまで私を待っていた。私は彼に手を振って『光の山』を目指したのだった。

午後１０時までは飛行を続け、現在は歩いている。一体どれだけ歩いただろうか？時刻は深夜１２時になろうとしていた。此処は『光の山』の山頂へと向かう道。月と星の明かりだけで、私は険しい山道の歩を進める。一部には木々が生えているが、殆どは進みにくい岩場が続く。翌日の授業開始まで残り９時間、私は焦っていた。
「まだ山頂が見えない。一体何処まで続くんだ？」
私は情けない独り言を呟いた。空を飛べば早いだろうが、夜１０時以降の外出許可はあっても飛行許可はない。その点を神官に指摘されると後々で厄介な事になる。そういった理由で私は空を飛ばずに、唯ひたすら早足で歩いた。

午前１時。天界では考えられない程の冷え込みを見せる山頂に到着した。地上から数千ｍぐらいは離れているだろう。周りには何も無く、私は遠くを見ていた。その時だった！
「ゴォォォォォォォォォ……！」
目の前を真っ赤な炎が包む！私は咄嗟に避けながら地面を転がった！
「誰だ！」
私は体を起こしながらオリハルコンの剣を抜く！
「今の攻撃を避けるとは、並の天使ではないようだな」
声のする方……私は空を見上げた！すると……全身が真っ白に光り輝く鳥のような姿をした者がいた。私は直感する！
「白い聖獣……！」
私がそう叫ぶと、その者は地面に降りてきた。
「その通りだ、天使の少年よ。この場所に何の用だ？」
白い聖獣は私を睨みつけた。その眼光からは何者も逃れられないだろう。私は思わず身震いする。そして、圧倒的力を物語る威圧感が私の体を押さえつけていた。嘘と不誠実が通じる相手ではない事が私には解った。
「私は……生まれたばかりの天翼獣を救う為の代償として、神官から『虹の輝水晶』を取ってくるように命じられました！『虹の輝水晶』は貴方が持つものだと聞いています！それを私に」
其処まで言った瞬間だった！

「愚かな！天使が『虹の輝水晶』を扱うなど……！傲慢にも程がある！その宝石は、我が『神』より預かりし物である！」
白い聖獣は叫びながら飛び上がった！そして、更に強い光に包まれる！
「待って下さい！」
このままでは、怒れる聖獣に殺されてしまう！その前に私はこんな形で戦いたくは無い！
「問答は無用だ、小僧！自分が正しいと言うのならば力で証明するがいい！……高等神術『光刃』！」
「パキキキィィィィィィィィー――……！」
光の刃が私を取り囲む……！何もしなければ……死ぬ！
「ゴォォォォォォォォォォ……！」
私は刹那の瞬間に意識を集中し、体の周りを高等神術『滅炎』で覆っていた！
「やるではないか。其処までの炎、その年で扱える者は他にはいまい……我の刃を掻き消すとはな。だが、どの道その程度ではお前は此処で死ぬ。『虹の輝水晶』は、いずれ『神』にお返しすべき物……それを、天使に渡す事は出来ぬ！」
聖獣は耳が張り避けそうな甲高い声を上げた……『神』……？私はそんな存在など信じてはいないが……だが、このままでは無事に帰る事も出来ない。私は、仕方なく戦う覚悟をした！
「貴方が私を殺すというのならば、私は戦う……！もし……私が勝てば、『虹の輝水晶』は頂きますよ！」
私は、今まで実戦で戦った事はない。全ては授業での『戦闘実技』のみ……だが、聖獣の力は恐らく私の全力を上回る。私は、授業で一度も本気を出した事が無い。だからこそ、私は全力の力を解放して戦う……！戦う理由は、悲しく生まれた。私と似ている境遇の子供を救う為……そして、何もしなければ殺されるという不条理は一つの生命として許せないからだ。
「天使にしてはよい心意気だ……だが、それは決して叶わぬ！受けるがよい……究極という名の炎を……！」

「……究極神術『火光』！」

何と言う絶大な力……！聖獣の嘴に集る光と炎の力は……！神官ハーツの『魂砕断』に匹敵……いや上回る！
「ゴゴゴゴゴォォォォォォォォォォ……！」
地面が振動する！空が赤く……そして白く染まる！私は精神を集中し叫んだ！
「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉ……！」
何も考えられない！私は、ただ無我夢中で精神力を神術のエネルギーに変換した！

「ドゴォォォォォォォォー――……ン！」

……一体何が起きたんだ？私は……生きている。恐る恐る目を開ける。すると……！
「見事……（まさか、『神光』を使うとは……）」
何と、片翼……いや半身を失った聖獣が目の前に倒れていた！
「私は一体……？」
私は聖獣に駆け寄る！私は……此処まで傷付けるつもりは無かった！
「お前は……いや……貴方様は、これから先の天界を確実に担う者となるでしょう……これをお受け取り下さい」
息も絶え絶えな聖獣の態度が急に変わった。一体何故……？
「何故……？急に私にそれを……！？」
私は聖獣に『治癒』の神術を使う……！しかし……！
「我……否、私の役目はこれで果たされました。これは貴方様が持つべき物……私が此処で消えるのは、貴方様の所為では無く宿命……どうかお嘆きにならぬよう」
言っている意味が解らない！まるで、初めからこの宝石は私の持ち物だったというような言い

方だ……！

「待ってくれ……！死なないでくれ！」

私は自然と涙が流れた。まるで、この聖獣とは昔からの知り合いだったかのような思いだった。

「……昔……神から頂いた私の名は……『リバレート・ホワイトフェザーズ』……貴方様は、いずれこの名を思い出すでしょう」

「（貴方様は……神の血を受け継ぐ者なのですから……）」

そう言って……白い聖獣は自らの意思で砂のように消えていった。『虹の輝水晶』を私に託して……

～２２４年後～

「それで、わたしの名前が『リバレス・シルバーフェザーズ』って名前になったのねー」

私のベッドの枕元に座っているリバレスが感慨深く呟いた。

「あぁ、結局白い聖獣が私に伝えたかった事はまだ解らないままだがな」

あれから２２４年が過ぎたが、私には『リバレート・ホワイトフェザーズ』という名前を理解出来る事は無かった。だが、リバレスが今もこうして生きていられるのは聖獣のお陰だ……聖獣は、あの時……私とリバレスの為に……生きる事をやめたのだ。

「わたしは……ルナと聖獣さんにとても感謝してるわー。本当は、わたしの命が無くならなければならなかったのに……今もこうして、ルナと一緒に楽しく生きていられるから」

リバレスは私の肩に乗って微笑んだ。私はその頭をゆっくりと撫でる。

「私は殆ど何もしてないけどな……聖獣には感謝しないとな」

私は灯りを消して寝る準備をした。窓の外には星明かり……そして、ルナ草が揺れていた。

「……わたしは、ルナにとっても感謝してるのよー！」

リバレスは私の頭を軽く叩いた。私は、其処まで感謝されるような事はしていない。唯、生まれた瞬間から消える命を見過ごす事など出来なかったし、そんな事をする自分が許せないと思ったからだ。しかし……言い合っても仕方ないな。

「はいはい……、解ったから、もう休もう」

私はリバレスの額を指で小突く。すると……

「もー……！ちっとも解ってないんだからー！」

リバレスは膨れっ面をして、私の枕元にある就寝スペースに入った。

「……（もし、ルナに不幸が起きて……わたしがそれを助けられるのなら、喜んでこの身を差し出すからねー……）」

リバレスが何かを囁いたような気がした。

「ん？何か言ったか？」

「何も言ってないわよー！おやすみー！」

こうして、私達はゆっくりと眠りに落ちていった。

翌朝……

「ドンドンドン……！」

ドアを激しく叩く音……一体何事だ……！？

「ルナ！聖歌隊の隊長のクロムさんが捕まったのよ！今日裁判があるらしいわ！」

ジュディアの叫び声だった。クロムさんが……！一体何故……！？

この日、学校の授業の終了と共に神官ハーツの狂気染みた裁判が開始する。

フィーネの心

「ねぇ、ルナさん」
フィグリル城の屋上、かつて皇帝やリバレスさんと最後の晩餐を交わした場所で私はルナさんに話しかけた。
「どうした、シェルフィア？」
物思いに瞬く星空を見上げていたルナさんの瞳に私が映る。私はその瞳が大好きだ。私がフィーネだった頃から変わらない。とても優しい目。特に、笑っている時の顔が一番好き。こんな人が、私なんかを愛してくれるなんて、初めは思わなかった。でも、私は一度死んでしまったのに……『永遠の約束』通り、ルナさんは迎えに来てくれた。こんな人が、今もこうして傍にいてくれるなんて……私は本当に世界一の幸せ者だと思う。ずっと、ずっとこの時が続いて欲しい……それが、例え私のわがままだとしても。
「昔、私が言った事を思い出したの……フィーネの頃にね」
私は微笑みながら、ルナさんの目を見つめた。きっとルナさんは、何でも覚えている。しかも、何も言わなくても私が考えている事を大体当ててしまう。でも、幾ら私の考えが読みやすくても……今回私が思っている事までは解らないだろうな……
「ん？フィーネだった頃に言った言葉……全部覚えているけど何だろう？もしかして、２００年前に船で漂流した３日目の夜に『戦いが終われば敬語と、さん付けをやめる』って言ってた事か？」
残念ながら、今回はルナさんの予想ははずれだった。確かに全ての戦いが終わった後、私はとても苦労してルナさんに対して『敬語』を使わないようになった。今も、『ルナさん』って呼ぶのは変わらないけど。
「うーん、残念……違うの。ルナさんが、私を好きになってくれて……死んでしまったお父さんとお母さんに『辛い事もあったけど、私は幸せです』って言った事」
その時、私は少し悲しい顔をしていたのかもしれない。ルナさんが優しく肩を抱いてくれた。私は心の底から安心して、ルナさんの胸に頭を預ける。すると……
「勿論覚えてるよ……あの時に約束した通り、今は一緒に暮らしてる。フィーネとしての体は失ってしまったけど……これからも、私はずっと傍にいるよ。だから安心するんだ」
とても……とても優しくて穏やかな表情だった。その心に私は今までずっと救われてきたんだ。ルナさんのいない世界なんて考えられない。こんな気持ちを持っていられて、こんな私を愛してくれて……これからも、幸せを育んでいける。そう思うと、私は涙が零れた。
「シェルフィア？どうしたんだ、大丈夫か！？」
心配そうにルナさんが、私を抱き締める。
「ううん……悲しい訳じゃなくて、ルナさんがいてくれる事が嬉しくて。フィーネだった頃の私の両親も、お互いにこんな気持ちで私を生んでくれて、育ててくれたのかな……？」
私は涙を拭いて、ルナさんの顔を見上げた。
「……きっとそうだろうな。そうじゃないと、そんな優しくて強い心を持てないよ」
ルナさんが、私の髪を撫でる。私は、不思議とフィーネだった頃……子供の頃を思い出していた。愛し合っている両親が私を育ててくれたから今の私がある。そして、こうしてルナさんを愛する事が出来る。そう思ったからかもしれない。
「お父さんと……お母さんの話をしてもいい？」
私はこの時無性に両親の話を聞いて貰いたくなって、そう訊いた。
「……何時間でも聞くさ。大事なフィーネの両親の話だからね」
ルナさんはそう言って、私達は星と街並みが見えるベンチに座った。

～２０３年前、フィーネ１４歳～
「フィーネ、そろそろ勉強は終わりにして晩御飯にしましょう」
お母さんが私の肩を軽く叩いた。その時、私は部屋で本を読みながら勉強をしていた。昔は学校で勉強をしていたけど、学校を魔物に破壊されてから自分の家でしか勉強出来なくなった。私は新しい知識や世界を知る事が出来る学校が好きだったから、今も自分の出来る範囲で本を読ん

だりしている。でも、今は晩御飯の準備を手伝わないと。
「はぁーい」
私はすぐに立ち上がり、キッチンに向かった。彩り豊かなサラダ、そして肉料理の数々。そして、とっても美味しいスープ……
「ん？どうしたの、フィーネ？」
お母さんが私の顔を覗きこんだ。私が、ずっと料理を見ていたからかな？
「美味しそう……！それに、今日の晩御飯は豪華だなって思ったの」
私は思った事をそのまま言葉に表していた。
「そうね、今日はお父さんとお母さんの結婚記念日だからよ。１５周年」
お母さんは何よりも嬉しそうに微笑んだ。お父さんとお母さんはずっと仲がいい。そして、二人とも私の事を心の底から大切にしてくれている。物心がついた時から私はそう感じて来た。そして、それは今も変わらない。
「あ、本当だ！今日は記念日ね。おめでとう！」
私はそう言って、自分の部屋に駆け戻り小さな包み袋を取ってきた。
「ちゃんと覚えててくれたのね……お母さんは嬉しいわ」
お母さんは、少し目を潤ませながら私からのプレゼントを受け取った。
「お父さんが帰ってきてから開けてね」
こうして、私達が食卓の準備をしていると……

「ただいま！」
其処で、鉱山で今日の仕事を終えたお父さんが帰ってきた。
「お帰りなさい！」
私とお母さんの声が重なる。私はお母さんによく似ている。姿形だけでなく、声も。それは私の誇りなの。
「おいおい、今日はどうしたんだ？二人とも揃って！」
少しびっくりしたような顔。でも、お父さんが今日の事を忘れていない事を私はすぐに解った。
「もう！お父さんだって気付いてるくせに……！その後ろ手に持っている花束は何？」
「ははは！フィーネは鋭いなぁ、さぁお祝いの晩御飯にしよう！」
「沢山御馳走を作ってるわよ！」
私達家族は今日も笑顔が絶えない。……外では魔物が現れたりするけど、私達は幸せだった。
幼心に、これが『愛』っていうものなんだと私はずっと思ってきた。
「そうか、フィーネもお父さん達にプレゼントがあるみたいだな！」
お母さんが作った世界で一番美味しい料理を食べながら、お父さんは言った。
「うん！でも……あんまり期待しないでね」
私はほんの少し顔を紅潮させた。
「何かしらね？」
お母さんが、包み袋に入っていた小箱の箱を大事そうにそっと開ける。
「これはいい！」
お父さんは大袈裟に声を上げた。そして、箱の中身をそっと取り出す。
「良かった。喜んで貰えたみたいで」
私はほっと胸を撫で下ろす。箱の中身、それは私の手作りの人形。人形は３体あって……お父さんとお母さんと私のつもりで一生懸命作った。上手く作る事は出来なかったけど、喜んで貰えて本当に良かった。
「フィーネ、ありがとう！大好きよ」
お母さんが私の頭を撫でる。私は素直にニッコリ微笑んだ。
「これは我が家の宝物だな！」
お父さんも嬉しそうに私の頭を撫でた。

こんな日々が続いていく。私はそう確信して疑わなかった。

～３ヶ月後～

お父さんとお母さんの結婚記念日から、３ヶ月ぐらい経ったある日の事だった。
「フィーネ、ちょっと果樹園まで果物を分けて貰いに行ってくるわね」
今の季節は、初夏で果物が美味しい時だ。ミルド村の外れにある果樹園は、毎年実りが豊かで味も良く非常に人気がある。お母さんは、その新鮮な果実を買いに行くのだ。
「うん、気をつけて行って来てね！」
私はそう言って、家の入り口まで見送った。大抵の場合私も一緒に行くのに、今日は何故かお母さん一人で行く事になった。

……私は、どうしてこの時お母さんを止められなかったんだろうって自分自身を責める時がたまにある。何か特別な事がある時は……後から思えば必ず『いつもとは少し違う予兆』のようなものがある気がするからだ。この時は……お母さんが一人で行くって言うのを止めれば良かったのに……！

「ただいま」
家を出て４時間程経ってから、お母さんは帰ってきた。酷く顔色が悪く……今にも倒れそうになりながら……！
「お母さん！どうしたの！？」
私は、お母さんを抱き締めた！体がとても冷たい……！
「フィーネ……、果樹園に行ったら急に体調が悪くなったの……この果物は……絶対に食べちゃダメよ」
そう言ってお母さんは意識を失った！
「お母さん……！？お母さん！」
私は泣きながらお母さんを揺さぶった！其処へ……
「ただいま……どうした！？」
お父さんが帰ってきた瞬間異変に気付き走り寄る！
「お母さんが……！お母さんが……！」
私は泣き叫びながらお父さんにしがみつく……！
「おい……しっかりしてくれ……！……フィーネ！今すぐお医者さんを呼んで来るんだ！」
青褪めた顔でお父さんが私に叫ぶ……
「……うん！すぐに呼んでくるから、お母さんをちゃんと看ていてね……！」
私は夜の村に駆け出した！

それから２週間ぐらい経ったある日……

「……あなた……フィーネ……、話しておきたい事があるの……聞いてくれる？」
お母さんが倒れてからずっと、私とお父さんは付きっきりで看病を続けていた。今も、お母さんの手を握り締めている。私は……涙が枯れ果てるんじゃないかという程に涙を流し続けた……お母さんの顔も体も……痩せ細り……酷く冷たくて……まるで別人のようになってしまったからだ。村で唯一の医者には、もう治る見込みは無いと言われた。そして……もう長くは生きていられないとも……何より辛いのは、不定期に訪れる強い発作だった。発作が訪れると、お母さんは全身を掻き毟り……苦しさの余り大声で叫ぶからだ。
「お前……無理して喋ろうとするなよ。必ず治るから……話は元気になった時でいいじゃないか……？」
お父さんは、変わり果ててしまったお母さんを直視出来ず……伏し目がちにそう言った。お父さんは、『治る』という一縷の希望で何とか理性を保っている。そんな感じだった。
「お母さん……！お父さんの言う通りよ、今は無理しないで……！」
私はそう言いながらお母さんの手を強く握り締める。そうしないと、お母さんが何処かに行ってしまいそうな気がしたからだ。
「……ふふ……あなたも……フィーネも心から愛してるわ。でもね……私はもう生きられない。それが解るの……だから聞いてね」
お母さんは苦しい筈なのに微笑んだ。私達は、その強い心に言葉を失ってしまった。

「……初めに……私はとっても幸せだった。……あなたと出会えて恋に落ちて……こんなに可愛い娘を授かったわ。……あなたは優しくて真面目な人で、私達家族を何より大切にしてくれた。フィーネが生まれた時も、この家を建てた時も……あなたはずっと傍にいてくれた。……あなたに出会えて良かった。そして、誰よりも愛しています。……フィーネ、あなたはとっても思いやりのある自慢の娘よ。……よく言う事を聞いてくれて、私達両親をいつも想ってくれた。この前のプレゼント……嬉しかった。だから……だから」

其処まで話したお母さんは涙を流していた。

「……お母さん！」

「お前……！」

私とお父さんは同時に叫び、お母さんに縋りついた！

「……二人とも……大好き……誰よりも世界で一番愛してるから……私がいなくなっても……幸せになってね」

それが……お母さんの意識がある内に発した最後の言葉だった。

～２００年前、フィーネ１７歳の誕生日～

あれから３年ぐらいの月日が流れて、私は今日１７歳の誕生日を迎えた。この日は朝から昼過ぎまで本を読んで勉強し、村に晩御飯用の食材を買い出しに行ってきた。お母さんが死んでしまって……家事は全部私がやるようになった。料理は、お母さんのレシピを読みながら悪戦苦闘の日々だったけど……お父さんは、『美味しい』って言いながら食べてくれる。お母さんがいなくなってしまって、初めは悲しくて寂しくて……お父さんも私も……食事すらろくに喉を通らない毎日を過ごしていた。でも……月日が流れて、お母さんの声を聞いたり顔を見たりは出来ないけれど、私達の心の中ではしっかりと生きている。そう思えるようになった。

「ただいま！」

晩御飯の支度を済ませて、暫く経ってからお父さんは帰ってきた。

「お帰り！今日も遅かったわね。心配してたのよ……！」

私は、お父さんの荷物と上着を受け取った。そして、それを収納場所に収めて食卓に戻る。

「フィーネ、１７歳の誕生日おめでとう！大した物じゃないけど、受け取ってくれよ」

そう言って、お父さんは私に少し大きめの箱を手渡した。

「もう、お父さん！プレゼントは要らないって言ってるのに……！最近は、鉱山に魔物が沢山現れて危ないから……お金を貯めて、この村を出ようって約束したでしょ！？」

私はそう言いながらも、内心嬉しかった。私は生まれてから今まで、誕生日を忘れられた事がない。それに、毎年お祝いをしてもらってきた。今はお母さんと一緒に笑い合ったりは出来なくなったけど……お父さんはずっと元気だし、此処にはいないお母さんだって心の中にはちゃんといる。だから、私は毎日を元気に送る事が出来るんだと思う。

「まぁ、そう言うなよ。中身はケーキだから！本当はもっと良い物を買ってあげたかったんだけど、フィーネと約束してたからな」

お父さんは少し申し訳無さそうな顔で……そしてとても嬉しそうな顔でそう言ったのだった。

「うん……ありがとう！お父さん大好き！」

この日は、二人で笑いながら夕食を食べた。お母さんみたいに上手には作れなかったけど、頑張った甲斐もあってか今日は今までで一番美味しく出来たような気がした。それは……すぐ傍にお母さんがいたような気がしていたからかもしれない。

「フィーネ」

夜遅く……暖炉には赤々とした火が揺ら揺らと燃えている。窓は曇っているけど、月明かりと星々の明りが差し込んでいるのが見える。お父さんは明日仕事が休みなので、今日は酔い潰れるまでお酒を飲んでいた。お父さんが私の名前を呼んだのは、テーブルにうずくまっているお父さんに毛布をそっとかけた時だった。

「どうしたの、お父さん？」

私は顔を上げようとせず、小刻みに震えているお父さんを見つめた。こんなお父さんは見た事がない。

「……うぅ……ごめんな、フィーネ……、お前はお母さんに似て、最高の娘だ。なのに……苦労ばっかりかけてるよな」

お父さんは泣いていた！今までに、お父さんが泣いているのを見たのは……お母さんが死んでしまった時だけだった。だから、私は物凄く驚いてしまった。

「……お父さん！お父さんが謝る事なんて何もないわ！私、今はお父さんが元気に生きていてくれるだけで幸せなんだから……！」

そう、自分でもびっくりするような大きな声を上げたと思う。

「フィーネ、お前は本当に優しくて……人の気持ちや痛みが解る子だ。お父さん……、いや、俺は一人の人間としてお前が生まれてきてくれてとても嬉しいよ……神様が俺達夫婦に、こんな素晴らしい子供を授けて下さったんだからな……今まであんまり話した事は無かったけど『フィーネ』という名前は、お前が『優しくて素晴らしい娘になりますように』という意味ともう一つ……『悲しみが終わりますように』という意味が込められている。……フィーネが生まれてくれて……世界から悲しみが消えれば……俺達はそう願ったんだよ。だから……フィーネには、悲しみを味わわせる事無く……前向きに生きて欲しいと望んできた。……だから……今、お前が悲しい思いをしているのが辛いんだ。もし、俺の願いが叶うとしたら……これから先、俺がこの世界に望む事はたった一つ……フィーネが、この世界に生まれた事を憎まずに……自分を愛し……誰かを愛し……幸せになってくれる事だけだ」

お父さんは、涙で言葉を詰まらせながら……そう言った。

「私は……！」

私が何かを伝えようとした時……お父さんは既に眠ってしまっていた。お父さんは、色んな事を抱えて辛い思いをしているんだ。私はそう思うと、それ以上声をかけられなかった。

私は部屋に戻り、ベッドに入って一人考えた。自分が生まれてきた事やお父さんとお母さんの事……この世界の事……そして『愛』について……

「（私は……大好きなお父さんとお母さんが愛し合って生まれてきたんだ。私をこの世界に生んでくれたのは、とても素晴らしい事だと思う。……魔物や病気なんかで悲しい事や辛い事があるけれど、私は……強く生きよう。例えどんな事があったとしても……。今はお父さんが私の傍にいてくれる。お母さんも心の中にいる。……私は、自分が生まれてきた事を決して憎んだりしない。大好きな両親が私を生んでくれた。そして、大切に育ててくれたから。……この世界も……私は好き。人が愛し合って……大切な命が紡がれてゆく世界だから。魔物は……私達人間を襲ってくる憎い存在だけれど……それにも理由があると思う。だから……私は、人間も魔物も……生きている者全てが互いに争う事なく……幸せになれたらと願う。そして……お父さんも私自身も幸せになりたいと思う。今も、お父さんと一緒に生きていられる事だけでも幸せだけど……悲しみで涙を流す事が無くなれば……と思う。そしていつか……私もお母さんみたいに素晴らしい人と出会って、温かい家族を作りたいな……）」

そんな事を考えていると、私の頬を一筋の涙が伝った。今日は……もう寝よう。明日は、１７歳の２日目だ。

私は……この日眠る前にふと窓から見えた夜空の光を忘れない。まるで、全ての悲しみを洗い流し……穏やかに微笑んでいるかのように見えたからだ。もうすぐしたら……雪が降り始めるかな……？

～５日後～

「ビュオォォォォォォォォ」

今日は、朝から嵐が吹き荒び窓もドアも激しい音を鳴らしていた。ミルド村は、海岸沿いの村なので嵐が起きた時の勢いは強い。

「お父さん、今日は嵐なのに鉱山に行くの！？」

私はお父さんの裾を引っ張った。今日の嵐は例年に無く強いので心配だったからだ。
「あぁ、この前別の鉱山が魔物にやられたからな……鉱石が足りないんだ。急いで採掘して出荷しないとダメなんだよ。今日はちゃんと早く帰ってくるから心配するんじゃないぞ」
そう言ってお父さんは私の頭を撫でて家を出て行った。そう……この日はあの『運命の日』。

この日の夜、私はいつも通り晩御飯の準備をしてお父さんの帰りを待っていた。窓際の椅子に座って、ボーっと外を眺めながら……
「お父さん……、本当に帰りが遅いなぁ」
私は一人呟いた。暖炉の火が揺ら揺らと私を照らし……その動きが何とも寂しく見えて、心配な気持ちが増幅していくのを感じた。
「……心配だなぁ、お父さん大丈夫かな……！？」
その時だった！
「……ドーン！」
落雷だ！私は窓から微かに見えるミルドの丘からの閃光と轟音で目を閉じた！

そして……私はその後『丘』に向かうの。
ルナさんと初めて会ったミルドの丘に……
『永遠の約束』の場所に……

愛する者の為に

あれは、全ての戦いが終わる少し前の事。ルナにもシェルフィアにも黙ってた、ごめんねー……

そう、シェルフィアに『フィーネ』の記憶が戻ってルナと一緒に帰ってきた時から始まったの。二人ともとっても幸せそうだった。だって、２００年前からずっと望んできた事だもんねー。わたしも心から嬉しかった。ルナは自分の命よりもシェルフィアを愛してるし、わたしもシェルフィアは大好きだから。それに、やっぱりルナはわたしにとって一番大切だから……ルナの幸せはわたしにとっても幸せな事になるの。

～記憶を取り戻したシェルフィアとルナリート帰還後の作戦会議～

「流石だな、ルナ。よく戻った！」

此処はフィグリル城の屋上にある会議場。冷たく透き通るような空気と満天の星空の中で、わたし達は今後の作戦について話し合うことになっていた。でも、その前に……

「お帰りー！フィーネ、シェルフィア！」

わたしはそう言いながら、二人の周りを飛び回った。本当に嬉しかったからねー！

「ありがとうございます！しかし、本当の意味での祝杯は、３ヶ月後を乗り越えてからにしましょう」

シェルフィアと一緒に帰ってきたルナは何よりも嬉しそうだったけど、３ヶ月後には『人間界』は滅ぼされてしまうかもしれない。だから、ルナの表情は険しかった。わたしだって、ルナや人間達の幸せを破壊する事なんて絶対に許せない！初めは人間の事なんて嫌いだったけど、フィーネに出会ってから考えが変わったもんねー……

その後、今後についての具体的な計画が決まっていった。ルナとシェルフィアは、人間界の戦乱を終わらせる為にリウォル王国に行く事になったけど、わたしはどうすれば……？それに、どうしてルナと離されるのだろう？

「あのー……わたしはどうすればいいんでしょうか？」

わたしは首を傾げながらハルメスさんに聞いてみた。

「リバレス君……君は、ルナ達が帰ってくるまでに俺の下で修行だ。これからの戦い、今のままでは危険だ」

えっ？わたしは思わず目を見開いた。確かにわたしは力不足かもしれないけど、今の状況でわたしは修行するだけ？どう考えても不思議だったけど、ハルメスさんはルナのお兄さん。ちゃんと考えがあるんだろう。

「……わ、わかりましたー！」

少し声が上ずりながらも何とか返事をした。でも、その後すぐにルナがハルメスさんに聞き返す。

「兄さんは？」

「俺はリバレス君の修行と並行して、単身で『ある調査』をする。この世界の命運を左右する事だ」

やっぱりそういう事なのねー……ハルメスさんの顔には深い覚悟が刻まれていた。

「……わかりました。全員の健闘を祈りましょう！」

ルナの掛け声と共に、皆で手を重ねた。平和と幸せが訪れるまでは戦い続ける。わたしも覚悟を決めた。

でも……わたしがルナ達と離されて修行する事には、もう一つ深い意味があったのよー……

この晩、ルナとシェルフィアと一緒に昔話で夜遅くまで盛り上がった。楽しかったねー、２００年前にフィーネと初めて出会った頃の話……船で遭難した時の話……ルナが鈍感だった事やフィーネがドジだった事とか、色々話した。でも、今二人が一緒にいられるのはわたしのお陰だって言われた時は照れちゃったわよー。そんな風に、この夜は笑顔が絶えなかった。それで、つくづく思ったの。

『わたしは二人ともやっぱり大好き』だってねー……

～ハルメスと二人で～

翌朝、ルナとシェルフィアはリウォル王国への出発準備を終えていた。

「気をつけてねー！」

今すぐにでも此処を発ちそうなルナとシェルフィアにわたしは声をかけた。二人が相手をするのは普通の人間だけど、一応敵国だから心配だった。

「お前も頑張れよ！すぐに帰ってくるからな！」

そう言ってルナはわたしの頭をポンポン叩いた。わたしが心配したりすると、ルナはいつもこうやって安心させてくれる。昔から、そうしてくれるの好きだったなー……

「はーい！頑張りまーす！」

わたしは何だかとても元気が出て大きな声でそう返事をした。

その後、ハルメスさんとわたしに見送られながら二人は出発した。生まれてきた時からずっと一緒だったルナを、シェルフィアに独占されているような気がして少し寂しかったけど、それが『愛』だから仕方ないわねー……と思ったりもしていた。

「さてと、リバレス君。約束通り修行を始めようか？」

わたしがボーッとしていた所で、ハルメスさんがわたしの背中を叩いたのでびっくりした！

「はっ、はいー！」

こうして、わたしはまず修行内容の話を聞いた。この国の近くに無人島があり、其処にある施設でトレーニングを行う。施設にはハルメスさんの製作した様々な装置がある事も解った。そして、ルナ達が帰ってきたら3人でトレーニングするという事も聞いた。

「話は大体わかりましたー！わたしはルナ達が帰ってくるまで、その施設でトレーニングをしておけばいいんですね？」

「リバレス君は、なかなか物分りがいいじゃないか。俺が施設まで『転送』で送るから修行に励んで欲しい。ただ、明後日の晩『話』があるから迎えに行くぜ。それでいいかな？」

『話』……？何故かハルメスさんの表情は真剣そのものだった。

「わかりましたー……一体何の話なんですか？」

わたしはとても気になってそう訊いた。

「……とても大事な話だ。君にとっても、俺にとっても……勿論ルナ達にとってもな」

ハルメスさんは少し俯いた。わたしは不安になって更に訊くしかなかった。

「ハルメスさん……、あなたは一人で何をする気なんですかー？」

其処で彼はまた表情を戻し、わたしの目をしっかりと見つめた。

「明後日、全てを話す。だから今は何も訊かないでくれ……ただ、俺が『調査』する対象は『輝水晶の遺跡』だ。それだけは言っておくよ」

輝水晶の遺跡！？かつてフィーネが命を失った！多くの魂を生け贄にする事で獄界を封じ込めるという……！？

「まさか……！？」

わたしは叫んだが、明後日までは何も訊くなと言われている。わたしは大人しくトレーニング施設へ向かう事にした。

～過酷な運命～

「やはりそれしかないのか」

此処は輝水晶の遺跡の最深部……暗闇の中に浮かび上がる『虹色の輝水晶』の祭壇。其処には、黒く変色した血液が付着していた。そう……この場所はフィーネがジュディアによって命を失った場所。ハルメスはこの場所で調査をしていたのだ。壁や祭壇は、かつてルナリートが発した『滅』によって至る所が削れている。だが、古代文字の判読には十分だった。この文字は、中界創世時の文字とその前の文字とが混同していた。ルナリート達は気付かなかったが壁面は小さな文字で隙間無く埋まっているのだ。だが、2日間調べて、辿りついた結論は先程発した言葉の通

りだった。
壁面に書かれていたのはこの遺跡の構造、エネルギー回路、装置起動に必要なエネルギー値の詳細だけだったからだ。そう、この遺跡自体が装置であり起動には膨大なエネルギーが必要だ。元々は、人間の魂『１０００人』分で起動するように設計されている。『魂』というのは、肉体の生命エネルギーを遥かに凌駕する。だから、この装置に捧げられた人間の肉体は愚か魂も単なる『純粋なエネルギー』と化すのだ。
「俺の生命エネルギーの全てを注いでようやく起動する。それでも足りない場合は、俺の魂までエネルギー化されるんだな」
ハルメスは誰もいない空間に向かって呟いた。そして、暫く無言で中空を眺めているのだった。

訪れた３日目……
「あー……もうっ！」
わたしは次々と襲いかかってくる神術人形と戦っていた。倒しても倒しても起き上がってくる。流石はハルメスさんが作った人形。
「キリがないわねー！これでどう！？高等神術『滅炎』！」
灼熱の空間が凝縮し、熱球が現れる！
「ゴォォォォォォォォォ……！」
神術人形が数体直撃を受け、壁まで弾き飛ばされる！これで少しの間は動けない筈。わたしは、空を切り『安全地帯』まで戻った。此処にいると、神術人形は襲ってこない。暫くは休憩だ。
「ふー……いい汗かいたわー！」
わたしは、汗を拭きＥＳＧと水を補給する。まだトレーニングは３日目だが、驚くべき事に高等神術まで使えるようになった。此処まで急激に成長したのは、多分『生命力を上昇させる装置』があったからだ。これは、Ｓ．Ｕ．Ｎの光をエネルギーに変換して体内に取り込めるものらしい。

「リバレス君、なかなか調子が良さそうだな」
突然ハルメスさんの声が遠くから響いた。そういえば、今日は約束していた日。もう夜なのー！？
「はいー！お陰様で力がつきました！これで、少しはルナの役に立てそうですー！」
わたしはハルメスさんの下まで飛んでいった。
「そうか、それは良かった。それでは、『話』の為に城に戻ろうか」
彼はそう言って微笑んだ。そして、すぐに『転送』によってフィグリル城に移動した。

「さぁ、リバレス君飲もう！リバレス君も、酒には強いだろ？」
今、わたしとハルメスさんは、屋上の会議場で向かい合わせに二人で座っている。空には、眩いばかりに散りばめられた星々……時々流れ星も見える。雲は一つも無かった。まるで、世界にはわたしとハルメスさんの二人だけが存在して……空がそれを覆っている。そんな雰囲気だった。それは物悲しくもあり、遥かなる時の流れに身を委ねている自分自身の存在が小さく感じられた。
「はいー、わたしも天界のお酒を飲んでいましたから。それにしても、ルナとシェルフィアが心配ですねー」
わたしは、今感じている事を正直に伝えた。わたしは生まれてから今まで、ルナと長期間離れた事が殆ど無い。その所為もあってか、何だか寂しくて心配だった。
「あいつらなら大丈夫だぜ！俺には何となく感じられる。同じエファロードで兄弟だからかもしれないけどな」
ハルメスさんは力強く微笑んで、わたし用の小さなグラスに最高級のワインを注いでくれた。
「そうですかー！それなら安心です」
わたしは何だか安心して、注がれたワインを一気に飲み干した。
「おぉ、いい飲みっぷりじゃないか！さぁ今日は二人で飲み明かそう！」
２、３時間は楽しく会話をしながら次々と酒瓶を空けていった。
「ハ……ハルメスさーん……わたしはそろそろダメですー」
後ろには酒瓶だけでなく……樽が転がっている。わたしはもうこれ以上飲めない。これがエフ

アロードの実力なのだろうか……？
「そうか、俺はまだまだ大丈夫だがな。そろそろ……本題に入るとしようか」
さっきまでのハルメスさんとは違い、真剣な目つきになった。まるで、視線で射抜かれそうな程だ。
「……はい、わかりました」
わたしもはっきりと答えた。酔いが急速に醒めていくのを感じる。
「単刀直入に言おう。俺は、この戦いに終止符を打つ為に『間違いなく死ぬ』」
「えっ……！」
わたしは思わず叫ぶ！一体どういう事！？
「驚いて当然だな。理由を話そう。人間界の平和、ルナとシェルフィアの幸せを考えた選択をするとそうなるんだ。まず、『新生・中界計画』自体を消す事は出来ない。何故なら、それは『神』の意思であり『獄界』の意思でもある。だが、計画の実行を阻止する事は出来る。その為には……神を説得し、説得に応じない場合は戦う事になるだろう。その役目を俺以外の３人に担って貰う。……その代わりに、俺が獄界からの侵攻を全て防ぐ。そして……最終的には、『獄界への道』を封印する。輝水晶の遺跡に俺の『命』を捧げる事でな」
そうやって、淡々と話すハルメスさんの表情は強い決意に満ちていた。そして、その目には一点の曇りもなかった。でも……！
「そんな事……！絶対にルナ達は承知しません！ハルメスさんが命を落とすなんて選択は絶対にダメですよー！」
わたしは彼の目を見据えた。此処でわたしは譲ってはダメなんだ。
「そうだろうな。あいつらは優しいからな。でも、未来はそんなに甘くはないさ。この戦いに終止符を打つには、誰かが犠牲になる必要がある。俺が獄界を封じないでどうする？仮にルナが神の説得に成功したとしても、獄界からの侵攻は止まらない。それは、結局の所皆の幸せにはならないんだ。いや、俺が愛する大切な弟……その最愛の人……そして、人間達のな。ルナだって、自分の愛すべき人の為には『命』を懸けるだろう？それと同じだ。それが……俺が『二人のエファロードの兄』として生まれた『十字架』なんだ。だから……ルナ達にこの事は黙っていて欲しい。そうしないと、あいつらは絶対に俺を止めようとするからな」
わたしには止められない。この意思を止める事など出来ない。他に選択などないのだから……それでも……
「……うぅ……それはわたしには難しいです！ハルメスさんは、ルナにとってもシェルフィアにとっても……この世界にとっても必要だから……！勿論……わたしにとっても大切な方ですー……！」
嗚咽交じりに懇願するわたしの肩を、ハルメスさんは優しく叩いた。
「リバレス君。俺にとって、君やあいつらは掛け替えのない大切な存在だ。だから解ってくれ、『愛する者の為』ならば何でも出来るという事を。そして……リバレス君にもう一つとても重要な事を言っておかなければならない」
これ以上……まだ……何かあるのだろうか……？
「……これは確定ではないが……もし、ルナが神と戦う事になり……神が消えた場合……『天界の維持』はルナの選択に委ねられる事となる。天界を維持する場合、エファロードは誰とも触れ合う事もなく……天界の全てを担わなければいけない。だがルナなら、恐らく俺の考えと同じで『維持』を終わらせるだろう。魂に於いて、人間と天使は同等……『別の界』に生きる必要もないからな……しかし、そうなった場合」
其処まで言って、ハルメスさんはわたしから目を逸らした。一体？
「……続きを聞かせて下さい」
わたしは彼を真剣に見つめる。しっかりと聞かなければいけない。そんな気がしたからだ。
「……天界が消えると……『天翼獣』も消える。……天翼獣は天界のエネルギーのみで存在し……生活しているからだ。そう……リバレス君は消えてしまう事になるんだ！」

わたしは眩暈がした。同時に何も考えられなくなった。ハルメスさんが死に……わたしも消える。それが想像出来なかったからだ。

「……急に色々な事を伝えて悪かったと思う。俺の選択は変わらないが、リバレス君自身の事はゆっくり考えてくれていい。でも、ルナ達が帰ってくるまでにはリバレス君の結論が欲しい。結論が出るまでは……ゆっくり休んでくれ」

ハルメスさんはそう言って、席を立った。冷たい風だけがわたしを通り抜ける。わたしは何をする気にもなれず……唯空を眺めていた。

その時、星がいつもより眩しく感じたのは忘れない。

～幸せの代償～

わたしは……ルナのお陰で今まで生きてこられた。ルナの傍で時を重ね……楽しくて幸せだった。生まれてからずっと今まで一緒だったわねー……たった４２４年だけど……わたしの一生はとても輝いていたと思う。だって、わたしはルナが大好きだから。ずっとずっと……ずぅーっと一緒にいられると思ってた……それがわたしには当たり前で……それがわたしの生き方そのものだったから。でも、随分昔から覚悟していた事があるのよー、『もし、ルナに不幸が起きて……わたしがそれを助けられるのなら、喜んでこの身を差し出す』っていう事をね。だから、わたしは決めたの。ハルメスさんとの話から丸一日考えていたけど、もう迷わない。わたしは、夕闇の中をハルメスさんの下へ飛んで行った。

下弦の月が照らす城の屋上で……ハルメスさんは待っていた。まるで、わたしが来る事を悟っていたかのように……

「ハルメスさん……、わたしは、ルナのお陰で今まで楽しく……そして幸せに生きてこれましたー……でも、わたしは……ルナが悲しんだり苦しんだりする姿は見たくありません。もし、ルナが天界と天翼獣について知れば……天界を維持しようとするでしょう。そうなれば……ルナはシェルフィアと幸せになれません。わたしは、ハルメスさんと共に……自分を捧げる決意をしたんです！『愛する者』の為なら何でも出来る。それがわたしにも良くわかりました」

わたしが、其処まで話すとハルメスさんはわたしの手を握っていた。

「リバレス君……すまない。こんな辛い未来に巻き込んでしまって……！」

ハルメスさんの目から一筋の涙が流れていた。こんなに強い心の持ち主なのに、他の者に対しては深い慈しみに溢れているんだ。

「……ハルメスさん……、泣かないで下さい……！わたしの方が泣き虫なんですからー……！」

そう言ったわたしの目からも涙が止まらなかった。

そして、二人で約束したのよー……

絶対に、ルナとシェルフィアを幸せにしようって……

わたし達がいなくなってもね。

～迎えるのは悲壮な決意と強い心～

翌日、左手の薬指に綺麗な指輪をつけたシェルフィアと何だかいつもよりも嬉しそうなルナが帰ってきた。わたしとハルメスさんは一瞬目を見合わせたけど、すぐにその意味は解ってしまった。婚約したという事を。わたしは……そんな幸せな事をいつものように明るく笑顔で迎えよう。二人の顔を見ていると、すぐにそう思えた。そう……厳しい未来なんて忘れてね。

「よくやったな！お前達！」

ハルメスさんはルナに渡された手紙を読んだ途端、嬉しそうに声を上げた。そう、人間達の戦争は終わったんだ！

「はい！後は来るべき日に備えるだけですね！」

ルナも嬉しそうだった。そんなルナ達の下にわたしは飛んでいく。でも、修行と昨日の話で疲

れた所為か少しよろめいてしまった。
「ルナー……、シェルフィアー……お疲れ様ー！」
わたしは二人の周りを祝福する気持ちで飛んで回った。
「今夜は、祝宴にしよう！そして、その時に……これからの予定を話すぜ」
ハルメスさんの顔は嬉しそうだったけど、自分……そしてわたしの未来と責任を思ってか表情に少し厳しさが顕れていた。
「はいっ！皇帝、今日の祝宴の料理は私も手伝いますよ。私は副料理長ですから」
へぇー……シェルフィアはこの城で副料理長だったんだ。うーん……フィーネとルナが最初に話すきっかけになったのも『料理』だったもんね。人間って生まれ変わっても、前世に似るものなのねー……と思った。

その後、祝宴が始まり……ルナ達が婚約したという喜ばしい事実も明らかになったのよねー。本当におめでとう！二人なら何があっても絶対幸せにやっていけるから自信を持ってね。わたしは……いつでも見守ってるからねー。

祝宴が終わり、トレーニングの日々が始まった。そして、７０日が過ぎて……皆で過ごせる最後の夜になったのよ。無数の星が瞬いて、すごく穏やかな風が吹いていた。もうすぐ人間界には春が訪れる。わたしとハルメスさんは其処に一緒にいることは出来ないけどね……

ハルメスさんは、この日を『最後の晩餐』と名付けた。戦いが終われば、次に訪れる『新しい世界』で最初の祝宴を開こうって言って。この日、わたしとハルメスさんは嘘をついていたの。『全員、生きて再会できる』ってね……でも、それがわたし達の選んだ道だから。わたしもハルメスさんも『愛する者』の為に生きたんだからねー……

「（でもね……ごめん、今までこんな風に騙したりする事なんて一度もなかったのにねー）」

この後、ハルメスさんが名付けた『ティファニィ流星群』を眺めた。一生って……流れ星みたいに儚いのかなぁって少し思ったりもしたけど、本当に綺麗だった。数え切れない星屑が夜空を光で埋め尽くしていたから……

ハルメスさんの部屋で……
「悪いな……出来るだけルナの傍にいたかっただろう？」
最後の夜、わたしはハルメスさんと共にいた。明日からの戦いを考えれば、ルナ達が穏やかに過ごせる時間はずっと先になるかもしれない。それをハルメスさんが配慮したからだ。そして……わたしは、今日ルナの傍にいたらきっと泣いてしまうと思ったから……
「……いいえ、いいんです。ハルメスさんだって、皆と会えるのは明日で最後なんですよー……辛くはないんですか？」
わたしは正直、前日になって不安の気持ちが増した。決意は変わらないけど、どうしようもなく不安だった。自分が消えてしまうのが恐いんじゃなくて……ルナの傍にはもう居れないという事を想像出来なかったから。
「……俺も辛いさ。あいつらの幸せな未来を見届けてやれないのがな。そして……君に悲しい思いをさせている事も……でもな、俺は自分の人生には一片の悔いも無い。俺は短いながらも愛する人と共に過ごす事が出来た。そして、これから先は俺の弟達……そして人間達が幸せに歩んで行く事が出来る。それで十分だからな」
わたしも……同じ気持ち。わたしはルナと共に生きてこれて幸せだった。そして、ルナが大好きな……わたしも大好きなシェルフィアと一緒に幸せになってくれる。そう信じてるから。不安は……消えた。

「全ては……『愛する者の為に』」

その為なら何も恐くない。命を失う事も……存在が消えてしまう事も。

だって、わたしは今まで幸せだったし……わたしが愛するルナが幸せになるんだからねー。

～最後の言葉～

「さぁ出発だ！」

この日、日の出と共にわたし達は目的を果たす為にフィグリル城を飛び立った。『新生・中界計画』を阻止する為……ルナとシェルフィア、人間達に幸せをもたらす為に。

「行きましょう！」

わたし達はその声に呼応した。わたしとハルメスさんは目を合わせる。強い覚悟の目だった。

「ルナ、頼むぜ！お前は……最高の弟だ！」

「はいっ！ハルメス兄さん……、あなたは私に全てを教えてくれました！あなたは師であり、最高の兄です！」

ルナとハルメスさんは拳をぶつけあう。これが、兄弟の強い絆なんだ。そして……ハルメスさんは……最後まで強かった。もうこれで……会う事は出来ないのに……笑顔だったからだ。

「皇帝、行ってきます！それから……どうかご自愛を……！」

でも……シェルフィアがそう言った言葉に対してハルメスさんは振り向かなかった。

「ああ、俺の心配はいらないぜ！お前達……何があっても……前へ進むんだぞ！」

肩が震えていた。泣いているんだ。わたしはその背中を見て堪えられなり、涙を流した。勿論、ルナ達に気付かれないように。

そして……長かった戦いが終わった。

「ふ……親父も……最後に俺の姿が見たかったのかい……？」

神術によりその姿が映像となって現れたのは、ルナとハルメスさんの父である神……彼との戦いに決着がついた後だった。ハルメスさんは輝水晶の遺跡で、全身から血を流し……目も見えなくなっている。『魔』との戦いで致命傷を負い……それでもなお、自分の命を捧げる為に遺跡へと向かったのだろう。わたしの目は……涙で溢れて何も見えなかった。

「ルナ……、此処は輝水晶の遺跡だ……悪いな……約束は守れないぜ……後の事は宜しく頼んだ。獄界への道は……俺の魂で封鎖させる。シェルフィアといつまでも仲良くやれよ」

「兄さん！止めろ！止めてくれ！」

ルナが叫ぶ……黙っててごめんね……

「ルナ……、そんな悲しい顔をするなよ……見えなくても俺には解ってるんだぜ……俺の魂は……この装置の作動に使うけど……消える訳じゃない。俺はティファニィと一緒なんだ。心配するなよ……唯、会えなくなるだけだ……これが……俺の生まれた意味だからな……ティファニィを愛し……獄界を閉ざす事が」

ルナは必死でハルメスさんの映像の下へ飛んでいく……ハルメスさんを失う事……それで悲しむルナを見るのがわたしには堪らなく悲しかった。

「またな」

「兄さん……！兄さぁぁぁぁぁ……ん！」

虚しく声が響き……ハルメスさんの映像は消えた。彼は……自分の進むべき道を全うしたんだ。頭ではそう解っていても、心が張り裂けそうになる！

でも……その後……悲しみに暮れながらもルナ……、大切な決断をしたわねー……天界を維持する『椅子』に座るかどうかのね……

「……今、『神の継承』を受けて……『記憶』が全て目覚めました。私は……天界の統治者……でも、あの椅子はもう必要ありません。天界は……今日を持って人間界と同化します」
そう……それで良かったのよー……それでルナはシェルフィアと幸せになれるからね。
「そうか……運命を変えるのだな。それも良かろう。今日が歴史の変わり目となる。……ＥＳＧを摂取出来ない天使は、やがて力を失い人間と同化していく事だろう。人間だけが創り出す世界……だが、例外はある。お前と……シェルフィアだけは力を失う事は無い。お前達が……人間界を支えていくんだ。そろそろ……時間だ……我もハルメスの下へ」
神は……砂のように消えていった。最後は……ルナとハルメスさんのお父さんとしての顔だった。

後は……わたしだけねー……

「……これから大変になるだろうけど……シェルフィア、君がいれば大丈夫だから……唯……全ての人々の幸せの為に……いや、何より私達の幸せの為に生きよう……！帰ったら……式を挙げような」
深い悲しみの中で二人は抱き合っていた。うん……この二人は強いから大丈夫……わたしが消えても……
「リバレス、お前もこれからずっと宜しく頼むよ」
ルナ……、ルナならきっとそう言うと思ってたわー。優しくて……わたしを大切にしてくれたルナ……、
「良かったわねー……ルナ、シェルフィア」
わたしの口から思わずそんな言葉が出た……殆ど無意識だった。
「急にそんな顔をしてどうしたんだ？」
もう何も隠す必要は無い。でもわたしの心は、風のない湖面のように静かだった。
「……今までありがとう……ルナが主人で良かった。そして、大切な人が出来たからわたしは笑ってサヨナラ出来る」
素直な言葉が次々と溢れる。本当に感謝してるから……誰よりも大好きだから……
「何を言ってるんだ！？変な冗談はよせよ！」
ルナは取り乱して、わたしを捕まえようとする。でも、わたしは逃げた……決意が鈍りそうな気がするから……
「……わたしは『天翼獣』……天界で生まれ……天界と共に消えるの……わたしはその事を知ってたわ。ハルメスさんと約束したの……ルナとシェルフィアを幸せにしようって」
此処で……ハルメスさんとの約束を打ち明けた。ルナとシェルフィアの表情が凍り付く……二人とも……優しい心の持ち主だから……
「リバレスさん！行かないで！」
シェルフィアの悲痛な声が心に響く……でも、ルナの言葉は……！
「私が……あの椅子に座ればお前は救われるんだろ？」
「絶対にダメ！あれに座ったら、ルナはこの場所で一生一人ぼっち……そんな事はわたしが許さない！」
わたしは即座に『椅子』を炎で破壊する！ルナは本当に天界を維持する『椅子』に座ろうとしたから……！
「リバレス……、お前は……最高のパートナーなんだ。行くなよ……！」
わたしだってそう思ってる！でも大好きだからこんな選択をしたのよー……！ルナー……、泣いてるのね……
わたしは……体から力が抜けていくのを感じた……多分……もうすぐわたしは消える。だから……
「ルナー……、ありがとう……楽しかったわ。わたしはルナの事死んでも忘れない。だから、少しだけ肩の上に座ってもいい……？」
愛するルナの……大好きな場所……わたしは最後に……其処に座りたかった。微笑みながらル

ナを見つめる。
「……あ……あぁ……お前の好きなだけ座ってるといいよ」
ルナがそう言ってくれたから……わたしはすぐに肩の上に座った。そう……最後の瞬間まで一緒にいたいから……
「……わたしは此処が一番好きなのー……でも……今度生まれ変わる時は……人間がいいな」
本当よー……生まれ変わったら……ルナの事は覚えていないかもしれないけど……わたしも人間が好きになったから……
今まで幸せだった。幸せの基準は……皆違うけど……わたしは世界で一番幸せだったと思うわー。
だって……生まれてから死ぬまで……大好きなルナの傍で生きてこれたから……
だからありがとう……
そう思うと……わたしは笑ってサヨナラする筈だったのに……涙が滲み出してきた。決して悲しい訳じゃないのに……
「リバレス！……さよならは無しだ……必ず……また会えるからな……！」
ルナはそう言ってくれた。そっか……サヨナラじゃない。此処で消えてもまた会える。
『永遠の心』……わたしも信じるから……
「……うん……それじゃー……起こしてくれるのを待ってるから……おやすみなさい」
意識が……消えていく……体も透明になる。もう……声も出せそうにない。
「おやすみ」
わたしは……いつも起きるのが遅いから……迷惑かけるかもしれないけど……
次に目覚めた時も……傍にいて欲しいな……

番外編

ー 完 ー